

国際医療福祉大学

福岡薬学部

令和5年度

自己点検・評価報告書



医療福祉の多彩なエキスパートを育てる。

国際医療福祉大学

INTERNATIONAL UNIVERSITY OF HEALTH AND WELFARE

福岡薬学部 令和5年度自己点検・評価報告書

目次

第一部 国際医療福祉大学福岡薬学部

1. 国際医療福祉大学の教育理念-----	1
(1) 国際医療福祉大学の基本理念と教育理念-----	1
2. 福岡薬学部の教育研究上の目的 / 3つのポリシー-----	2
(1) 福岡薬学部の教育研究上の目的-----	2
(2) 薬学科の教育研究上の目的-----	2
(3) 福岡薬学部の3つのポリシー-----	2
3. 運営組織-----	3
(1) 福岡薬学部教員一覧-----	3
(2) チューター制-----	3
(3) 運営組織図-----	5
4. 学事報告-----	7
(1) 開講科目-----	7
(2) 卒業要件-----	10
(3) 進級条件-----	11
(4) 2021年度入学生の6年間のカリキュラム-----	14
(5) 在籍者数-----	16
(6) 学事日程-----	16
(7) 主な学事-----	18
1) 入学式-----	18
2) 保護者懇談会-----	19
3) オープンキャンパス-----	19
4) 国際医療福祉大学学会-----	21
5) 第19回月華祭-----	23
6) 保護者のつどい-----	24
7) ボランティア活動-----	24
8) ニュースレター(保護者通信)-----	25
9) 地域交流-----	26
10) 学生—チューター面談-----	26
11) ディプロマ・ポリシー到達度評価の導入-----	27
12) 薬学共用試験(CBT)-----	28
13) 薬学共用試験(OSCE)-----	28
14) 卒業研究(研究室配属)-----	29
15) 動物実験・組換えDNA実験教育訓練-----	30

16) 自己点検2023-----	30
-------------------	----

第二部 福岡薬学部会議および各委員会活動報告

1. 福岡薬学部会議-----	32
2. 福岡薬学部教務委員会-----	42
3. 福岡薬学部学生委員会-----	45
4. 福岡薬学部臨床教育・実務実習委員会-----	47
5. 福岡薬学部FD委員会-----	49
6. 福岡薬学部教育・研究支援委員会-----	50
7. 福岡薬学部広報・学生募集委員会-----	51
8. 福岡薬学部第三者評価・自己点検委員会-----	53
9. 福岡薬学部予算管理委員会-----	55
10. 福岡薬学部就職委員会-----	55

第三部 福岡薬学部教育活動報告

1. 令和5年度の教育活動振り返り-----	57
2. 令和6年度の教育活動目標-----	61
3. 2023年度開講 福岡薬学部必修科目-----	63
(1) 総合教育科目 人間系-----	63
(2) 総合教育科目 社会系-----	65
(3) 総合教育科目 自然・情報系-----	68
(4) 総合教育科目 外国語系-----	75
(5) 総合教育科目 総合系-----	80
(6) 専門教育科目 専門基礎/学部共通-----	81
(7) 専門教育科目 専門基礎-----	87
(8) 専門教育科目 専門-----	94

第四部 福岡薬学部研究活動報告

1. 2023年度研究活動-----	144
--------------------	-----

第一部 国際医療福祉大学福岡薬学部

1. 国際医療福祉大学の教育理念

(1) 国際医療福祉大学の基本理念と教育理念

国際医療福祉大学（以下「本学」という。）は、「人間中心の大学」、「社会に開かれた大学」、「国際性を目指した大学」という3つの基本理念と、この理念を実現するための7つの教育理念（人格形成、専門性、学際性、情報科学技術、国際性、自由な発想、新しい大学運営）を掲げ、病める人も、障害を持つ人も、健常な人も、互いを認め合って暮らせる「共に生きる社会」の実現を目指した教育をおこなう。

3つの基本理念

(人間中心の大学)

プロフェッショナルとしての専門的な知識や技能の修得にとどまらず、幅広くバランスの取れた良識ある人間を育成すること。

(社会に開かれた大学)

学問を創造的に追究するとともに、地域社会と一体となり、地域の医療福祉のニーズに応え、地域社会や医療福祉に関わる各界の人々の生涯教育の拠点としても機能できる大学となること。

(国際性を目指した大学)

国際的センスを備え、いかなる国の人々とも伸び伸びと協働できる真の国際人を育成すること。

7つの教育理念

(人格形成) 知識・技術のみに偏しない知・情・意を兼ね備えた人材を育み、「共に生きる社会」を目指していく。自ら考え、自ら行動する幅広くバランスの取れた人格の形成を図る。

(専門性) 日進月歩する医療福祉の高度化・専門分化に対応した、学問の確立と研究の推進をおこなう。医療福祉のプロフェッショナルとしてふさわしい能力を学生生活で身につけていく。

(学際性) 医療福祉分野の大学の特性を生かして、他学科の専門科目も教養として修得し、授業外活動も重視する。総合的教養を併せ持つ医療福祉専門職を目指す。

(情報科学技術) 情報化社会の進展に対応できるよう、すべての学科において最新の知識・技術を修得させ、情報科学技術に強い医療・福祉専門職を育成する。

(国際性) 語学教育など一般教育だけでなく、専門教育や学生生活を通じて、人間（私人）としても専門家（公人）としても国際的視野を持った人材を育てる。

(自由な発想) 人間としての品位や、社会のルール・マナーの遵守を前提におきながら、学生個人の自由な発想や行動を歓迎し、特に宗教・思想・社会運動への関心や探究を尊重する。

(新しい大学運営) 時代の変化に即応して、大学の運営も年功序列を廃し、学生の立場から教員の評価もできるシステムを導入するなど、適時見直しを進め、自由闊達な校風の中で学生の自主性を育む努力をする。大学院教育については、特に生涯学習の視点に立って専門職育成のための教育、研究の充実を図る。

2. 福岡薬学部 of 教育研究上の目的 / 3 つのポリシー

(1) 福岡薬学部 of 教育研究上の目的

福岡薬学部は、薬学 of 各分野について、理論及び応用 of 研究を行うとともに、それぞれ十分な知識と技能を有し、保健医療 of 実践を担うこと of できる応用能力及び豊かな人間性を備えた人材を育成することを目的とする。

(2) 薬学科 of 教育研究上の目的

福岡薬学部 of 教育研究上の目的をふまえ、薬学科は、薬学 of 各分野について、理論及び応用 of 研究を行うとともに、「くすり」に対する専門的な知識と、臨床現場で発揮される高い能力、技術を備え、調剤した「くすり」 of 適切な説明や薬物療法について、的確なアドバイスができる薬剤師 of 育成を目的とする。

(3) 福岡薬学部 of 3 つ of ポリシー

アドミッションポリシー

- ① 「共に生きる社会」 of 実現を理解し、イメージできる人
- ② 使命感・倫理観・責任感・思いやり of 心など、豊かな人間性を養うために、努力し続けることができる人
- ③ 薬剤師に必要な知識・技能・態度 of バランスを意識して、目標を設定し自ら向かって進める人

ディプロマポリシー

- ① 医療 of 領域にとどまらず、社会生活 of 基本である「ひと」 of としての基本姿勢(人間性)を養うために、他者を理解し、多方面に関心を持ち、実行し、自己分析・評価することができる。
- ② 科学的思考力を持ったくすりの専門職をめざして、基礎薬学・衛生薬学・医療薬学・社会薬学などの知識を身につけ、反復学修し、それを活用(応用)できる。
- ③ 講義を通して知識を、実習を通して技能を、薬剤師を意識し続けることで態度を修得し、知識・技能・態度 of バランスを保ちながら、自己研鑽できる。

④ 医療全体(チーム医療、地域医療など)を理解することができ、他職種を理解することができ、あらゆる活動において積極的に協働できる。

カリキュラムポリシー

① 「くすり」の専門家としての専門的な知識や技能の修得にとどまらず、多様な学問領域に関心を持ち、使命感、倫理観、責任感、思いやりの心などの豊かな人間性を持つ人材を育成する。

② 真理や科学の本質を追究するものの考え方の基本を修得し、学問を創造的に追究するとともに、将来役立つ知識と技能と態度をバランスよく身につけ、自ら考えて判断できる問題解決能力を持った人材を育成する。

③ 現在または近い将来の地域医療の問題、地域社会のニーズを捉えることができ、さらに、視野を広げて国際的な医療問題についても考えることができ、様々な国の人々と連携、協働できる素地を持った人材を育成する。

3. 運営組織

(1) 福岡薬学部教員一覧

学部長 学科長 教授	武田弘志
副学科長 教授	石橋正己、永倉透記
教授	阿部義人、石田卓巳、猪部学、太田昭一郎、緒方勝也、川端猛夫、梶岡俊一、岸拓弥、吉良潤一、西村信弘、長谷川雄、平木洋一、村田祐造、山口政俊
准教授	一木裕子、齊藤秀俊、多田納豊、塚本宏樹、成川佑次、宗像達夫、山本緑、吉武康之
講師	今井竜也、今村友裕、貝塚拓、中矢正、朴珍相、宗像千恵
助教	磯田紀之、坂井崇亮、澤井円香、柴田健太郎、福田光良

五十音順

(2) チューター制

本年度は、31名の薬学科教員がチューターを担った。チューターは学生の修学・生活における相談に随時応じ、問題を把握するとともに解決に向けて支援した。また、半期に一度の定期面談では、ラーニングポートフォリオを通じて学生の短期および中長期の目標に対する進捗状況を、後期からはDP評価表を通じてディプロマポリシーの達成度を確認し、アドバイスを行った。3年生に関しては、チューター担当教員を入れ替

え、複数教員で学生を支援できる体制を整えた。修学困難(休学または進路変更希望)な学生については、本人および保護者との面談を随時行い適切に対応した。さらに、留年に至った場合についても、学生または保護者も交えた面談を行い、留年期間の学習および生活の支援を行った。以下に、本年度のチューター担当教員と担当学生数を示す。

	チューター名	職位	学生数				
			総数	1年生	2年生	3年生	4年生
1	阿部 義人	教授	14	4	5	5	3
2	石田 卓巳	教授	13	4	4	5	3
3	猪部 学	教授	12	4	4	4	4
4	太田 昭一郎	教授	13	4	4	5	3
5	緒方 勝也	教授	13	4	4	5	4
6	梶岡 俊一	教授	13	4	6	3	4
7	川端 猛夫	教授	11	4	4	3	4
8	永倉 透記	教授	13	4	4	5	3
9	西村 信弘	教授	13	5	3	5	3
10	長谷川 雄	教授	13	4	6	3	4
11	平木 洋一	教授	13	4	4	5	3
12	村田 祐造	教授	13	4	5	4	3
13	石橋 正巳	教授	7	4	0	3	0
14	一木 裕子	准教授	12	5	3	4	3
15	齊藤 秀俊	准教授	14	4	6	4	3
16	多田納 豊	准教授	12	4	5	3	4
17	塚本 宏樹	准教授	12	5	3	4	4
18	成川 佑次	准教授	13	4	6	3	3
19	宗像 達夫	准教授	13	4	4	5	2
20	山本 緑	准教授	13	4	5	4	3
21	吉武 康之	准教授	13	4	5	4	3
22	今井 竜也	講師	13	4	5	4	3
23	貝塚 拓	講師	14	4	5	5	2
24	中矢 正	講師	13	5	4	4	3
25	朴 珍相	講師	14	4	7	3	3

26	宗像 千恵	講師	13	4	6	3	3
27	磯田 紀之	助教	13	4	5	4	3
28	坂井 崇亮	助教	13	5	4	4	3
29	澤井 円香	助教	13	4	5	4	3
30	柴田 健太郎	助教	13	4	5	4	2
31	福田 光良	助教	13	4	5	4	2

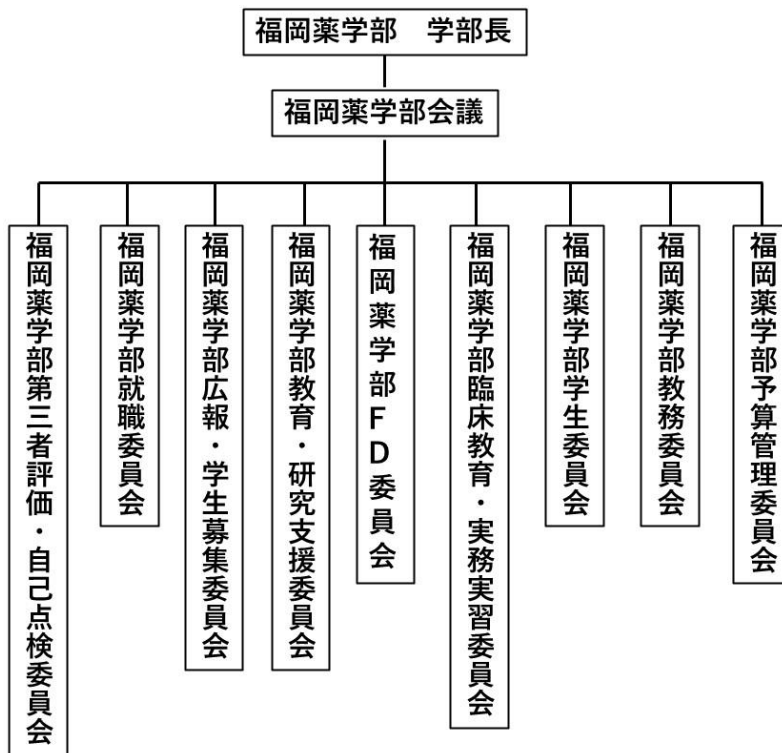
(3) 運営組織図

大川キャンパス・福岡キャンパス委員会構成

会議	管理運営委員会
	運営会議
	学部長学科長会議
	専任教員代表者会議
	教員会議
教務統括委員会	教務委員会
	カリキュラム小委員会
	VOD委員会
	臨床実習委員会
	国家試験対策委員会
	学修支援センター ／学修支援委員会
FD 統括委員会	FD委員会
学生統括委員会	学生委員会
	キャリア支援センター ／就職委員会
	ボランティアセンター ／ボランティア委員会
国際交流統括委員会	国際交流委員会
	別科委員会
	留学生サポートセンター
学生募集統括委員会	学生募集広報委員会
	ニューズレター編集室
地域交流統括委員会	地域交流委員会
図書統括委員会	図書委員会
防災統括委員会	防災対策委員会
	安全衛生委員会
DX 統括委員会	教育機器整備委員会
	オンライン教育 WG
その他	ハラスメント防止委員会
	入試システム WG

研究推進室
臨床教学共同研究室
産学連携推進室
倫理審査施設委員会
動物実験委員会
自己点検評価委員会
国際医療福祉大学学会運営委員会
シュミレーションセンター
大学院院生委員会

福岡薬学部内委員会組織



4. 学事報告

(1) 開講科目

授業科目の 区分	科目名	配当 年次	単位数		時間数	備考	
			必修	選択			
総合 教育 科目	人間系	文学論	1 2 3 4 5 6		2	30	
	演劇論	1 2 3 4 5 6		1	15		
	心理学	1		2	30		
	哲学	1 2 3 4 5 6		2	30		
	コミュニケーション概論	1		2	30		
	雑談と傾聴～話す力と聴く力～	1 2 3 4 5 6		2	30		
	人間学	1 2 3 4 5 6		2	30		
	倫理学	1 2 3 4 5 6		2	30		
	宗教学	1 2 3 4 5 6		2	30		
	日本近現代史	1 2 3 4 5 6		2	30		
	文化人類学	1 2 3 4 5 6		2	30		
	教育学	1 2 3 4 5 6		2	30		
	死生学-死を通して生を考える-	1 2 3 4 5 6		2	30		
	社会学	法学	1		2	30	
	日本国憲法	1 2 3 4 5 6		2	30		
	社会学	1 2 3 4 5 6		2	30		
	国際関係論	1 2 3 4 5 6		2	30		
	国際医療福祉論	1 2 3 4 5 6		2	30		
	組織運営管理論	1 2 3 4 5 6		2	30		
	海外保健福祉事情Ⅰ(講義)	2		1	15		
	海外保健福祉事情Ⅱ(実習)	2		1	45		
	社会保障制度論	1 2 3 4 5 6		2	30		
	ボランティア論	1 2 3 4 5 6		2	30		
	経済の仕組み	1 2 3 4 5 6		2	30		
	自然・情報系	統計学	1		2	30	
	数学	1		2	30		
	物理学	1 2 3 4 5 6		2	30		
	化学	1		2	30		
	生物学	1		2	30		
	情報処理	1		1	30		
	生命倫理	1		2	30		
	医学/医療史	1 2 3 4 5 6		2	30		
	総合系	大学入門講座Ⅰ(基礎)	1		1	15	
	大学入門講座Ⅱ(展開)	1 2 3 4 5 6		1	15		
	郷土論～大川学～	1 2 3 4 5 6		1	15		
医療福祉教養講義	1 2 3 4 5 6		1	15			
メディカルマナー入門	1 2 3 4 5 6		2	30			
外国語系	英語講読1(Primary)	1		1	30		
英語講読2(Basic)	2		1	30			
英語CALL1(Primary)	1		1	30			
英語CALL2(Basic)	2		1	30			
英会話	1 2 3 4 5 6		1	30			
実用英会話	2 3 4 5 6		1	30			
医学英語Ⅰ(入門)	1 2 3 4 5 6		1	30			
医学英語Ⅱ(応用)	1 2 3 4 5 6		1	30			
資格英語1(Primary)	1 2 3 4 5 6		1	30			
資格英語2(Basic)	1 2 3 4 5 6		1	30			
中国語	1 2 3 4 5 6		2	60			
実用中国語会話	2 3 4 5 6		1	30			
韓国語	1 2 3 4 5 6		2	60			
実用韓国語会話	2 3 4 5 6		1	30			
保健体育系	健康科学理論	1 2 3 4 5 6		1	15		
健康科学実践	1 2 3 4 5 6		1	30			

授業科目の 区分	科目名	配当 年次	単位数		時間数	備考
			必修	選択		
専門基礎 ／ 学部共通	公衆衛生学	3	2		30	
	救急医学(救命救急を含む)	2 3		1	15	
	リハビリテーション概論	1 2 3 4 5 6		2	30	
	微生物と病気	1 2 3 4 5 6		2	30	
	関連職種連携論	2	2		30	
	ケアマネジメント論	2 3 4 5 6		1	15	
	保健医療福祉制度論	1 2 3 4 5 6		2	30	
	臨床心理学概論	1	2		30	
	関連職種連携ワーク	3	1		30	
	関連職種連携実習	5		1	45	
	リスクマネジメント論	3 4 5 6		2	30	
専門基礎	薬学演習Ⅰ(物理系等)	2	1		30	
	薬学演習Ⅱ(化学系等)	3	1		30	
	薬学演習Ⅲ(生物系等)	3	1		30	
	薬学計算	2	1		30	
	病原微生物学	3	2		30	
	コミュニケーション実習	2	1		45	
	基礎薬学実習Ⅰ(物理)	1	1		45	
	基礎薬学実習Ⅱ(生物)	1	1		45	
専門 教育 科目	薬学概論	1	2		30	
	有機化学Ⅰ(脂肪族化合物1)	1	2		30	
	有機化学Ⅱ(脂肪族化合物2)	2	2		30	
	有機化学Ⅲ(芳香族化合物)	2	2		30	
	生薬学	2	2		30	
	天然物化学	2	1		15	
	医薬品構造化学	3	1		15	
	分析化学Ⅰ(溶液中の化学平衡と滴定法)	1	2		30	
	分析化学Ⅱ(機器分析、分離分析および臨床分析)	2	2		30	
	医薬品構造解析	2	2		30	
	薬品物理化学Ⅰ(物性とエネルギー)	1	2		30	
	薬品物理化学Ⅱ(平衡と変化)	2	2		30	
	放射化学	2	1		15	
	生化学Ⅰ(生体分子)	1	2		30	
	生化学Ⅱ(生体エネルギー・代謝)	2	2		30	
	分子生物学Ⅰ(遺伝情報・細胞内情報伝達)	2	2		30	
	分子生物学Ⅱ(細胞間コミュニケーション・遺伝)	2	2		30	
	解剖生理学Ⅰ(外皮系、骨格系・筋肉系、循環器系)	1	2		30	
	解剖生理学Ⅱ(神経系、内分泌系)	2	2		30	
	解剖生理学Ⅲ(消化器系、呼吸器系、泌尿器系)	2	2		30	
	がん薬物療法学	3	2		30	
	ゲノム医療	3	1		15	
	化学療法学	3	2		30	
	免疫学	2	2		30	

授業科目の 区分	科目名	配当 年次	単位数		時間数	備考
			必修	選択		
専門 教育 科目	疾病と病態生理学Ⅰ(内分泌系、神経精神系疾患等)	2	2		30	
	疾病と病態生理学Ⅱ(循環器系疾患、消化器系疾患等)	3	2		30	
	疾病と病態生理学Ⅲ(呼吸器系疾患、代謝性疾患等)	3	2		30	
	薬理学Ⅰ(総論、末梢神経薬理等)	3	2		30	
	薬理学Ⅱ(中枢神経薬理、免疫・炎症薬理等)	3	2		30	
	薬理学Ⅲ(循環器薬理、消化器薬理等)	4	2		30	
	薬理学Ⅳ(呼吸器薬理、内分泌薬理等)	4	2		30	
	医薬品安全性学	4	2		30	
	臨床検査医学	3	2		30	
	薬物治療学Ⅰ(神経精神系疾患、内分泌系疾患等)	4	2		30	
	薬物治療学Ⅱ(循環器系疾患、呼吸器系疾患等)	4	2		30	
	薬物治療学Ⅲ(症例・病態解析)	6	2		30	
	物理薬剤学	2	2		30	
	製剤設計とDDS	4	2		30	
	臨床薬学Ⅰ(調剤の基礎)	3	2		30	
	臨床薬学Ⅱ(調剤の実践)	4	2		30	
	臨床薬学Ⅲ(薬物療法の実践)	4	2		30	
	臨床薬学Ⅳ(チーム医療・地域医療の実践その前に)	4 5	1		15	
	薬物動態学	3	2		30	
	臨床薬物動態学	4	2		30	
	医薬品情報学Ⅰ(医薬品情報の収集と活用)	3	2		30	
	医薬品情報学Ⅱ(EBMと臨床研究)	6	1		15	
	衛生化学Ⅰ(食品・栄養)	2	2		30	
	衛生化学Ⅱ(毒性・代謝)	3	2		30	
	環境衛生学	3	2		30	
	医療関係法規	4	2		30	
	日本薬局方	3	1		15	
	漢方医学Ⅰ(漢方の基礎)	3	2		30	
	漢方医学Ⅱ(漢方の応用)	4	1		15	
	OTC医薬品概論	3	2		30	
	化学系薬学実習Ⅰ(有機合成)	2	1		45	
	化学系薬学実習Ⅱ(天然資源)	2	1		45	
	物理系薬学実習	2	1		45	
	生物系薬学実習	4	1		45	
	分子生物学実習	3	1		45	
	臨床検査医学実習	3	1		45	
	衛生系薬学実習	3	1		45	
	早期体験実習	1	1		45	
	医療系薬学実習Ⅰ(調剤の基礎と情報収集)	3	1		45	
	医療系薬学実習Ⅱ(調剤の実践と服薬指導)	4	1		45	
	病院・薬局事前実習Ⅰ(実務実習に必要な基本的知識)	4	2		90	
	病院・薬局事前実習Ⅱ(実務実習に必要な基本的技能)	4	2		90	
	病院・薬局実務実習Ⅰ(主に病院での実習)	5 6	10		450	
病院・薬局実務実習Ⅱ(主に薬局での実習)	5 6	10		450		
総合薬学演習Ⅰ(主として物理・化学・生物・衛生)	6	1		15		
総合薬学演習Ⅱ(主として薬理・薬剤・病態・実務)	6	1		15		
卒業研究	5 6	4		60		

(2) 卒業要件

卒業要件（卒業に必要な単位数）

授業科目の区分		最低単位数	
		必修	選択
総合教育科目	人間系	4単位	総合教育科目 および 専門教育科目 の中から 10単位以上 (9単位以上 内5単位は日本語の 選択必修)※1
	社会系	4単位	
	自然・情報系	11単位	
	総合系	1単位	
	外国語系	4単位 (5単位)※1	
	保健体育系		
	小計	24単位 (25単位)※1	
専門教育科目	専門基礎科目	学部共通	7単位
		学科専門基礎	9単位
		小計	16単位
	専門科目	140単位	
	小計	156単位	10単位以上 (9単位以上)※1
合計		180単位 (181単位)※1	10単位以上 (9単位以上)※1
総計		190単位以上	

※1 () 内の単位は留学生の単位を表す。

履修すべきすべての必修科目（180単位）* を修得していること。必修科目と選択科目の総単位数が

190 単位以上である場合には卒業できる。

*留学生の必修科目は 181 単位

(3) 進級条件

進級条件（留学生以外）

【第2学年への進級条件】

①1 学年必修科目(37 単位)のうち、すべての実習科目(3 単位)を含む 31 単位以上修得していること。

【第3学年への進級条件】

①1 学年必修科目(37 単位)のすべてを修得していること。

②2 学年必修科目(44 単位)のうち、すべての実習科目(5 単位)を含む 38 単位以上修得していること。

③以上、①②の両方の条件を満たしていること。

【第4学年への進級条件】

①2 学年までの必修科目（81 単位）のすべてを修得していること。

②3 学年必修科目(42 単位)のうち、すべての実習科目(4 単位)を含む 36 単位以上修得していること。

③以上、①②の両方の条件を満たしていること。

【第5学年への進級条件】

①3 学年までの必修科目（123 単位）のすべてを修得していること。

②4 学年必修科目 28 単位のうち、臨床薬学Ⅳ（チーム医療・地域医療の実践その前に）を除く 27 単位のすべてを修得していること。

③以上、①②の両方の条件を満たしていること。

進級した場合：

前年次の不合格必修科目については、受講し、定期試験を受け、単位を修得すること。

留年した場合：

①合格した科目の単位は認められる。

②不合格の必修科目は再履修しなければならない。

③不合格になった選択科目は、新たに希望して選択するものとする。

④必修・選択科目とも前年度不合格であった科目の評点は取り消し、無効とする。

⑤在学年限について：同一学年における在学年数を2年以内とする（休学期間を除く）

但し、5、6 学年は通算で4年間在籍できる。

進級条件（留学生）

【第2学年への進級条件】

①1 学年で履修できる外国語系科目を除く必修科目 35 単位と日本語科目 2 単位（必修/選択を問わない）を

合わせた 37 単位のうち、すべての実習科目（3 単位）を含む 31 単位以上の必修科目を修得していること。

【第3学年への進級条件】

①1 学年で履修できる必修科目のうち 37 単位を修得していること。

※2 学年終了時までには日本語必修科目 2 単位の修得が必要である。

②2 学年で履修できる必修科目 44 単位（日本語必修科目 2 単位含む）のうち、すべての実習科目（5 単位）を

含む 38 単位以上修得していること。

③以上、①②の両方の条件を満たしていること。

【第4学年への進級条件】

①2 学年までに履修できる必修科目 81 単位を修得していること。

※3 学年終了時までには日本語必修科目 4 単位の修得が必要である。

②3 学年で履修できる必修科目 42 単位のうち、すべての実習科目（4 単位）を含む 36 単位以上修得していること。

③以上、①②の両方の条件を満たしていること。

【第5学年への進級条件】

①3 学年までに履修できる必修科目 123 単位を修得していること。

②4 学年必修科目 28 単位のうち、「臨床薬学Ⅳ（チーム医療・地域医療の実践その前に）を除く 27 単位のすべてを修得していること。

③4 学年終了時までには日本語必修科目 5 単位すべてを修得していること。

④以上、①②③のすべての条件を満たしていること。

進級した場合：

前年次の不合格必修科目については、受講し、定期試験を受け、単位を修得すること。

留年した場合：

①合格した科目の単位は認められる。

②不合格の必修科目は再履修しなければならない。

③不合格になった選択科目は、新たに希望して選択するものとする。

④必修・選択科目とも前年度不合格であった科目の評点は取り消し、無効とする。

⑤在学年限について：同一学年における在学年数を 2 年以内とする（休学期間を除く）

但し、5、6 学年は通算で 4 年間在籍できる。

科目履修条件

5、6 学年において実務実習を履修するための条件

- ① 共用試験（CBT、OSCE）に合格すること。
- ② 実務実習生にふさわしい知識・技能・態度のバランスがとれていること

日本語履修について（留学生）

(1) 開講科目一覧

科目名	配当年次	単位			時間数
		必修	選択	自由	
作文・読解Ⅰ（入門）	1 2 3 4 5 6		1		30
作文・読解Ⅱ（応用）	1	1			30
作文・読解Ⅲ（完成）	1 2 3 4 5 6		1		30
文法・語彙Ⅰ（入門）	1 2 3 4 5 6		1		30
文法・語彙Ⅱ（応用）	1	1			30
文法・語彙Ⅲ（完成）	1 2 3 4 5 6		1		30
発表・討論Ⅰ（応用）	1	1			30
発表・討論Ⅱ（完成）	1 2 3 4 5 6		1		30
医療福祉専門漢字	1	1			30
医療福祉専門語彙	1	1			30
日本語基礎Ⅰ（初級）	1 2 3 4 5 6			1	30
日本語基礎Ⅱ（初級）	1 2 3 4 5 6			1	30

(2) 日本語科目の区分

必修科目 = 必ず履修する科目（留学生全員、卒業要件に必要な単位）

選択科目 = 必要に応じて履修する科目

自由科目 = 必要に応じて履修する科目（単位の取得は可能だが、取得した単位は卒業要件に含まない）

(3) 履修条件

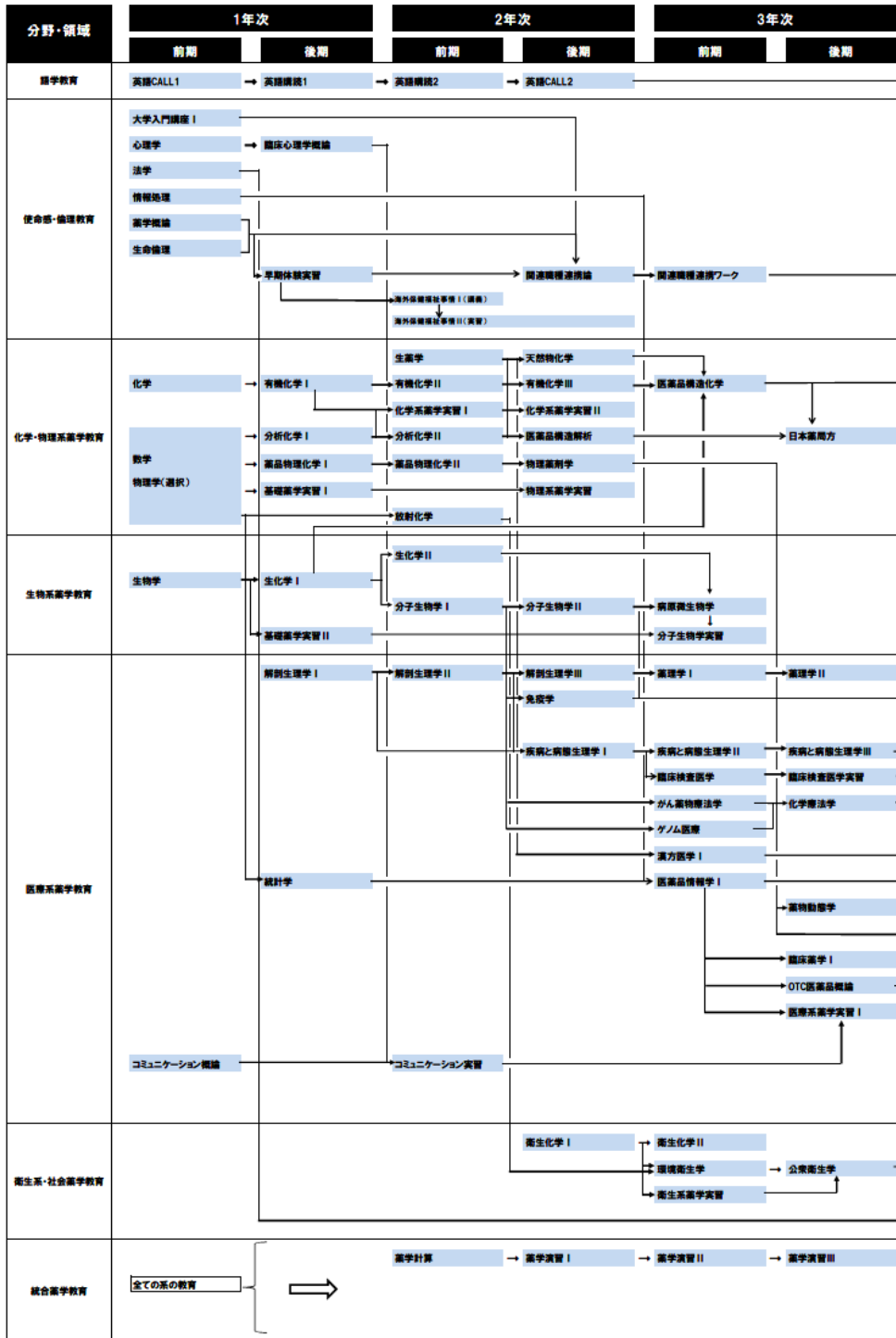
外国語の履修については、原則として日本語科目を 10 単位取得すること。

- ① 10 単位の内 2 単位までは日本語科目以外の 外国語科目（母国語としない外国語に限る）をもって代えることができる。
- ② 「外国人のための日本語能力テスト」の得点により、最大 3 単位まで認定することができる。

(4) 2023年度入学生の6年間のカリキュラム

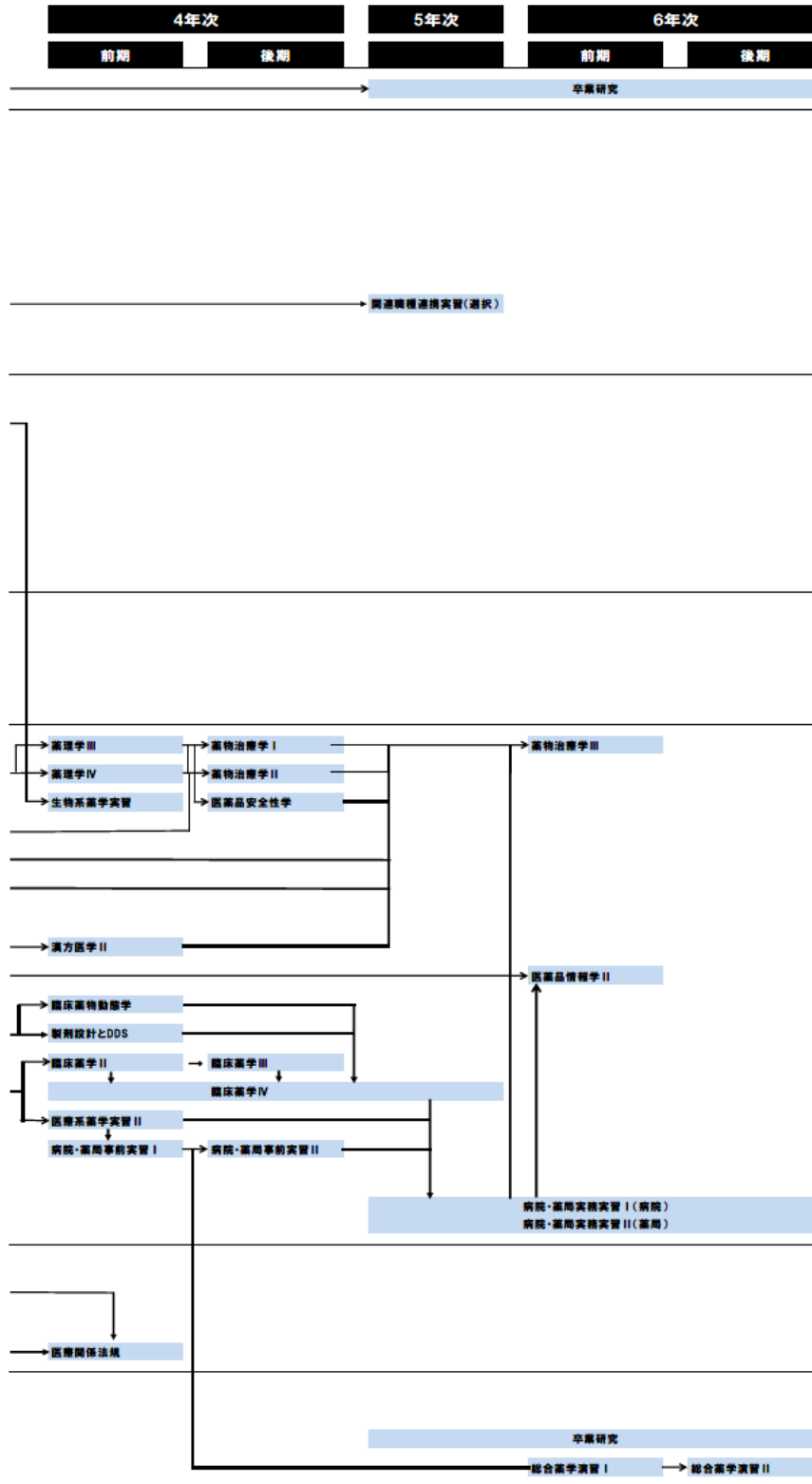
福岡薬学部 薬学科 履修系統図

ディプロマポリシー
 ① 医療の領域にとどまらず、社会生活の基本である「ひと」としての基本姿勢(人間性)を養うために、他者を理解し、多方面に関心を持ち、実行し、自己分析・評価することができる。
 ② 科学的思考力を持ったくすりの専門職をめざして、基礎薬学・衛生薬学・医療薬学・社会薬学などの知識を身につけ、反復学習し、それを活用(応用)できる。
 ③ 講義を通して知識を、実習を通して技能を、薬剤師を志望し続けることで態度を修得し、知識・技能・態度のバランスを保ちながら、自己研鑽できる。
 ④ 医療全体(チーム医療、地域医療など)を理解することができ、他職種を理解することができ、あらゆる活動において積極的に協働できる。



カリキュラムポリシー

- ①「くすり」の専門家としての専門的な知識や技能の修得にとどまらず、多様な学問領域に関心を持ち、使命感、倫理観、責任感、思いやりの心などの豊かな人間性を持つ人材を育成する。
- ②真理や科学の本質を追究するものの考え方の基本を習得し、学問を創造的に追及するとともに将来役立つ知識と技能と態度を身につけ、自ら考えて判断できる問題解決能力を持った人材を育成する。
- ③現在または将来の地域医療の問題、地域社会のニーズを捉えることができ、さらに、視野を広げて国際的な医療問題についても考えることができ、様々な国の人々と連携、協働できる素地を持った人材を育成する。



(5) 在籍者数（2023年5月1日現在）

学 年	薬学科		
	男	女	合計
1年生	39	90	129
2年生	50	92	142
3年生	43	81	124
4年生	27	65	92
合 計	159	328	487

(6) 学事日程

3月29日（水）—3月30日（木）	薬学共用試験（C B T）実力試験（4年生） （29日），オリエンテーション（4年生）
4月4日（火）	入学式 学科別保護者懇談会
4月5日（水）—4月7日（金）	新入生オリエンテーション（5・6日） プレイスメントテスト（新入生）（5・7日） 在校生オリエンテーション（7日）
4月10日（月）	前期授業開始
4月—5月	チューター面談
5月1日（月）	大学創立記念日
5月20日（土）	運動会
6月16日（金）、23日（金）	科目別テスト（3年生）
7月1日（土）	関連職種連携ワーク報告会（3年生）
7月12日（水）	動物実験・組換えDNA実験 教育訓練
7月21日（金）	前期授業終了
7月22日（土）—8月4日（金）	前期定期試験期間（予備日含む）
7月23日（日）	オープンキャンパス
8月2日（水）—8月16日（水）	海外研修（夏季前半）（2年生）
8月5日（土）	オープンキャンパス 大川市民夏祭り（地域交流）
8月20日（日）	オープンキャンパス
8月21日（月）—8月25日（金）	前期追・再試験期間
8月29日（火）—8月30日（水）	薬学共用試験（C B T）体験受験（4年生）

9月3日(日)	第13回国際医療福祉大学学会学術大会
9月2日(土)－9月16日(土)	海外研修(夏季後半)(2年生)
9月21日(木)	プレイスメントテスト(1年生)
9月22日(金)	海外保健福祉事情成果報告会 (1, 2年生)
9月25日(月)	後期授業開始
9月－10月	チューター面談
10月7日(土)－10月8日(日)	大学祭(第19回月華祭) 教育後援会 会員のつどい(7日) 学科別懇談会、個別面談(7日)
10月21日(土)	プレミアムカレッジ
11月15日(水)－11月16日(木)	後期定期試験期間(4年生)
11月30日(木)、12月7日(木)	解剖見学実習(2年生)
12月5日(火)	薬学共用試験(CBT)本試験(Aクラス)
12月6日(水)	薬学共用試験(CBT)本試験(Bクラス)
12月20日(水)	科目別テスト(3年生)
12月24日(日)	薬学共用試験(OSCE)本試験
12月28日(木)－1月3日(水)	冬期休暇期間
1月4日(木)－1月5日(金)	後期定期試験追再試験期間(4年生)
1月10日(水)	講演会 (日本病院薬剤師会会長 武田泰生先生)
1月19日(金)	後期授業終了
1月20日(土)－2月2日(金)	後期定期試験期間(予備日含む)
2月13日(火)－2月16日(金)	後期追・再試験期間
2月19日(月)	第I期実務実習第開始(～5月5日(日))

(7) 主な学事

1) 入学式（ようこそ国際医療福祉大学 福岡薬学部へ）

令和5年4月4日（火）11：00～、国際医療福祉大学大川キャンパス・図書館講堂棟3階講堂において令和5年度九州地区学部・大学院合同入学式が挙行された。真新しいスーツに身を包んだ福岡薬学部新入生123名は、鈴木康裕学長および高木邦格理事長からの式辞を拝聴して、大川キャンパスでの薬学の学びへの決意を新たにした。新入生は、6年間、同級生、先輩、教職員、大川市の人々等と交流を深めながら大学生活を送る。福岡薬学部は、新入生が、薬剤師として社会で活躍するために求められる知識・技能・態度を修得し、実り多き学生生活を送れるよう卒業まで支援する。



新入生保護者懇談会

実施日：4月4日

【実施概要】

コロナ禍の影響で、新入生保護者懇談会は3年間中止となっていたが、本年度は入学式の後、新入生学科別保護者懇談会を開催した。本会は主に福岡薬学部学生委員会が運営を担当した。2号館101教室にて、新入生とその保護者が参加し、武田学部長の挨拶の後、福岡薬学部の教員紹介を行なった。さらに各担当教員より教務、実務実習、学生生活関連の説明を行なった。

【自己点検・評価】

新入生学科別保護者懇談会はコロナ禍で3年間実施されておらず、開校後初めての開催だった。そのため、時間配分や会場の設営などに不安があったが、当日は運営面においては大きな問題はなかった。懇談会で質問はなかったが、保護者に対して対面にて福岡薬学部の内容紹介および教員紹介を行うことができ、保護者との関係構築に繋がったと考えている。また、学生と各担当チューターとの顔合わせをすることができ、学生の新生活への不安軽減に繋がったと考える。

【今後の対応】

今回は参加者への対応および運営もスムーズに行えた。今後は事前に保護者の質問を抽出したうえで保護者が知りたい内容を説明するなど検討が必要と考える。

2) 保護者懇談会

実施日：10月7日

【実施概要】

昨年度に引き続き、本年度秋に大川キャンパス教育後援会会員のつどいの後、学科別保護者懇談会を開催した。本会は主に福岡薬学部学生委員会が運営を担当した。69組の保護者が参加し、武田学部長の挨拶の後、教務、学生生活関連の報告を行なった。その後、希望する保護者26組に対し、チューター担当教員による対面での個別面談を実施した。

【自己点検・評価】

今回は開校以来、2度目の秋の保護者懇談会であった。会場の設営、運営、保護者の案内ともに大きな問題はなかった。チューター担当教員による個別面談において、成績面、生活面、メンタルケア、学生の要配慮事項についての相談があり、担当教員がそれぞれ対応し、面談記録を残している。本会により保護者との信頼関係の構築に繋がったと考えている。

【今後の対応】

昨年度より参加者が増えており、学年進行に伴い、来年度も増加することが見込まれる。円滑な運営のために、個別面談に対応する教員や会場案内に対応するスタッフを増やすなど今後の課題である。

3) オープンキャンパス

本年度のオープンキャンパスは計4回、毎日キャンパス見学会は計4回実施された。各オープンキャンパスの実施時期、対応教員、並びに来場者は以下の通りである。

本年度の福岡薬学部オープンキャンパスは、コロナ禍が少し落ち着いた中での実施であったが、参加者は予約制で感染対策を引き続き考慮しながらの対面かつ体験型の実施であった。また来場者へは、ノベルティー並びに配付資料を、直接手渡し、感染防止に配慮した形で配布した。学科説明後、ボランティア学生によって体験型ブースへと分散して誘導を行った。体験型オープンキャンパスと言うこともあり、来場者はいずれも楽しんでいる様子であった。毎日キャンパス見学会では、少人数での参加であるため、パネルなどを用いた学科説明の後、質問なども丁寧に対応しながら時間をかけて学部内施設見学を行った。

オープンキャンパスの学科企画に関する改善点および自己評価は以下の通りである。

- ・来場者が増えたことから、本部での入試対策講座後、教室の移動無しに学科ガイダンスを行った後、学科体験プログラム会場への誘導を行った。
- ・昨年同様に医療系(2)、物理(1)、化学(1)、生物(1)、薬理系(1)のブースを設置した。なお、括弧書きはブースの数を表す。本年度より、コミュニケーションブースをレギュラーブースとして追加した。
- ・薬学部1階入り口付近の廊下に学部紹介用のパネルを設置した。1階ラウンジを休憩所として開放した。
- ・医療系のブースでは、調剤手技の説明時間が必要なため、整理券制としたが、参加者に

よっては整理券配布の周知が十分ではない場合もあった。これらについては、何かしらの対応を考える必要がある。

- ・学科体験プログラムにおいては、学生実習のある時期では4号館2階のスペースを、学生実習のない時期では4号館4階までの各系の実習室を使用した学科体験プログラムを実施した。
- ・オープンキャンパス学科プログラム開催時間中は、前年度の解決事項としていた音楽を流し、落ち着いた雰囲気で開催することができた。
- ・福岡薬学部のオープンキャンパス参加人数は前年度666名に対して、今年度649名となり、前年比約97%とほぼ昨年度並みの来場者であった
- ・今年度の新たな取り組みとしてプレミアムカレッジを薬理系、生物系、物理系の3つの分野で実施した。参加者は4高校、16名であった。

オープンキャンパス

日時	来場者	対応教員	対応学生
7月23日	196名	阿部義人、石田卓巳、石橋正己、猪部学、緒方勝也、太田昭一郎、永倉透記、西村信弘、平木洋一、村田祐造、一木裕子、齊藤秀俊、多田納豊、塚本宏樹、成川佑次、宗像達夫、山本緑、吉武康之、今井竜也、貝塚拓、朴珍相、中矢正、宗像千恵、磯田紀之、坂井崇亮、澤井円香、柴田健太郎、福田光良	1年生：2名 2年生：47名
8月5日	139名	阿部義人、石田卓巳、石橋正己、猪部学、川端猛夫、永倉透記、西村信弘、平木洋一、村田祐造、一木裕子、齊藤秀俊、多田納豊、塚本宏樹、成川佑次、宗像達夫、山本緑、吉武康之、今井竜也、貝塚拓、朴珍相、中矢正、宗像千恵、磯田紀之、坂井崇亮、澤井円香、柴田健太郎、福田光良	1年生：4名 2年生：36名 3年生：2名 4年生：1名
8月20日	191名	武田弘志、阿部義人、石田卓巳、石橋正己、猪部学、緒方勝也、川端猛夫、永倉透記、西村信弘、長谷川雄、平木洋一、村田祐造、一木裕子、齊藤秀俊、多田納豊、塚本宏樹、成川佑次、宗像達夫、山本緑、吉武康之、今井竜也、貝塚拓、中矢正、朴珍相、宗像千恵、磯田紀之、坂井崇亮、澤井円香、柴田健太郎、福田光良	2年生：51名 4年生：1名
3月17日	123名	阿部義人、石田卓巳、猪部学、太田昭一郎、平木洋一、村田祐造、一木裕子、齊藤秀俊、多田納豊、塚本宏樹、成川佑次、宗像達夫、山本緑、今井竜也、貝塚拓、中矢正、朴珍相、磯田紀之、坂井崇亮、澤井円香、柴田健太郎、福田光良	2年生：1名 3年生：1名 4年生：14名

毎日キャンパス見学会

日時	来場者	対応教員	日時	来場者	対応教員
9月4日	1組2名	宗像達夫	12月26日	1組2名	宗像達夫
9月22日	2組4名	平木洋一	2月15日	1組2名	宗像達夫

プレミアムカレッジ

日時	来場者	対応教員
10月21日	16名	武田弘志、永倉透記、阿部義人、猪部学、斎藤秀俊、多田納豊、塚本宏樹、宗像達夫、貝塚拓、中矢正

4) 国際医療福祉大学学会

【実施概要】

第13回国際医療福祉大学学会学術大会が、国際医療福祉大学 成田キャンパスにて開催された。本年度も昨年度と同様、新型コロナウイルス感染拡大を鑑み現地開催と Zoom 配信を併用したハイブリット形式での開催であった。大会では、特別講演（1 演題）、教育講演（2 演題）、シンポジウムに加え、MREAL®を使用した解剖学・フィジカルイグザミネーションの学修体験ができる体験イベントが新たに実施された。また、優秀演題口述発表（8 演題）およびポスター発表（325 演題）が行われ、参加者からの活発な意見交換が行われた。

プログラム

第13回国際医療福祉大学学会学術大会

9月3日（日）9:00～16:00

■開会式

学会長挨拶 国際医療福祉大学学会 会長 鈴木 康裕

大会長挨拶 第13回国際医療福祉大学学会学術大会 大会長 上田 克彦

■優秀演題口述発表 I

1. MRI 操作手技訓練シミュレーション教育システムの開発および既存システムとの比較

梶沢 宏之（国際医療福祉大学 成田保健医療学部 放射線・情報科学科）

2. 時計遺伝子発現を用いた早期疾患発症時期を毛1本から検出するシステム構築

浜田 俊幸（国際医療福祉大学 薬学部 薬学科）

3. DPC データを用いた食道癌手術における術前コルチコステロイド投与と短期術後成績の関連の分析

平野 佑樹（国際医療福祉大学 医学部 消化器外科学教室）

4. アルツハイマー病における血液バイオマーカーの実用化

今村 友裕（国際医療福祉大学 福岡薬学部 薬学科）

座長：清宮 正徳（国際医療福祉大学 成田保健医療学部 医学検査学科長）

■優秀演題口述発表Ⅱ

5. 乳がん術後上肢リンパ浮腫に対する予防及び早期治療プログラムの構築

岡道 綾（国際医療福祉大学 成田保健医療学部 理学療法学科）

6. 増血器腫瘍における日本人高齢者の特徴的な遺伝子変異

野本 順子（国際医療福祉大学 ゲノム医学研究所）

7. 手の震えに効果的な自助具開発

ー既存自助具の効果検証 ユーザビリティ評価に着目してー

秋葉 喜美子（国際医療福祉大学 保健医療学部 看護学科）

8. **Extended Reality (XR)** 技術による看護学科 1 年生の身体機能・構造とヘルスアセスメントの知識への影響

島田 伊津子（国際医療福祉大学 成田看護学部 看護学科）

座長：岡田 佳詠（国際医療福祉大学 成田看護学部 看護学科長）

■教育公演Ⅰ

専門職実践の可視化・関連職種連携・リアルワールドデータ利活用に資する **F-SOAIP**

演者：小嶋 章吾（国際医療福祉大学大学院 医療福祉学分野 特任教授）

座長：山本 康弘（国際医療福祉大学 医療福祉学部 学部長、

医療福祉・マネジメント学科 学科長）

■特別公演

本学（大学院）における研究の方向性について

演者：矢富 裕（国際医療福祉大学大学院 大学院長）

座長：鈴木 康裕（国際医療福祉大学大学 学長）

■学会総会・優秀発表者表彰式

■体験イベント **MREAL** を使用した解剖学・フィジカルイグザミネーションの学修

■教育公演Ⅱ

医学教育における **Virtual Reality/Mixed Reality** ~ IUHW VR 医学研究会の活動を中心に ~

演者：吉岡 直紀（国際医療福祉大学大学院 放射線・情報科学分野 教授）

座長：吉野 一郎（国際医療福祉大学成田病院 病院長）

■シンポジウム

共に創る国際医療福祉大学の将来

司会：西田 裕介（国際医療福祉大学 成田保健医療福祉学部長、理学療法学科長）

メタバース監修：岸 拓弥（国際医療福祉大学大学院 医学研究科 教授、国際医療福祉大学
福岡医学部 薬学科 教授）

■閉会式

■成田病院見学会

■ポスターセッション

学術大会特別サイトにて公開

【自己点検・評価】

昨年と同様、対面と Zoom によるハイブリット開催であったため、リモート参加者への通信環境の維持、並びに質疑応答の際の対話環境の確保が課題であった。本年度は国際医療福祉大学 成田キャンパスが主体となって学会を開催したが、学会期間を通じて各キャンパスおよび様々な場所からのアクセスに耐えうる通信環境が確保できたことは、来年度以降の会の開催に向け意義のある成果となった。

【次年度に向けての改善】

次年度以降も新型コロナを含む感染症の感染拡大状況を見ながらの開催となると予想される。このため、対面またはリモートのいずれか、もしくはハイブリッド型の開催を視野に入れた準備が必要である。本学部においては、早い段階での発表者や座長の選定、スケジュールの確認、通信環境の確保など、大会のスムーズな開催と進行に協力するための準備・点検が望まれる。

5) 第 19 回月華祭

実施日（期間）： 10 月 7、8 日

【実施概要】

本年度は学生を中心にメインステージでの催し物、模擬店などが準備・運営され、第 19 回月華祭が 10 月 7、8 日に 2 日間開催された。薬学部学生委員会は薬学部実行委員の選出、運営のアドバイス等を行った。

【自己点検・評価】

2 日目はあいにくの雨となったが、1 日目は晴天で、多くの参加者が来場し、大きな問題はなく実施された。薬学部学生も多数催し物、模擬店に参加しており、大いに盛り上がっていた。

【今後の対応】

次年度は本年度の経験を活かし、運営等のアドバイスや委員の選出を行なっていく。

6) 保護者のつどい

実施日（期間）： 10月7日

【実施概要】

本年度も前年度と同様大川キャンパス教育講演会の後、学科別保護者懇談会を開催した。学科別保護者懇談会は主に薬学部学生委員会が運営を担当した。52組の保護者が参加し、武田学部長の挨拶の後、教務、学生生活関連の報告を行った。その後、チューター担当教員による対面での個別面談を実施し、25組の保護者が参加した。

【自己点検・評価】

運営面においては大きな問題はなかった。懇談会ではいくつかの質問が出ており、担当教員が説明を行い、納得いただいた。個別面談においては、成績面、生活面、メンタルケアなどにおける相談があり、チューターがそれぞれ対応し、面談記録を残している。これにより保護者との信頼関係の構築に繋がったと考えている。

【今後の対応】

今回は、運営もスムーズに行えた。今後学年進行に伴い、保護者懇談会、個別面談の人数が増えてくると思われる、本年度は昨年度よりも9組の個別面談が増えている。今後面談が増加したときにどうするかは課題である。

7) ボランティア活動

福岡薬学部全学生の2022年4月から2023年3月におけるボランティア活動実績は、下記のとおりであった（報告協力：本学ボランティア委員会）。

	(名)
入学式ボランティア	2
20歳未満飲酒防止	2
大川寺子屋*	1
モルック交流大会	4
キャリア教育交流	5
第49回道守大川	2
日本心血管インターベンション*	27
大川市民夏まつり	49
飲酒運転撲滅	1
木の香まつり	5

大川市学校合同音楽会	4
SOMPO ボールゲームフェスタ in 大川	1
ariichi サイクリング	1
モッカランド DE ハロウィンパーティー	7
シマンマルシェ	1
引きこもり支援*	4
第2回グランドゴルフ	1
スカイランタン	1
大川市人権講演会	1
木の香マラソン大会	1
計	120

*: 有償ボランティア

今年度は、昨年度の約3倍にあたる120名がボランティア活動を行った。理由の一つに、新型コロナウイルス感染症対策である行動制限が解除された点が挙げられる。

参加した学生は、ボランティア活動を必要としている方々がいることを知り、本学の理念「『共に生きる社会』の実現を目指して」の理解に多少なりとも繋がったと思われる。

来年度もさらなる参加者増を目指し、学内のボランティア委員会と協力し、ボランティア啓発に努める。

8) ニュースレター（保護者通信）

「実施概要」 福岡薬学部と福岡保健医療学部合同で、国際医療福祉大学 大川キャンパスにおいて発行されているニュースレターが、本年も6月、9月12月に保護者宛に郵送された。12月には、福岡薬学部独自の「たより」も同封し、薬学生の大学生活の様子をお伝えした。3月には、卒業特別号を制作し、卒業式に配布した。ただ、新設の福岡薬学部では、まだ卒業生がおらず、第1期生の卒業は2025年度末となっている。

「自己点検・評価」 今年度は、5月に新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、これまで制限されていた様々な大学行事が再開した。2年次の海外保健福祉事情Ⅱで実施される海外研修や、これまで規模を縮小していた学園祭も従来のように実施された。本年度は、これら大学での活動やイベントの一部を、多数の写真とともに保護者にご覧いただき、ふだん目にするのが少ない、学生の大学生活の一部をお伝えした。

「今後の対応」 新型コロナによる制限がなくなり、活発に行われる学生の活動を、今年度と同様に、詳細にお伝えし、本学の活動にご理解いただくように努めていく。

9) 地域交流

地域交流委員会の大きな活動は、大川夏祭りへの参加と地域公開講座である。大川夏祭りは、コロナ禍で福岡薬学部開設以来行われていなかった。2023年8月5日(土) 17:00~21:00に行われ、薬学部からは、主に1年生が参加した。また、薬学部の4年生やサークルは屋台を出店した。コロナ禍で1年生の時に夏祭りに参加できなかった4年生の学生からは、参加して良かったとの声も聞かれた。薬学部では、薬の一包化体験を行った。薬の代わりにラムネを用いて一包化体験を行って頂き、好評であった。

また2024年1月20日(土)には、看護学科久木原博子教授によって、「加齢に伴うこころと身体の健康講座」と題して地域公開講座が行われた。近隣自治体から住民の皆さんに参加していただいた。

国際医療福祉大学 地域公開講座
主催：国際医療福祉大学 後援：大川市

加齢に伴うこころと身体の健康講座

本講座では、健康的に暮らすために必要な、適度な運動やストレスへの対処法について、本学看護学科の教授がわかりやすく説明します。講座の中では、日常生活でも簡単にできるヨガエクササイズも15分程度行いますので、お気軽にご参加ください。

開催日時
2024年1月20日(土)
10:00~11:00 (開場 9:30)

講師のご紹介
久木原 博子
国際医療福祉大学 福岡保健医療学部
看護学科 教授
看護師・産業カウンセラー

参加無料!
(要予約)

会場
国際医療福祉大学 大川キャンパス
2号館 2209教室 (大川市榎津 137-1)

佐賀大学大学院(医学研究科看護学専攻)修士・博士課程修了。
福岡大学看護学科教授などを歴任し、
2023年4月に本学看護学科教授として着任。

参加申し込み
いずれかの方法で
お申し込みください。

国際医療福祉大学 大川キャンパス
0944-89-2031
※平日のみ受付、9時~17時まで

QRコードからのお申し込みはこちら

さらに「社会に開かれた大学」の実現のため、教育研究面で一層の地域への貢献ができるように、地域への講師派遣を行っている。2023年度は福岡薬学部の梶岡俊一教授へ大川市より依頼があった。「ちょっと相談しにくい、おしっこのはなし」と題して、2023年6月2日(金)に出前講座を行った。

10) 学生一チューター面談

実施期間 前期：5月 後期：10月

【実施概要】

福岡薬学部では、学生一人ひとりに対して大学生生活に係るきめ細やかな指導を実現するために、チューター制度を取り入れている。チューターは、前期・後期の開始時期(5月、10月)に担当学生の個人面談を実施した。面談を通して、現在の生活態度や就学状況を把握するとともに、ラーニングポートフォリオを利用して卒業までの中長期的な目標について、

また後期からは DP 評価表を通じてディプロマポリシーの達成度の確認を行った。一年生においては入学時面談記録によって、大学生生活のスタートに配慮した指導を行った。さらに、各学生のチューター面談記録により、全ての学生にもれなくチューター面談を実施したことを確認した。

【自己点検・評価】

チューター面談の実施により、各学年の全ての学生の生活、学習のアドバイスを行うことができた。面談以外でも、チューターによる担当学生の指導・相談等は適時行われており、学生の相談窓口として、活用されている。

【今後の対応】

担当学生を集めての親睦会を企画するなどして、学生間のつながりを積極的にサポートしていく。また、本年度は初めて面談を通して学生の薬剤師としての資質を評価する方法（ディプロマポリシー到達度評価）を行ったが、不備な点も見つかったので、その修正を行い、さらにチューター面談へ活用していく。

11) ディプロマ・ポリシー到達度評価の導入

実施日（期間）： 後期面談（10月）

【実施概要】

福岡薬学部は、福岡薬学部および福岡薬学部薬学科の教育研究上の目的に基づき、学生が卒業までに身につけるべき資質・能力としてディプロマ・ポリシー(DP) 4項目を設定しており、学生が年次進行的に DP を身につけることが出来るように教育課程が編成されている。福岡薬学部 DP は、薬学教育モデルコアカリキュラムに定められている薬剤師として求められる基本的な資質・能力の 10 項目、および国際医療福祉大学の特徴である国際性を加えた計 11 項目と関連させている。学生が DP を身につけているかどうかを判断する必要があるため、DP 到達度評価表による評価を行うこととした。具体的には、1) 各学生に DP 到達度評価表に各科目の成績を記入させる、2) 各学年の各科目を 4 つの DP および DP と関連した 11 項目に分類し、項目ごとの GPA 平均値を DP 到達度評価表上で自動的に算出する、3) チューターが後期面談時に DP 到達度評価表を確認する、という手順を行なった。確認した DP や項目の到達度に関して、チューターが助言・指導し、特に、職業人としての心構え、患者・生活者を捉える姿勢、コミュニケーション能力等の項目は、成績のみでは評価しにくい点もあるので、面談を通して、重点的に助言・指導を行なった。助言・指導の内容は面談記録に記録した。

【自己点検・評価】

初回でもあり、学生側の DP 到達度評価表の記入ミスや理解度不足などがあったが、ほとんどの学生の DP 到達度評価をチューター面談を通じて行うことができた。面談時でのチューターの主観的な判断となる部分も総じて問題はなかった。

【今後の対応】

今回、学生側の理解不足の面が見られた部分は、マニュアルを作成することで、改善していきたいと思っている。また、チューター側にも理解を深めてもらい、さらに DP 到達度評価表を活用していきたいと考えている。

12) 薬学共用試験(CBT)

【実施日および実施概要】

2023 年度の薬学共用試験 CBT は、体験受験 8 月 29 日、30 日、本試験 12 月 5 日、6 日にそれぞれ 2 クラスに分けて実施した。本試験では薬学共用試験センターの提示した合格基準に基づき、正答率 60%以上を合格とし、2023 年度の薬学共用試験(CBT)の合格者数は 82 名であった。なお、福岡薬学部の薬学共用試験・国家試験の HP において、薬学共用試験センターの指示に従い、実施日程、合格者数、合格基準を記載し 4 月 1 日に公表する予定である。

【自己点検・評価】

2023 年度の体験・本試験の実施に問題は見られなかった。しかしながら、体験受験において、学生 1 名による違反行為が発見された。原因として学生ガイダンスや監督アナウンスの内容を理解できていないことが原因である。また、本試験においては違反行為や、不正行為は発見されなかった。

【今後の対応】

薬学共用試験 CBT の実施体制、監督業務については問題が見当たらないため、来年度も今年度同様に試験実施・運営を行う予定である。一方で、上記の違反行為に対する再発防止策として、学生受験ガイダンス時での指導の徹底と、試験中の注意徹底を行うなどの対応を取り、本試験では問題ないことから、来年度も特に注意して対応を行う予定である。

13) 薬学共用試験(OSCE)

【実施日および実施概要】

2023 年度の薬学共用試験 OSCE は、トライアル 8 月 8 日、本試験 12 月 22 日にそれぞれ実施した。本試験では薬学共用試験センターの提示した合格基準に基づき、合否判定を行い、2023 年度の薬学共用試験(OSCE)の合格者数は 82 名であった。なお、福岡

薬学部の薬学共用試験・国家試験のHPにおいて、薬学共用試験センターの指示に従い、実施日程、合格者数、合格基準を記載し4月1日に公表した。

【自己点検・評価】

2023年度は初めてのOSCE実施であったため、薬学共用試験センターの指示により、トライアルを行った。薬学共用試験センター本部からOSCE担当者がモニター員として、本学OSCEトライアルについて、事前提出書類の確認、改善点の指摘をいただいた。トライアル当日のモニター調査の結果を説明いただき、指摘事項について、改善・修正等を行い本試験に臨んだ。

本試験の実施は問題点はなく、モニター員からの指摘もなかった。受験学生の態度等にも問題無く、違反行為も無く試験は完了した。しかしながら、運営については、多くの人員を要し、そのマネジメントがマニュアル通りに進められなかった部分もあった。

【今後の対応】

薬学共用試験OSCEの実施体制、運営については、受験数も増加が見込まれ、来年度は評価者、模擬患者、模擬医師、学生スタッフ、運営スタッフ、ステーション担当者など人員配置とそのマネジメントを見直す予定である。また、学生受験ガイダンス時での指導の徹底と、試験中の注意徹底を行い、来年度のOSCEを実施する予定である。

14) 卒業研究（研究室配属）

実施期間：4年後期

科目責任者：武田弘志、科目担当者：齊藤秀俊

本科目は、「薬学教育モデル・コアカリキュラム」（平成25年改訂版）に基づき、学生が実験や調査研究を通じて研究の本質を体験し、科学的根拠に基づく問題解決能力を養成することを目的としている。

【自己点検・評価】

今年度、最上級生が4年次に進級したことを受けて、卒業研究分野とそれに対応する担当教員が設定された。また、卒業研究の基本運営ルールと学生の配属方針が決定され、各教員の専門研究領域を基に、教員間の協議を通じて研究分野が設定された。

分野ごとの研究テーマを募集した後、ガイダンスを実施し、学生に卒業研究分野紹介資料を配布した。これに並行して、各教員による研究紹介の時間を設け、学生の配属希望を調査した。その結果、成績を基に基本運営ルールに従い、82名の学生を各分野に配属することが決定された。卒業研究の実施記録は、学生に配布された記録ノートによって行われ、規定時間はこの記録をもとに確実に確保されることとなった。

留年する学生がいたことで、予め設定していた定員枠に対して学生数が不足し、所属学生が極端に少ない分野が発生するという課題が生じている。

実質的な研究活動期間は、4年次後期の2月から設定されており、令和5年度内の1か月程度では大きな問題なく卒業研究を開始できている。

【今後の対応】

今後、各分野の担当教員主導で卒業研究活動が実施されていくが、定期的に進行状況を確認し、記録する必要があると考えている。アンケート、報告書、中間報告会等の実施の可能性を教員間で協議して質を保ちつつ安定した卒業研究運営を行っていく。

15) 動物実験・組換えDNA実験教育訓練

大田原キャンパスと大川キャンパス合同で毎年1回、動物実験・組換えDNA実験教育訓練を実施している。令和5年度動物実験・組換えDNA実験 教育訓練は、以下のとおり実施した。

主催：動物実験委員会及び組換えDNA実験安全委員会

実施日時：2023年7月12日（水） 17：00～18：30

実施方法：ZOOM 配信

実施内容：

第一部（教員および学生対象） 17：00～17：50

1) 動物実験に関する講話（17：00～17：25）（講師：辻 稔先生）

2) 組換えDNA実験に関する講話（17：25～17：50）（講師：八木 秀樹先生）

第二部（教員対象） 18：00～18：30

1) 動物実験申請等の手続きについて（18：00～18：15）（講師：辻 稔先生）

2) 組換えDNA実験等の手続きについて（18：15～18：30）（講師：八木 秀樹先生）

16) 自己評価 2023

【実施概要】

国際医療福祉大学 福岡薬学部は開設4年目を迎え、来年度より新5年生が薬局、病院での学外実習を行う。6年制薬学部は、薬学教育評価機構による外部評価を、7年ごとに受審することになっているが、新設薬学部の場合は、まず開設4年目に自己点検・評価を実施し、1期生が学外実習を行う上で、必要な知識、技能、態度を身につけたかどうか、それまでの教育課程を自己点検・評価することになっている。本年度は、自己点検・評価の対象年度にあたり、薬学教育評価機構の実施マニュアルに沿って自己点検を実施した。その結果を報告書「自己評価 2023」にまとめ、HPに掲載するとともに、薬学教育評価機構に提出し、報告した。本学福岡薬学部は、開設当初より、第三者評価・自己点検委員会を組織し、教育・研究の質向上を図ることを目的として、年度毎に教育・研究活動を自己点検・評価してその結果を「自己点検・評価報告書」にまとめている。これらの取り組みにより、本学福岡薬学部の現体制は、適正な状態にある。

【自己点検・評価】

自己点検・評価の対象年度にあたり、第三者・自己点検委員会内に作業チームを設置し、点検する事実の基準日が5/1であることから、約1年前から準備を開始した。その結果、おおよそ予定通りに作業が進行し、期限である2024.4.11 ホームページ公開、2024.4.18 薬学教育評価機構へ提出を完了することができた。第三者・自己点検委員会では、本年度より外部委員にご参加いただき、毎年度の自己点検・評価にくわえ、自己評価2023の作成においても貴重なご指摘をいただき、報告書へ反映させることができた。

【今後の対応】

本学福岡薬学部は、2年後に完成年度を迎え、2028年度に薬学教育評価機構の本審査を受審する予定になっている。これまで毎年度実施してきた自己点検・評価によるPDCAサイクルを継続的に行い、5年次以降の薬学教育についても適正な形で実施できるように準備を進める。さらに、本年度の自己評価2023をふまえ、本審査に向けてより優れた教育・研究システムの構築に努める。

第二部 福岡薬学部会議および各委員会活動報告

1. 福岡薬学部会議

委員	<p>教員：武田、永倉、石橋、阿部、石田、猪部、太田、緒方、梶岡、川端、岸、吉良、西村、長谷川、平木、村田、山口、一木、齊藤、多田納、塚本、成川、宗像（達）、山本、吉武、今井、今村、貝塚、中矢、朴、宗像（千）、磯田、坂井、澤井、柴田、福田</p> <p>事務局：北原、東郷</p>
会議開催と内容	<p>第1回 2023年4月24日（月）16：30～18：00</p> <p>議題：</p> <p>1) 前回議事録について 第11回福岡薬学部会議議事録</p> <p>審議事項：</p> <p>なし</p> <p>報告・連絡事項：</p> <p>1) 福岡薬学部教務委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.学生情報</p> <p>3.2023年度福岡薬学部講義に関するお願い</p> <p>4.卒業研究のしおり（卒業研究実施概要）</p> <p>5.CBT 実力試験結果報告</p> <p>6.薬ゼミデータベースの運用方法</p> <p>7.再履修願書式の修正案</p> <p>2) 大川C教務委員会</p> <p>1.委員会出席報告</p> <p>3) 福岡薬学部第三者評価・自己点検委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.2023年度福岡薬学部自己点検活動への協力依頼</p> <p>4) 福岡薬学部広報学生募集委員会</p> <p>1.学生募集活動報告</p> <p>5) 大川C学生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>6) 大川C安全衛生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.大川キャンパス安全衛生計画書について</p> <p>7) 大川Cボランティア委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>8) 福岡薬学部FD委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>9) その他</p>

	<p>1.共用試験について</p> <p>第2回 2023年5月22日(月) 16:30~18:00</p> <p>議題:</p> <p>1) 前回議事録について</p> <p>第1回福岡薬学部会議議事録</p> <p>審議事項:</p> <p>なし</p> <p>報告・連絡事項:</p> <p>1) 福岡薬学部教務委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.学生情報</p> <p>3.講義出欠状況</p> <p>4.プレイスメントテストI 結果解析</p> <p>5.リメディアル教育の方針</p> <p>6.卒業研究分野と担当教員</p> <p>7.定期試験の不正行為の取扱い指針</p> <p>8.英語科目のスケジュール</p> <p>9.科目担当者修正</p> <p>10.チャット GPT</p> <p>11.講義における Zoom 利用</p> <p>12.新カリキュラムへの対応</p> <p>2) 大川C教務委員会</p> <p>1.議事メモ</p> <p>2.議事録</p> <p>3) 福岡薬学部広報学生募集委員会</p> <p>1.学生募集活動報告</p> <p>4) 学生募集広報委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>5) 大川C入試システム委員会</p> <p>1.総合型選抜入試問題の開示について</p> <p>6) 福岡薬学部学生委員会</p> <p>1.留年面談対応等に関して</p> <p>7) 大川C学生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>8) 大川C防災対策委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>9) 大川C安全衛生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>10) 大川CFD委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>11) その他</p> <p>1.2022年度福岡薬学部慶弔費会計報告</p>
--	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

	<p>2.福岡薬学部委員会メンバー修正 3.日本薬学会九州支部大会幹事会報告</p> <p>第3回 2023年6月26日(月) 16:30~18:30 議題:</p> <p>1) 前回議事録について 第2回福岡薬学部会議議事録 審議事項:</p> <p>1) 地域交流委員会 1.令和5年大川市青少年育成市民大会の出展について 2.大川市民夏まつり、学生屋台の出店について 報告・連絡事項 1) 福岡薬学部教務委員会 1.議事録 2.学生情報 3.講義出欠状況 4.卒業研究ガイダンス 5.定期試験ガイダンス 6.改訂コアカリキュラムへの対応 7.薬学共用試験 2) 大川C教務委員会 1.議事録 3) 福岡薬学部地域交流委員会 1.夏祭りキッズコーナーの進捗状況について 2.2023年度地域公開講座について 4) 福岡薬学部広報学生募集委員会 1.学生募集活動報告 5) 大川C入試システム委員会 1.議事録 6) 大川C安全衛生委員会 1.議事録 7) 大川Cニューズレター委員会 1.ニューズレター36号の発行について 8) 大川CFD委員会 1.報告事項 9) その他 1.OSCE実施委員会 2.定期試験補助監督 10) 2023年度第1回福岡薬学部FD活動 「教授法」梶岡俊一 教授</p> <p>第4回 2023年7月24日(月) 16:30~18:00 議題:</p>
--	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>1) 前回議事録について 第3回福岡薬学部会議議事録 審議事項：</p> <p>1) 福岡薬学部第三者評価・自己点検委員会 1.令和3年度自己点検・評価報告書 2.福岡薬学部薬学科の教育研究上の目的及び三つの方針の検証</p> <p>2) 福岡薬学部 OSCE 実施委員会 1.PS4年生白衣の購入について</p> <p>3) 大川C地域交流委員会 1.学生の夏祭り屋台運営について 2.各学科の夏祭りブースについて 報告・連絡事項：</p> <p>1) 大川C地域交流委員会 1.夏祭りについて 2.大川市青少年育成市民大会について</p> <p>2) 福岡薬学部教務委員会 1.議事録 2.前期成績確認スケジュール 3.定期試験監督 4.科目別テスト結果 5.卒業研究ガイダンススケジュール 6.新カリキュラムにおける薬学計算</p> <p>3) 大川C教務委員会 1.報告</p> <p>4) 福岡薬学部第三者評価・自己点検委員会 1.2022年度後期の講義資料点検結果 2.後期からのディプロマポリシー(DP)達成度評価稼働</p> <p>5) 福岡薬学部学生委員会 1.福岡薬学部 保護者懇談会について</p> <p>6) 大川C学生委員会 1.議事録 2.障がい学生修学支援担当会議について</p> <p>7) 大川Cボランティア委員会 1.議事録</p> <p>8) 大川C安全衛生委員会 1.議事録</p> <p>9) 福岡薬学部広報学生募集委員会 1.学生募集活動報告</p> <p>10) 福岡薬学部FD委員会 1.議事録 2.令和5年度第1回福岡薬学部FD活動報告</p> <p>11) 福岡薬学部OSCE実施委員会 1.OSCEトライアルに関するご協力をお願い</p>

<p>臨時福岡薬学部会議 2023年8月30日(水) 10:00~12:00</p> <p>審議事項：</p> <p>1) 福岡薬学部教務委員会</p> <p>1.2023年度前期成績判定</p> <p>2.新カリキュラムの2024年度からの導入</p> <p>3.福岡薬学部の3つのポリシーの2024年度からの変更</p> <p>4.進路希望アンケート実施</p> <p>報告・連絡事項：</p> <p>1) 福岡薬学部第三者評価・自己点検委員会</p> <p>1.前期科目のエビデンス資料提出依頼</p> <p>第5回 2023年9月25日(月) 16:30~18:00</p> <p>議題：</p> <p>1) 前回議事録について</p> <p>1.第4回福岡薬学部会議議事録</p> <p>2.臨時福岡薬学部会議議事録</p> <p>審議事項：</p> <p>なし</p> <p>報告・連絡事項：</p> <p>1) 福岡薬学部教務委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.各学年教務ガイダンス内容</p> <p>3.卒業研究の学生コース分け</p> <p>4.CBT体験受験および第1回薬ゼミ全国統一CBT対策模試の結果</p> <p>5.CBT演習</p> <p>6.後期の薬ゼミCBT対策講習</p> <p>7.4102室における自習禁止の周知</p> <p>8.進路希望アンケート</p> <p>9.2023年度解剖見学実習について</p> <p>2) 大川C教務委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.出席報告</p> <p>3) 福岡薬学部広報学生募集委員会</p> <p>1.学生募集活動報告</p> <p>4) 大川C学生募集広報委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>5) 福岡薬学部学生委員会</p> <p>1.保護者懇談会に関して</p> <p>2.チューター面談・DP評価に関して</p> <p>3.留年生対応に関して</p> <p>6) 大川C学生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>7) 大川C安全衛生委員会</p>

	<p>1.議事録 8) 大川Cハラスメント防止委員会 1.議事録 9) 大川Cニューズレター編集委員会 1.ニューズレター37号の発行について 10) 大川C入試システム委員会 1.議事録 11) 福岡薬学部FD委員会 1.令和5年度第2回FD活動議事録 12) 大川CFD委員会 1.報告事項 13) その他 1.2024年度科目担当者について</p> <p>第6回 2023年10月23日(月) 16:30~18:00 議題: 1) 前回議事録について 第5回福岡薬学部会議議事録 審議事項: なし 報告・連絡事項: 1) 福岡薬学部教務委員会 1.議事録 2.学生情報 3.薬学科のカリキュラムポリシー(教育目標)修正 4.主要授業科目と担当教員 5.2023年度後期進級判定スケジュール 6.CBT対策模擬試験結果(ファーマプロダクト) 7.キャリア講演会 8.4年生の研究室配属 2) 大川C教務委員会 1.議事録 2.出席報告 3) 福岡薬学部広報学生募集委員会 1.学生募集活動報告 4) 大川C学生委員会 1.議事録 2.交通規則の順守について 5) 大川C安全衛生委員会 1.議事録 6) 大川C入試システム委員会 1.総合型選抜入試について</p>
--	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

	<p>第7回 2023年11月27日(月) 16:30~17:30</p> <p>議題:</p> <p>1) 前回議事録について</p> <p>第6回福岡薬学部会議議事録</p> <p>審議事項:</p> <p>1) 福岡薬学部地域交流委員会</p> <p>1.地域公開講座の実施回数の変更について</p> <p>報告・連絡事項:</p> <p>1) 福岡薬学部地域交流委員会</p> <p>1.大川夏祭り等の実施状況について</p> <p>2.議事録</p> <p>2) 福岡薬学部OSCE実施委員会</p> <p>1.当日の役割分担と直近のスケジュールについて</p> <p>3) 福岡薬学部教務委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.2023年度後期進級見込み判定スケジュール修正版</p> <p>3.主要授業科目/国試資格指定科目 進捗状況</p> <p>4.2024年度用シラバス作成</p> <p>5.令和6年度履修系統図案</p> <p>6.選択科目単位不足注意喚起</p> <p>7.授業欠席回数状況</p> <p>8.第2回全国統一CBT模擬試験結果</p> <p>4) 大川C教務委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.報告</p> <p>5) 福岡薬学部広報学生募集委員会</p> <p>1.学生募集活動報告</p> <p>6) 大川C学生募集広報委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>7) 大川C学生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>8) 大川C安全衛生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>9) 大川C防災対策委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>10) 大川Cボランティア委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>11) 福岡薬学部FD委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>第8回 2023年12月25日(月) 16:30~17:30</p> <p>議題:</p> <p>1) 前回議事録について</p>
--	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>第7回福岡薬学部会議議事録</p> <p>審議事項： なし</p> <p>報告・連絡事項：</p> <p>1) 福岡薬学部臨床実習委員会</p> <p>1.実務実習について</p> <p>2) 福岡薬学部教務委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.CBT 試験結果</p> <p>3.後期定期試験、期間外試験、TOEIC 試験監督</p> <p>4.2024 年度 4 月のオリエンテーション日程</p> <p>5.後期定期試験ガイダンス</p> <p>6.実務実習 I 期参加学生の成績問い合わせ方法</p> <p>3) 大川 C 教務委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.報告</p> <p>4) 福岡薬学部第三者評価・自己点検委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.2024 年度からの 3 ポリシー</p> <p>3.令和 5 年度自己点検・評価報告書の作成スケジュール</p> <p>5) 福岡薬学部広報学生募集委員会</p> <p>1.学生募集活動報告</p> <p>6) 大川 C 学生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>7) 大川 C 安全衛生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>8) 大川 C ボランティア委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>9) 大川 C N L 編集委員会</p> <p>1.ニューズレター 38 号の発行について</p> <p>10) その他</p> <p>1.福岡薬学部会議 規定案</p> <p>臨時福岡薬学部会議 2024 年 1 月 10 日 (水) 15:00～15:30</p> <p>審議事項：</p> <p>1) 福岡薬学部教務委員会</p> <p>1.2023 年度進級見込判定 (4 年生)</p> <p>第 9 回 2024 年 1 月 22 日 (月) 16:30～17:30</p> <p>議題：</p> <p>1) 前回議事録について</p> <p>第 8 回福岡薬学部会議議事録</p> <p>審議事項：</p>

	<p>1) 福岡薬学部第三者評価・自己点検委員会</p> <p>1.自己点検 2023</p> <p>報告・連絡事項：</p> <p>1) 福岡薬学部教務委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.2024 年度学生便覧掲載用の卒業要件・進級条件、履修系統図</p> <p>3.2024 年度の薬学演習、病院薬局事前実習 I/予備校講習</p> <p>4.2024 年度のリメディアル教育</p> <p>5.卒業研究評価手順</p> <p>6.5 年生教務ガイダンス資料</p> <p>7.キャリア講演会アンケート結果</p> <p>8.進路希望アンケート結果</p> <p>9.2023 年度解剖見学実習アンケート結果</p> <p>2) 大川 C 教務委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.報告</p> <p>3) 大川 C 学生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>4) 大川 C 安全衛生委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>2.ストレスチェック実施について</p> <p>5) 福岡薬学部広報学生募集委員会</p> <p>1.学生募集活動報告</p> <p>6) 福岡薬学部ボランティア委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>7) 大川 C 国際交流委員会</p> <p>1.議事録</p> <p>8) その他</p> <p>1.福岡薬学部会議規定</p> <p>2.FD 活動開催のお知らせ</p> <p>臨時福岡薬学部会議 2024 年 2 月 20 日 (火) 14:00～15:00</p> <p>審議事項：</p> <p>1) 福岡薬学部教務委員会</p> <p>1.2023 年度進級見込判定 (1-4 年生)</p> <p>第 10 回 2024 年 2 月 26 日 (月) 16:30～18:00</p> <p>議題：</p> <p>1) 前回議事録について</p> <p>1.第 9 回福岡薬学部会議議事録</p> <p>2.臨時福岡薬学部会議議事録</p> <p>審議事項：</p> <p>なし</p>
--	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>報告・連絡事項：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 大川C地域交流委員会 <ol style="list-style-type: none"> 1.議事録 2) 福岡薬学部教務委員会 <ol style="list-style-type: none"> 1.議事録 2.学生情報 3.カリキュラムマップ(DP/CP-科目対応表) 4.5年生Bコース演習(メディセレ教材案) 5.適性診断(マッチプラス/マイナビ(株))の結果利用 6.履修登録画面印刷の薬事務への提出の廃止 7.国試受験時の宿泊希望アンケート結果 3) 大川C教務委員会 <ol style="list-style-type: none"> 1.議事録 4) 福岡薬学部第三者評価・自己点検委員会 <ol style="list-style-type: none"> 1.自己点検2023の作成・公開 2.2023年度前期科目点検結果 3.今年度福岡薬学部活動のまとめ 5) 福岡薬学部学生委員会 <ol style="list-style-type: none"> 1.5年生時の面談に関して 2.保護者懇談会に関して 3.退学、休学手続きに関して 6) 大川C学生委員会 <ol style="list-style-type: none"> 1.議事録 7) 大川C安全衛生委員会 <ol style="list-style-type: none"> 1.議事録 8) 福岡薬学部広報学生募集委員会 <ol style="list-style-type: none"> 1.学生募集活動報告 9) 大川CFD委員会 <ol style="list-style-type: none"> 1.報告事項 10) 2023年度第2回福岡薬学部FD活動 「コロナ禍における薬学教育」齊藤秀俊 准教授 <p>第11回 2024年3月18日(月) 16:00~17:30</p> <p>議題：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 前回議事録について <ol style="list-style-type: none"> 1.第10回福岡薬学部会議議事録 2.臨時福岡薬学部会議議事録 <p>審議事項：</p> <p>なし</p> <p>報告・連絡事項：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 福岡薬学部教務委員会 <ol style="list-style-type: none"> 1.議事録 2.4月オリエンテーション内容

	<p>3.1 年生のリメディアル教育について（リメディアル教育 WT）</p> <p>4. 新入生プレイズメントテスト1の監督要領</p> <p>5.3 年生の科目別テストについて（CBT 対策 WT）</p> <p>6.4 年生時間割取り纏め報告</p> <p>7. 来年度の実習スケジュール</p> <p>8. 教科書・参考書著作権対応事例</p> <p>9. 新入生の卒業要件（選択科目の単位数）</p> <p>2) 大川C教務委員会</p> <p>1. 出席報告</p> <p>3) 福岡薬学部学生委員会</p> <p>1. 福岡薬学部新入生学科別懇談会について</p> <p>4) 大川C学生委員会</p> <p>1. 運動会に関して</p> <p>2. 特待奨学生に関して</p> <p>3. 推薦書に関して</p> <p>5) 大川C安全衛生委員会</p> <p>1. 議事録</p> <p>6) 福岡薬学部広報学生募集委員会</p> <p>1. 学生募集活動報告</p> <p>7) 大川C学生募集広報委員会</p> <p>1. 議事録</p> <p>8) 大川CFD委員会</p> <p>1. 令和5年度第2回FD活動</p>
--	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

2. 福岡薬学部教務委員会

委員	<p>永倉透記（委員長、教授）、多田納豊（副委員長、准教授）、猪部学（教授）、西村信弘（教授）、長谷川雄（教授）、平木洋一（教授）、宗像達夫（准教授）、塚本宏樹（准教授）、吉武康之（准教授）、齊藤秀俊（准教授）、成川佑次（准教授）、宗像千恵（講師）、貝塚拓（講師）、坂井崇亮（助教）、澤井円香（助教）、柴田健太郎（助教）、福田光良（助教）</p>
所管事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ 薬学教育カリキュラムの点検および改善・改革 ・ 各学年の成績集計・分析および進級・卒業要件達成度の精査 ・ カリキュラムの運営実務（時間割作成、履修状況やシラバス作成の取り纏め等） ・ 各種試験（定期試験、模擬試験等）の調整・実施 ・ 卒業研究（卒研生配属、卒研発表会運営、卒論取り纏め、成績評価等）の調整・実施 ・ 薬剤師国家試験対策の企画・運営 ・ 薬学共用試験(CBT・OSCE)対策の企画・運営 ・ 総合選抜型入試問題の作成、入試実施および成績評価

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教務ガイダンスの調整・実施 ・ 学生への4月アンケートの実施 ・ 保護者への学習に関する報告 ・ 事務部教務係および福岡保健医療学部との連携 ・ 薬学部会議への報告・議案上程 ・ 当委員会活動の自己点検および報告書作成 ・ その他、福岡薬学部の教務に係る事項
<p>活動概要 (委員会開催と内容)</p>	<p>第1回 2023年4月18日(火) 14:40-16:00 議題：1. 大川教務委員会(4/5)報告、2. 学生情報、3. 2023年度役割分担修正案、4. 卒業研究のしおり(卒業研究実施概要)、5. プレイスメントテストIの結果報告、6. CBT 実力試験の結果報告、7. 薬ゼミデータベースの運用方法、8. 再履修願修正案、9. 2023年度福岡薬学部講義に関するお願い案、10. その他</p> <p>第2回 2023年5月16日(火) 14:40-16:00 議題：1. 大川教務委員会(5/2)報告、2. 学生情報、3. 講義出欠状況、4. プレイスメントテストIの成績、5. 卒業研究分野と担当教員、6. 総合型選抜試験過去問の外部への公開について、7. 英語科目のスケジュール、8. 科目担当者修正、9. チャット GPT、10. 講義における zoom 利用、11. 新カリキュラムについて</p> <p>第3回 2023年6月20日(火) 14:40-16:05 議題：1. 大川教務委員会(6/6)報告、2. 学生情報、3. 講義出欠状況、4. 総合型選抜問題の校正・チェックについて、5. 改定コアカリに基づく対応、6. 卒業研究ガイダンス資料案、7. 定期試験ガイダンス案、8. 2023年度前期3年生科目別テスト</p> <p>第4回 2023年7月18日(火) 14:40-15:55 議題：1. 大川教務委員会(7/4)報告、2. 学生情報、3. 前期成績確認スケジュール、4. 定期試験監督、5. 科目別テスト結果、6. 卒業研究ガイダンススケジュール、7. 令和4年度後期科目資料の点検結果、8. 新カリキュラムにおける薬学計算について、9. その他</p> <p>臨時 2023年8月28日(月) 13:00-14:30 議題：1. 2023年度前期成績判定、2. 新カリキュラムの2024年度からの導入/福岡薬学部3ポリシーの2024年度からの変更、3. 進路希望アンケート、4. 2023年前期科目の点検依頼</p> <p>第5回 2023年9月19日(火) 14:00-15:45 議題：1. 大川教務委員会(9/11)報告、2. 学生情報、3. 後期教務ガイダンス資料案、4. 卒業研究配属、5. 後期の薬ゼミ CBT 対策講習開始、CBT 体験受験、CBT 対策模試の結果、薬学演習の開始、6. 教室見回りについて、7. 進路希望アンケート</p> <p>第6回 2023年10月17日(火) 14:45-15:20 議題：1. 大川教務委員会(9/11)議事録、2. 大川教務委員会(10/3)報告、3. 学生情報、4. 薬学科のカリキュラムポリシー(教育目標)修正、5. 主要授業</p>

<p>科目と担当教員、6. 2023 年度後期進級判定スケジュール、7. 2023 年度 CBT 対策模擬試験（ファーマプロダクト）結果、8. 第 1 回 福岡薬学部学生対象キャリア講演会、9. 卒業研究配属の結果</p> <p>臨時 2023 年 10 月 17 日（火） 14:30– 14:45 議 題： 1. 総合型選抜入試の合格者候補の抽出</p> <p>第 7 回 2023 年 11 月 21 日（火） 14:00- 14:40 議 題： 1.大川教務委員会(10/3)議事録、2. 大川教務委員会(11/7)報告、3. 2023 年度後期進級見込み判定スケジュール修正版、4. 主要授業科目/国試資格指定科目進捗状況、5. 2024 年度用シラバス作成、6. 令和 6 年度履修系統図案、7. 選択科目単位不足注意喚起、8. 授業欠席回数状況、9. 第 2 回全国統一 CBT 模擬試験の結果</p> <p>第 8 回 2023 年 12 月 21 日（火） 14:00- 15:10 議 題： 1.11 月度大川教務委員会議事録、2.大川教務委員会(12/5)報告、3. CBT 試験結果、4.後期定期試験、期間外試験、TOEIC 試験の補助監督、5. 薬学演習 I・II・III 定期・追試再試験の採点基準、6.来年度 4 月のオリエンテーション日程、7.後期定期試験ガイダンス、8.実務実習 I 期参加学生の成績問い合わせ方法、9.その他</p> <p>臨時 2024 年 1 月 9 日（火） 16:00- 16:30 議 題： 1. 2023 年度 4 年生後期期成績判定</p> <p>第 9 回 2024 年 1 月 16 日（火） 14:15- 14:45 議 題： 1. 12 月度および 1 月度大川教務委員会議事録、2. 臨時福岡薬学部教務委員会(1/9)議事録、3. 2024 年度新入生の卒業要件・進級要件案および履修系統図案、4. 卒業研究評価手順について、5. 2023 年度 4 年生（2024 年度 5 年生）教務ガイダンス資料について、6. 来年度 4 年生の薬学演習、病院薬局事前実習 II/予備校講習、7. 来年度のリメディアル教育、8. 夏休み、春休み時のスクールバスの運行時間</p> <p>臨時 2024 年 2 月 19 日（月） 17:00- 17:45 議 題： 1. 2023 年度成績確認（進級判定）</p> <p>第 10 回 2024 年 2 月 20 日（火） 15:00–15:50 議 題： 1. 2 月度大川教務委員会議事録、2. 学生情報、3.カリキュラムマップ（DP/CP-科目対応表）、4. 2023 年度福岡薬学部前期科目点検結果、5. 5 年生 B コース演習（メディセレ教材案）、6. 適性診断（マッチプラス/マイナビ（株））の結果利用について、7. 履修登録画面印刷の薬事務への提出の廃止、8. 2023 年度教務委員会活動まとめ</p> <p>第 11 回 2024 年 3 月 12 日（火） 17:00-19:00 議 題： 1. 3 月度大川教務委員会報告、2. 4 月オリエンテーション内容、3. 1 年生のリメディアル教育について、4. 新入生プレイスメントテスト I の監督要領、5. 3 年生科目別テストについて、6. 4 年生時間割取り纏め報告、7. 2024 年度の実習スケジュール、8. 教科書・参考書著作権対応事例、9. その他</p>

自己点検・評価	<ul style="list-style-type: none"> ■ 本委員会は、福岡薬学部会議前週に定期的開催し、薬学部内教学課題に関する討議、委員間の情報共有等を行った。前後期の定期試験後において、臨時委員会を開催して成績確認を行った。委員会決定事項は、福岡薬学部会議に上申して決裁を受けた。本委員会は、大川キャンパス教務委員会と密接に連携し、大川キャンパス全体の教務活動との整合性を保った。 ■ シラバス記載最適化、講義・実習スケジュール調整、定期試験等の試験監督配置、定期試験後の進級判定資料作成、学生の講義出欠状況の定期的集計、学生への教務ガイダンス、リメディアル教育の企画・実行など、学生の学修が円滑かつ効果的に進むよう活動を進めた。 ■ 令和6年度入学生から適用される改訂コアカリに沿った新カリキュラムを作成した。新カリキュラム作成は大田原キャンパスと協議して作成した(8月21日開催のキャンパス間合同会議にて合意)。新カリキュラム案は、臨時福岡薬学部会議、大川教務委員会、専任教員代表者会議(教授会に相当)において上申・審議され承認された。また、新カリキュラムに基づいた履修系統図を作成した。 ■ 薬学共用試験センターと連携してCBT実施準備を進め、8月29、30日の外部モニター員による監修下の体験受験実施を経て、12月5、6日にCBTを実施した。本年度が初の実施であったが、円滑に実施することが出来た。 ■ 半期毎の各科目の講義資料・成績評価資料の点検作業を第三者評価・自己点検委員会と連携して本委員会が担った。
今後の対応	5年生の病院・薬局実務実習および卒業研究が円滑に進むよう活動する。4年生に対しては、共用試験や研究室配属を令和5年度と同様に進める。2-5年生の各科目における教育の質がさらに向上するよう活動する。新1年生に対して改訂コアカリが円滑に導入・運用されるよう活動する。

3. 福岡薬学部学生委員会

委員	阿部義人(委員長、教授)、山本緑(副委員長)、緒方勝也(教授)、西村信弘(教授)、岸拓也(教授)、太田昭一郎(教授)、塚本宏樹(准教授)、一木裕子(准教授)、貝塚拓(講師)、朴珍相(講師)、今井竜也(講師)、磯田紀之(助教)、柴田健太郎(助教)、
所管事項	<p>【年中業務】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己点検および報告書作成 <p>【学生指導】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生主導行事の準備、運営の支援(大学祭(月華祭)、運動会、謝恩会) ・大学主導行事の準備、設営(入学時オリエンテーション、入学式・卒業式(学位授与式))

	<ul style="list-style-type: none"> ・チューター活動の運営 【生活指導】 ・問題発生時の学生生活の指導(交通安全、地域社会における生活等) ・修学困難な学生の把握および支援並びに対応手順の作成および周知 ・新型コロナウイルス感染予防の徹底(本年度) 【修学指導】 ・成績不振学生等への三者面談(保護者・学生・チューター)実施 【健康管理】 ・健康(ハラスメント、心身症、予防接種、学生体調管理アンケート等)に関する状況把握 【教育後援会】 ・教育後援会幹事の選出 ・保護者懇談会の運営 【課外活動】 ・部活動、サークル活動の支援
<p>活動概要 (委員会開催と内容)</p>	<p>第1回 2023年4月18日 (火) 11:00 – 12:00</p> <p>【議題】 1. 担当の割り振りに関して 2. 留年面談対応等に関して 3. DP 評価に関して 4. 面談記録の保管に関して 5. その他</p> <p>【報告】 1. その他</p> <p>第2回 2024年2月19日 (月) 11:00 – 12:00</p> <p>【議題】 1. 5年生時の面談に関して 2. 要配慮者の対応に関して 3. 2回目の4年次用学習支援体制について 4. その他</p> <p>【報告】 1. 面談記録の保管に関して 2. 保護者懇談会に関して 3. その他</p> <p>その他活動 1. 大川キャンパス学生委員会との連携業務 福岡薬学部学生委員4名は、大川キャンパスの学生委員を兼務した。毎月第一月曜に開催のキャンパス学生委員会に出席し、学科への依頼事項の窓口として対応した。さらに、キャンパス学生委員会活動内容について、学科教員への情報共有を行った。</p> <p>2. チューター活動運営 チューターに対して、前期・後期開始時期には個人面談を通してラーニングポートフォリオを確認すること、担当学生の就学・生活指導を適宜行うこと、DP評価表にもとづきディプロマポリシーの達成度の確認することを依頼した。また、前期・後期の成績判定後に留年が確定した学生については、心情のケアや就学の意味確認、必要に応じて保護者との情報共有、などを入念に行うように依頼した。 留年生に向けて、学習支援室(ゼミ室8)の活用やチューターとの定期面談について毎月指導した。チューターに対しても、定期的な指導を依頼した。なお、実施した全ての面談について、委員会作成の書式を用いて記録・報告するようにチューターへ依頼し、提出されたファイルを集計・保管した。1年生入学時の学生記録用紙は取りまとめた後に、学年主任に保管を依頼した。さらに学科別保護者懇談会(10/7開催)を運営・遂行した。</p>

	3. 学生主導行事の準備、運営の支援 (大学祭(月華祭)、運動会) 大学祭 (10/7,8)、運動会 (5/20) 等の実行委員を決定し、運営に協力した。
自己点検・ 評価	大学主導・学生主導行事 (学科別保護者懇談会、月華祭、運動会) が開催された。いずれの運営も特に大きな問題はなく、円滑に遂行された。委員会会議を開催し、所轄事項を円滑に遂行するように議論した。また、大川キャンパス学生委員会との連携業務および学科におけるチューター業務について、滞りなく活動を継続できたため、目的は概ね達成したと考える。
今後の対応	大学祭、運動会などの学生イベントやチューター活動、サークル活動を通じた学生間のつながりを持たせるイベントのサポート業務を引き続き行っていく。また、健康管理、生活指導など学生生活のサポートや保護者懇談会等の円滑な運営を引き続き支援していく。

4. 福岡薬学部臨床教育・実務実習委員会

委員	西村信弘 (委員長、教授)、長谷川雄 (副委員長、教授)、緒方勝也 (教授)、太田昭一郎 (教授)、宗像千恵 (講師)、福田光良 (助教)、平木洋一 (教授)、一木裕子 (准教授)、今村友裕 (講師)
所管事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ 早期体験実習 (1年次必修) の調整・実施 ・ 病院薬局実務実習 (5年次必修) の調整・実施 ・ 薬学共用試験 (OSCE) 実施委員会、各担当委員会の開催 ・ 多職種連携教育関連の講義・実習に対する対応 ・ その他臨床教育・実務実習に関わる事項
活動概要 (委員会開 催と内容)	<p>早期体験実習 (1年次必修) の調整・実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 早期体験実習の見学施設 (薬局) への受入依頼について、九州山口各県の薬剤師会との打合せを実施した。また、福岡県内薬系 4 大学間での調整、打合せを行った。 <p>病院薬局実務実習 (5年次必修) の配属調整・実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 九州山口実習調整機構および大学委員会、福岡県薬剤師会、福岡県病院薬剤師会、佐賀県薬剤師会、佐賀県病院薬剤師会等と協議を重ねた。 ・ 実習先を調整するための、本学で学生アンケートを実施し、それに基づいて実習病院の振り分けを行い、調整機構へ提出した。 ・ 調整機構大学委員会で九州山口地区における病院への実習配属調整を行い、薬局実習調整機関へ薬局実習の配属依頼を行った。 ・ 病院および薬局の配属結果を学生に説明し、実習実施のための準備を開始した。ワクチン接種を勧奨していたが、接種が進まなかったため、学内での集団接種を実施した。 ・ 実習受入施設に在籍が必須である認定実務実習指導薬剤師について、養

	<p>成のためのワークショップに参加した（西村、福田）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・病院薬局実務実習のための事前教育、ガイダンスを実施した。 ・2024年2月19日より第I期の実習（薬局）がスタートしたが、今のところ、トラブル等は発生していない。 <p>薬学共用試験（OSCE）実施委員会、各担当委員会の開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・OSCE トライアルの日程調整、物品の稟議提出、など準備を行った。8月8日に OSCE トライアルを実施、モニター2名より指摘事項をいただき、改善点について協議した。 ・OSCE 課題決定後に、事前提出書類作成を各教員に振り分けて依頼し、期日までに提出した。モニターおよび薬学共用試験センターからの評価は良く、ほとんど修正が発生しなかった。 ・OSCE 実施に向けて、福岡県内薬学部（福岡大学、第一薬科大学、九州大学、国際医療福祉大学）合同で模擬医師養成講習会を開催した。 ・OSCE 課題決定後評価者、模擬患者、模擬医師について、養成講習・直前講習を実施した。 <p>多職種連携教育関連の講義・実習に対する対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・代表者3名（西村、太田、宗像千恵）が大川キャンパス臨床実習委員会へ出席し、関連職種連携論、関連職種連携ワーク、関連職種連携実習、臨地実習に関する協議を行った。 ・関連職種連携ワークには、薬学部からチューター担当教員を選出して、グループワークに対応した。
自己点検・評価	<p>受入れ薬局と調整を重ね早期体験実習を実施した。病院見学も定通り終了し、最終の報告会で成果確認ができた。</p> <p>本学では OSCE 実施は初めてであったため、大田原薬学部の協力を得ながら、トライアルの実施、事前提出書類の作成・提出、本試験の準備・運営に取り組んだ。臨床系教員および事務職員の負担が尋常で無かったため、来年度は改善が必要であると思われる。</p> <p>関連職種連携ワークについては、大川キャンパスの内容が薬学科、医学検査学科の学生には適合していないため、模擬症例への取組方法など課題が山積していた。</p>
今後の対応	<p>来年度は早期体験実習及び関連職種連携教育の実施に対応する。</p> <p>関連職種連携ワークは全学共通の内容に変更する。</p> <p>薬学共用試験（OSCE）に向けて必要事項を検討していく。</p> <p>さらに、2025年度実施の病院薬局実務実習の配属調整が2024年度4月から始まるため、委員会として対応を進める。</p>

5. 福岡薬学部 FD 委員会

委員	長谷川雄(委員長、大川キャンパス FD 委員兼任、教授)、 齋藤秀俊(副委員長、准教授)、梶岡俊一(教授)、吉武康之(准教授)、 中矢正(大川キャンパス FD 委員兼任、講師)、今井竜也(講師)
所管事項	<ul style="list-style-type: none"> ● 本学の基本理念と教育の目標を基盤とした独自の薬学教育の啓蒙 ● 教員の教育技法向上支援 ● 授業アンケート結果の分析と活用 ● 教育・研究実施に係る教員間の意思疎通サポートと環境整備 ● FD 委員会活動の自己点検及び報告書の作成 ● 薬学部各委員会と連携した薬学部課題の抽出、およびそれを題材とする研修会の開催
活動概要 (委員会開催と内容)	<p>1. 薬学部 FD 活動：年 3 回実施</p> <p>第 1 回(6/26、26 人出席、出席率 76%)：薬学部必修科目のうち学生アンケート結果のスコアが最も高かった梶岡俊一教授より「教授法：疾病と病態生理」と題し、講義の進め方や工夫について発表して頂いた。</p> <p>第 2 回(9/5、21 人出席、出席率 60%)：初の外部講師を招待、薬学ゼミナール</p> <p>松本賢先生をお招きし、「近年の薬剤師国家試験から見る薬剤師育成に関わる薬学生の現状と対策」と題し、現在の薬学教育の現状と国家試験合格へ向けての対策についてお話し頂いた。</p> <p>第 3 回(3/9、26 人出席、出席率 74%)：齋藤秀俊准教授より「コロナ禍における薬学教育」と題し、コロナ禍におけるオンライン講義や実習における ICT 活用、それらの長所や短所について講演頂いた。</p> <p>なお、欠席教員に向けて後日議事録の配信を行った。</p> <p>2. 大川キャンパス FD 活動</p> <p>大川キャンパス FD 活動：全キャンパスにおける 2 回の合同教員研修会(9/21、3/14)に加え、科研費獲得経験談(7/18)、学内教員に学ぶ教授法(10/17)に参加した。</p>
自己点検・評価	<p>本学の FD 活動は薬学部内での開催に加え、大川キャンパス内、全キャンパス内でそれぞれ企画されている。本学部には様々な背景を持つ教員が在籍しているため、FD 活動では薬学部の枠組みの中で今後目指すべきベクトルを共有できる内容を企画した。活動後のアンケート結果において企画内容に対する評価は総じて高く、我々が企画・実施している FD 活動は、新設学部である本学の薬学教育遂行に一定の役割を果たすことができていると考えている。なお、今回初めて外部講師を招聘したが、様々な分野の専門家に</p>

	よる講演は学内教員の知識活動に大きく貢献するため、予算が限られる中今後も可能な限り計画していきたいと考えている。
今後の対応	今年度福岡薬学部において OSCE や CBT が初めて執り行われた。来年度は最高学年が5年生となり、教員は新しく卒業研究や実務実習に対応することになる。学生達が臨床で活躍するためにはどのような教育や対策を日々行っていくのが最適か考えつつ、FD 活動を通して我々も薬学教育の専門家としてさらなるグレードアップを目指したい。

6. 福岡薬学部教育・研究委員会

委員	石田卓巳（委員長、教授）、阿部義人（副委員長、教授）、川端猛夫（教授）、岸拓弥（教授）、吉良潤一（教授）、村田祐造（教授）、朴珍相（講師）、中矢正（講師）、磯田紀之（助教）、坂井崇亮（助教）
所管事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究費申請の啓発 ・ 教員の研究・教育業績（論文、総説、著書、学会発表、講演、担当科目等）のとりまとめ ・ セミナーおよび研究会の企画・実施 ・ 研究の支援 ・ 当委員会活動の自己点検および報告書作成
活動概要 （委員会開催と内容）	なし
自己点検・評価	研究・教育支援委員会では、研究の支援や業績の取りまとめなど薬学部教員の研究・教育に関する内容を審議し福岡薬学部教員会議に提議・報告している。本年度は、第13回国際医療福祉大学学会学術大会（9/3開催）における協力体制の構築、並びに年度毎にまとめられる第三者評価・自己点検報告書の研究活動報告書について、書式を第三者評価・自己点検委員会会議に提議し決定すると共にその取りまとめを行なった。また、本年度は議題等の提案がなされなかったため会議を開催しなかった。
今後の対応	本学学会学術年会における協力体制の構築については、来年度も継続して対応する予定である。次年度以降も他の委員会との連携を図りながら、本委員会が掲げた所管事項に伴い研究支援活動を行う。

7. 福岡薬学部広報・学生募集委員会

委員	宗像達夫(委員長、准教授)、一木裕子(副委員長、准教授)、猪部学(教授)、磯田紀之(助教)、坂井崇亮(助教)、福田光良(助教)
所管事項	<ul style="list-style-type: none"> ・オープンキャンパスにおける学科宣伝と体験企画の考案・実施 ・高校模擬講義、高校訪問、進学相談会担当者調整 ・学生募集・広報委員会参加 ・薬学部パンフレット/大学パンフレットの作成と校正 ・薬学部ホームページの情報追加と変更依頼 ・薬学部フォーラムの対応と内容調整 ・その他の広報媒体への学生の手配、原稿の校正など ・パンフレットなどで使用する素材集め ・SNS 発信に向けた準備 ・当委員会活動の自己点検および報告書作成 ・高校訪問担当参与との連携
活動概要 (委員会開催と内容)	<p>委員会会議と内容</p> <p>第1回 2024年1月11日 10:00～11:00</p> <p>議題：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オープンキャンパス開催日 ・オープンキャンパスについて ・地方説明会 ・入試対策講座 ・毎日キャンパス見学会対応について ・SNS 対応 <p>第2回 2024年2月9日 10:30～11:30</p> <p>議題：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・来年度オープンキャンパスの取り纏め進捗状況 ・必要物品リスト ・講義内容と担当者選定 ・3月17日のオープンキャンパス実施の準備状況 ・入試対策講座(10月12日、13日)のミニOCの実施内容について ・来年度学生募集全般について ・県別交流会 ・その他 <p>第3回 2024年3月22日(金)メール審議</p> <p>議題：自己点検評価提出用文章の確認</p>
自己点検・	本委員会は、第1回福岡薬学部会議にて設置され、福岡薬学部の広報・学生

評価	<p>募集を主目標として活動を開始した。福岡薬学部開設4年目にあたる今年度の活動として、本委員会の所管事項制定を行い、これに沿って活動を行った。</p> <p>各所管に対する対応は以下の通り。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オープンキャンパスにおける学科宣伝と体験企画の考案・実施 <p>オープンキャンパスの学科紹介パネルの制作(6月)</p> <p>オープンキャンパス、毎日キャンパス見学会の対応教員とりまとめ(随時)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校模擬講義、高校訪問、進学相談会担当者調整 <p>教員による高校訪問先の取りまとめ(5月)</p> <p>高校訪問先への教員の割り振り(83校対象、5/23)</p> <p>模擬講義：山門高校(7/4)、三池高校(10/12)、折尾高校(11/13)</p> <p>進学ガイダンス：明光学園高校(6/30)、筑前高校(7/14)、春日高校(9/22)、佐賀北高校(9/26)、佐賀北高校(10/24)、福岡西陵高(10/25)、小倉西高校(2/22)、佐賀清和高校(3/7)</p> <p>地方説明会(6/3 宮崎, 6/4 鹿児島, 6/10 熊本, 6/11 長崎, 6/18 大分)</p> <p>高校・予備校教員対象説明会(6/16 大川, 6/23 福岡)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生募集・広報委員会参加 <p>大学広報学生募集委員会への出席と学科報告(5月、9月、10月、11月、2月、3月の計6回、3月27日現在)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・薬学部パンフレット/大学パンフレットの作成と校正 <p>3月22日現在、作成進行中</p> <ul style="list-style-type: none"> ・薬学部ホームページの情報追加と変更依頼 <p>福岡薬学部ホームページの変更のお願い(2/22)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・薬学部フォーラムの対応と内容調整 <p>本年度フォーラムの実施無し</p> <ul style="list-style-type: none"> ・その他の広報媒体への学生の手配、原稿の校正など <p>学科紹介リーフレット校正(5/12)</p> <p>NHK福岡放送「福チャン」(5/24撮影, 6/3放映)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パンフレットなどで使用する素材集め <p>福岡薬学部パンフレット用写真撮影(12/13)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SNS発信に向けた準備 <p>インスタグラムフォロワー(644人、3/22現在)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校訪問担当参与との連携 <p>各県参事との高校訪問計画の打ち合わせ(5/26)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当委員会活動の自己点検および報告書作成 <p>本報告書の作成</p>
----	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

	<p>・その他</p> <p>県別交流会(4/21)</p> <p>プレミアムカレッジの実施(10/21)</p> <p>以上、本年の実施の無かった薬学フォーラム以外のほぼ全ての所管について活動が行われており、当初の目的は概ね達成できたものとする。</p>
今後の対応	<p>高校訪問は 84 校と多くの高校に説明に行くことが出来た。また、本年度は参事と在校生との情報交換を目的とした県別交流会、研究に対して高い関心を持つ高校生対象のプレミアムカレッジの実施など新たな試みを行うことが出来た。来年度は状況を踏まえながら、本年度以上に活動することで、充実したものになるよう努力が必要であるとする。また、18 歳人口減少による、受験生の減少も考慮に入れ、学生確保のための福岡薬学部の知名度をさらに上げることが必要である。これらについては、さらにアイデアを出す必要があり、動画や SNS などを利用した広報・学生募集活動を今年度以上に取り組む必要がある。</p>

8. 福岡薬学部第三者評価・自己点検委員会

委員	<p>山口政俊（顧問、教授）、吉富博則（外部委員）、武田弘志（学部長）、永倉透記（委員長、教授）、猪部学（副委員長、教授）、宗像達夫（准教授）、多田納豊（准教授）、成川佑次（准教授）、宗像千恵（講師）、中矢正（講師）、澤井円香（助教）花岡公一（専務理事）、田中博也（事務局長）、東郷栄里（事務部）、北原希（事務部）</p>
所管事項	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教育研究上の目的及び三つの方針に基づく薬学教育研究活動の自己点検・評価 ・ 自己点検・評価の計画（項目設定を含む）・実施 ・ 教育研究活動の質的・量的解析 ・ 自己点検・評価結果の教育研究活動改善への反映推進 ・ 自己点検・評価結果の公表（ホームページ等） ・ 薬学教育評価機構等の第三者評価受審に関する対応 ・ 福岡薬学部会議への報告・議案上程 ・ 当委員会活動の自己点検および報告書作成 ・ その他、薬学教育研究活動の自己点検・評価に関する事項
活動概要 (委員会開催と内容)	<p>第1回 2023年4月7日（金） 13:00-14:15</p> <p>議題：1. 2023年度の主な活動方針、2. 2023年度の各委員の役割分担、3. ディプロマポリシー（DP）到達度評価方法（案）、4. その他</p> <p>第2回 2023年7月21日（金） 13:00-14:00</p> <p>議題：1. 令和4年度自己点検・評価報告書、2. 福岡薬学部薬学科の教育研究上の目的及び三つの方針の検証、3. 改訂コア・カリキュラムに基づく新</p>

	<p>カリキュラム導入、4. 2022 年度後期の講義資料点検結果、5. 本年度後期からのディプロマポリシー（DP）到達度評価の稼働、6. 自己点検 2023 基礎資料収集・作成状況、7. 薬草園整備状況</p> <p>第 3 回 2023 年 12 月 15 日（金）13:30-14:30</p> <p>議題：1. 自己点検 2023 作成状況、2. ディプロマポリシー(DP)達成度評価稼働状況、3. 来年度からの 3 ポリシーおよび改訂コアカリ対応カリキュラム、4. 令和 5 年度自己点検・評価報告書の作成役割分担・スケジュール</p> <p>第 4 回 2024 年 2 月 26 日（月）13:00-13:45</p> <p>議題：1. 自己点検 2023 の作成・公開、2. 2023 年度前期科目点検結果</p> <p>3. 2023 年度活動のまとめ</p>
<p>自己点検・評価</p>	<p>自己点検評価・PDCA サイクル循環による教育の継続的改善：令和 2 年度の開学以来、年度毎の自己点検・評価報告書の作成を継続している。主な学事、委員会活動、必修科目、研究活動について自己点検・評価し、令和 5 年度自己点検・評価報告書の作成を進めた。それぞれの項目について主担当者は自己点検し、報告文書を 3 月末までに提出した（令和 6 年 8 月を目途に自己点検・評価報告書を最終化して、ホームページに公開する）。</p> <p>講義資料、成績評価資料の点検評価：令和 2 年度の開学以来、福岡薬学部必修科目の講義資料、成績評価資料の点検を継続している。科目責任者から提出されたエビデンス資料の点検評価は、福岡薬学部教務委員会へ委託した。点検結果、指摘事項は、各科目担当者および福岡薬学部にフィードバックし、各科目において令和 6 年度授業改善に繋げる。</p> <p>自己評価 2023</p> <p>薬学教育評価機構から提示された実施要項（点検項目、スケジュールなど）に沿って、根拠資料収集および自己点検を実施した。点検結果をまとめた自己点検・評価書（自己評価 2023）は、本委員会および福岡薬学部会議において審議・承認された後、薬学教育評価機構へ提出し、ホームページへ公開した。</p> <p>ディプロマポリシー(DP)到達度評価の開始</p> <p>本委員会および学生委員会は、DP 到達度評価方法案を福岡薬学部会議（9 月 25 日）に上申して承認を得た後、本年度後期から評価を開始した。半期毎にチューターと学生の面談において、卒業時に DP を達成できるかどうかについて 5 段階評価を実施した（学生委員会による運営）。</p> <p>外部委員からの助言</p> <p>外部委員より助言をいただきながら教育活動や自己点検・評価活動を進めた。</p>
<p>今後の対応</p>	<p>1. 年度毎の自己点検・評価報告書作成と次年度活動の改善（PDCA サイクル循環）を継続して教育の一層の質向上を諮る。</p> <p>2. 必修科目エビデンス資料の点検およびその結果の科目担当者へのフィードバックを継続して、各科目の一層の質向上を諮る。</p>

	<p>3. ディプロマポリシー（DP）到達度評価軌道に乗せて、必要に応じて評価方法等を改善・最適化する。</p> <p>4. 令和 5 年度に引き続き、外部委員より福岡薬学部の教育活動や自己点検・評価活動についてご助言をいただく。</p>
--	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

9. 福岡薬学部予算管理委員会

委員	武田弘志（委員長、学部長）、永倉透記（教授）、阿部義人（教授）、西村信弘（教授）、猪部学（教授）、長谷川雄（教授）、石田卓巳（教授）、吉武康之（准教授）、斉藤秀俊（准教授）、成川佑次（准教授）、宗像達夫（准教授）、多田納豊（准教授）、宗像千恵（講師）東郷栄里（事務）、北原希（事務）
所管事項	<ul style="list-style-type: none"> ・福岡薬学部予算の立案 ・福岡薬学部予算の執行計画および執行状況の把握
活動概要 （委員会開催と内容）	<p>第1回 2024年2月20日（火） 11:00 - 11:20</p> <p>【議題】</p> <p>1. 2024年度福岡薬学部予算案について</p>
自己点検・評価	2024年度福岡薬学部予算案を本年度の実績および各委員の意見をもとに作成した。学年進行に伴い、病院薬局実習費用を計上したため、2023年度予算案と比較して増額となったが、第1回の委員会において「2024年度福岡薬学部予算案」として認められたため、国際医療福祉大学事務部経理係に提出した。
今後の対応	次年度の予算執行を円滑に行なっていけるように、執行状況を把握しておく。また、次年度の実績をもとにスムーズな次々年度の予算案作成を目指す。

10. 福岡薬学部就職委員会

委員	西村信弘（委員長、教授）、平木洋一（副委員長、教授） 委員：武田弘志（学部長）、宗像千恵（講師）、中矢 正（講師）
所管事項	<ul style="list-style-type: none"> ・就職に向けた各種情報提供 ・グループ施設への就職情報提供 ・就職説明会等の開催・運営計画の立案
活動概要 （委員会開催と内容）	・西村、中矢が大川キャンパスキャリア支援センター会議（隔月開催）へ出席し、他学科の就職対応状況、薬学部対応予定などを共有した。

	<ul style="list-style-type: none"> ・本学が連携しているマイナビおよび大田原薬学部が連携している薬キャリアと、キャリア支援に関する情報共有および来年度に向けた対応について協議した。 ・2023年11月に開催された大田原薬学部のメタバースを利用した就職説明会へ参加し、就職担当者および三浦学部長と本学での対応方法について協議を行った。 ・2024年1月に日本病院薬剤師会 武田泰生会長を招聘し、「薬剤師の軌跡と未来 – 病院薬剤師の魅力と職能を中心に –」と題した講演会を開催した。1年生から4年生まで全ての学生が聴講し、将来の職業についての理解を深めた。 ・2024年2月に、薬局薬剤師、行政薬剤師の業務について、学習する機会を設定した。また、実習中の就職活動に関する注意事項などを、就職ガイダンスを開催して4年生に説明を行った。 ・2024年3月に近隣大学で実施された就職説明会を視察した（長崎国際大学）。 ・2024年3月に横浜市で開催された日本薬学会第144年会で、初めて開催された「キャリアデザインセミナー」を視察し、グループ病院ブース（三田病院、成田病院）の見学等を行った。また、三浦学部長と大学として就職関連に関する次年度の取組みについて協議した。
自己点検・評価	<ul style="list-style-type: none"> ・すでに、奨学金等により、就職を決めた学生も出てきているため、就職活動の状況把握が必要と考えられる。キャリア支援センターでは把握出来ないため、早急に状況を確認する。 ・大田原薬学部の就職に関する対応を参考に、福岡薬学部でも対応を進めてきた。 ・「薬剤師の軌跡と未来 – 病院薬剤師の魅力と職能を中心に –」の講演後のアンケート結果では、病院薬剤師への理解が深まったとの回答が多くみられた。
今後の対応	<ul style="list-style-type: none"> ・2024年度は5年生の実務実習が始まり、並行して就職関連のセミナー、説明会等を開催する予定である。 ・企業研究セミナー、関連病院就職セミナー、履歴書の作成方法のセミナー、面接に関するセミナーなど、基本的なマナーも含めて教育・指導を実施する予定である。 ・4年生以下の学生に対しても、薬剤師を職業とする心構えや、就職先の選び方、将来の薬剤師像など、授業やセミナーを通して、情報発信を行っていく予定である。

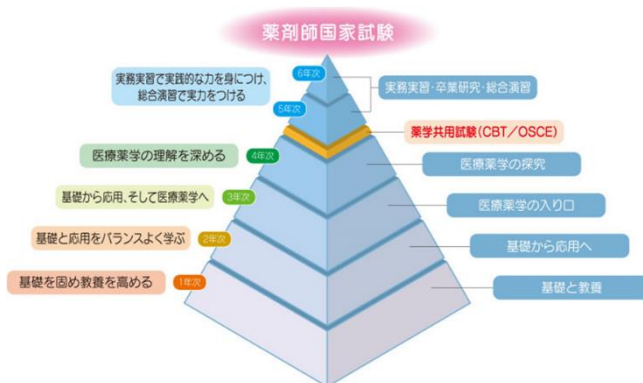
第三部 福岡薬学部教育活動報告

1. 令和5年度の教育活動振り返り

福岡薬学部は、「リサーチマインドを持った臨床に強い医療人としての薬剤師を育成する」ことを教育目標としている。すなわち、「リサーチマインド」を備えてエビデンスに基づく医療提供(Evidence-Based Medicine)や基礎・臨床研究を推進し、チーム医療・チームケアや地域包括ケアに貢献出来る人間性・社会性・国際性豊かな臨床に強い薬剤師を育成する教育を実践している。薬学教育モデル・コアカリキュラム（平成 25 年度改訂版）を網羅し、基本事項、薬学と社会、薬学基礎、衛生薬学、医療薬学、薬学臨床系科目を各年次に適切に配置して高度かつ専門的な知識・態度・技能を修得させる。福岡薬学部開設 4 年目に当たる令和 5 年度は、以下項目に重点的に取り組んだ。

学年進行への円滑な対応および各学年における教育の一層の質向上

基礎から専門領域の講義、実習、演習で構成される6年間のカリキュラムを通じて、医療現場で求められる知識・技能・態度を身につけた薬剤師の養成教育を実施した。1～4 年の各学年において以下の点に重点をおいて教育した（右図参照）。



1 学年：基礎を固め教養を高める。

2 学年：基礎と応用をバランスよく学ぶ。

3 学年：基礎から応用、医療薬学（臨床薬学）へ繋げる。

4 学年：医療薬学（臨床薬学）の理解を深める。

（5・6 学年：実務実習で実践的な力を身につけ、総合演習で実力をつける。）

今年度は最高学年が4年生まで進行したが、各教員の専門性を活かした科目担当配置によって科目数増加に適切に対応し、教育の一層の質向上に取り組んだ。各科目において、昨年度の自己点検評価を基に教育内容を見直し、PDCAサイクル循環による質向上を進めた（本報告書第三部 福岡薬学部教育活動報告参照）。最高学年の4年生は、「薬理学」、「薬物治療学」、「臨床薬物動態学」等の科目の履修によって3年次までに身につけた薬学の知識をさらに一歩進めて「くすりをどのように使うのか」について理解を深め、「医療系薬学実習」や「病院・薬局事前実習Ⅱ」の実習では、薬剤師業務に必要な知識、技能、態度を修得した。

薬学共用試験(CBT・OSCE)

薬学部生が病院・薬局実務実習を行う条件として、薬学共用試験(CBT [Computer-Based Testing]：知識、態度が一定の基準に達しているかをコンピューターを使用して客観的に評価する試験、およびOSCE [Objective Structured Clinical Examination]：技能及び態度が一定の基準に到達しているかを客観的に評価する試験)において一定水準以上の成績を修めていることが求められている。今年度の薬学共用試験は、本学における初めての実施であったが、昨年度から準備を進めて備えたことにより、円滑に実施することが出来た。CBT実施に際しては、薬学共用試験センターと連携して準備を進め、8月29、30日の外部モニター員による監修下の体験受験実施を経て12月5、6日に本番のCBTを実施した。OSCE実施に際しては、OSCE実施委員会を組織して、薬学共用試験センターと連携して準備を進めた。外部モニター員の監修下のOSCEトライアル(8月8日)、評価者講習会、SP(標準模擬患者)講習会等の実施を経て12月24日に本番のOSCEを実施した。本学の教職員のみならず、他大学の教員、病院・薬局の薬剤師等多くの方々の参加協力をいただき、遂行することが出来た(詳細は、主な学事[CBT、OSCE]を参照)。4年生は、病院・薬局事前実習Ⅰにおいて、1～4年次の学習内容を症例や処方箋を基に総復習し、医療の担い手としての倫理観の重要性を確認してCBTに備えた。また、病院・薬局事前実習Ⅱにおいて、実務実習で求められる、個々の患者に適した薬物療法を提案・実施・評価するための基本的技能を修得してOSCEに備えた。

薬学教育モデル・コア・カリキュラム(令和4年度改訂版)の来年度からの適用準備

文部科学省より薬学教育モデル・コア・カリキュラム(令和4年度改訂版)(改訂コアカリ)が公表された(2023年2月28日)。改訂コアカリは、1年間の周知期間を経て、令和6年度の入学生から全国の6年制薬学部にも適用される。福岡薬学部では、令和6年度新入生から適用する改訂コアカリに基づく新カリキュラムの構築を進めた。国際医療福祉大学では、原則的に他キャンパス(国際医療福祉大学薬学部 栃木県大田原市：大田原キャンパス)と共通のカリキュラムに沿って教育を進める方針であることから、新カリキュラム作成は大田原キャンパスと協議し、会議を経て作成を進めた。2023年8月21日開催の薬学科キャンパス間合同会議において、両キャンパス間で、新コアカリ対応の新カリキュラムの基本的部分について合意を得た。新カリキュラム案は、臨時福岡薬学部教務委員会(8月28日)、臨時福岡薬学部会議(国際医療福祉大学学則に規定される学科会に相当、8月30日)、大川教務委員会(9月11日)、専任教員代表者会議(教授会に相当、9月12日)において上申・審議され承認された。福岡薬学部教務委員会は、新カリキュラムに基づいて履修系統図を作成した。新カリキュラムおよび履修系統図は、令和6年度新入生から適用される予定であり、令和6年度新入生用学生便覧や福岡薬学部ホームページにおいて公表される。

ディプロマポリシー到達度評価の開始

福岡薬学部第三者評価自己点検・評価委員会および福岡薬学部学生委員会は、ディプロマポリシー(DP)到達度評価方法の検討を昨年度より開始し、今年度さらに検討を進めた。7月21日開催の第三者評価自己点検・評価委員会において評価方法概要案を確定し、福岡薬学部会議(9月25日)においてDP到達度評価の稼働が承認され、本年度後期から評価が開始された。半期毎のチューターと学生の面談において、職業人としての心構え、患者・生活者を捉える姿勢、コミュニケーション能力等の観点から卒業時にDPを達成できるかどうかについて5段階評価を実施する(詳細は、主な学事[DP到達度評価]を参照)。

国際的な広い視野の醸成

福岡薬学部は、国際的視点を含む広い視野で課題に取り組む力を醸成するため、約2週間の海外医療現場での研修を2年次必修としている(海外保健福祉事情Ⅰ[講義]およびⅡ[実習])。今年度は新型コロナウイルスの影響が収まったことから、実際に海外の各医療・福祉・教育機関を訪ねて研修に参加し、現地スタッフの指導のもと、医療・福祉の現場に触れて国際的視野を醸成した(詳細は、福岡薬学部必修科目 [海外保健福祉事情Ⅰ・Ⅱ]を参照)。

関連職種連携教育

3年生は、2年次の「関連職種連携論」履修に続いて「関連職種連携ワーク(問題解決型学修)」を履修した。他医療職を目指す学生と共に多職種チームをつくり、与えられた医療課題について討議し、解決策を発表するチーム活動に取り組み、多職種が連携して患者中心の医療を提供するための知識・技能・態度を学んだ。また、多職種チーム構成メンバーの役割を充分理解して連携し、薬剤師としての専門性を発揮し、チーム医療・チームケアに貢献する能力を身に付けた(詳細は、福岡薬学部必修科目 [関連職種連携論、関連職種連携ワーク]を参照)。

使命感・医療倫理観の醸成

医療の担い手としてふさわしい態度・医療倫理観を醸成するため、入学後の早期から「薬学概論」や「生命倫理」等の科目において使命感・医療倫理に関する教育を実施した(詳細は、福岡薬学部必修科目 [薬学概論、生命倫理]を参照)。1年次の「早期体験実習」において、薬害被害者の講演を拝聴して医療問題を深く考える機会とした(詳細は、福岡薬学部必修科目 [早期体験実習]を参照)。2年次の解剖生理学Ⅲにおいて、人体解剖見学の機会を設けて人体の形態・機能に関する理解を深め、医療職として必須の生命倫理感を醸成した(詳細は、福岡薬学部必修科目 [解剖生理学Ⅲ]を参照)。

キャリアデザイン教育

薬学部を卒業後、どのような薬剤師として将来生きていくのかを早期から考え、薬学の学びに対するモチベーションを高めるため、低学年次から薬学概論（病院、薬局、行政・製薬企業で働く薬剤師について講義）、早期体験実習（病院、薬局の現場見学）、コミュニケーション実習（現時点でのキャリアプランの発表）等のキャリアデザインを考えさせる教育を実施した。また、今年度より各学年において、卒業後どのように社会で活躍するか（病院薬剤師、薬局薬剤師、医薬品関連企業等）についてアンケート調査を開始した。今後、福岡薬学部生の将来像が学年を重ねてどのように変化するかを把握することを目的として、データを蓄積する。

自己点検評価・PDCAサイクル循環による教育の継続的改善:

令和2年度の開設以来、福岡薬学部内に第三者評価・自己点検委員会を組織して年度毎に自己点検評価を実施している。令和5年度の主な学事（大学祭、保護者懇談会等）、委員会活動、各必修科目の教育内容、および研究活動について各項目担当者が点検評価を実施し、その結果を自己点検評価報告書（本報告書）としてまとめて、福岡薬学部HPに公開している。また、必修科目内で使用したエビデンス資料（講義資料、実習書等）および成績評価資料等を福岡薬学部教務委員および第三者評価・自己点検委員が点検し、その結果を各科目担当者にフィードバックすることによって次年度の各科目の質向上に繋げている。

自己点検2023

本年度は、本学部開設後4年目に相当することから、薬学教育評価機構の2023年度（令和5年度）における「薬学教育（6年制）第三者評価 評価基準 平成30年度1月版」に基づく自己点検・評価の実施年度に該当した。自己点検評価チームを構成し、薬学評価機構の『自己点検・評価実施マニュアル「自己評価2023」対応』に従い、指定された項目について、自己点検及び報告書（自己評価2023）作成を進めた。2024年4月に薬学評価機構へ自己評価2023を提出し、また、福岡薬学部ホームページに公開する（詳細は、主な学事[自己評価2023]を参照）。

5年次への学年進行準備

5-6年次の卒業研究実施に向けて、各研究分野の教員が研究内容の紹介および卒業研究に関する学生へのメッセージ（研究に対する思いや方針など）をプレゼンテーションする「研究マインド養成講座」を開講し、4年生は、当養成講座の受講および配属希望研究室訪問を経て興味と合致する研究室を選択した（詳細は、主な学事[卒業研究]を参照）。また、5年次の薬局・病院実務実習実施に備えて、4年生に対して説明会を開催し、実習先病院・薬局に関する希望調査、病院・薬局実務実習地区調整機構等との連携・スケジュール調整等を進めた。

2. 令和6年度の教育活動目標

「リサーチマインドを持った臨床に強い医療人としての薬剤師を育成する」を目標とする教育を推進する。福岡薬学部開設以来、令和5年度まで実施してきた教育を基盤として、5年次への学年進行に対応すると共に、完成年度（令和7年度）を見据え、教育の質の一層の向上および特色ある福岡薬学部薬学教育確立を目指して以下項目に重点的に取り組む。

学年進行への円滑な対応および各学年における教育の一層の質向上

令和6年度は、最高学年が5年生へ進行する。5年次の病院・薬局実務実習、卒業研究等を十分な準備をした上で円滑に実施すると共に、1～5各学年の教育の質を一層向上させる。

改訂コアカリ（令和4年度改訂版）の導入

薬学教育モデル・コア・カリキュラム（令和4年度改訂版、改訂コアカリ）を令和6年度入学の新1年生に対して適用する（令和5年度以前の入学の在校生には、旧コアカリ[平成25年度改訂]を継続して適用する）。新1年生に対して、改訂コアカリに沿った新カリキュラム、シラバス、および履修系統図に基づいた教育を実施する。

リサーチマインドの醸成・卒業研究

5年生は令和6年度からの2年間、卒業研究に取り組み、実験あるいは調査研究を通して研究を体感し、リサーチマインド（科学的根拠に基づいて問題点を解決する力など）を養う。各研究分野の指導教員は、6年次の卒業研究発表会に向けて配属学生を指導する。令和5度と同様に、4年生に対してリサーチマインド養成講座（各研究分野の教員による研究内容紹介等）を実施し、研究室訪問等を経て学生の興味と合致した研究室配属を行う。

ディプロマポリシー到達度評価

令和5年度より開始したディプロマポリシー(DP)到達度評価を、1-5年の各学年において継続して実施する。半期毎のチューターと担当学生（チューティー）の面談において、卒業時のDP達成見通しを5段階の基準で評価する。DP評価を進める過程において、評価法の改善等を必要に応じて実施する。

薬学共用試験(CBT・OSCE)

令和5年度の薬学共用試験結果を基に改善点を抽出し、新4年生に対する薬学共用試験準備教育（病院・薬局事前実習Ⅰ・Ⅱ等）に反映させる。

病院・薬局実務実習

5年次において、病院及び薬局における各11週の実務実習を実施する（福岡薬学部は令和6年度が初の実施年となる）。実習先施設（病院・薬局）と連携して臨床系教員を中心に学生

を指導する。福岡薬学部全教職員は、巡回指導等を介して実務実習中の学生指導・支援に参画・協力する。

国際的な広い視野の醸成（海外研修の実施）

福岡薬学部の特徴ある教育の一つとして、海外研修教育を継続・推進する。2年生全員が「海外保健福祉事情Ⅰ・Ⅱ」において、約2週間の海外各地の医療関連施設（大学、病院等）での研修に取り組み、国際的な広い視野を醸成する。

関連職種連携教育の推進

福岡薬学部の特徴ある教育の一つとして、他医療職（看護師、理学療法士等）を目指す学生と共に学ぶ関連職種連携教育を継続・推進する。講義（2年次必修）、グループワーク（3年次必修）、および実習（5年次選択）から構成される関連職種連携教育（Interprofessional Education: IPE）において、チーム医療・チームケア、チーム内での薬剤師の役割、および他職種とのコミュニケーション能力を向上させる。

自己点検評価・PDCAサイクル循環による教育の継続的改善

主な学事、委員会活動、各必修科目の教育内容、および研究活動に関する自己点検評価、自己点検報告書の作成・ホームページ公開、および点検結果を基にした次年度活動の改善を継続する。必修科目のエビデンス資料の収集・点検、およびその結果の科目担当者へのフィードバックを継続する。

3. 2022年度開講 福岡薬学部必修科目

(1) 総合教育科目 人間系

科目名	心理学	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	藤枝 恵	科目担当者			
自己点検・評価	<p>心理学的な用語の理解と説明に加え、授業の回数を重ねるたびに自己理解が深まるよう授業全体を構成した。そして、授業で学ぶ心理学に加えて、授業以外の日々の生活でも心理学の授業で学んだことを実践し、学んだことが自然と身につく、学生の対人関係スキルの向上に繋がるよう授業内容を工夫した。授業中に、無作為に学生の名前を言い、名前を言われた学生が発表する形式で、学生からの意見を聞き出す予定であったが、自分の意見を発表する学生は少なく、黙って答えないことが多かった。授業の内容が心理学であり、当てられた学生も、自分の内面について語ることに躊躇していたため、毎回 A4 の半分サイズ用の紙を配布し、毎回授業の最後に、質問、感想について記載するための時間をとったうえで、授業終了後に提出してもらった。そして、毎回、授業の初めに、前回の授業に対する学生の感想、質問を読み上げて、前回の授業についての補足や質問に対する詳しい説明を行った。</p> <p>その結果、学生の理解が深まったようである。毎回、授業の終わりに提出してもらい、感想・質問の内容も、授業の回数を重ねるごとに、非常に内容の深いものとなっていった。また、学生のモチベーションを引き出すため、心理テストを多用した。</p>				
今後の対応	<p>学生が、授業中に意見を述べたり、質問したりできれば、より理解を深めることができるが、1 年生ということもあり、大勢の前で発表することに慣れていない学生も多い。引き続き、授業の終わりに質問を書いて提出してもらいなど、できるだけ多くの学生の意見を聞きながら授業を進めていきたい。学生の理解の程度、興味の程度などを、毎回、授業終了時に確認し、学生の理解力と興味に応じた講義内容にすることができれば、授業は双方向性となり、学生の理解もさらに深まり、興味も広がると考えられる。また、自ら調べたり、体験したり、それを自然な形で他の学生と共有できるような授業の内容にできれば、その後の病院実習などでも役立つ経験ができるであろう。講義の中でも、ロールプレイや、グループ学習、グループワークなどを、うまく取り入れて、学生の発言の場が増えるように工夫していきたい。</p>				

科目名	コミュニケーション概論	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	中島 薫	科目担当者	中島 薫		
自己点検・評価	<p>本講義では、日常の対人関係や、対人援助場面における信頼関係を築く上で必要となるコミュニケーション技術、およびその土台となる自己・他者理解、人間行動理論、援助技術について体験的に学び、実生活や今後の臨床実習場面で活用できることを目標としている。</p> <p>近年コミュニケーションへの苦手意識が高い学生が多くなり、対人援助職としての基本的な関係づくりに苦勞する実習生や初心援助職が増えている。自身を「コミュ障」とレッテル付けし対人関係に回避的な態度を持つ者もある。しかしコミュニケーションは技術でありトレーニングにより上達するものでもある。このため講義では、①自己意識の改善、②コミュニケーションについての教育と基礎訓練、③対人援助場面やセルフケアとしても活用できる心理療法技法の実習をテキストをベースとしながらワークシートやロールプレイ、グループワークを通じて行ってきた。講義内でロールプレイやグループワークを毎回経験し、また時折席替えを行うことで様々な相手との対話を行う中で、コミュニケーションへの苦手意識が克服されていることが多くの学生のリフレクションシートから確認された。またレポート課題にてコミュニケーション技法の活用、もしくは授業で行ったリラクゼーション技法による不安や緊張の緩和や、認知行動療法による否定的思考の修正などのいずれかを実際の生活内で試行し報告するよう求めた。これにより昨年度よりも具体的に生活場面への応用やその効果の実感も得られており、講義の目標が達成されたと考えられる。</p>				
今後の対応	<p>今年度はオンライン受講がなく、全ての時間で対面での講義参加がされていたため、昨年度課題としていたオンライン参加者がロールプレイやグループワークに参加できない点についてはそのような状況自体が発生しなかった。ただ、今後またオンライン受講者が出てこないとは限らず、その場合でもコミュニケーションスキル習得の場が提供できるような工夫を行っていきたい。また、毎回のリフレクションシートを通じての質疑応答でより講義内容や技法の活用方法などの理解を補うことができていたため、来年度以降も引き続きの実施を行っていきたい。</p> <p>課題としては、使用テキストが作業療法士や理学療法士をメインに書かれたものであるため、薬学部学生にとっての対人援助場面との乖離を感じる学生も少なくないと思われる。講義の中で適宜補足説明を行ったり、日常場面に置き換えて具体例を挙げるなどして対応はして</p>				

	いるが、それに加えて資料を提供したりしながらより自分自身のこととして取り組めるよう動機づけを高めていきたい。
--	--------------------------------------------------------

(2) 総合教育科目 社会系

科目名	法学	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	今井 竜也	科目担当者			
自己点検・評価	<p>例年通り、はじめに「法とはなにか」というテーマで3回授業をし、法の基本的特質についてある程度理解してもらった上で、具体的な社会問題について、法的観点からそれをどう見るのかを学び、かつ考えてもらった。</p> <p>法解釈や学説、諸制度を理解させるよりも、法や制度の持つ基本的な理念、人と社会との関係性、現代社会において直面する様々な社会問題に対し、私たちがどう考え行動すべきか、というような、法や社会のあり方の本質に迫るようなテーマ設定をし、毎時間、ランダムに受講生を指名して口頭での質疑応答を行うことに加え、ミニツペーパーを用いた質疑応答、Google Formを用いた宿題課題への回答など、自分の意見を述べる機会をなるべく多く設けることで、「覚えることよりも考えること」を重視した、主体的な学習ができるよう工夫した。</p> <p>法が扱う伝統的なテーマ(刑罰、契約、労働など)に加え、「公衆衛生と法」においては、医療従事者が共通して理解する必要のある公衆衛生という問題、「科学・科学者と法」においては、科学と法との関係、科学的事実と法的事実の違いについて考えてみた。また、近年注目されている環境問題、食糧供給と食品衛生、AIやロボットの問題など、今年度も医療・自然科学と社会科学の境界上にある学際的なテーマを積極的に扱ってみた。</p> <p>授業アンケートでも、概ねどの項目もキャンパス平均値を超えることが出来、授業を通じてこちらが何を狙って教育を行ってきたのか、その理念や意図は十分に通じたと評価して良いと考えている。</p>				
今後の対応	<p>ただ、授業アンケートを見ると例年通り、復習について十分に時間を使っている学生は少なく、また授業の難易度について「やや難しい」と「難しい」を合わせると3割近くとなり、例年よりも内容が難しいと感じた学生が多かったようである。</p> <p>受講者が「難しくて堅苦しい」という先入観を持たずに、興味をもって法を学べるような内容を毎年精査しているつもりであるが、各テ</p>				

	<p>ーマを十分理解できるよう、内容や説明の仕方を精査する必要はあろう。</p> <p>また、学生の傾向として、客観性や抽象性の高い話を理解することが苦手であること、十分に復習がされず、復習のためにほぼ毎回出している宿題課題も、積極的な復習を喚起する材料として十分に機能してはいないこと、理解よりも暗記に頼る傾向が強く、論述に弱いことなどが挙げられ、これらの問題傾向にどう対応していくのかということについても、引き続いて考えていく必要がある。</p>
--	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

科目名	海外保健福祉事情 I (講義)	学年	2 学年	期	前期
科目責任者	石橋 英恵	科目担当者	濱本 邦洋, 下田 武良, 徳江 武, 坂井 崇亮, 有家 尚志, 岡田 理恵子, 朴 珍相, 韓 侑熙, 劉 振, 後藤 純信		
自己点検・評価	<p>この科目は、海外保健福祉事情 II (実習) の事前準備と位置づけ、国際協力・国際保健・旅行医学・異文化理解の基本を学ぶ科目である。到達目標は、海外の文化・社会に基づく多様性を理解し、国際協力の意義と海外渡航に関する危機管理についての理解を深めることである。</p> <p>授業では、各トピックに精通した講師によるオムニバス形式で行っている。特に、本学の建学の理念を踏まえ、途上国支援の実績・国際的な医療協力の枠組み・事例を紹介しその意義を強調した。JICA 専門家や協力隊員経験者を講師として招聘し、現地での事例紹介にとどまらず、海外での活動を見据えたキャリアプランにも触れ、学生が将来を具体的にイメージし、関心が持てるよう試みた。</p> <p>各授業後にはリフレクションシート(Google フォーム)を提出してもらっている。翌週の授業開始直後に、前回のリフレクションシートから有意義な感想や疑問点を共有すると同時に、講師側からの回答やコメントをフィードバックすることで学生の能動的な参加と授業双方向性の確保に努めた。</p> <p>依然感染症予防の観点から、2つの大教室を遠隔で接続し授業を実施した。音声不備やスライドが見にくいなど学生さんに不利になる点の解決には至らなかったが、授業理解度は「よく理解できた」が最も多く、ついで「まあよく理解できた」である。出席率も良好で、最終評価の平均点も84点(SD4)だった。</p>				

今後の対応	<p>大規模のクラスだが、次年度も授業後のリフレクションシートを活用し授業の双方向性を確保する予定である。</p> <p>他キャンパスでも同様の授業を開講している。次年度は全学的にシラバスの統化を図り、全キャンパスで同様の授業が進行できるように努めたい。また、姉妹校で同期に海外研修を行っている福岡国際医療福祉大学と授業日時をそろえ、遠隔で繋ぎ合同で授業を行う予定である。この授業の進行をそろえることで、次の「海外保健福祉事情Ⅱ」で予定している、キャンパス間を超えたグループワークの足並みが揃うことに期待したい。</p>
-------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

科目名	海外保健福祉事情Ⅱ（実習）	学年	2	期	前期 後期（集中講義）
科目責任者	石橋 英恵	科目担当者	濱本 邦洋, 徳江 武, 鈴木 あかり, 坂井 崇亮, 岡田 理恵子, 朴珍相, 韓 侑熙, 劉 振, 上野 民生, 研修引率教員		
自己点検・評価	<p>コロナ禍が落ち着き、4年ぶりに海外研修を再開した。薬学部の学生にとっては初めての研修であり、期待と共に、上の学年からの情報が無いまま不安を抱えて渡航した学生も多かったと思う。また、渡航研修先での受け入れ学生数の制限のため、希望した研修先に行けなかった学生も多数存在する。</p> <p>渡航前のグループワーク（事前準備）では、他学科の学生と協力し研修先の文化・気候をはじめ、医療副全般を調べ研修に備えた。研修中では、事前学習（情報）との差異に戸惑ったり、慣れない生活と緊張で体調を崩す学生も多かったが、帰国後アンケートを見ると、研修に満足した学生は7割を占め、研修プログラム全般、研修国の医療・保健・福祉事情や、文化を知る機会に対する満足度も高かった。また、この研修をきっかけに、他キャンパスの学生だけではなく、研修先の学生と交流が始まった学生もいる。帰国後のレポートでは、事前学習で得た知識を基に、研修国の健康の社会的要因を考察したり、見学した施設で提供される病院食を多面的に考察したり、見学施設がその地域における役割と機能を分析するなど、多岐にわたるテーマと考察を見せてくれた。</p> <p>研修を成功裏に終わらせる大きな要因は修中の体調管理である。心身ともに健康な状態で研修に臨めるよう、研修前から研修にかけて健康管理（自己管理）ができるよう、準備していきたい。</p>				

今後の対応	<p>学生が体調を崩す原因の一つに、研修プログラムの過密がある。次年度は早期に研修先とスケジュールを確認し、無理のない、しかし有意義な研修になるよう調整を行う予定である。また、他キャンパスからの学生とは、現地初日初めて顔を合わせ研修が始まる。学生からは、事前の段階で学生間の打合せ（友達アワー：日本の文化紹介）を行いたいとの意見もあった。次年度は他キャンパスと講義スケジュールを合わせるなど、キャンパス間での事前交流がスムーズに行えるよう努めたい。</p>
-------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(3) 総合教育科目 自然・情報系

科目名	統計学	学年	1 学年	期	後期
科目責任者	安本誠一	科目担当者	安本誠一		
自己点検・評価	<p>医療分野で利用する統計学手法の多くはコンピューター用アプリケーションソフトで求められている。しかし、その解析結果を解釈するのは人なのであるから、統計学に対する正しい知識が必要となる。そこで、その基本となる統計学の原理と解析結果に対する解釈の考え方を講義する。具体的には、統計処理とはどういうものか、統計処理がなぜ必要なのか、そして記述統計、推測統計（推定・検定）の原理と解釈である。</p> <p>講義では丁寧に説明をしており、統計学の知識がある程度、伝えられたのではないかと考えるが、昨年度と同レベルの定期試験内容での出題であったが合格率が 50% を切ってしまった（平均点 57.7 点）。本年度も同一教科書、同一講義資料であり、また講義内容や定期試験も同レベルである。年々、入学してくる学生の学力レベルの低下が感じられるが、講義レベルを下げるにはいけないというところが難である。</p>				
今後の対応	<p>簡単な小数計算や分数計算ミスで点数を落とす計算力不足の学生が多数存在し、また、出題分を読み間違えたり、自己都合的に解釈をしているなど国語力の学力低下も懸念される。それゆえ、学生が基礎的な学力を備えて入学してきているかも疑わしくなっている状況である。このような学生が年々増加している状況の中で、どのように対応していかねばならないかということを検討することは甚だ難解なことである。</p> <p>取りあえずは、講義に対する学生からの授業アンケートを踏まえて、次年度の講義の在り方を検討していきたいと考えているが、初等中等教育レベルの基礎学力が不足している学生に対しての教育には</p>				

限界を感じている。

科目名	数学	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	安本 誠一	科目担当者	安本 誠一		
自己点検・評価	<p>医療人として実践的な能力を持つためには、教養教育，専門教育を通じた知識の習得が必要で、医療現場では「数学」的な知識や考え方が非常に重要な要素になっている。例えば、物質のエネルギーや反応速度，濃度計算を計算するのに，運動方程式や微分積分、ベクトルなどを、また、物質の溶解、分散や安定性、更には体内動態を解析する際に、指数・対数関数や微分積分の知識が必要不可欠となる。データ解析に用いられる統計学的手法も含め、「数学」は医療現場のさまざまな専門科目の基礎として位置付けられている。本講義では、このような医療現場の現実的問題において、数学が活かされている具体的な事例を考えながら数学的思考を身に付けていくことを目的としている。</p> <p>例年通りに，高校数学の復習から、微分方程式、重積分や線形代数入門（行列・行列式、固有値・固有ベクトル、行列の対角化）までの大学教養の数学を充実させた講義を行った。しかしながら，2020 年度から同レベルの定期試験を行っているが，高得点者が激減し，本年度（2023 年度）の学生は平均化していることが定期試験の結果からみられる。つまり，学力の高い学生とそうではない学生，意欲の高い学生とそうではない学生とが平均化していると感じる。つまり，本年度の学生は入学者の低学力にもつながっている傾向が良く見て取れる。</p>				
今後の対応	<p>本年度はコロナ過からも脱却し，通常の対面講義を実施することが出来た。学生との対面での質問が多数あり、全体の様子を感じながら講義を展開できた。また，研究室の訪問も多数あり，学生のフォローは出来ていると感じた。来年度も学生との Q&A を重視した講義や学生フォローを心がけたいと考えている。</p> <p>教科書は「薬学生のための基礎シリーズ2 微分積分〔改訂版〕（培風館）」を使用しているが、やはり，内容が難しいということである。しかしながら，大学生ならば、この程度の数学ぐらいはチャレンジ学習して、数学的知識の理解を深めてほしいものである。高校の数学で終わりではなく，いろいろな数学の分野があり，それらが他分野（物理学や化学など）と微妙に絡み合いながら学問が成り立っていることを理解できるよう心がけながら講義を行っていきたいと考えている。</p>				

科目名	化学	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	坂井 崇亮	科目担当者			
自己点検・評価	<p>本講義前半では、SI 単位や有効数字など化学計算能力の習得、原子や化学結合の性質など、高校化学の復習・延長からなる基本的知識の習得を目標に行った。次に、有機化学への導入として、軌道の概念、正しい構造式の書き方、反応式における矢印の使い方、共鳴、酸性度等に関する講義を行った。また、今年度より、分子構造の理解を促進する目的で、不飽和度の計算を追加した。講義資料は Google クラウド上で授業開始前に閲覧可能とし、必要な者は各自印刷とした。課題は Google フォームと記述物の提出にて行った。一人一人の提出課題に対し採点・返却を行い、理解の補助に努めた。また、疑問点がある際には積極的に質問へ来るように促し、理解の促進をはかった。</p> <p>本年度の成績評価においては、昨年度の定期試験 95%、課題 5% から定期試験 100% へと変更を行った。その結果、再試験者の割合が 25% から約 35% へと増加した。</p> <p>しかしながら、再試験不合格者数への影響は見られなかった。</p>				
今後の対応	<p>次年度においては薬学教育モデル・コア・カリキュラムの改訂が行われる。化学においては大きな変更はないため、例年通りに講義を進める予定である。また、成績評価方法を定期試験 95%、課題 5% から定期試験 100% へと変更を行ったことにより、再試験者の割合が増加したが、再試験不合格者数への影響は見られなかったことから、従来本試験にてボーダーギリギリで合格していた層が再試験を受けることにより、より知識が定着化したと考える。次年度においては、今年度同様に定期試験 100% にて評価を行う。</p>				

科目名	生物学	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	多田納 豊	科目担当者			
自己点検・評価	<p>講義では、高校において未学習の者や苦手意識を持ってしまった学生に、生物の面白さを感じてもらえるようにし、その一方で、高校で既に学習した学生が無駄な時間を過ごしていると感じない様、要所に原理・発展・応用などの少し踏み込んだ内容を講義し、既学習者にとっても初めて見聞きする内容を織り交ぜることを心掛けた。昨年度には、授業アンケートの自由記載では「資料が見にくい」という意見がほとんどなくなり、反対に「見やすい」という意見が増えてきた様子</p>				

	<p>であった。今年度は自由記載の回答が無かったが、学生にとって問題点の無い授業が出来ている結果とも捉えられる。図の配置や説明文のブラッシュアップは継続して行っており、また、例年通りアニメーションなどを利用し直感的に理解しやすい講義資料の作成を心掛けており、これらの取り組みが功を奏していると考えられる。</p> <p>また、講義内容の重要ポイントの理解、知識の定着や自主学習の方向性を確認してもらうことを目的として、Googleフォームを活用し、前回の講義に関する確認問題を講義開始までに解くようにアナウンスし、学生の自主学習に役立ててもらった。この際に、学生の理解の向上を目的として、正答率を基に適宜追加説明・解説を行った。また理解度を自主的に高めてもらうことを目的として、全ての講義を録画し、いつでも視聴し復習できるようにクラスルームにアップした。</p> <p>疑問があれば質問に来るように講義毎に何度も伝えているが、積極的に質問に来る学生は昨年度よりも減少している様感じた。また、確認問題を次の講義までに解かない学生も多くおり、学生のモチベーションを如何に上げるかが重要であるように思われる。</p>
今後の対応	<p>今後もアニメーションなどを利用し直感的に理解しやすい講義資料の作成を心掛けるとともに、内容にストーリー性を持たせる講義を心掛ける。また、授業動画の利用は、復習に有用に思われるため、引き続き利用する。</p> <p>今年度は、学力が低い学生（入学時のプレイスメントテストの「生物」において点数が低かった者）に向けてリメディアル教育を実施した。後期に実施するプレイスメントテストⅡにおいて、対象者の生物の点数が有意に増加するため、生物学の授業に加えて実施するこのリメディアル教育にも一定の効果があるものと考えられる。今後もリメディアル教育の実施を続け、より効果的なものになる様に研鑽する。</p> <p>自主学習の仕方が分からない学生が一定数存在する様である。理解を深める学習方法を如何にして身につけてもらうのが課題である。</p>

科目名	生物学（再履修）	学年	2 学年	期	前期
科目責任者	多田納 豊	科目担当者			
自己点検・評価	<p>本科目の該当学生は、既に1年次に同様の内容の授業を受講した学生である。理解度を自主的に高めてもらうことを目的として、講義の動画をクラスルームにアップロードし、その動画を視聴する事と、ノートを用いた学習を課題とし、毎回、個別にノートチェックおよびそ</p>				

	<p>の内容に基づく指導を行った。特に、着眼点の修正や、様々な事象の関連性を意識できる様になることを意識して指導した。</p> <p>また、講義内容の重要ポイントの理解、知識の定着や自主学習の方向性を確認してもらうことを目的として、Googleフォームを活用し、前回の講義に関する確認問題を講義開始時に出題し、学生の自主学習に役立ててもらった。</p> <p>質問に来るように常に伝えた。しかしながら再履修科目履修者で質問に来る学生はいなかった。</p>
今後の対応	<p>例年と同様に、アニメーションなどを利用し直感的に理解しやすい講義資料の作成を心掛けることについて今後も続ける。また、既存の動画の教材としての利用は、理解の助けになったという意見があり、引き続き利用する。今後も引き続き内容にストーリー性を持たせる講義を引き続き心がける。また、確認問題の出題とその解説を適宜行う。</p> <p>授業動画のアップは好評な意見があったため、来年度も同様に行う予定である。また、ノートを用いた学習を課題とし、そのノートチェックを通して学習の仕方の問題点を指摘できたことは良いと考えているため、来年度も同様な取り組みを行う。</p>

科目名	リメディアル教育	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	多田納 豊	科目担当者	宗像達夫、坂井崇亮		
自己点検・評価	<p>例年、入学選抜試験が様々な形態で実施され、入学者の学力には大きなバラつきがみられる。薬学教育に十分についていける学生が一定数いる一方で、物理・化学・生物・数学という理系科目の基礎学力が不足している学生も一定数認められる。毎年、化学、生物、物理の基礎科目で不合格となる者が一定数あり、また、1年目から留年してしまう学生も存在する。このような現状の打開を目的として、1) 入学時に物理・数学、化学、生物のプレースメントテスト I を実施し、統一の実力試験により新入生の入学時の学力を評価し、2) 物理・数学、化学、生物学の科目毎に成績下位者(プレースメントテスト I で D または E 判定だった学生)を対象とし、3) 科目毎に、今後の薬学教育に必要となる基礎領域について再教育(リメディアル教育)を実施した。今年度は、昨年度と同様に、「物理・数学」は、①指数・対数、②微分・積分、③束一的性質を、「化学」では、①原子の構造と元素の周期表、②反応係数、③酸・塩基を、「生物」では、①遺伝情報の分配、②動物の刺激の受容と反応、③体内環境(の調節)を範囲とした(各科目 3 回ずつ、計 9 回実施した)。なお、今年度の 2 回目の 1 年生(留年生)は、前期休学者を除き、全員を全科目の対象者とした。</p> <p>リメディアル教育対象学生は、9 月に、各自が受講した対象科目のみプレースメントテスト II を受験し学習効果の評価を行った。いずれ</p>				

	<p>の科目も、対象者全体としては有意な点数の上昇が認められた。しかしながら化学、数学・物理については平均点の上昇が僅かであり顕著な成果は認められなかった。生物に関しては顕著な得点上昇が認められ、リメディアル教育の実施の有効性を示している可能性がある（ただし、前期に必修科目の「生物学」を受講しており、その影響が大きいと思われる）。</p>
今後の対応	<p>本年度は、入学時プレイスメントテストⅠの成績下位者に対してリメディアル教育を初めて実施し、学力向上に一定の効果がある可能性が示された。基礎学力の向上、ひいては留年率の低下を目指して、来年度も同様にリメディアル教育を実施する。ただし、各学年で科目毎の不得意な領域が変動する可能性もあるため、領域の設定はプレイスメントテストⅠの結果を踏まえて適宜変更して実施する予定である。また、極少数ではあるが、プレイスメントテストⅠの成績下位者に含まれない学生の中にも留年者が存在するため、リメディアル教育受講者の選抜の条件の一部変更を予定している。</p>

科目名	情報処理	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	吉武康之	科目担当者			
自己点検・評価	<p>授業は講義及び演習形式で行った。演習の初めに講義資料を電子ファイルと紙媒体で提供し、資料を前面のスクリーンで掲示した。演習中はできる限り学生自身で問題解決をするよう指導した。演習の進捗状況は学生の PC 画面を教員用 PC で確認し、質問には個別対応した。複数の学生が質問した内容に関しては、その学生の画面をスクリーンへ映し、全員に対して解説を行った。資料や課題のやりとりにはファイル共有システム利用した。その結果、学生一人一人との対話時間が多く確保可能となり、結果的に理解度が高まった。演習の終わりに PC やネットワークを利用して自ら考える課題を用意し、オンラインでの添削・評価を行った。授業時間外の学習に際して、パソコンを持っていない、ネットワークに制限がある等の理由で自宅での復習が十分できない学生が少なからずいた。また、パソコンはあってもマイクロソフトオフィスを導入していないため、演習室以外での復習が十分にできないケースも生じた。</p>				
今後の対応	<p>近年の学生は情報伝達ツールとして携帯電話や電子タブレットの利用には長けているが、パソコンを使った操作には不慣れなものもある。学生のパソコン購入は必須であると考え。よって入学時に「大学推奨パソコン」の紹介やマイクロソフトオフィスのアカデミックライセンス（Office365 など）の提供を検討して頂きたい。</p>				

科目名	生命倫理	学年	1 学年	期	後期
科目責任者	今井竜也	科目担当者			
自己点検・評価	<p>例年通り、「生命倫理の枠組みと用いられる基本的な方法論」について論じた後、「人間の生老病死を巡る課題」、「医療テクノロジーの社会適用における課題」を考えるという三部構成で、1コマ1テーマで授業を展開した。</p> <p>毎時間、ランダムに受講生を指名して口頭で質問に答えてもらい、かつ受講生全員に、必ずミニツツペーパーに同じ質問への回答を記載してもらった。次週の授業では、それらのコメントや、別途Google Form経由で出題した宿題課題の回答などを紹介し、解説しながら復習をするという方法で前回授業のフィードバックを行うとともに、受講生が講義を聞いてどのようなことを考え、かつ疑問に思ったのか、情報を共有することで更なる内容理解に役立てられるよう工夫した。また、薬学部生向けに薬害や創薬という「薬」に特化したテーマを、昨年に引き続き扱った。創薬をめぐる倫理、法制度は4年次の「医療関係法規」の方でも詳しく話がされる予定であるが、その前段階として基本的な枠組みを話しておくことで、専門科目への架橋となることが期待される。</p> <p>授業アンケートでは、1～11の項目において3.8もしくは3.9となり、全てキャンパス平均を上回ることが出来、その点では上出来であった。授業スタイルが何を意図しているものであるのか、その方向性は受講生にも概ね理解されていると評価して良いと考えている。</p>				
今後の対応	<p>ただ、授業アンケートを見るとこれも昨年同様、予習復習時間については学生の約8割が30分未満、授業の難易度については約2割の学生が「やや難しい」、「難しい」と回答していた。</p> <p>ほぼ毎時間、宿題課題を出しているが、復習をあまりせず、宿題課題に手短かに回答して済ませていると思しき受講生も結構多い。また、薬学部生対象の講義であるため、研究倫理、創薬、医療事故(薬害)に関するトピックを入れているが、このあたりのトピックは1年生にはまだまだ理解が難しく、授業難易度の評価にも影響していると思われる。</p> <p>だが、これらのトピックは4年時に学ぶ「医療関係法規」とも大きな関係性があり、準備学修の一環として外せないところでもあり、分かり易く教えられるようにもう少し、内容を精査すべきだったかもしれない。</p> <p>なお、薬学部生については2024年度より「医療必修」の授業が、</p>				

	生命倫理に代わって必修科目となる。こちらの授業も私が主担当で関わることになっているので、引き続いて生命倫理、医療倫理教育に資するような対応をしていきたい。
--	-------------------------------------------------------------------------------

(4) 総合教育科目 外国語系

科目名	英語講読 1 (Primary) (PS)	学年	1 学年	期	後期
科目責任者	加藤 明子	科目担当者			
自己点検・評価	<p>グローバル社会において、医療分野でも英語を必要とする機会が増え、また「海外保健福祉事情」の必修授業では海外研修で英語を使う機会が多い。「なぜ英語を学修するのか」という動機を明確にし、英語学修に興味を持てるよう、通訳技法などを活用しながら実践的な方法で教授した。英語でコミュニケーションができ、身近な話題についてプレゼンテーションができるような、国際社会で通用する英語運用能力を身に着けることを目標とした。</p> <p>初回の授業では、異文化を意識した効果的な自己紹介の方法を提示し、実際にプレゼンテーションをしてもらった。受講人数が 123 名と多く、初回の授業ではモニターや板書の文字が見にくいと指摘があったので（縦長の教室で、後方のモニター画面が小さい）、2 回目の授業からより板書とスライドが見やすい、横長の広い教室に変更してもらった。</p> <p>『医療通訳』（厚生労働省ホームページ）のテキストをもとに、医療英単語が身につくよう毎回単語テスト（30 問）をおこなった。実際の医療現場で使用される英単語のテストなので、終始学修意欲が高く、予習復習をしっかりとこなう学生が多くみられた。また毎回の授業において、学習意欲が持続しやすいよう、学修目的を明確にし、学習内容にも気を配った。課題として薬局で実際に使われる英会話の教材を作成し、ロールプレイを通じて会話の練習もおこなった。</p>				
今後の対応	<p>実際に英語を使ってはじめて、感覚的に英語が身につくので、語学学習は「学修」というより「訓練」に近い。その「訓練」に学生を導くため、「なぜ英語を学習するのか」という動機づけを明確にし、英語学修に興味を持ってもらえるよう、通訳技法などを活用しながら、今後も医療現場や学生のニーズに合わせた教材研究をしていきたい。また受講生が 123 名と多く、会話指導において難しい点もあるが、できるだけインタラクティブな授業を心がけ、発言の機会を多くすることで、発音矯正をしながらリスニング能力を高め、「話す」ことにも</p>				

	<p>重点をおいていきたい。</p> <p>また継続して以下の要素を念頭においた、教材内容や指導もしていきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 英語で自分の考えを相手に伝えることができる ・ 異文化を理解し、柔軟に対応することができる ・ 英文を理解するのに必要な文法知識や語彙力を養うことができる
--	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

科目名	英語講読 2 (Basic) (PS)	学年	2 学年	期	前期後半・後期前半
科目責任者	加藤 明子	科目担当者			
自己点検・評価	<p>グローバル社会において、医療分野でも英語を必要とする機会が増え、また「海外保健福祉事情」の必修授業では海外研修で英語を使う機会が多い。「なぜ英語を学修するのか」という動機を明確にし、英語学修に興味を持てるよう、通訳技法などを活用しながら実践的な方法で教授した。英語でコミュニケーションができ、身近な話題についてプレゼンテーションができるような、国際社会で通用する英語運用能力を身に着けることを目標とした。</p> <p>初回の授業では、異文化を意識した効果的な自己紹介の方法を提示し、実際にプレゼンテーションをしてもらった。また『医療通訳』（厚生労働省ホームページ）のテキストをもとに、医療英単語が身につくよう毎回単語テスト（30 問）をおこなった。はじめは単語数の多さ戸惑う学生もみられたが、最後の「薬に関する用語」のテストでは、学修意識が高まり高得点をとる学生が多かった。英語学修の目的を明確にすることで学修意欲が増し、実際の医療現場で使われている英語表現を授業で扱うなど学習内容に気を配った。</p> <p>また海外研修からの帰国後におこなったアンケートでは、異文化コミュニケーションで必要なことは何かを具体的に考えてもらい、学修の動機づけに役立て、学修意欲の向上に結びつけることができるよう努めた。アンケート内容には、実践的な英語学修がしたいという意見が多く、薬局で実際に使われる英会話の教材を作成し、ロールプレイを通じて会話の学修もおこなった。その他アンケート結果から、英語学修に対して前向きな意見が多く、大半の学生は「英語は必要」という認識を持っていたため、その意欲を今後の教材研究に生かしていきたい。</p>				
今後の対応	<p>実際に英語を使ってはじめて、感覚的に英語が身につくので、語学習得は「学修」というより「訓練」に近い。その「訓練」に学生を導</p>				

	<p>くため、「なぜ英語を学習するのか」という動機づけを明確にし、英語学修に興味を持ってもらえるよう、通訳技法などを活用しながら、今後も医療現場や学生のニーズに合わせた教材研究をしていきたい。また受講生が約 130 名と多く、会話指導において難しい点もあるが、できるだけインタラクティブな授業を心がけ、発言の機会を多くすることで、発音矯正をしながらリスニング能力を高め、「話す」ことにも重点をおいていきたい。</p> <p>また継続して以下の要素を念頭においた、教材内容や指導もしていきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語で自分の考えを相手に伝えることができる ・異文化を理解し、柔軟に対応することができる ・英文を理解するのに必要な文法知識や語彙力を養うことができる
--	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

科目名	英 語 CALL1 (Primary) (PS)	学年	1 学年	期	前期後半・後期前半
科目責任者	鄒 艶	科目担当者			
自己点検・評価	<p>概要：</p> <p>今年度の講義では、学生の英語力のばらつきと学習負担の大きさ、そして英語に使う時間の制約といった二つのチャレンジに直面しました。これらの課題に対処するため、新しいスタートを切るクリニック系の教科書を導入し、実用性を重視したアプローチを採用しました。また、講義中には TOEIC の練習やシャドーイング、ロールプレイ、ディベートなどの活動を通じて、学生たちのヒヤリングと話す能力を向上させ、リーディング能力の向上も図りました。</p> <p>到達目標：</p> <p>講義の主な目標は、英語力の差異がある生徒たち全員が上達できるようにすることでした。大学の生徒たちの目標が受験ではなく実用性に転換していることを考慮し、実践的なアクティビティを通じてコミュニケーションスキルを向上させ、実際の使用に耐える英語力を育むことを重視しました。</p> <p>重点的に取り組んだ内容と取り入れた工夫：</p> <p>学生の英語力向上を促進するため、講義ではクリニック系の教科書を導入し、TOEIC の練習やシャドーイング、ロールプレイ、ディベートなどの実践的な活動を積極的に取り入れました。これにより、生徒たちは言語スキルを向上させるだけでなく、実際のコミュニケーション</p>				

	<p>にも適用できるようになりました。</p> <p>うまくいった点：</p> <p>新しいアプローチと実践的な活動の導入により、生徒たちの興味を引きつけ、講義への積極的な参加が見られました。特に、TOEIC の練習やディベートなど、実際の使用に即したアクティビティは学習効果が高かったです。</p> <p>課題：</p> <p>参加度に関しては、喚起にもかかわらず参加しない生徒が依然として存在しています。これは受験中心の考えからの脱却が求められており、これに対する適切なアプローチやモチベーション向上の手段を模索する必要があります。</p> <p>まとめ：</p> <p>今年度の講義では、学生の英語力向上と学習負担の軽減に向けた二つの大きなチャレンジに果敢に取り組みました。実践的なアクティビティなどにより、生徒たちの成果が見られましたが、課題も浮き彫りとなりました。今後はこれらの課題に対処するための改善策を検討し、より効果的な英語教育を提供していくことが求められます。</p>
今後の対応	<p>来年度の講義では、引き続き学生の英語力向上と学習負担の軽減に焦点を当て、より効果的かつ持続可能なアプローチを追求していく方針を掲げます。</p> <p>方針：</p> <p>参加度の向上に重点を置き、生徒たちが受験中心の枠を超え、実用性を重視する視点を養えるようなアクティビティやアプローチを検討します。生徒たちが英語を実際のコミュニケーションや仕事に活かせるような学習環境を整えます。</p> <p>重点的に取り組むべき課題：</p> <p>参加度の向上は依然として課題です。来年度では、新たな喚起手段や学習への動機づけを促進する戦略を検討し、個別にアプローチすることで、全生徒の積極的な参加を引き出す方法を模索します。</p> <p>来年度も学生たちが英語力を向上させ、自己実現につながるような講義を提供していくことが、我々の使命であり目標です。</p>

科目名	英 語 CALL2 (Basic) (PS)	学年	1 学年	期	前期後半・後期前半
科目責任者	鄒 艶	科目担当者			
自己点検・評価	概要：				

	<p>今年度の講義では、前年度の担当者とは異なる方針やアプローチを導入する中で、学生の英語力のばらつきや学習負担の大きさ、さらには私自身の新しい講義の方針による学生の理解の難しさなど、様々なチャレンジに直面しました。これらの課題に対処するため、講義中にはTOEICの練習やシャドーイング、ロールプレイ、ディベートなどの活動を通じて、学生たちのヒヤリングと話す能力を向上させ、リーディング能力の向上も図りました。</p> <p>到達目標：</p> <p>講義の主要な目標は、学生一人ひとりが英語力を向上させ、実用的なスキルを身につけることでした。新しい方針に基づき、全ての学生が適切なサポートを受けながら成長できる環境を整えることが求められました。</p> <p>重点的に取り組んだ内容と取り入れた工夫：</p> <p>学生の英語力向上を促進するため、講義ではクリニック系の教科書を重点にし、TOEICの練習やシャドーイング、ロールプレイ、ディベートなどの実践的な活動を積極的に取り入れました。これにより、生徒たちは言語スキルを向上させるだけでなく、実際のコミュニケーションにも適用できるようになりました。</p> <p>うまくいった点：</p> <p>新しいアプローチと実践的な活動の導入により、生徒たちの興味を引きつけ、講義への積極的な参加が見られました。特に、ロールプレイなど、実際の使用に即したアクティビティは学習効果が高かったです。</p> <p>課題：</p> <p>新しい方針やアプローチに馴染むまでに時間がかかり、生徒たちの理解を得ることが難しかった面がありました。参加度の課題も残り、受験中心の考え方からの脱却が求められています。これに対する適切なアプローチやモチベーション向上の手段を模索する必要があります。</p> <p>まとめ：</p> <p>今年度の講義では、様々な挑戦に直面しましたが、新しい方針と実践的なアクティビティの導入により、生徒たちの成長と自信の向上が見られました。来年度に向けては、課題への更なる対応と学生との連携を強化し、より良い学習環境を築くことが目指されます。</p>
今後の対応	<p>来年度の講義では、引き続き学生の英語力向上と学習負担の軽減に焦点を当て、より効果的かつ持続可能なアプローチを追求していく方針を掲げます。</p>

	<p>方針：</p> <p>参加度の向上に重点を置き、生徒たちが受験中心の枠を超え、実用性を重視する視点を養えるようなアクティビティやアプローチを検討します。生徒たちが英語を実際のコミュニケーションや仕事に活かせるような学習環境を整えます。</p> <p>重点的に取り組むべき課題：</p> <p>参加度の向上は依然として課題です。来年度では、新たな喚起手段や学習への動機づけを促進する戦略を検討し、個別にアプローチすることで、全生徒の積極的な参加を引き出す方法を模索します。</p> <p>来年度も学生たちが英語力を向上させ、自己実現につながるような講義を提供していくことが、我々の使命であり目標です。</p>
--	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(5) 総合教育科目 総合系

科目名	大学入門Ⅰ(基礎)	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	武田 弘志	科目担当者	坂井 崇亮、澤井 円香		
自己点検・評価	<p>大学入門Ⅰ(基礎)は新入生を対象に 1) 本学建学の精神と教育理念・ポリシー、2) 学習地域の特性の理解と社会的貢献、3) 大学の意義と自主的な学びの必要性とその方略、4) 大学生活上の注意点、5) 社会人としてのマナーや医療人としてのコミュニケーション能力の向上、6) 関連医療職種の理解とチーム医療の必要性などを学ぶことにより、医療系大学生としての基礎的能力を高め、より良い医療人・社会人として成長するために必要な素養を涵養するための科目である。</p> <p>教育目標の到達の為、理事長・学長・市長をはじめとした、それぞれ該当する背景を有する経験豊かな複数の講師にオムニバス形式で講義して頂き、教育のポリシーや地域への理解、医療人としての知識を深める機会を設けた。講義形式は全キャンパス共通の VOD 講義と対面講義の形式にて行った。</p> <p>成績評価として講義内容に関するレポート評価を行い、学習の到達度を確認した。</p> <p>講義アンケート結果より、「勉強の仕方」「レポートの書き方」「社会人としてのスキル」「医療人の心構え」「地域の特色」「マナー」を学習できた旨のコメントが多くみられた。</p>				
今後の対応	<p>次年度のカリキュラム改定に当たり、本科目は「大学入門講座-医療人・社会人として成長するために-」へ変更が行われる。これに伴い、</p>				

	講義回数は現 8 回から 15 回となり、医師や看護師、薬剤師等の医療職専門の講師による他職種の理解を目的とした内容の講義が追加される予定である。
--	---------------------------------------------------------------------------

(6) 専門教育科目 専門基礎/学部共通

科目名	臨床心理学概論	学年	1 学年	期	後期
科目責任者	藤枝 恵	科目担当者			
自己点検・評価	<p>臨床心理学の基本的内容の理解に加え、薬剤師として必要な臨床心理学的スキル、薬剤師の業務遂行に必要なコミュニケーション能力が獲得できるよう授業内容を工夫した。</p> <p>しかしながら、学生に発表を促しても、ほとんど発言しないことから、授業について学生がどのように理解しているのか、どのようなところに疑問を持っているのか把握するのが困難であった。そのため、グループワークを取り入れることとした。当初は、学籍番号で班分けをしていたが、課題をうまくこなせるグループと全くやる気のないグループがみられ、グループによる偏りが大きい結果となった。そのため、毎回違うメンバーになるように、学籍番号でグループ分けをしていたが、班分けの準備に労力を要することから、途中より、くじによるグループ分けに変更した。</p> <p>5～6人でひとグループとして、実際に薬剤師になってから臨床現場で遭遇する課題に取り組んでもらった。これは、臨床心理学への理解を促すための工夫でもある。グループ数を 22 グループとしたので、各グループから出された意見やコメント、話し合いの結果などについて、十分フィードバックすることができた。学生全員からのコメントに対しては、人数が多すぎるため、ひとつずつコメントすることは不可能であった。</p> <p>グループワークにより、コミュニケーションスキルが向上したという学生の反応も多かった。講義の回数が増すごとに、グループワークでのディスカッションも活発になっていった。</p> <p>グループワークは、薬学部で身につけるべき能力として、コアカリキュラムにも含まれるコミュニケーション能力の向上にも非常に効果的であった。</p>				
今後の対応	<p>グループにより、課題に取り組む姿勢に差がみられたことが、次年度への課題となった。クラス全員の中でやる気のある学生の割合は、おそらく 10～20%程度と考えられる。極端に意欲の低い学生と同じグループになったり、全体的にモチベーションの低いグループに属し</p>				

	たりすると、グループワークの成果も内容の乏しいものとなり、ディスカッションもほとんどできていなかった。今後は、学生全体のモチベーションが自然と上がるような授業内容となるよう、学生にとってより身近な話題を取り扱う予定である。また、ロールプレイ課題で演じてもらう薬剤師の役割については、よりイメージしやすい内容となるよう工夫していきたい。
--	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

科目名	関連職種連携論	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	永井良治	科目担当者	長谷麻由、中原雅美、森山良太、大谷 久也、太田昭一郎、大内田博文、戸田 修二、後藤純信、西村信弘、長谷川雄、宗像千恵、平塚剛、小荒田秀一、藤丸 知子、村上武士		
自己点検・評価	<p>保健・医療・福祉の統合が進む社会状況にあって、その現場で働く職種には各々の専門的立場からサービスを提供すると同時に、各職種が連携し、利用者に総合的に支援することが求められている。全人的支援を行うには、関連職種連携が不可欠であり、それを行えるようになるためには他職種の専門性を理解すると共に、職務の関連性や連携について理解することが必要である。本講義の到達目標は 1.専門職種間連携の概要を理解し、自職種について説明できる。2.保健・医療・福祉に携わる職種の専門性と関連性について説明できる。3.職種連携実践のあり方について概説できる。ことである。この目標を達成するため、福岡保健医療学部学部長をはじめした、医師、看護師、保健師、薬剤師、臨床検査技師、言語聴覚士、作業療法士、理学療法士、社会福祉士、介護福祉士の学内専任教員と臨床の先生方よりオムニバス形式で講義をして頂き、保健・医療・福祉を支える職種の理解と専門職種間連携の理解を深めた。学修内容の確認としては、講義内容に関する問題を作成して頂き学修の到達度を確認した。</p> <p>授業アンケートの結果より、「授業が興味深く、自身の将来に役立つものであると感じた」そう思う・ややそう思う 回答率は 88.5%、「総合的にこの講義は満足だった」89.4%、また「他の医療職の業務について知ることができた」旨のコメントもみられた。一方、オムニバス講義の関係上、範囲が広くどこを勉強してよいかわからないため、要点を絞って伝えてほしい、レポートにしてほしい、履修者が多くスライドがみえにくいなどの意見もみられた。</p>				

今後の対応	アンケート結果より、キャンパス平均より、すべての項目が低値であった。第1回の授業において、わかりやすく授業概要と到達目標について説明する必要がある。また定期試験では範囲が広いいため授業の要点を絞りこめるよう授業展開していく必要がある。
-------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

科目名	関連職種連携ワーク (執筆 西村信弘)	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	大内田 博文	科目担当者	永井良治、石橋英恵、長谷麻由、中原雅美、下田武良、松田憲亮、佐藤謙一、森山良太、原麻理子、鈴木あかり、船島由美子、 <u>西村信弘</u> 、木下栄子、 <u>宗像千恵</u> 、 <u>坂井崇亮</u> 、有家尚志、松下 航、岡田理恵子、和野紗央里、 <u>中矢 正</u> 、 <u>朴 珍相</u> 、 <u>貝塚 拓</u> 、 <u>磯田紀之</u> 、 <u>柴田健太郎</u> 、 <u>西之園 栞</u> 、 <u>一木裕子</u> 、韓 旻熙、東 靖之、西田哲司、劉 振、 <u>福田光良</u> 、吉田亮平		
自己点検・評価	<p>関連職種連携ワークは、保健医療福祉に携わる職種が連携して、対象者中心の援助を実践できるようになるために、各職種の専門性と関連性を学び、チーム医療・チームケアの理念と方法を理解し、関連職種の連携を通じた課題解決の技能を習得する講義である。医療系の総合大学である当学において大きな特徴となる講義の一つと位置付けられている。大川キャンパスにおいて関連職種連携ワークに薬学科の学生が参加するのは今年度が初めてであったため、事前準備の際に薬学科教員が主となり模擬症例の見直しを行った。</p> <p>今年度は理学療法学科、作業療法学科、言語聴覚学科、医学検査学科、薬学科の5学科の学生が参加し、学科横断型の25班を編成した。薬学科からは10名の教員がチューターを担当した。講義の構成は初回オリエンテーション及び3回のグループワーク（中間発表を含む）を経て最終発表会という日程であった。各班は準備された5つの模擬症例から1つを指定され、その模擬症例について各職種が実施できる介入を検討するグループワークを行った。最終発表会は学生達によって審査が行われ、上位の班が表彰された。</p>				

	<p>本講義を通じて学生は各職種を理解を深めることができたと考え。また、他学科の学生に自分の学科を説明する過程を経て、薬剤師に対する理解も深まったようであった。</p> <p>反省点として、グループワークはリハ学科中心の大川キャンパス独自の内容となっており、薬学科・医学検査学科の2学科では学習しない内容が多く含まれているため、模擬症例にそれら2学科が介入できる事項を増やすべきだという意見、およびチームビルディングについて、感想を述べるだけの課題は不要との意見が教員よりあがった。</p>
今後の対応	<p>次年度は大川キャンパス独自のワークの内容を廃止し、全学共通のワークの内容に改める予定。これを用いてグループワークを行い、学生の介入度の変化を確認しつつ模擬症例の調整を継続していく予定である。</p> <p>また大川キャンパスに2023年度より新たに看護学科が新設されたことから、2025年度には本講義に看護学科が新たにメンバーに加わることを想定して変更を加えていく必要があると考えている。</p>

科目名	関連職種連携ワーク (執筆 大内田博文)	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	大内田 博文	科目担当者	永井良治、石橋英恵、長谷麻由、中原雅美、下田武良、松田憲亮、森山良太、原麻理子、鈴木あかり、安田聖子、船島由美子、澁田樹、西村信弘、木下栄子、宗像千恵、坂井崇亮、有家尚志、松下航、和野紗央里、中矢正、朴珍相、貝塚拓、磯田紀之、柴田健太郎、澤井円香、一木裕子、韓侑熙、東靖之、西田哲司、劉振、福田光良、吉田亮平、草場耕二		
自己点検・評価	<p>本学独自のカリキュラムとして、関連職種連携教育（IPE：Interprofessional Education）に取り組んでいる。特に、学部・学科の垣根を越えチームを形成する関連職種連携ワークと関連職種連携実習は、医療福祉の総合大学である本学の大きな特徴となる講義の一つに位置付けられている。</p>				

	<p>関連職種連携ワークでは、保健・医療・福祉に携わる職種の専門性と関連性、チーム医療・チームケアの理念と実践方法を理解し、各職種が連携して課題を解決し、患者・利用者中心の専門的サービスを提供する技能を修得する。到達目標は次の4点を掲げている。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 対象者・児を ICF の概念などを用いて多角的・全人的に理解できる。 2) 実際にチームを形成できる（チーム・ビルディング）。 3) チームにおける自らの役割を発見・理解し、メンバーシップを発揮できる（メンバーシップ）。 4) 自職種の役割を自覚し、他職種に興味を持つことができる（他職種理解）。 <p>事前準備として、議論が促進するために、薬学科教員および医学検査学科教員による模擬症例情報の見直しを行なった。加えて、本学の IPE と関連職種連携ワークの位置付けを理解してもらうための補足資料を作成した。</p> <p>2023 年度は、理学療法学科、作業療法学科、言語聴覚学科、医学検査学科、薬学科の 5 学科、合計 316 名の学生が履修し、学科横断型の 25 班を編成した。授業の構成は、初回オリエンテーションと 3 回のグループワーク、報告会、最終リフレクションの機会を設けた。</p> <p>初回オリエンテーションでは、補足資料をもとに、関連職種連携論の内容を振り返った。また、対象者・児の理解だけでなく、チーム形成やメンバーシップについて学ぶことを強調した。グループワークでは、各班は準備された 5 つの模擬症例から 1 つを指定される。そこで、課題 1「あなたたちは対象者・児のために、各専門職として何をしますか。チームとして何をしますか。」の問いに、各職種およびチームとして実践すべき介入を検討した。その後、課題 2「課題 1 に取り組んだ経過を振り返って、チームとメンバーシップについて考えてみましょう。」の問いに、チーム形成やチームにおける自身の役割について振り返りを行ない、報告会資料をまとめた。報告会は学生達によって審査が行われ、上位の班が表彰された。</p> <p>本講義を通じて学生は各職種の理解を深めることができたと考える。また、他学科の学生に自分の学科を説明する過程を経て、薬剤師に対する理解も深まったようである。チーム形成やメンバーシップについても学んだことで、他職種との関わり方について考えるきっかけにもなったと思われる。</p>
--	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

	<p>反省点として、提示される模擬症例によっては、介入の余地が少ない学科が散見され、グループワークの際に発言や関わりが乏しくなりがちであった。</p>
今後の対応	<p>課題 2 では 2 年次の関連職種連携論の授業資料を手元におきグループワークに臨む学生が多く見られ、本講義における学修目的を正しく理解していることが伺えた。</p> <p>現在、本講義は大川キャンパス独自の要項に基づき実践されている。他キャンパス学生と関連職種連携実習を履修することを考えると、関連職種連携ワークの要項を揃えておくことが望ましい。次年度は他キャンパスの要項を参考に実施方法や到達目標などの修正を行う。</p> <p>引き続き、どの学科も満遍なく関われるよう、症例情報の見直し、症例数の増加を検討し、適宜、教員からも足場かけを行うよう努めていく。</p> <p>また、2023 年度に看護学科が新設され、言語聴覚学科は募集を停止している。そのため、2025 年度の本講義の参加は、理学療法学科、作業療法学科、医学検査学科、薬学科、看護学科の 5 学科となる。参加学科の構成が変わることを想定して準備を進めていく。</p>

科目名	公衆衛生学	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	石田 卓巳	科目担当者	石田 卓巳, 朴 珍相		
自己点検・評価	<p>本講義では、人々の健康増進、公衆衛生の向上に貢献できるようになるため、現代社会における疾病とその予防に関する基本的知識の修得を目指し授業を行った。健康と疾病の概念とその変遷、保健統計、疫学、医療・介護保険制度、感染症とその予防、生活習慣病とその予防、母子保健、労働衛生など広範囲に及ぶ内容をカバーしている。本講義では、実際の保健統計を用いた解析能力や疫学的思考の習得に加え、感染症予防や生活習慣病予防の実態、医療・介護保険や労働衛生の現状などを理解し、かつ説明できることを到達目標とした。授業は対面で 15 回開講され、指定教科書および参考書の解説と理解を主軸に進行した。また、公衆衛生学が現在の社会情勢から得られる知識を基とした発展的学問であるとの観点から、現状の社会問題との関連性を想起させる授業説明を行い、自らの力で知識を集約し発展させる意識付けを行った。定期試験は、教科書を基に CBT および国家試験にも対応できるような問題形式とした。さらに、再試験については、問題形式は変えず難易度を下げたものを準備した。これらの結果を見る</p>				

	限り、本年度は、学生における学習内容の理解度は一定のレベルに達しているものの、昨年度以上に問題の読解力および図やグラフの解析力に個人差があるように見受けられた。このため、特に成績の振るわなかった学生については、これらの理解と修得に向けた学習時間の確保が必要であると感じた。
今後の対応	衛生化学は、薬学における専門科目の中でも様々な分野の知識を必要とする発展型の学問である。中でも公衆衛生学は、現状の社会情勢を背景としたテーマとのつながりが強く、これらの知識の有機的な繋がり理解が必須な科目である。これが不十分であることが、学生の理解度のばらつきを産み出している原因の一つであると考察する。これを改善するため、授業で触れる様々なトピックに対して、社会問題と繋がりを想起させるような授業の実施を目指す。また、現状のスケジュールで中間テスト等の補助的な確認を行うことは困難であるため、授業での重点項目の解説を丁寧に行うと共に、授業開始時の口頭試問を充実させることが望ましいと考えている。

(7) 専門教育科目 専門基礎

科目名	薬学計算	学年	2 学年	前期	前期
科目責任者	宗像 達夫	科目担当者	吉武 康之、多田納 豊、中矢正、宗像千恵、柴田 健太郎		
自己点検・評価	薬学計算は、薬学で学ぶ者にとって必須な基本的な計算の復習を目的とする。具体的には、臨床上での計算の重要性に始まり、分数計算、指数対数、単位変換、濃度計算、pH計算、緩衝液について演習を行った。先の内容は大田原の薬学部でも行っていたが、福岡薬学部では、この内容に加えて薬剤師国家試験で近年多く出題されるグラフと統計、ミカエリス-メンテン式を追加した。演習の実施に当たっては、クラス編成試験の成績により、A～Fの6クラスへ分割した。実施自体に問題は無く、学生からの評価も高く、大川キャンパスのグッドティーチング賞を頂いたことから、本講義は良好に進行したものとする。しかしながら、15回目の講義資料がない(講義実施のエビデンスとなる様な物が必要)、クラス編成試験の結果について、単純に成績でクラス分けを行ったが、実力別に分かれていない可能性があるなどの問題点が指摘された。				
今後の対応	上の問題点に対して、15回目の授業は各クラス必ず学生を集め、まとめを行う(何かしらの資料を準備、内容については各クラスに任せる)、クラス編成試験の結果と2021年度の再試験者リスト、正				

	答率などを考慮に入れた分析を行う必要がある。その結果を基に改善を行うこととした。
--	------------------------------------------

科目名	病原微生物学	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	多田納 豊	科目担当者			
自己点検・評価	<p>本科目は、微生物の分類、構造、生活環などに関する基本的事項、および、ヒトと微生物の関わりおよび病原微生物に関する基本的事項を修得する事を目的とする科目である。当科目は、病原体の種類やそれによって引き起こされる感染症について多くの部分は暗記が必要な科目ではあるが、当科目を実施する上での一つの目標として、学生に、暗記のみに偏ることなく、病原体の性質を構造や産生する毒素などから論理的に「理解」できる部分をしっかりと「理解」できるようになってもらう、ということを目指している。そこで、「何故その病原体がその様な感染症の原因となるのか」、「何故その病原体がその様な感染経路を経て感染するのか」など、理屈の説明を丁寧に行った。また、暗記が必要な部分についても、ただ文字の羅列・名称として記憶するのではなく、構造や病態（臨床像）を画像で示し、映像とセットでの記憶の定着を目指し、画像を必ずセットで示すように心がけた。前年度の授業評価アンケートにおいて「授業が分かりやすかった」という意見が複数あったため、基本的には昨年度の方策を変えずに行った。今年度の自由記載のアンケート回答は無かったため、学生にとって特に授業に問題点は無かったと解釈した。</p> <p>自身が科目責任者となっている他の科目と同様に、講義を毎回録画し、動画を復習のために視聴できるようにした。学生に動画の提供は好評であり、復習に寄与できたと考えられる。しかし、復習時間が足りていない学生が多く、暗記と理解が必要な当該科目について、学生が取り組む姿勢をどのような方法で改善できるのかが今後の課題である。</p>				
今後の対応	<p>本年度は、講義内容の重要ポイントの理解、知識の定着や自主学習の方向性を確認してもらうことを目的として、他の担当科目と同様に、Google フォームを活用し、前回の講義に関する確認問題を次の講義回までに出題し、次の講義開始時に、正答率を基に適宜追加説明・解説を行った。この取り組みは学生からも好評であり、学生の自主学習の一助となっていると考えられるため、来年度もこの取り組みは継続する。しかしながら、半数以上の学生が授業開始までに確認問題を解いておらず、学習に取り組む姿勢が3年生になっても定着していない学生が多い点は問題であると思われる。</p> <p>また、講義の動画を復習のツールとして活用する取り組みも、来年度も継続して実施する予定である。</p> <p>暗記量が多い科目であることと、その記憶の定着のためにも「理解」に基づく暗記の仕方を、「理解する点」をより明示しながら講</p>				

	義をする必要があると考えた。引き続き、論理的に捉える部分は、それが分かる資料の作り方を意識して改善していく。
--	--------------------------------------------------------

科目名	病原微生物学 (再履修)	学年	4 学年	期	前期
科目責任者	多田納 豊	科目担当者			
自己点検・評価	<p>本科目の該当学生は、既に3年次に同様の内容の授業を受講した学生である。理解度を自主的に高めてもらうことを目的として、講義の動画をクラスルームにアップロードし、その動画を視聴する事と、ノートを用いた学習を課題とし、毎回、個別にノートチェックおよびその内容に基づく指導を行った。特に、着眼点の修正や、様々な事象の関連性を意識できる様になることを意識して指導した。</p> <p>また、講義内容の重要ポイントの理解、知識の定着や自主学習の方向性を確認してもらうことを目的として、Googleフォームを活用し、前回の講義に関する確認問題を講義開始時に出題し、学生の自主学習に役立ててもらった。</p>				
今後の対応	<p>4 年次であるため、この科目を欠単すると進級できない事が確定してしまうため、学生自身が本気で学習したことが大きな要因であると思うが、課題としたノートを自身で作り、その際に教科書や講義資料を見て学習した事で、覚えるべき内容がしっかり頭に入っていた様に見受けられた。再履修科目の方策として、今年度のやり方で来年度も行う予定である。</p>				

科目名	薬学演習Ⅰ(物理系等)	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	中矢 正	科目担当者	多田納 豊、坂井 崇亮、阿部 義人、塚本 宏樹、吉武 康之、柴田 健太郎、宗像 達夫		
自己点検・評価	<p>本講義では、2 年前期までに学習した内容の再確認を目的とし、演習形式による授業を行った。物理系、化学系、生物系でそれぞれ 5 回ずつ計 15 回の授業を行い、定期試験 100%による評価を行った。演習問題及びその説明の授業回数は昨年度と同様であり、定期試験の難易度についても例年通りであった。しかしながら、本試験の平均得点率が 5 割程度であり、例年になく再試験受験者数が多かった。学生面談した結果、演習内容について全く理解できていない訳ではないが、忘れていた点が散見されており、勉強不足感が否めない状態であった。第一回授業で、本科目がこれまでの復習から成り立つことを強調</p>				

	したが、正しく理解されていなかった可能性が考えられた。また、必要な復習過程をより絞って効率的に習得・定着させることを教員間で共有したが、その点についても学生には十分伝わっていない可能性が考えられた。
今後の対応	本科目は復習が重要な学習ポイントである。この点について各回の授業において強調すると共に、学生自身による既学習内容の復習をより強く促す。学習内容については既に検討済みであり、この内容をしっかりと習得することが以降重要になることから、内容の削除等は行わない。他方、学生の意識向上に向けた働きかけを行っていく。

科目名	薬学演習Ⅱ(化学系等)	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	磯田紀之	科目担当者	阿部義人、猪部学、宗像達夫、塚本宏樹、成川佑次、中矢正、柴田健太郎、坂井崇亮		
自己点検・評価	<p>本講義では、2年後期までに学習した内容の復習を目的とし、演習問題を行い、解説を加える形式で、化学系、生物系、物理系でそれぞれ5回ずつ担当し実施した。本年度より、生薬分野の強化のため、教員の増員を行なった。</p> <p>アンケートの結果より、70%以上の学生がシラバス通りの授業が展開されたと答えていることから、シラバス通りに授業が展開できたと考えられる。一方、複数の担当者で授業を分担したことで、担当日の共有が適切に行えておらず、補講が行われる事例があり、学生からの指摘を受けた。</p> <p>成績評価は各分野において行った演習問題は評価には含まず、定期試験の点数のみで評価を行った。定期試験は、本試験、再追試験を行い、120名中98名（再履修含む）が単位を取得でき、多くの学生が本試で合格した。一方で、不合格者中の留年者の割合が極めて高い状況となった。定期試験の難易度を、正答率80%を目標とし作問を行なっているが、本試平均点が66%程度であることから、昨年度同様に既学習内容が十分に復習できたのか再評価が必要と考えられる。</p>				
今後の対応	<p>次年度は、本年度の結果や授業評価アンケートを踏まえ、授業担当日の共有を行い、授業が飛んでしまうことがないように努める。また、試験の結果から、授業レベルの調整を行うとともに、理解度の低い内容に焦点を絞った講義を行なっていく。</p> <p>本年度は再履修クラスの google classroom を設定せずに進行した。来年度は本クラスの情報と再履修クラスの情報が混在するのを防ぐ</p>				

	ため、それぞれ別の classroom を設定する。
--	----------------------------

科目名	薬学演習Ⅲ(生物系等)	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	柴田 健太郎	科目担当者	阿部 義人、多田納 豊、 塚本 宏樹、宗像 達夫、 貝塚 拓、中矢 正、磯田 紀之、 澤井 円香、村田 祐造		
自己点検・評価	<p>本科目は、3年前期までに実施された基礎系薬学授業（化学系・物理系・生物系・衛生系）の復習を目的に実施された。学生諸氏はこれまで、薬学演習ⅠおよびⅡにて同様の形式で授業を受けているが、衛生系は新規科目であった。復習項目は、3年前期までに達成した到達目標の中から選抜し、シラバスの各回に掲示している。</p> <p>なお本年度は、柴田担当の1回分を村田祐造教授が代行し、初回ガイダンスは澤井円香助教が担当した。</p> <p>初回ガイダンスでは、澤井助教により演習に対する取り組み方、問題の解き方に対するアドバイスがなされ、授業中に理解できないことは必ず質問に行くよう指導された。</p> <p>再履修クラスにあっては、Google Classroomを利用した課題の提示、提出の指示がなされた。また、提出に関し問題のある学生に対しては、澤井助教が主体となり丁寧な個別指導が行われた。</p> <p>授業の平均出席率は93.1%で、再履修クラスは90.6%といずれも高値を示した。</p> <p>本試験不合格者は45.8%、再履修クラスの同不合格者は9.1%と大きな差が見られた。</p> <p>また、今年度も薬学演習Ⅰ、ⅡおよびⅢ全教員でのミーティングが実施され、改めて授業の目的や難易度の再確認を行った。</p> <p>昨年度の授業アンケートでは、化学を不得意としている学生数名から、復習時間の十分な確保を目的として授業順を早めてほしい旨要望があったため、生物→衛生→物理→化学から生物→化学→衛生→物理の順番に変更した。</p> <p>なお、本年度の授業アンケート結果より、グッドティーチング賞が授与された。この理由として、先に挙げたミーティングによる振り返り、学生の要望を取り入れた点に加え、各教員の演習に対する熱意が学生へ伝わったためと思われる。</p>				
今後の対応	<p>今後も、アンケート結果ならびに試験の成績等を用いて科目担当者ミーティングを実施し、授業のあり方を振り返る。</p>				

	<p>また、学生に対して、「授業で演習した問題をそのまま暗記することは意味のないことであり、出題意図は同じでも問題文を変えられたときに対応できるのか」すなわち「本質的な理解ができているのか」について、指導を徹底する。</p> <p>再履修生に対しては、どのような姿勢で取り組めば総合力を高めることができるのか、改めて考えさせる。</p>
--	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

科目名	基礎薬学実習Ⅰ(物理)	学年	1 学年	期	後期
科目責任者	宗像達夫	科目担当者	阿部義人、石田卓巳、中矢正、		
自己点検・評価	<p>本年度は、物理・衛生系実習室にて物理系3名と化学系2名の教員にて実習を行った。なお化学系2名の教員はA、Bクラスに対して各1名とし、担当教員4人にて実施を行った。担当学生数は全体を4等分とし、1教員あたり13から18人の学生を担当することとした。</p> <p>本年度は、昨年度同様、リンゲル液の輸液バッグを購入し、その輸液を試料として使う予定であったが、物品搬入が間に合わなかったため、昨年購入したリンゲル液の輸液バッグの提示のみで、実習で使った試料は自前で調製した物を使用した。</p> <p>また、レポート評価に対するループリックの修正を行い、考察の行われていないレポートに対して、評価を下げるようにした。昨年度導入したレポートの例示、実験操作の動画の導入などにより、実験操作、レポートの完成度に関しては、例年よりやや改善が見られたが、昨年度同様、レポート提出日に間に合わない学生が数名いた。</p> <p>一方で、今年度はインフルエンザに罹患する学生が多く、追実習を行う日程確保に苦労したが、全体としては概ね良好な実習であったと考える</p>				
今後の対応	<p>新カリキュラムでは、基礎薬学実習Ⅰ(物理)と基礎薬学実習Ⅱ(生物)が統合され基礎薬学実習となり内容が半減するが、本実習での良い点については、次の実習に受け継ぐ予定である。</p>				

科目名	基礎薬学実習Ⅲ(生物)	学年	1 学年	期	後期
科目責任者	猪部学	科目担当者	村田祐造、多田納豊、塚本宏樹、貝塚拓		
自己点検・評価	<p>本実習科目は、1年生の生物系実習科目として、薬学教育モデルコアカリキュラムの中から、代表的な器官の組織や細胞を顕微鏡で観察できる(C7(1)③)、グラム染色を実施できる(C8(3)⑥)、無菌操作を実施で</p>				

	<p>きる(C8(3)⑥)、代表的な細菌または真菌の分離培養、純培養を実施できる(C8(3)⑥)、脂質、糖質、アミノ酸、タンパク質、もしくは核酸の定性または定量試験を実施できる(C6(2)⑧)、酵素反応速度を測定し、解析できる(C6(3)③)の技能に関する内容を含む。これらの内容を通して、顕微鏡の取り扱い方、生体を構成する細胞種の形態的な相違、細菌の分類や薬剤感受性の相違、タンパク質、アミノ酸の性質や定量法、酵素反応速度を解析して酵素の特性を学ぶ。さらに、3~4名で構成される少人数班での共同実験を通じて、協働する態度を醸成することを目標とした。そのため、結果の測定値や実習書内に設けた空欄(計算して記入する欄)について、班内での相談を促し、統一した結果を得る過程で、理解の促進や協働する態度が得られるように工夫した。5月から新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、これまで実施されていた特別措置の多くは通常対応に戻ったが、インフルエンザ等を含め、集団感染に注意しながら実習を安全に実施できた。期間中、自宅待機者が発生したが、補講で対応した。以上、概ね問題なく実施できた。</p>
今後の対応	<p>本実習で実施する技能は、1年次に履修する「生物学」、「生化学Ⅰ」、「解剖生理学Ⅰ」等の科目で修得する知識と関連づけられ、1年生が行う生物の基礎実習として最適な内容となっている。さらに、少人数による共同作業は、6年間を通じて継続して学ぶコミュニケーション力、協働する態度の醸成において、低学年時に学ぶ重要な機会となっている。来年度は、新しい薬学教育モデルコアカリキュラムに対応したカリキュラムへと変更され、内容が大きく変わるが、変更後の実習においても同様な方針で実施できるように、十分な準備を行いたいと考えている。</p>

科目名	コミュニケーション実習		学年	2 学年	期	前期
科目責任者	永倉透記		科目担当者	石田卓巳、山本緑、 齊藤秀俊、今井竜也、 朴珍相、貝塚拓、 澤井円香		
自己点検・評価	<p>薬剤師の業務(かかりつけ薬剤師、チーム医療、セルフメディケーション等)は物から人へシフトしている。薬剤師が身につけるべき能力として、薬に関する専門性に加えて高いコミュニケーション能力が増々重要視されていることを背景として、本実習は、学生が将来薬剤師として社会で活躍するために必要なコミュニケーション能力を実践によって身につけることを目的とした。主な実習内容は、</p>					

	<p>自己・他者理解、コミュニケーション（非言語的/言語的コミュニケーション、傾聴など）の実践、薬剤師業務を想定したロールプレイ、グループディスカッション、薬剤師としてのキャリアデザイン作成、プレゼンテーションとした。さらに、修得したスキルを活かして実践するため、大学来訪者とのコミュニケーションの機会を設けた。今年度は履修者を8グループ(16人程度/グループ)に分けて1期間で実施したが、昨年まで(2期間に分けて10人程度/グループで実施)と同様に、各グループにおいてロールプレイやディスカッション等は活発に行われ、1期間への凝縮による影響は小さかった。また、教員の学生のパフォーマンスに対する評価も支障なく実施出来たことから、1期間での実施は適切と考えられた。今年度、チームビルディングに関わるタワー作りのプログラムを試験的に導入したが、来年度以降どのように発展させるかが課題である。</p>
今後の対応	<p>これまで3年間の実習プログラムの工夫により、自主的に役割を決めて活発に演習を進めるグループが多くなっている。グループディスカッション等のテーマ設定・シナリオをさらに研磨して、より意見交換が進む内容とする。また、薬剤師として社会で業務を行う自覚をより高める内容とする。これまでに話したことのない学生間の接点を作り、緊張感をもった状態で実習に取り組ませるため、グループワークメンバーの毎回の入れ替えを継続する。キャリアデザイン作成のプログラムは、低学年次にキャリアデザインを考えるきっかけを提供し、薬学学修への意識を高める意義があることから継続する。チームビルディングプログラム(タワー作り)は、趣旨・ルールをより明確化する必要がある。</p>

(8) 専門教育科目 専門

科目名	薬学概論	学年	1 学年	期	前期
科目責任者	武田弘志	科目担当者	石田卓巳、猪部学、今井竜也、多田納豊、永倉透記、西村信弘、宗像千恵、山口政俊、山本緑、吉武康之		
自己点検・評価	<p>当科目は、これから薬学を学ぶ新入生に対して、医療と薬学の歴史を知ること、「薬剤師」の活動分野（医療機関・薬局のみならず、製薬会社や衛生行政等）を知り、国民の健康管理、医療安全や薬学防止等における「薬剤師」の役割を理解する事、自身が目指す「薬剤師」としての使命感を身につけるための科目とすることを目指す。そして</p>				

	<p>これから学ぶ「薬学」がどのような学問であるのか理解するための科目である。</p> <p>専門分野の異なる多くの教員がオムニバス形式で講義を行うことにより、学生には将来目指すべき「薬剤師像」を多面的・多角的に理解し、どのような考え方が必要か、またどのような学習が必要かを認識してもらえらるプログラムになっていると考えられる。また、前年度の学生の授業アンケートの自由記載において、これから取り組む「薬学」を様々な視点からとらえて学んでいくことを知り、興味をもてたという意見が複数あり、この科目の目的が果たされていると考える。また、昨年度から生命倫理教育の充実、特に態度の養成を目的として一昨年度から始めた、生命倫理に関して学生同士が討議する(SGD)回では、年度毎に改善を試み、特に今年度はテーマを1つに絞って実施した。</p> <p>また、学生の評価方法として、各講義回における内容についてのレポート課題や小テストを課し、それらを評価対象とすることで、毎回の講義内容について学生が自身の考えを整理し纏めることができたと考えられる。</p>
今後の対応	<p>学生の授業アンケートの結果は全ての項目でキャンパス平均以上の高評価となっており、今後も今年度と同様の形式・内容で実施する予定である。倫理教育を目的とした、アクティブラーニング(SGD)の回では、倫理観について、「知識」のみではなく「態度」を身につける機会となる授業を実施することができた。また、今年度は自由記載のコメントがなかったが、不評な点が無いということから、特にない様に問題はない状況であると認識できる。今後も引き続き改良を心掛けながら、今年度の内容を基本として実施する。</p>

科目名	薬品物理化学Ⅰ	学年	1 学年	後期	前期
科目責任者	宗像達夫	科目担当者	宗像達夫		
自己点検・評価	<p>薬品物理化学Ⅰでは、学問の性質上、難解なため、内容をできるだけかみ砕く形で講義を行った。具体的には、教科書に書かれている公式の導出や変形などをなるべく省略しない形で掲載した講義資料などを準備した。また、SI基本7単位や誘導単位などのように、薬学を学ぶ上で基礎となる部分については、講義の初めに、書かせるなどの繰り返し学習を行った。また、区切りとなる单元ごとに小テストを行い、单元ごとに整理をさせるよう促した。しかしながら、計3回の小テストの結果では、繰り返しの復習の際、学生自身がどこまで手を抜いて</p>				

	<p>いたのかで結果に大分差が生じた。具体的には、本来セットで覚えなければいけない部分のうち、記号や名称だけと言った覚え方をしている傾向にあった。また、小テストなどの復習が追いついておらず、類似の問題では、以前間違えたものと同じ間違いを繰り返す学生も多く見受けられた。量子化学の部分では、数学的基礎が不十分であることから、基本的な内容とし、概要が見える形での講義を行い、演習問題の追加も行った。</p> <p>しかしながら、定期テストの結果において、公式の理解について重点的に問うたところ、理解が十分ではない学生も多く見られた。</p>
今後の対応	<p>来年度の対応として、理解が進んでいない部分の講義資料の充実や、演習問題の修正など、より学生自身が自己学習を進められるよう修正を行う予定である。また、小テストに重点を置く傍ら、暗記として捉える学生に対しても何かしら策を考える必要がある。さらに、第108回薬剤師国家試験に置いて応用が広い範囲で問われていることから、現在の学問領域と臨床応用を踏まえた、式とグラフの対応などを積極的に取り入れていくことが必要である。また、来年度はコアカリキュラム改定による新カリキュラムとなるので、再度講義資料なども構成し直す必要がある。</p>

科目名	薬品物理化学Ⅱ	学年	2 学年	前期	前期
科目責任者	宗像達夫	科目担当者	宗像達夫		
自己点検・評価	<p>薬品物理化学Ⅱでは、1年次の薬品物理化学Ⅰを基礎に、反応速度論、相平衡、溶液の化学、束一的性質の4つについて講義を行った。これらの内容は、高校化学を基礎にしているため、高校化学の理解が内容把握に大きく関わってくる。そこで、講義資料では、高校化学で学ぶ範囲についても、内容を盛り込んだ講義資料とした。また、区切りとなる單元ごとに小テストを行い、單元ごとに整理をさせるよう促した。計3回の小テストの結果では、第1回目の平均点が低かったが、2回目以降では改善され、計3回の合計では、30点満点中約5、6割の得点であった。5割台がいるのは1回目の結果が低かったためである。定期テストの結果、平均点が62点と若干低い。また、再試験においても、その平均点は同様の結果であった。小テストの解答を見ると、十分に演習を行って臨んだ学生と、中途半端な学習で臨んだ学生とで顕著に差が出ている。また、講義中に演習を行っているのに、詳細な解説を求めるなど、暗記科目へと落とし込もうとする意図も見える。しかしながら、一部の学生は演習前に問題を解き解答を求めるなど、積極的</p>				

	な姿勢を取る学生もいたことは、非常に喜ばしい。
今後の対応	来年度の対応として、演習問題の詳細な掲載は、様子を見て検討するが、電子媒体での配布は行わない。また、108回の薬剤師国家試験問題では、グラフとより内容に突っ込んだ形の問題が多く出題されていることから、それらを踏まえて、講義資料などの修正を行い、現在の学問領域と臨床応用を踏まえた、式とグラフの対応などを積極的に取り入れていくことが必要である。

科目名	物理薬剤学	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	阿部義人	科目担当者	宗像達夫		
自己点検・評価	<p>本講義では薬物の溶解性、安定性（宗像担当）、界面、分散、粘度、レオロジー、粉体の物性（阿部担当）を理解し、その基礎知識を学ぶことを目的とした。1回～6回（宗像担当）に関しては、教科書ならびに過去に出題された薬剤師国家試験の問題内容から関係する周辺知識が網羅できるようにまとめた配付資料を中心に講義を行った。配付資料は物質の溶解、医薬品の安定性の2部構成とし、それぞれの内容に入る授業回で配布を行った。7回～15回（阿部担当）に関してはパワーポイントを用いて、なるべくわかりやすく講義した。講義内容に関しては、講義前に Google クラウドルームを用いて、PDF ファイルとして事前配布し、予習ができるように配慮した。講義内容を元に練習問題を作成し、講義終了後に復習として配布した。7～9回、10～12回の講義のあと、テスト形式で講義内容の理解度の確認をした。確認テストの結果、理解度が足りていないと思われる学生には、さらにテスト内容に関するレポートの提出をさせ、理解を深めるように指導した。</p> <p>定期試験として、本試験、再試験、追試験を記述式、再再試験をマークシートで行った。本試験は合格点に達しているものが少なく学生が理解できているかの判断が難しかったが、再試験、再再試験で点数が向上し、単位を取得した学生も多く、自己学習の効果を見ることができた。単位を落とした学生に関しては、解答の記述から明らかに自己学習ができていない様子が見て取れた。</p>				
今後の対応	本年度は、前年度より、定期テストの平均点が低く、理解できていない学生が多かった。演習後の質問も少なく、レポートの提出も悪かった。今後、自己学習を促す工夫が必要かもしれない。				

科目名	医薬品構造解析	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	阿部義人	科目担当者	吉武康之、中矢正		
自己点検・評価	<p>本講義では赤外吸収、ラマン散乱の原理（中矢担当）、核磁気共鳴、質量分析、X線結晶回折、熱分析の原理（阿部担当）を理解し、スペクトル解析演習を通して、医薬品などの構造を推定できるようになること（吉武担当）を目的とした。原理の理解（1回～10回）に関してはパワーポイントを用いて、教科書の内容をなるべくわかりやすく講義した。講義内容に関しては、講義前に Google クラスルームを用いて、PDF ファイルとして事前配布し、予習ができるように配慮した。演習が足りないと思われたので、講義内容を元に練習問題を作成し、講義終了後に復習として、配布した。スペクトル解析演習（11回～14回）に関しては、まずは赤外吸収、核磁気共鳴、質量分析のスペクトルの読み方を理解させ、演習を行った。前年度の反省をもとに、最終日に演習問題の解説を行い、理解を深めた。定期試験として、本試験、再試験を行った。各試験はマークシートにより、3～5問の選択肢から選ばせたが、問題によっては正答率が、2割より少ないものもあった。</p>				
今後の対応	<p>定期テストの正答率が低い部分は、練習問題からの応用問題であり、基礎の部分から、さらに応用できるようにしっかりと理解させることが必要かと思われた。次年度はこのあたりを考慮して、講義を行いたいと考えている。</p>				

科目名	医薬品構造化学	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	阿部義人	科目担当者			
自己点検・評価	<p>本講義では生体分子の構造と化学的な機能である反応性を理解するとともに、医薬品のコア構造と薬理作用との関連を学ぶことを目的とした。医薬品と生体分子との相互作用に関する基礎の理解（1回～3回）を行い、その後、具体的な医薬品の作用機序をその構造と相互作用について各論的に解説（4回～12回）した。本講義は前期前半の講義（8回）であるが、教授すべき内容が多く全12回とした。講義はパワーポイントを用いて、教科書の内容をなるべくわかりやすく講義した。特に、昨年度の改善点を踏まえて、有機化学、生化学にて理解してないような部分は時間をかけて、教授した。講義内容に関しては、講義前に Google クラスルームを用いて、PDF ファイルとして事前配布し、予習ができるように配慮した。また講義内容を元に練習問題を作成し、講義終了後に復習として配布した。さらに5～12回に関し</p>				

	<p>ては、前回の内容の小テストを行い、学生の理解を深める工夫をした。定期試験として、本試験、再試験を行った。各試験はマークシートにより、3～5問の選択肢から選ばせたところ、予想していたよりも比較的高い平均点となった。授業評価においても、毎回の小テストが理解につながったと書かれており、各項目で、予習、演習問題による復習、小テストによる確認を行なって、各自の理解を含めたことが効果的であったと考えている。ただし、単位を落とした学生もおり、解答の記述から明らかに自己学習ができていない様子が見て取れた。</p>
今後の対応	<p>本講義は、有機化学、生化学、薬理学の総合的な理解が必要であり、前年度の反省を踏まえた対応を行なったが、まだ基礎の部分でしっかりと理解できていない部分があるため、次年度もこの点を考慮して、講義を行いたいと考えている。</p>

科目名	放射化学	学年	2 学年	期	前・前半
科目責任者	中矢 正	科目担当者	中矢 正		
自己点検・評価	<p>本講義では薬学コアカリキュラムに則り、基本的な放射壊変の種類や壊変法則、放射線の種類や放射線の物質との相互作用と減弱法則、放射性核種の物理的性質などを学ぶとともに放射線の検出原理や放射線測定器の原理などを理解し、放射化学の理解を深めることを目的とした。到達目標として、物質を構成する原子・分子の構造、及び化学結合に関する基本的事項を修得する。化学物質などの生体への有害作用を回避し、適正に使用できるようになるために、化学物質の毒性などに関する基本的事項を修得することを掲げた。教科書を基準として、より具体的であるとともに簡潔に理解ができるよう、多くの図の作成、及び引用を行った。また、各回の一週間程度前には内容スライドの配布を行った。本試験、再試験共に昨年度と同程度の成績であり、1/3 程度の学生が非常に優秀な成績を収めた。</p>				
今後の対応	<p>授業内容はコアカリキュラムで定められた範囲を網羅していることから、訂正・修正を加える程度で次年度も活用していく。また、各回で重要項目について教授した点についても、概ね理解度が高かったことから、これらについても継続する。小テストについては、出題された内容にのみ固執するくらいがあるため、行う必要は無いと思われるが、状況を注視する。</p>				

科目名	物理系薬学実習	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	阿部義人	科目担当者	宗像達夫、中矢正、澤井円香		
自己点検・評価	<p>物理系薬学実習では、反応速度、分子吸着、分光機器分析、クロマトグラフィーなどに関する技能、知識の習得を目指した。</p> <p>初日に実習講義を行い、内容の理解を深め、当日はなるべく実習自体に時間が取れるようにした。そのため、当日の予習が不十分な学生が実習に時間がかかることもあったが、実習に慣れていくに従って改善して行った。本年度は、昨年度と同様、実験グループを学生番号順ではなく、ランダムにシャッフルし、普段あまり交流のない学生とコミュニケーションを取るよう配慮したところ、授業アンケートにおいて好評であった。また、1) 基本的な器具の使い方などは一年生時に習った基礎薬学実習(物理)の実習書などで実習前に再確認させる。2) グラフの書き方、実習の内容などを実習時にもしっかりと教えるなどの対応を行った。実習は最後まで問題なく終了した。</p> <p>ループリックに従い、各科目担当者が採点したところ、全員合格点以上であり、実習の意義は学生に伝わったものと考えている。</p>				
今後の対応	<p>本年度の実習に関しては、十分な指導ができたものと考えている。今後もこれらを続けていくことで、しっかりとした実習指導を続けて行きたい。</p>				

科目名	分析化学 I	学年	1 学年	期	後期
科目責任者	山口政俊	科目担当者	山口政俊		
自己点検・評価	<p>薬学領域における分析化学は、創薬科学、医療薬学、生命科学、衛生薬学などのあらゆる分野で不可欠な基礎知識および基盤技術となっている。医薬品の確認試験、純度試験および定量、生体試料中の薬物濃度の測定、ゲノム、プロテオーム解析、環境および職の安全性の評価を行う上で、単に分析化学の知識の集積だけではなく、技能・態度の習熟が必要である。さらに、本講義では、基本的な思考方法や理論を学習するとともに、薬剤師あるいは薬学研究者にとって不可欠なものである。また、改訂コアカリの「C2 化学物質の分析」中の化学的分析法を中心に講義に取り組んだ。講義は、パワーポイントを用いて行った(講義前週までに講義資料を学生に送信、提供した)。コロナ禍の中ではあったが、全て対面講義を行うことができた。</p> <p>今期は、昨年自己点検・評価・課題(講義内容の過多による、学修の消化不良、それによる学生の不安)に対応し、さらなる講義の改</p>				

	善に努めた。学習内容に対して、講義時間が足りないことは否めない。したがって、学生の自己学習が必須になる。これをカバーするために、効果的な自習のために基礎演習や応用演習問題を与えるとともに、その解説を行った。今年度は前回までの問題に加え、最近の CBT や国家試験の動向・傾向を考慮し、更なる改良を加えた。
今後の対応	今期は、昨年の学生からの授業評価アンケートを踏まえ、講義の在り方や習熟度の向上を目指して、効果的講義の実施のための改善を行った。しかし、今年度の学生からの授業評価アンケート（化学平衡と滴定の講義内容のバランス、国家試験や CBT 対策など）では、未だ改善の余地がある。特に、一部の学生は、化学平衡についての基礎的知識が不足していることを不安視している。これらの対応・改善を来期以降も続ける。また、試験結果から感じたことであるが、本学の学生は、選択肢の正解率は極めて良好である。一方、記述問題の回答が出来ない。この対応も考慮したい。選択肢と記述問題の正解率に関する懸念はあまり改善できなかった。来年度も引き続き改善していく。さらに、講義内容について重要度の濃淡を明確にする。

科目名	分析化学Ⅱ	学年	2学年	期	後期
科目責任者	山口政俊	科目担当者	山口政俊		
自己点検・評価	<p>薬学領域における分析化学は、創薬科学、医療薬学、生命科学、衛生薬学などのあらゆる分野で不可欠な基礎知識および基盤技術となっている。コアカリキュラム C2 コース「化学物質の分析」の一般目標は、「化学物質（医薬品を含む）をその性質に基づいて分析できるようになるために、物質の定性、定量に必要な基本知識と技能を習得する」とされている。「分析化学Ⅰ」では、化学的手法に基づく分析化学（定性・定量分析及びその基礎的事項）を中心に、また、「分析化学Ⅱ」では、物理的手法に基づく分析化学(分離分析、分光分析、臨床分析法)を中心に講義を行った。分析化学は、単位の知識の集積だけではなく、技能・態度の習熟が必要である。本講義では、基本的な思考方法や理論を学習するとともに、薬剤師あるいは薬学研究者にとって不可欠なものである。これらを考慮し、講義に取り組んだ。講義は、パワーポイントを用いて行った（講義前週までに講義資料を学生に送信、提供した）。</p> <p>コロナ禍の中、本大学の職域ワクチン接種による一回の休校（後日、補講を実施）があったが、全て対面講義を行うことができた。試験は、後期の本試験（100点満点）及び再試験（90点満点）を実施した。</p>				

今後の対応	<p>他大学の一部では、本講義内容を一年以上の期間で講義している。同じ講義内容を半期でおこなうため、学生が学修の消化不良を起こしているのではないかと不安を抱きながらの講義であった。今後、この懸念を軽減するために、学生からの授業評価アンケートを踏まえ、講義の在り方や習熟度の向上を目指して、効果的講義の実施のための改善を行う。また、一部の講義内容が、他の教科内容と重複することが分かった。講義内容のチェックと講義内容の分担分けを実行する。さらに、講義内容の重要度を考慮し、講義内容に濃淡を明瞭にし、理解しやすい講義を構築する。</p>
-------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

科目名	有機化学 I	学年	1学年	期	後期
科目責任者	吉武康之	科目担当者	吉武康之		
自己点検・評価	<p>講義は15回を対面形式で実施した。講義資料は事前にClassroom上に公開した。授業ではその印刷した物を配布し、教科書、分子模型と共に手元に置いて受講するよう指示した。授業の初めには、復習として高校で学んだ化学の内容を解説した。有機化学を基礎的な内容を確実に理解するため、時折画面には分子模型の操作を映しながら学生に分子模型の組み立てを体験させた。有機化合物の例は日常で用いられるものや医薬品など親しみやすいものを多用した。講義の途中で一部の学生に質問をして理解度を確認した。定期試験では授業で掲示した練習問題を改変したものを用いた。再試験では基礎的な内容を中心に難易度を下げた問題を準備した。練習問題の確認を行った際に、高校レベルの化学知識が欠落している学生が若干名おり、これらの学生には更なる導入教育が必要であると感じた。</p>				
今後の対応	<p>定期試験で正答率5割に満たない学生の多くは、練習課題に取り組んでいない傾向にあり自主的な学習ができていないと判断した。これらの学生に対しては課題提出の義務化などが必要と思われる。また講義を理解するために必要な基礎知識に欠けた学生には、時間の許す限り高校化学の復習的内容を導入する予定である。</p>				

科目名	化学系薬学実習 I (有機合成)	学年	2 学年	期	前期
科目責任者	川端猛夫	科目担当者	石橋正己、吉武康之、坂井崇亮、磯田紀之		
自己点検・評価	<p>医薬品や生体成分の多くは有機化合物である。簡単な有機化合物の</p>				

	<p>性質を理解し、その構造から、塩基性水溶液にイオンとなって溶けるか、酸性水溶液にイオンとなって溶けるかを見分けるすべと実験操作法を習得した。具体的には、酸性化合物と塩基性化合物の混合物を酸性、塩基性の抽出操作による分離法とその操作の意味を習得した。また、得られた有機化合物の誘導體化、再結晶による精製操作を習得した。医薬品合成では、局所麻酔薬である<p>p</p>-アミノ安息香酸エチルの合成を行い、得られた化合物の融点測定、混融試験、質量分析、核磁気共鳴スペクトルの測定により解析を行い、有機化合物の同定法、純度解析法を修得した。</p> <p>本年度は、昨年度課題であった反応機構の理解に関して、実習前講義での各反応の反応機構を説明することにより、理解を促すよう工夫をした。一方、昨年度に融点測定機を増設し待ち時間の短縮を行なったものの、学生アンケートでは未だ不足を指摘する意見が見られるため、次年度以降にさらに増設が必要と考えられる。実験の安全性に関しては、知識の習得と安全な実験操作の徹底に努めると共に、消火設備を増やす等の安全面の強化を行なった。</p> <p>反応機構の理解や電子の移動を表す矢印の適切な扱い方に関する解説を行なったこともあり、例年に比べ実習試験の平均点の向上が見られた。一方で、レポートの書き方で、指定された書式が守られていない例が多く見受けられたことから、レポートの作成法について指導が必要と考えられる。</p>
今後の対応	<p>実験操作をスムーズかつ安全に行えるよう、また、実験操作の化学的な意味合いの理解を深めるように引き続き促していく。また、実験手技の動画資料の提供や、実験器具の増設あるいは円滑に共有できる方法を考えることで、実験の待ち時間を短縮できるように努める。</p>

科目名	生薬学	学年	2 学年	期	前期
科目責任者	成川佑次	科目担当者			
自己点検・評価	<p>生薬学は薬となる天然に由来する植物、動物、鉱物について、その基原、成分、品質、薬効など幅広く学修する科目である。今年度は、昨年度の講義内容を整理し、スライド枚数をやや減らし、重要な生薬をまずは覚えてもらうように講義した。ドラマ「らんまん」で出てきている話題や身近な薬用植物や実際に医薬品等に用いられている例を随所に紹介して、なるべく学生が興味を持ってもらえるように努力した。新たに Google classroom にて質問欄を設置し、疑問点などを次の講義で解説するようにした。また、3 回の小テストを実施や Google</p>				

	<p>classroomにて復習問題を出すなどは今年度も継続して行った。</p> <p>2023年度の定期試験の結果は平均 69.9 点で、再試験対象者は 29 名（昨年度平均 64.1 点，再試 35 名）と成績が向上しているが、一年目の昨年とは単純な比較は出来ない。今年度も構造式に関する問題は出来が悪い傾向があり、対策が必要である。</p>
今後の対応	<p>来年度は著作権侵害への対応と学生の利便性の向上、さらには新コアカリへ向けて教科書を変更し、講義内容も変える予定である。生薬学は覚えることが多く、暗記科目と捉えがちだが、学生が興味をもって学修することによって理解を深めるように配慮する。昨年に引き続き、化学成分の構造式に関しては有機化学の基礎的事項の復習も含めて講義していきたい。</p>

科目名	漢方医学Ⅰ(漢方の基礎)	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	成川佑次	科目担当者			
自己点検・評価	<p>漢方医学Ⅰ(漢方の基礎)は漢方の基礎，歴史，診断法，使用法，副作用や注意点などを学修する科目である。学生に苦手意識を持たないよう出来るだけ簡単に漢方独自の概念や用語など説明するとともに，漢方処方の各論では典型的な症例なども紹介して具体的にイメージできるようにした。今年度も毎講義後には Google classroom で復習問題を配信し，さらに3回の小テストを実施して，緊張感をもって講義に臨めるようにした。その結果，小テストを含めた総合点の平均は 71.9 点であり，昨年よりは点数が低かったが，まずまずの成績であるといえる。反省点としては症例を昨年度よりも増やした結果，ひとつひとつの漢方処方の解説がやや不足して分かりにくくなってしまった可能性がある。</p>				
今後の対応	<p>漢方医学は独自の概念や用語などが難しく，さらに多種類の漢方処方がある程度覚えなければならないため，苦手意識をもつ学生もいる。漢方の概念、用語などは日常生活に繋がっている部分と関連させて丁寧に説明するとともに，漢方処方に関しては重要なものをより重点的に講義することによって，少しでも理解できるように講義をすすめていく。</p>				

科目名	漢方医学Ⅱ(漢方の応用)	学年	4 学年	期	前期後半 (集中講義)
科目責任者	成川佑次	科目担当者	今村友裕		

自己点検・評価	漢方医学Ⅱ(漢方の応用)は、3年生・漢方医学Ⅰ(漢方の基礎)で学修した知識を発展させ、実際の薬剤師実務に応用できるようになるために、前半は今村講師に医師として診断法や症例などについて講義を担当していただき、後半は鍼灸、中医学など統合医療に関する講義を成川が行った。今年度から開始した講義であるが、出席率も高く、定期試験は平均 86.2 点と高かったことから、概ね学生に理解してもらえたと考えている。
今後の対応	漢方医学Ⅱ(漢方の応用)は、基礎的な科目ではなく、臨床などの実務の場で役立つ知識の獲得を目指しており、内容に関しては更なる精査を行う。定期試験はやや平均が高すぎるため、講義内容の理解度を測れているか不明であり、適切な難易度に調整することとする。

科目名	化学系薬学実習Ⅱ (天然資源)	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	成川佑次	科目担当者	川端猛夫、石橋正己、吉武康之、磯田紀之、坂井崇亮		
自己点検・評価	化学系薬学実習Ⅱ(天然資源)は生薬、漢方薬の取り扱いに必要な生薬形態の観察と鑑別、漢方薬の調製、品質評価のための試験法などの技能を修得する実習科目である。生薬の鑑別においては形態とともに希望者には味や香りを確認してもらい生薬が印象に残るようにし、確認試験などに関しては化学構造に基づく機序についても理解できるように配慮した。また、生薬の基原となる重要な植物に関しても出席時などに実物を用意して解説するようにした。反省点としては昨年度より鑑別試験の再試験が多く出てしまったことで、生薬の観察が不十分であった可能性がある。さらに出席時に結果などを確認する際に時間がかかってしまい、学生を待たせてしまったことは改善が必要である。				
今後の対応	次年度は生薬のスケッチに関して学生がより深く観察し、丁寧に形態を描写できるように説明するとともに再試験にならないように注意喚起する。出席時の確認に関してはもう少し簡略化して一組当たりの時間を減らすように配慮する。また、植物の観察に関しても種類を増やし、薬用植物に関する知識も増やせるように工夫していく。				

科目名	生化学Ⅰ(生体分子)	学年	1 学年	期	後期
科目責任者	塚本宏樹	科目担当者			

自己点検・評価	<p>「生化学Ⅰ」では、生体分子の構造と性質、機能と役割を理解し、薬学教育の基盤となる知識の修得を目標に授業を行った。「アミノ酸・タンパク質」、「糖質」、「脂質・生体膜」を小分子と高分子の視点で捉え、その構造と性質、生体内における機能と役割を説明できることが到達目標である。</p> <p>全15回の授業内容は、昨年同様、「アミノ酸・タンパク質」、「糖質」、「脂質・生体膜」に大別し、特に「酵素」について重点的に授業を行った。最終回のインフルエンザ流行によるオンライン授業を除き、すべて対面形式で実施した。</p> <p>同学期の「基礎薬学実習Ⅱ（生物）」では、「アミノ酸の定性」と「酵素反応速度測定・解析」を実習している。本科目で学修するタンパク質・酵素に関する知識と物理化学的測定法・解析法の技能を連携し、知識から応用に至る学修項目を一貫して修得できるよう工夫している。特に、学生が苦手な「酵素・酵素反応速度論」では、酵素の特性や反応速度論の理解に必要な知識、解析法、解析結果の解釈に重きをおいて授業を行い、実習では、酵素反応速度を実測し、測定データに基づく酵素反応速度論解析（Michaelis-Menten plot、K_m、V_{max}の算出等）の技能を修得した。</p> <p>小テストは、授業内容の段階的理解の確認と毎回授業の復習を促す目的で2回（各10分）実施した。例年通り五肢択一問題であるが、不確かな知識や理解では正解できない工夫をしている。第1、2回小テスト、定期試験の満点はいるものの、第1回小テスト以外は、例年に比べ、低調であった。定期試験と小テストの成績は、例年通り、強く相関し、日常的な予習復習の重要性が強く確認された。</p> <p>予習復習を促すため、講義資料は事前にWEB掲載し、教科書の該当範囲は初回授業で周知した。SBOsは各回授業の冒頭にも明示し、授業内容と達成目標を明確にした。授業内容に沿った復習問題を授業前にWEB掲載し、授業内容の予習復習によって要点となる知識を体系化できるよう工夫している。</p>
今後の対応	<p>生化学は、生命現象を化学的に探究するため、最低限の化学の知識と理解が必要となる。アミノ酸、糖、脂質等、多様性に富んだ小分子が存在するが、その基本構造や違いを生み出す官能基、並びに、生体分子の構造と性質の物理化学的関係を整理し理解することが大切である。小分子の理解は高分子の構造や性質を理解する基礎となる。</p> <p>例年、本学の学生は、「脂質・生体膜」に関して苦手意識があるようである。複合脂質の理解は生体膜の構造や性質を理解する基礎とな</p>

	<p>り、アミノ酸・タンパク質の理解は膜タンパク質の局在や生体膜の機能発現の理解にもつながる。生体分子の名称、構造式を単に暗記するのではなく、構造から性質、機能、役割につながる「考える力」を養える授業にしたい。</p> <p>不合格者は例年並み、全体の成績は正規分布に近いが、一部の不合格者は抜本的な対策が必要と感じる。</p> <p>学生授業評価は例年通り高く、授業内容・計画に大きな変更、修正は必要ない。講義資料、伝え方、復習課題をブラッシュアップし、到達目標を達成できるよう取り組んでいきたい。</p>
--	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

科目名	生化学Ⅱ	学年	2 学年	期	前期
科目責任者	猪部学	科目担当者			
自己点検・評価	<p>本科目は、2 年生前期に開講され、薬学教育モデルコアカリキュラムの C6(5)「生体エネルギーと生命活動を支える代謝系」を中心とする範囲をカバーする科目であり、生命の維持に必須である活動エネルギーや生体構成要素を、摂取した栄養素から生み出すしくみについて学ぶ。三大栄養素である糖質、タンパク質、脂質の「異化」と「同化」により行われる代謝反応は、酵素により触媒され、その反応は相互に関連している。これら、複雑な代謝反応系と栄養素の分解・吸収を含む体内での輸送系、貯蔵等、生命現象の根幹をなす代謝経路を包括的に修得する。授業は、糖質からの ATP 産生経路を中心に、脂質やタンパク質などの性質の異なる代謝経路をブロックとしてとりまとめ、パワーポイント資料を用いて行った。配布したパワーポイント資料には空欄を設け、説明にあわせて記入してもらうことで、重要ポイントを意識してもらう工夫を行った。授業に集中する動機を与えるため、各回の終了後に、小テストを実施しているが、解答に対するフィードバックを強化し、振り返りによってより効果的に理解が進むように充実させた。5 月から新型コロナウイルス感染症が 5 類に移行し、これまで実施されていた特別措置の多くは通常対応に戻ったが、引き続き、感染には注意しながら安全に授業を実施できた。以上、本年度も概ね問題なく実施できた。</p>				
今後の対応	<p>本科目は、1 年前期の「生物学」、1 年後期の「生化学Ⅰ」に続き、生物学の基本を学ぶ科目であり、その後続く「分子生物学Ⅰ、Ⅱ」や「免疫学」などの基盤を形成する。今年度は小テストの解答にフィードバックを多く使い、より理解が進むような工夫を行った。次年度も同様な方針で実施する予定で、引き続き小テストのフィードバックを強化し、授業に対する学生の取り組みを促したいと考えている。</p>				

科目名	分子生物学Ⅰ (遺伝情報・細胞内情報伝達)		学年	2年生	期	前期
科目責任者	塚本宏樹	科目担当者				
自己点検・評価	<p>「分子生物学Ⅰ」では、「遺伝情報の保存と発現」、「遺伝子工学の基本技術」、「細胞の分裂と増殖」について学び、その仕組みについて分子・細胞レベルで理解し説明できることが到達目標である。</p> <p>授業内容は、「第 1-7 回セントラルドグマ」、「第 8-10 回遺伝子工学」、「第 11-14 回細胞分裂・細胞死・がん」の 3 部構成（第 15 回まとめ・補足）とし、対面形式の講義を行った。例年同様、各回の授業が SBO 過多に陥らないよう伝えるべき要点を絞り、毎回授業における学修理解の積み重ねが科目全体の理解につながるよう心掛けた。学修支援と理解の醸成を図る目的で、授業後には確認問題と授業動画を WEB 配信し、履修者が授業内容を見直し、復習しやすくなるよう配慮した。例年同様、問題や授業内容に関して質問する学生も見られた。第 1 部セントラルドグマ、第 2 部遺伝子工学について基礎的内容を問う小テスト（15 分、10 点）を各 1 回実施したところ、ある程度予想通りの成績分布となった。確認問題が、授業内容の早期復習とそれに伴う学修理解の向上に貢献していると考え。定期試験も想定通りの結果であった。</p>					
今後の対応	<p>3 年度目の授業であったが、昨年度に続き、現状の授業内容・計画で問題ないと考え。試験結果を見る限り、特に伝わりにくい授業内容はなさそうであるが、全体的に底上げにつなげられるかが今後と課題と考える。丸暗記で覚えきれない内容ではないため、どれだけ知識を体系化し理解できるかがポイントである。復習課題の解答を作り、暗記に頼る学生も少なからずいるものと思われる。その場しのぎの暗記学修ではなく、高学年を見据えた知識の体系化、全体像を把握する学修スタイルを身に着け、理解を深められるよう授業を通じて意識付けしていきたい。</p> <p>授業評価アンケートを見る限り、例年通り、評価は高い。授業が能動的な学修行動を促し、修学成果と自信につながるよう授業を通じて後押ししたい。</p>					

科目名	分子生物学Ⅱ	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	猪部学	科目担当者	貝塚拓		

自己点検・評価	<p>本科目は、2年生後期の科目であり、薬学教育モデルコアカリキュラムの C6(6)細胞間コミュニケーションと細胞内情報伝達、C7(1)人体の成り立ち①遺伝と②発生、細胞骨格 (C6(1)③)、組換え DNA(C6(4)⑥)、細胞死 (C6(7)②)、免疫反応の利用 (C8(2)②) などを取り上げた。これらのうち、遺伝や発生は1年前期の「生物学」から、組換え DNA は2年前期の「分子生物学 I」から続く科目であり、連続した内容を含む。一方、細胞骨格と細胞運動、細胞内シグナル伝達分子の機能モチーフ、遺伝子多型の解析や遺伝疾患の診断法、リアルタイム PCR や次世代シーケンス技術、タンパク質間相互作用、RNA 干渉やゲノム編集等の解析技術、ES 細胞等の多能性維持メカニズム、老化やストレス応答など、幅広いアドバンストな内容を含めた。授業の一部では、小テストを行うことで授業に集中する動機を与え、振り返りにより知識の定着を目指した。今年度は、一部の小テスト等で、解答に対するフィードバックを強化し、振り返りによってより効果的に理解が進むように充実させた。5月から新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、これまで実施されていた特別措置の多くは通常対応に戻ったが、引き続き感染には注意しながら安全に授業を実施できた。以上、本年度も概ね問題なく実施できた。</p>
今後の対応	<p>本科目は、1年前期に履修する「生物学」、1年後期の「生化学 I」、2年前期の「生化学 II」、「分子生物学 I」から続く生物系基礎科目の最後に位置づけられる科目であり、全体の過不足の調整や最新知見を取り入れたアドバンストな内容で構成される。今年度は、一部の小テストの解答でフィードバックを強化し、より理解が進むような工夫を行った。次年度も同様な方針で実施する予定で、引き続き授業に対する学生の取り組みを促したいと考えている。</p>

科目名	分子生物学実習		学年	3 学年	期	前期
科目責任者	猪部学	科目担当者	太田昭一郎、多田納豊、塚本宏樹、柴田健太郎			
自己点検・評価	<p>本年度は、昨年度実施した内容の一部を変更して実施した。具体的には、酵素反応速度を測定して解析する実習(C6(3)③)にかえ、遺伝子工学の基礎技術のひとつである大腸菌の形質転換をアドバンストな内容として実施した。また、本実習科目は、3年生の生物系実習科目として、薬学教育モデルコアカリキュラムの中から、抗原抗体反応を利用した検査方法を実施できる(C8(2)②)に対応したイムノブロット法を行い、モノクローナル抗体が抗原と高い特異性で結合すること、</p>					

	<p>様々な検出法に応用されていることを学ぶ。本科目は、1年次の基礎薬学実習II(生物)とともに、生物系の実習科目と位置付けられ、1年次に行った基礎的な実習内容やその後に授業で学んだ生命科学に関する知識を踏まえ、その他にもPCRによる遺伝子断片の増幅と電気泳動、PCR-RFLP法によるH-ras遺伝子の点突然変異の解析やコンピューターソフトを用いたDNA配列解析などが含まれている。本実習は、3~4名で構成される少人数班で行い、各実験で得られる結果について、班の中で統一した見解を得てレポートに記載するように促し、理解の促進をはかるとともに、協働する態度の醸成を目指した。5月から新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、これまで実施されていた特別措置の多くは通常対応に戻ったが、引き続き、感染対策等を実施しながら集団での実習を実施できた。期間中、自宅待機者が発生したが、補講で対応した。以上、一部内容を変更して実施したが、概ね問題なく実施できた。</p>
今後の対応	<p>本実習で実施する技能は、3年次までに履修する生命科学系の科目で修得する知識と関連づけられ、薬学教育コアカリキュラムに含まれる内容以外にアドバンストな内容を含むものとなっている。さらに、少人数による共同作業は、1年次の基礎薬学実習から引き続きコミュニケーション力、協働する態度の醸成において、重要な機会となっている。今年度は、実施する中で、電気泳動の結果の理解に不足が認められたと思われたため、次年度は、マーカーの移動距離を測定し、グラフを作成することで、分子量と移動距離の関係を正確に理解できるようにしたいと考えている。</p>

科目名	解剖生理学 I	学年	1年生	期	後期
科目責任者	村田 祐造	科目担当者	村田 祐造		
自己点検・評価	<p>医療従事者である薬剤師を目指す者として、人体の構造と機能を取得することは不可欠である。まずは1冊の指定された解剖生理学教科書の熟読と十分な理解を学生に促した。そのため教科書に沿った質問形式の予習課題を事前に紙媒体およびGoogle Classroomで配布した。講義はそれに沿った課題を含め、教科書に沿って進めていった。また、講義後確認のためGoogle Classroomで課題の解答を配布した。</p> <p>講義の最初にシラバスに記されているように、予習・復習をするように伝えた。小テストを講義開始時、Google Classroomで行った。小テストは単純に教科書の語句を問う問題ではなく、講義内容を補充するような事項を交え、内容の理解を問う問題作成を心がけた。多く</p>				

	<p>の学生が自己学習をしていたためであろうか、概ね良い成績であった。次の講義の始めに解説を行い、Google Classroom に掲載した問題解答のフィードバックも理解するよう告げた。</p> <p>多くの学生が集中して学修したようで、本試験の結果は良好で、合格者は約 8 割で、最高得点も 95 点であった。しかしながら、一方で、再試験を行ったが、単位非取得者が生じ残念であった。</p>
今後の対応	<p>先にも述べたが、2023 年度は少なからず単位非取得者を出してしまった。これを反省材料として、全ての学生が授業内において、内容に興味を持ち、理解できるように努めていきたい。全ての学生が十分学修するための対応を考え行っていきたい。</p> <p>まずは、シラバスに提示している準備学修を確実にを行うよう喚起する必要がある。シラバスでは、予習復習に 4 時間かけるように記載しているが、講義アンケートでは、2 時間半以上が 5% のみで 30 分未満が 28% であった。復習を促す小テストであったが、さらにその喚起が個人に届くように、最初の講義で自己学習の重要性を伝え、あるいは予習レポートを課すことが良い方策かもしれない。また、コロナ・インフルエンザ禍のため、講義中での質疑応答ができなかったが、口頭で、学生に質問をし、理解度を測りながら講義を進めていきたいと思う。次年度は、解剖生理学 I の範囲の講義が 15 コマから 10 コマになり、内容を重要点に絞り込むよう十分な準備を行いたいと考えている。</p>

科目名	解剖生理学 2	学年	2 学年	期	前期
科目責任者	緒方勝也	科目担当者	緒方勝也		
自己点検・評価	<p>基礎医学としての解剖生理学は医療系学部としては共通する基礎知識である。薬学部は人体を直接扱う機会は少ないものの、総合的な医学・薬学の理解に重要な内容を含んでいる。本科目では解剖生理学分野のうち神経系、内分泌系、血液系について扱った。各講義においてはあらかじめ授業のスライドと特に重要な部分を抜粋した資料を google クラウドで配布し、学生が利用可能な形をとった。また講義の最後に講義に関連したミニテストを google フォーム上で設定し、学生の復習の補助となるよう務めた。解剖生理学は医療系の学部における共通言語を学ぶ場として非常に重要であるが、英単語のようにまずは暗記する必要がある知識も多く、要求される知識量が多かったかもしれない。</p> <p>神経系については中枢神経、末梢神経、自律神経系をそれぞれ詳説</p>				

	<p>し、基本的な解剖学的知識のみならず、臨床医学につながる橋渡しとなる内容を講義した。特に自律神経系は薬剤の標的となる部分が多くあり、これらの知識は今後の薬理学の理解に重要になってくることを念頭に講義を行った。同様に内分泌系は基礎的な解剖学知識および各内分泌器官の機能や異常を来たす場合の影響、そしてこれらの薬剤の標的の観点から理解できるよう講義した。血液学では各血球血漿成分の分類および機能を講義した。血球成分は血栓や白血球成分の疾患との関連について、また血漿成分は凝固系を中心に薬剤の標的となる箇所を重点的に講義した。</p>
今後の対応	<p>アンケートにおいて大きな問題はなかったようであった。昨年度に引き続き重点がわかりやすく伝わるよう資料は可能な範囲で枚数を減らし、また資料中の強調を通じて重要なポイントが印象に残る工夫をしていく。教科書からやや外れる内容(受容体サブタイプなど)であっても薬学部に関連の内容については触れるようにし、知識の定着を図っていく。特に神経系は医学部でも難関となりやすい分野であり、知識の羅列にならないよう、ゆっくりと内容に触れるよう工夫する。一方自律神経や内分泌領域は疾患を中心に疾患との関連を通じて各内容が疾患理解や薬理学の理解、副作用の理解に必要であることが伝わるよう臨床面とのつながりの説明を増やし学生の興味を引き出すよう改善を試みる。これらの高学年での学習時に役立つよう改善を今後も継続する。</p>

科目名	免疫学	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	猪部学	科目担当者	太田昭一郎		
自己点検・評価	<p>本科目は、2年生後期の科目であり、薬学教育モデルコアカリキュラムの C8(1) 身体をまもる、C8(2) 免疫系の制御とその破綻・免疫系の応用で取り上げられる「免疫」を体系的に修得する唯一の科目となっている。免疫系は、医薬品が治療の対象とする病態と深く関連しており、そのターゲットとしても重要であることから、抗炎症薬 (E2(2)①)、免疫・炎症・アレルギー疾患の薬、病態、治療 (E2(2)②)、骨・関節・カルシウム代謝疾患の薬、病態、治療 (E2(2)③) や、ウイルス感染症およびプリオン病の薬、病態、治療 (E2(7)④)、悪性腫瘍 (E2(7)⑦) など、免疫系の関連する感染症やがんなども取り上げた。さらにアドバンストとして、HIV 感染症の疫学、腫瘍マーカーなどについても触れた。授業の一部では、小テストを行うことで授業に集中する動機を与え、事前課題や振り返りにより知識の定着を目指した。今年度は、一部の小テスト等で、解答に対するフィードバックを強化し、振り返りによってより効果的に理解が進むように充実させた。5月から新型</p>				

	コロナ感染症が5類に移行し、これまで実施されていた特別措置の多くは通常対応に戻ったが、引き続き、感染には注意しながら安全に授業を実施できた。以上、本年度も概ね問題なく実施できた。
今後の対応	本科目は、病態と関連する生体の高次の制御機構を学ぶ科目であり、1-2年で履修する生物系基礎科目「生物学」、「生化学Ⅰ・Ⅱ」、「分子生物学Ⅰ」で修得する生体反応の基礎を踏まえた重要科目と位置づけられる。今年度は、一部の小テストの解答でフィードバックを強化し、より理解が進むような工夫を行った。次年度も同様な方針で実施する予定で、引き続き授業に対する学生の取り組みを促したいと考えている。

科目名	衛生化学Ⅰ	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	貝塚 拓	科目担当者			
自己点検・評価	<p>本講義では、衛生化学分野における栄養と食品に関する講義を実施した。本講義の到達目標として「1、五大栄養素の種類と機能および消化・吸収・代謝の過程を説明することができる。2、食事摂取基準と栄養の過不足により生じる疾患とその予防・治療法について説明できる。3、食品中の炭水化物、タンパク質、油脂が変質/変敗する機構を説明できる。4、食品添加物を含む様々な食品成分についてその種類や機能を概説できる。5、食中毒の原因となる微生物や自然毒を列挙し、その作用機構や症状の特徴を説明できる。6、食品汚染物質の代表例を挙げ、健康に及ぼす影響を説明できる。」を掲げている。</p> <p>本科目の内容は広範囲に及ぶため、各項目を均等に配分し、全範囲を網羅するよう努めている。そのため重要な点を明確にして講義し、補足的な内容や生物系科目で扱う復習的な内容は簡潔に講義した。また、スライドには図を多く取り入れ視覚的な印象を与え、理解し易い講義になるよう努めた。さらに、食品添加物等の内容で扱う化合物については学習カードを作成し、各化合物名と特徴について修得しやすくなるよう工夫した。講義の最後には復習用問題を配布し、学習のアウトプットを自身で判断できるようにした。</p> <p>全講義を終えて、講義の出席状況に関しては履修者 138 名中 3 回以上欠席した学生が 42 名であった。学生アンケートでは「わかりやすい資料で話し方も聞きやすく良かった」という評価があり、講義スタイルと配布資料は一定の水準に達していると考えられる。一方で、「スライドの数が多すぎてどれが重要なのが分かりにくい」との評価があった。</p>				
今後の対応	今年度を終えて、来年度の課題は全範囲を再度見直し、他科目で既				

	<p>に学修した内容や講義内での説明が不要な部分をさらに抽出し、重要点を明確にした講義内容と配布資料にすることである。特に配布資料では文章を極力減らし、図を中心とすることで学生にとって学習しやすい資料になるよう工夫する。そして、学生が最後まで集中できるような講義となるよう読み上げるばかりの講義ではなく、アニメーションを取り入れた説明など試していきたい。また学生の出席を促す対策も必要である。3回以上欠席した学生は再試験となる割合も高いため、初回の講義で効果的な呼びかけができるよう検討する。</p>
--	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

科目名	衛生化学Ⅱ	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	石田卓巳	科目担当者	石田卓巳		
自己点検・評価	<p>衛生化学は、人々の疾病の予防や健康の維持・増進に資する予防薬学としての使命を有する科目であり、そのカバーする領域は、保健(公衆)衛生のみならず環境衛生、食品衛生、化学物質の毒性、薬毒物中毒の科学的鑑定や中毒処置法など広範囲に及んでいる。本講義では、生体に対する化学物質の毒性学的側面の理解に向け、化学物質の代謝・代謝的活性化、化学物質による発がん、化学物質による毒性とその処置、電離放射線・非電離放射線の生体への影響について授業を行った。本講義では、化学物質や放射線による生体影響に加え、それらに対する生体の防御的反応を理解し、かつ説明できることを到達目標とした。授業は対面で 15 回開講され、指定教科書の解説と理解を主軸に進行した。授業の始まりに前回の授業で重要とされる点について口頭で質問を行うことで、学生の理解度を確認しながら進めた。また、衛生化学が他の基礎科目(有機化学、物理化学、生物学など)で培った知識を基とした発展的学問であるとの観点から、他の学問分野との知識の連携を想起させる授業説明を行い、自らの力で知識を集約し発展させる意識付けを行った。定期試験は、教科書に記載されていることを基に CBT や国家試験に対応できるような問題形式とした。さらに、再試験については、問題形式は変えず難易度を下げたものを準備した。本年度の結果を見る限り、学生における問題の読解力や学習内容の理解度が大きく二極化しているように思われた。また、基礎学力と考えられる有機化学、物理化学、生化学の知識が不足しているもの、またはそれらの知識が整理されていないものも散見された。これらの学生には更なる学習時間の確保が必要であると感じた。</p>				
今後の対応	<p>衛生化学は、薬学における専門科目の中でも様々な分野の知識を必要とする発展型の学問である。このため、これまでに習得した様々な</p>				

	<p>科学的基礎知識の有機的な繋がり の理解が必須である。これが不十分であることが、学生の理解度の差を産み出している原因の一つであると考察する。これを改善するため、来年度は、授業で触れる様々なトピックに対して、他の科目との繋がり を想起させるような授業の実施を目指す。また、現状のスケジュールで中間テスト等の補助的な確認を行うことは困難であるため、授業での重点項目の解説を丁寧に行うと共に、授業開始時の口頭試問を充実させることが望ましいと考えている。</p>
--	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

科目名	環境衛生学	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	山本 緑	科目担当者	山本 緑		
自己点検・評価	<p>本講義では、衛生薬学領域における環境科学分野を中心に、環境と人の健康との関わりについて講義を行った。到達目標として、「1. 地球環境と生態系について、人の健康に関与する要因について説明できる。2. 地球環境問題とその対策、法規制について説明できる。3. 水環境による生体への影響と、浄水および下水処理について説明できる。4. 大気汚染物質の性質と発生要因および生体への影響について説明できる。5. 室内環境と健康の関係について説明できる。6. 廃棄物の種類と処理について説明できる。7. 環境中の化学物質の特性と生体への影響について説明できる。」を掲げた。</p> <p>講義は、教科書に沿って進行した。特に重要な事項について、穴埋め形式の配布資料にまとめて、学生の理解度を高めるよう努めた。資料には毎回の復習のための確認問題を記載し、定期試験の出題範囲となることを初回時に伝えた。また、学生の自発的学習を促すべく、1. 講義中は身近な内容に置き換えた分かりやすい説明を加えること、2. 講義外では積極的に意見交換することで学生への興味・熱意を伝えること、の2点を特に意識した。また、講義のターゲットを成績中間層より下位方向に据えたことから、上位層に向けては毎回アドバンストの話題を紹介したり、小レポートに直接フィードバックを返したりすることを心掛けた。理解度の確認および講義への質問・要望には、Google Form も併用したが（無記名式）、質問等を Google Form に書き込む学生は少なく、直接話に来る学生がほとんどであった。定期試験の平均点は昨年度より 5 点上昇し、当初の想定内の結果となった。授業アンケートの結果からも熱意や理解度の確認について高評価であったことから、上述した2点の意識事項について効果はあったと判断する。次年度以降も、学生の学習モチベーションを高めることを</p>				

	第一に考えた講義を実践する。
今後の対応	講義の中心となる配布資料についてアップデートを加え、昨年度より完成度の高い資料を作成した。内容は概ね高評価であったことから、次年度も維持していきたい。2年目の講義となり、進行具合や本学学生の学力等をより把握できた。今後は、科目への真の理解力を深めてもらうことを目的に、学生自身による一問一答式の問題作成を促すとともに、それらの効果的な運用法について検討していく。

科目名	衛生系薬学実習	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	石田卓巳	科目担当者	石田卓巳、山本緑、貝塚拓、澤井円香		
自己点検・評価	<p>本科目は、衛生化学に関わる基本的な技能を習得するため、3年生の実習科目として開講された。実習項目は、衛生化学分野から食品成分の試験（脂質の酸価とカルボニル価の測定、および食品中のビタミンCの定量）と特定原材料の試験（PCRによる小麦成分の定性検査）、環境衛生分野から水質の試験（飲料水の硬度と残留塩素濃度の測定、および環境水における化学的酸素要求量の測定）、空気の試験（室内環境における気温、気湿、カタ冷却力、気動、感覚温度、補正感覚温度、不快指数の測定、および大気環境における粉塵、二酸化窒素の測定）であり、これらを通じて各種測定技能の習得を目指すと共に、講義で学んだ食品衛生や環境衛生における知識の補完を行なった。実習は4名ほどで構成される少人数班を基本単位として実施し、実験での協力態勢や結果を協議する姿勢の醸成を促した。本年度は、事務方との連携がうまくいかず、試薬・機材等の準備不足が危ぶまれた。一方で、実習の進め方、さらにレポートの記載内容や提出期限の設定などについて昨年度の反省をもとに変更を行なった結果、大きな問題なく改善が見られたように思われる。本年度も実習は概ね問題なく実施できており、良好な実習であったと考えられる。</p>				
今後の対応	<p>来年度も原則的に本年度の体制を維持しながら実習を実施する。一方で、本年度の実習では、実習期間中に実験機材や試薬等の不足が危惧される事態となったこと、さらに機材や試薬に関して危険と感じる取り扱いが一部の学生に見られたことなどいくつかの問題点も見受けられた。このため、来年度は、機材や試薬等の計画的な充足に加え、安全対策や感染対策を徹底するための更なる指導の強化など改善を行う予定である。また、レポートについても、本年度の状況を周到し、実習の理解度を深めながら、かつ学生の過剰な負担とならないような</p>				

	形式にまとめていく予定である。
--	-----------------

科目名	薬理学Ⅰ	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	武田弘志	科目担当者	齊藤秀俊		
自己点検・評価	<p>薬理学総論として、薬理学という学問の概念を理解し、薬物の効果やその発現機序を説明するために必要不可欠な基本的事項について「薬学教育モデル・コアカリキュラム」(平成 25 年度改訂版)の内容に対応した講義を行った。また、自律神経系の解剖と生理を復習し、これら神経系に作用する薬物の薬理学的基礎知識について「薬学教育モデル・コアカリキュラム」の内容に対応した講義を行った。</p> <p>将来の薬剤師としての業務を遂行する上で必須となる知識である、1)薬物の生体内における作用に関する基本的事項(用量と作用の関係、アゴニストとアンタゴニスト、薬物が作用する分子と細胞内情報伝達、薬物の体内動態等)、2)自律神経系の働きと生理学的機序、3)交感神経、副交感神経、自律神経節に作用する薬の薬理学的基礎知識(分類、薬物名、薬理作用、作用機序、副作用、相互作用、臨床適用等)の修得を定期試験によって確認した。講義内では必須習得事項を含むレジュメを配布した上で、視覚的情報をスライドを用いて提供し、概念としての理解を促した。</p> <p>定期試験では 113 人の受験者中、22 名の再試験者が発生したが、個別指導により講義時間内での理解不足を補い、最終的に 99%以上の学生が試験を合格したことから、おおむね目標は達成されたと考える。</p>				
今後の対応	<p>定期試験結果から、目標としていた知識習得は達成されたと考えているが、再試験対象者の個別指導から、基礎的知識の呼び起こしの必要性が感じられたことから、今後の講義では過去の知識を反芻させるような機会を追加し、講義時間内での理解のばらつきを少なくするための工夫を実行していく。</p>				

科目名	薬理学Ⅱ	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	永倉透記	科目担当者	—		
自己点検・評価	<p>アレルギー治療薬、抗炎症薬に 2 コマ、神経系に作用する薬(局所麻酔薬、筋弛緩薬、鎮痛薬、全身麻酔薬、中枢興奮薬、催眠薬、抗不安薬、うつ病・双極性障害治療薬、統合失調症治療薬、抗てんかん薬、パーキンソン病治療薬、アルツハイマー病治療薬、脳血管疾患治療薬、</p>				

	<p>片頭痛治療薬、依存症等)に 13 コマを割り当てた。各疾患治療に用いられる代表的薬物について、薬理学的基礎知識(分類、薬物名、薬理作用、作用機序、副作用、相互作用、臨床適用等)を習得することを学習目標とした。生理学、病態学に関連する内容も講義内容に加え、それらを薬理作用機序と繋げて理解出来るように努めた。解剖生理学、生化学、病態生理学等の学問と繋がり、また薬理学 I で学習した基本事項(アゴニスト/アンタゴニスト、用量依存性など)を基盤とする内容のため、上記科目を復習しながら受講するよう学生に伝えた。グーグルクラスルームで講義日の 1 週間前までに講義資料を配信し、目を通しておくよう指示した。各回の講義資料末に確認問題を提供し、それを講義資料および教科書を参照して解かせることで復習を促した。理解度確認のための小テストを 2 回実施(グーグルクラスルームで出題)して、学生の理解度を確認した。今年度より、国家試験までに学習すべきレベルを実感させるため、各回の講義資料中に国家試験問題を 1~2 問出題し、講義中あるいは講義後に取り組みさせた。</p>
今後の対応	<p>疾患、薬理作用機序、各薬物の特徴を繋げて体系的な理解が進むよう講義の流れを一層工夫する。今年度より、講義を zoom で録画して復習に活用出来るようクラスルームで公開した。学生が利用しているようであれば次年度も継続を検討する。</p>

科目名	薬理学Ⅲ	学年	3 年	期	前期
科目責任者	齊藤秀俊	科目担当者	岸拓弥、永倉透記		
自己点検・評価	<p>薬理学、生理学、解剖学などの知識を基盤として、様々な疾患に用いられる薬物の薬理作用、機序、副作用などを学び、薬物治療のための基礎知識を身につけること。また、国際的な視点を醸成する一環として、主要な専門用語(テクニカルターム)は、和名および英名の両方で習得することを目的に、循環器系疾患治療薬、代謝系疾患治療薬、血液疾患治療薬、消化器疾患治療薬、泌尿器・生殖器作用薬の講義を行った。薬物の効果やその作用機序、副作用を説明するために必要事項について「薬学教育モデル・コアカリキュラム」(平成 25 年度改訂版)の内容に対応した講義を行った。特に循環器系疾患治療薬、泌尿器・生殖器作用薬については、専門医である教員が担当し、将来の薬剤師としての業務を遂行する上で必須となる現場の知識も含めて講義を行った。</p> <p>講義内では必須習得事項を含むレジュメを配布した上で、視覚的情報をスライドを用いて提供し、各治療薬の理解を促した。</p>				

	定期試験では 92 人の受験者中、3 名の再試験者が発生したが、個別指導により講義時間内での理解不足を補い、すべての学生が試験を合格したことから、おおむね目標は達成されたと考える。
今後の対応	定期試験結果から、目標としていた知識習得は達成されたと考えているが、新しく更新された知見についても、取りこぼしの無いように常に最新の講義を心掛けていく。今後の講義では過去の知識を反芻させるような機会を追加し、講義時間内での理解のばらつきを少なくするための工夫を実行していく。

科目名	薬理学IV	学年	4 学年	期	前期
科目責任者	永倉透記	科目担当者	太田昭一郎、猪部学、柴田健太郎		
自己点検・評価	<p>呼吸器系薬（2 コマ/永倉）、内分泌系薬（2 コマ/永倉）、感覚器系薬（1 コマ/永倉）、免疫系に作用する薬（1 コマ/猪部）、抗体医薬品（1 コマ/猪部）、抗炎症・アレルギー薬（1 コマ/太田）、抗悪性腫瘍薬（1 コマ/太田）の分担で講義した。各教員は担当疾患領域で用いる主な薬の作用機序、副作用、相互作用等の要点を講義し、学生が整理して理解出来るようにした。生理学、病態学に関連する内容も講義内容に加え、それらを薬理作用機序と繋げて理解出来るようにした。本科目は、解剖生理学、生化学、病態生理学等の学問と繋がり、また薬理学 I で学習した基本事項（アゴニスト/アンタゴニスト、用量依存性など）を基盤とする内容のため、それらの科目を復習しながら受講するよう伝えた。グーグルクラスルームで講義資料を事前に配信し、目を通しておくよう指示した。薬学共用試験を控える 4 年生の授業に対する集中度は、3 年生までと比較して増していた。本講義の後半 6 コマは薬理学 I～IV の学修内容の総復習に割り当てた（柴田が担当）。6 回の演習試験を課し、演習試験結果は本科目の成績評価に含めた。総復習および問題演習は、4 年生までに学んだ薬理学知識の整理に有効であった。</p>				
今後の対応	疾患、薬理作用機序、各薬物の特徴等を繋げて体系的な理解が進むよう講義の流れを各担当教員が一層工夫する。薬理学の総復習および問題演習は学生の知識の整理に有効であり、薬学共用試験への準備にもつながることから、今後も継続する。				

科目名	がん薬物療法学	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	猪部学	科目担当者	齊藤秀俊、宗像千恵		

自己点検・評価	<p>本科目は、3年前期の科目であり、主要な疾患である「がん」に着目し、腫瘍に関する薬学教育モデルコアカリキュラムの内容だけでなく、アドバンストな内容も含めて、「がん」を包括的に学習する大学独自の科目である。以上のように、生体の基本的な仕組みを修得したうえで実施される。内容は、がん化のメカニズムやリスク要因と予防、抗がん剤の作用機序、臨床での薬物治療の実際、副作用と医療的ケアなどを含み、3つのパートに分けて実施した。薬学モデルコアカリキュラムには、「がん」に関連する項目が、C6 生命現象の基礎、D2 環境、E2 薬理・病態・薬物治療、F 臨床薬学などに散在している。本科目は、これらを一つにまとめ、「がん」という視点から薬学に必要な知識を捉えることを目的としている。授業では、各パートを担当する教員が、学生の理解促進を促すため、小テストや課題を課して授業に集中する動機を与えるとともに、知識の定着を目指した。今年度は、一部の小テスト等で、解答に対するフィードバックを強化し、振り返りによってより効果的に理解が進むように充実させた。5月から新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、これまで実施されていた特別措置の多くは通常対応に戻ったが、引き続き、感染には注意しながら安全に授業を実施できた。以上、本年度も概ね問題なく実施できた。</p>
今後の対応	<p>本科目は、1-2年で履修する生物系基礎科目や生理学、免疫学等の生体の基本的な仕組みに関する科目を修得し、薬理学や病態生理学等と同時期に開講される。今年度は、一部の小テストの解答にフィードバックを多く用い、より理解が進むような工夫を行った。次年度も同様な方針で実施する予定で、引き続き授業に対する学生の取り組みを促したいと考えている。</p>

科目名	ゲノム医療	学年	3 学年	期	後期前半
科目責任者	塚本宏樹	科目担当者			
自己点検・評価	<p>本科目では、ゲノムの違いによる遺伝性疾患の発症と薬物応答の個体差、異なる個体間に生じる免疫応答と移植医療の関係、再生医療の移植医療への応用、がんゲノムに基づく個別医療（がんゲノム医療）とがん免疫療法の現状・展望、また、これらの医療に応用される遺伝子治療、抗体医薬や細胞医薬等を始めとしたバイオ医薬品について学修した。</p> <p>到達目標は以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 遺伝子治療の原理、方法・手順、現状、倫理的問題点を概説できる。 2. 遺伝的素因による薬物応答の個体差について例を挙げて説明でき 				

	<p>る。</p> <p>3. 移植医療の原理、方法・手順、現状、ゲノム情報の取り扱いに関する倫理的問題を概説できる。</p> <p>4. 移植医療に関わる免疫反応（拒絶反応・免疫寛容）を説明できる。</p> <p>5. がんゲノムに基づく個別医療とがん免疫療法の現状を説明できる。</p> <p>本科目は、3年前期までの必修科目、特に、免疫学、分子生物学の知識と理解を基盤に、生化学、薬理学、薬物代謝学、微生物学等の基礎科目の履修を前提とした分野横断的な発展科目である。既修科目の知識や理解が不十分な場合、本科目の到達目標を達成するのは困難である。担当2年目の今年度も、全8回を遺伝性疾患・遺伝子治療、ゲノム薬理、移植医療、がんゲノム医療に大別し、毎回、テーマ・要点を絞ったメリハリある授業を心掛けた。特に、遺伝性疾患や遺伝子治療では、背景となるゲノム等の分子生物学的内容の復習に力点を置き、移植医療では免疫学の復習に時間を割いた。また、学生の知識と理解を図り、授業の早期復習を促す目的で、第6回に小テスト（最終評価の25%）を実施した。</p> <p>授業における工夫として、学生が授業内容を予習復習できるよう授業資料を事前にWEB掲載した。免疫学が苦手な学生、または、復習を希望する学生を対象に任意の補講を1回行った。出席率はおよそ50%以上で小教室に着席できない学生もいた。また、分野横断的内容であることに配慮し、授業内容が漫然と幅広い内容にならないよう、授業を体系化し代表的な具体例も交えながら授業を展開した。学生の予習復習、各回授業で理解してほしい要点やポイントを明確にするため、質問形式の要点資料を配布（WEB掲載）し、自己学習を促した。</p>
今後の対応	<p>学生からの質問や同学期に分担する薬学演習Ⅲの成績から察するに、既修内容の十分な理解や知識の定着が不十分な学生が多いことが懸念された。実際、第6回の小テストの成績は、満点こそいるものの、平均65点、良好とは言い難い結果であった。特に、免疫関連の内容やウイルスベクターを用いた遺伝子治療の理解に乏しい傾向が顕著であった。この傾向は昨年同様であったため、本科目の理解に必要な免疫学の補講（90分）を時間外に実施した。授業態度や出席率を見る限り、学生なりの向学心と焦りを感じた。補講の有効性は感じられるが、開学から在籍学年も増加し、教員負担も増加している。来年度は補講を見送り、授業時間内で既修内容を復習し、本科目の到達目標達成を目指したい。</p>

	また、細胞医薬やがん免疫療法に関する授業内容に十分な時間を配分することが難しかったことが反省点としてあげられる。
--	----------------------------------------------------------

科目名	化学療法学	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	多田納豊	科目担当者	西村信弘		
自己点検・評価	<p>本科目は、病原微生物および寄生虫に作用する医薬品の薬理学的基礎知識（薬理作用、機序、抗菌スペクトル、主な副作用、相互作用、組織移行性）および疾患の病態・薬物治療に関する基本的知識を修得し、治療に必要な情報収集・解析および医薬品の適正使用に関する基本的事項を修得することを目的とする科目である。</p> <p>当科目の前半（8回）は、種々の化合物の種類・構造・性質・作用機序を「薬理学的観点」から、また、それぞれの薬物に対する耐性化のメカニズムを「生物学的観点」から授業し、後半（7回）は、臨床現場での化学療法の実際に則して、感染症に対する治療薬の選択や副作用などについて、「薬物治療学的観点」から授業した。この様に、当科目は「どのような薬物があり、それらの薬物を感染症・病原体に対してどのように選択するのか」について、基礎から臨床への2段構成で授業を実施している。</p> <p>薬物名とその性質・特徴の多くは暗記が必要であるが、化学構造から性質が理解できるものや、薬物名に反映されるものが多くあるため、薬物名は構造式（母核構造）とともに記憶することを求めた。特に前半は、副作用や作用機序を、薬物の構造に基づいて「理解」するための説明を丁寧に行うことを心掛けた。また、後半は、臨床における薬物の選択について、薬物の病原体に対する親和性だけでなく、副作用の観点や薬剤耐性菌出現抑制の観点、患者の状態に基づく選択の仕方などを説明し、現場で必要な知識の修得を目指した。</p> <p>当科目は、一度の講義の情報量が多い授業となるため、補助的に、講義を録画し、復習のために動画を視聴できるようにした。動画の提供は学生に好評であり、復習に寄与できたと考えられる。また、一部の授業では、講義内容の重要ポイントの理解、知識の定着や自主学習の方向性を確認してもらうことを目的として、Google フォームを活用した確認問題を次の講義開始時までの課題とし、次の講義開始時に、正答率を基に適宜追加説明・解説を行った。この取り組みは学習の一助となっていると考えられる。</p>				
今後の対応	<p>動画の活用や確認問題の実施と解説は、学修に一定の効果があると考えられるため、部分的にでも継続して行う予定である。</p>				

	<p>また、3年生前期の「病原微生物学」の知識が必要な科目であるため、その繋がりをより明確に示し、理解を深め、記憶の定着をより強固にすることを目指し、講義内容を改善していく。</p> <p>授業アンケート結果から、この科目は暗記すべきことも理解すべきことも多いため毎週必ず復習することを講義の度に伝えているが、復習時間が1時間にも満たない学生が半数いる状況であり、この学生の学習に対する姿勢・モチベーションが低い点が問題であると考え。この状況を改善する方法を引き続き考える。また、授業アンケートの自由記載に「他の科目よりも比重が重く感じる」という意見があり、だからこそこの科目でしっかりと復習に取り組み学習に対する姿勢を修得して欲しいと考える。</p>
--	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

科目名	化学療法学 (再履修)	学年	4 学年	期	後期
科目責任者	多田納豊	科目担当者	西村信弘		
自己点検・評価	<p>本科目の該当学生は、既に3年次に同様の内容の授業を受講した学生である。理解度を自主的に高めてもらうことを目的として、講義の動画をクラスルームにアップロードし、その動画を視聴する事と、ノートを用いた学習やレポート等を課題とし、個別にノートチェックおよびその内容に基づく指導などを行った。特に、着眼点の修正や、様々な事象の関連性を意識できるようになることを意識して指導した。</p> <p>また、講義内容の重要ポイントの理解、知識の定着や自主学習の方向性を確認してもらうことを目的として、Google フォームを活用し、前回の講義に関する確認問題を講義開始時に出題し、学生の自主学習に役立ててもらった。</p>				
今後の対応	<p>4年次であるため、この科目を欠単すると進級できない事が確定してしまうため、学生自身が本気で学習したことが大きな要因であると思うが、課題としたノートを自身で作し、その際に教科書や講義資料を見て学習した事で、覚えるべき内容がしっかり頭に入っていた様に見受けられた。再履修科目の方策として、今年度のやり方で来年度も行う予定である。</p>				

科目名	生物系薬学実習	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	武田弘志	科目担当者	齊藤秀俊、永倉透記、貝塚拓、柴田健太郎、福田 光良		
自己点検・評価	<p>医薬品の開発過程の非臨床試験で行われる動物実験について知り、一部を実体験する実習を行った。動物実験の倫理に配慮し、実験動物</p>				

	<p>の適切な取り扱いや、実験動物への薬物投与の手法など、動物実験に関する基本的知識と手技を修得したうえで、代表的な自律神経系に作用する薬物、知覚および運動神経系に作用する薬物、中枢神経系に作用する薬物の効果の測定法を実践した。これらの動物実験を通して、効果を測定した薬物に関する薬理学的知識の理解を深めた。さらに、卒業研究に向けたアドバンスト教育として、抗不安薬の薬効の行動薬理学的評価法についても実践した。これらによって「薬学教育モデル・コアカリキュラム」(平成25年度改訂版)の内容に対応した実習を行った。履修登録者すべてが実習を完遂し、遅刻欠席等は無かった。一部実験結果が安定しない項目があったが、事前に準備した模擬データの提示と実習現場での解説により学習目標は達成されたと考える。</p>
今後の対応	<p>目標としていた知識・実技習得は達成されたと考えている、生物学・生理学範囲における基礎的知識の再確認になったと考えている。最終日に行ったアンケートからは動物の命を扱った実習から多くのことを学び、多くのことを考えさせる実習時間を提供できたと思われた。次年度も同様の機会を提供し、また目に見えて分かりやすい実験に絞ることでより印象に残る実習にするようための工夫を実行していく。</p>

科目名	疾病と病態生理学Ⅰ	学年	2 学年	期	後期
科目責任者	長谷川雄	科目担当者	吉良潤一、緒方勝也、今村友裕		
自己点検・評価	<p>病態生理学的知識に基づいた疾病の理解は、臨床現場にて薬剤師として適切な服薬管理・指導をする際の基盤となる。本科目は臨床経験が豊富な脳神経外科医・脳神経内科医が担当している。講義内容においては特に脳神経系、感覚器系、内分泌系疾患の中で将来診療の中で遭遇する頻度が多く標準的な知識が必要な疾病や症候を選び、学生にその背景や病態生理について学んでもらい、試験を終えた後にそれらを概説できることを主目的に講義を行った。</p> <p>疾患の理解は、患者との信頼関係を結ぶ上で重要である上多職種の医療従事者が共有しなければならない知識でもある。従って、基本的内容は医療従事者の共通知識・言語として卒業時には必ず取得すべきである。本科目の講義において、暗記に頼ることなく疾患に興味を持ちながら学習できるように、疾病の病態生理学的理解が深まることを念頭に疫学や症状についても講義、疾患を網羅的に理解できるスライド作成にも努めた。</p> <p>その結果、本試験では9割程度の学生が合格しており昨年同様アンケート結果が上々であったことから、教員が求めている一定レベル</p>				

	以上の知識獲得を学生は達成できたと判断した。今後も学生の知識取得の視点に立った教育を行っていくことが肝要と考えている。
今後の対応	<p>本年度の結果を鑑み、大きく方針を変える必要はないと考えている。一方、疾患は多岐にわたる上同じ疾患であっても患者によって症状は多彩である。従って、基礎となる病態生理学的知識を獲得した上で、将来個々の患者の訴えに柔軟に対応できるような知識取得にも取り組んでいきたいと考えている。具体的には、類縁疾患との相違点や鑑別に必要な項目についても取り入れたい。</p> <p>本科目はオムニバス形式の授業であり、各教員の臨床的見地に基づいた講義に柔軟性も持たせるため、参考書は明示しているものの現在教科書は指定していない。もっと自己学習をしたい学生や勉強の仕方がわからない学生の声を傾聴し、必要ならば教科書を指定することも考慮しながら、さらなる学生の理解度アップを念頭に今後も継続的に学生の視点に立った講義に取り組んでいきたい。</p>

科目名	疾病と病態生理学 III	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	太田昭一郎	科目担当者	廣岡良隆		
自己点検・評価	<p>今日の薬剤師に必要とされるのは、患者の基本情報、症状、検査データ等の情報を十分に活用した薬物治療方針の確認であり、ときには薬学的知見と科学的根拠に基づいて適切な処方を提案することも求められる。</p> <p>本科目では、呼吸器系、消化器系、循環器系、血液系、免疫系、骨・関節、皮膚、眼の主な疾患について、病態生理を理解し、症状、診断から治療の基本を説明できることを到達目標として、種々の疾患の病態生理と、薬剤がそれに及ぼす影響を学習し、医師と協力して様々な処方シーンに対応できる薬剤師としての実践的な能力を養成するための講義を行った。コアカリキュラム外の本学独自の内容としては、高血圧診療の最新知見を詳細に解説し、高血圧医療に寄与できる薬剤師の能力を高めた。</p> <p>学習の流れは以下のようにした。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 講義の前週に講義資料を配布し予習課題を与え、講義の前日までに予習を行わせた。 2. 講義を復習と位置付け、予習で理解に至らない点や疑問点を可及的に解消させた。 3. 講義の終盤に小テストを解かせ、解説を行い、知識と理解の再確認を行った。 				

	<p>4. 講義終了後の任意の時間帯で再度の復習を行うことを促した。</p> <p>以上のように、同一内容を短期間に頻回に繰り返して学習することにより理解と知識の定着をより確実にさせた。定期試験では9名の全科目に渡って成績不良な学生を除いて合格しており、一般的な能力の学生に対しては概ね予定した指導と期待する学習が実践できたと考えている。</p>
今後の対応	<p>年度と同様の指導を行うが、成績下位者の理解度を深めるために、基本的事項を平易化した解説も適宜加えていく。</p>

科目名	臨床検査医学	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	太田昭一郎	科目担当者			
自己点検・評価	<p>現代の医療は臨床検査のデータなくしては成り立たない。薬剤師にとっても検査データを読み解き病態を把握する能力は重要であり、それをもって薬剤処方の確認や副作用の発現防止に寄与できる。本科目では、①臨床検査の評価指標を説明できること、②主な検査の測定原理と意義を説明できること、③代表的な疾患における検査値の変化を説明できること、を到達目標として、臨床検査の基礎知識と主な検査項目、および代表的な疾患における検査の意義とデータの読み方について教授した。コアカリキュラム外の本学独自の内容としては、臨床検査の評価指標、遺伝子検査、および輸血検査についての項目を加え、チーム医療や最新検査に寄与できる薬剤師の能力を高めた。</p> <p>学習の流れは以下のようにした。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 講義の前週に講義資料を配布し予習課題を与え、講義の前日までに予習を行わせた。 2. 講義を復習と位置付け、予習で理解に至らない点や疑問点を可及的に解消させた。 3. 講義の終盤に小テストを解かせ、解説を行い、知識と理解の再確認を行った。 4. 講義終了後の任意の時間帯で再度の復習を行うことを促した。 <p>以上のように、同一内容を短期間に頻回に繰り返して学習することにより理解と知識の定着をより確実にさせた。定期試験では全員が合格しており、概ね予定した指導と期待する学習が実践できたと考えている。</p> <p>初年度は、講義資料の作成や学生への提示が遅れがちになった時期があったが、これは改善して適時の提供ができた。</p>				
今後の対応	<p>今年度と同様の指導を行うが、基本的事項を平易化した解説を充実</p>				

<p>させて、成績下位者の理解度を深めていきたい。</p>

科目名	臨床検査医学実習	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	長谷川雄	科目担当者	太田昭一郎、永倉透記、 緒方勝也、岸拓弥、梶岡俊一、 斎藤秀俊、貝塚拓、今村友裕、 柴田健太郎		
自己点検・評価	<p>本実習の目的は、個々の患者に適切な薬物を選択する際の基盤となる人体の生理機能や疾病の病態生理の基本を理解することである。昨年と同じく以下の方法で本実習を行った。</p> <p>まずオリエンテーション時、実習の概要を説明した上で「臨床検査医学実習の被検者となることについての同意書」を全員から得た。実習項目は以下の7つに設定、①血液学・代謝検査：血球の観察、血糖値測定②生理機能検査1：血圧測定・脈拍③尿検査：尿試験紙検査④生理機能検査2：肺・心臓の聴診と心電図⑤初期救命救急講習とワクチン接種者の実技と心得⑥血圧・心拍数に対するカフェインの効果⑦呼吸機能検査とした。</p> <p>学生全体を4班に分け、4号館3階実習室と高木病院4階シュミレーションセンターを利用した上オンライン実習も活用し、上記項目を順番に回ることによって実習を完遂した。実習点はレポートとマークシートを利用した実習確認試験の2つを総合して評価した。</p> <p>各教員がこれまでの経験に基づく実習を展開しながら学生が自ら手を動かすことを目指し、体感した内容の知識取得を目指した。その結果、実習確認試験では全員本試験にて合格点を超えることが出来た。以上から、本実習の主目的である人体の生理機能を体感してもらい体得することが出来たと考えている。</p>				
今後の対応	<p>昨年度大田原の実習を参考に本学部で初めて開講した実習であり、本年度が第2回目である。若干の担当教員の変更があったものの、本年度も昨年の実習内容とほぼ同じものを採用、教員全員の協力によって大きな問題なく遂行できた。</p> <p>高学年となった学生の実習態度は極めて良好であり、各自が真摯に臨床的生理学的知識を学んでくれたと思う。来年度も基本的には本年と同様の内容を行い充実した教育を担保しつつ、時代のニーズにあった改良を加えていきたい。</p>				

科目名	医薬品情報学 I	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	宗像千恵	科目担当者	永倉透記、一木裕子、朴珍相		
自己点検・評価	<p>本講義では医薬品情報の収集、評価、加工などに関する基本的知識を修得し、それらを活用するための基本的事項を身につけることを目的とした。具体的な内容として、代表的な医薬品情報源について、開発過程で得られる情報、情報検索の方法や情報源の評価について、EBM、情報を加工した情報提供について等を講義した。これらの内容を科目担当者でそれぞれ分担し、14回の講義を実施した。最後の第15回は全体の振り返りの講義を行った。講義資料はGoogle Classroomを用いて学生に事前に配布し、予習を促した。</p> <p>医薬品情報においてもICT化が進んでいる現状を学生に認識させるべく、学生所有のスマートフォンやタブレットを用いて情報検索を行う時間を講義内に積極的に設けた。また添付文書やRMP等の情報源は実際の文書を学生に配布し、臨場感を持った講義となるよう心掛けた。</p> <p>本講義は3年前期の講義であるが、学生は2年次まで基礎科目を主として学んできており、「情報」という掴みどころのないものを主題とする本講義に戸惑った学生もいたようであった。教員が実際に臨床現場で経験したことを離すことで臨床との関係を認識できるよう配慮した。定期試験では昨年度より難易度を下げたため再試によって全員が合格となった。このため学生は医薬品情報の基本的な知識を習得できたと考えている。</p>				
今後の対応	<p>今年度から大きな変更は講義順番の講義担当者の一部変更のみで他についてはおおむね今年度と同様に行う予定である。</p> <p>薬剤師にとって医薬品情報の取得と取捨選択は、今後さらに重要となっていくものと予想する。学生がこの講義で学んだことが将来薬剤師になってから活用できるよう、実臨床を結びつけながら理解を促していきたい。</p>				

科目名	日本薬局方	学年	3学年	期	後期
科目責任者	一木裕子	科目担当者	阿部義人、中矢正、磯田紀之		
自己点検・評価	<p>日本薬局方は重要な医薬品の規格・試験法について医薬品医療機器等法に基づき定めたものであり、医薬品の公定規格書である。本講義では、日本薬局方通則及び物理系・化学系薬学の基礎としての日本薬局方一般試験法について講義を行なった。</p>				

	<p>本講義の到達目標として</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 日本薬局方の意義と内容について説明できる。 2. 日本薬局方通則の意義と内容について説明できる。 3. 代表的な一般試験法の原理と応用例について説明できる。 4. 医薬品各条の純度試験, 確認試験, 定量法の原理について説明できる。 <p>上記を念頭に置いて、各講義の前に授業スライドと重要な部分を抜粋した練習問題資料等をGoogleクラスルームにて配布し、学生が利用可能な形をとった。オムニバス方式で全授業を対面で行うことができた。</p> <p>本試験では高い平均点を示し、アンケート結果も上々であったため、教員が求めている一定レベル以上の知識獲得はできたと考えている。一方、全体の講義回数が少ないため、最終講義（第8回）には全授業の総復習の授業を行い、数多くの練習問題や解説を行うことで、学生から多くの質問があり、それに対応することができた。</p>
今後の対応	<p>本年度のアンケート結果を鑑み、大きく方針を変える必要はないと考えており、今後も、同様にオムニバス方式で、各専門分野について授業を行っていく予定である。すなわち、各講義資料をGoogleクラスルームに早めに掲載し、学生に予習をさせ、各回の担当教員がそれぞれ調整し全内容をバランスよく進める対応を続けていく。また、毎時間、自学で復習することが可能な内容の練習問題資料を配布しているため、質問がある場合には、専門分野担当の教員が個別に対応する形式を続けていく。最終講義では、学生の理解力向上のため、全分野に渡る理解しにくい問題の解説を行ったことで学生の勉強意欲が上がる努力をした。今後も復習問題を解かせ解説をするように続ける予定である。</p> <p>成績評価について、定期試験100%で実施したが、特に問題は見当たらなかったため、来年度も同様のスタイルで取り組む予定である。学生アンケートでは練習問題が役に立ったとの声が多かったため、今後は、練習問題の問題数やバリエーションを更に増やし、学生の期待に更に添える様に対応したい。</p>

科目名	OTC 医薬品概論	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	宗像千恵	科目担当者	平木洋一、一木裕子		
自己点検・評価	本講義では前半では概論としてOTC医薬品に関する分類や配置・販売方法などに関する法規、相談応需の方法等を3人で分担し講義した。				

	<p>後半では各論を科目責任者が1人で担当し、様々な症状に対するOTC医薬品の製品、成分、使用方法、選択時の注意点等について講義を行った。各論については薬理学や臨床薬学など他の講義と重なっている部分も多いため、学生がそのつながりを認識できるよう心掛けた。</p> <p>本講義の特徴として、アクティブラーニングとして3回のTBL (Team based learning) を実施した点がある。TBLでは最初に10問の個人テストを実施した後に、答え合わせをせずにチームテストとして同じ問題を7人の班で考えさせた。続けて問題内容の解説をして理解を深めた後に、その内容をふまえた応用演習問題2問を与えて班で検討を行わせた。個人テスト・チームテストは各薬剤の適用や使用上の注意点等を問う基礎的な問題とし、応用演習問題は模擬症例にどのOTC医薬品を推奨するか検討する問題とした。</p> <p>講義内で実施したアンケートにおいて、TBLは学生に高評価であった。特にスクラッチカードを用いたチームテスト、応用演習問題はスクラッチを削ると即座に正否が提示される点についてスリルがあると好評であった。</p> <p>最後に成績について述べる。定期試験ではCBTレベルを想定し、OTC医薬品に関する基礎的な問題を15回の講義内容から満遍なく出題した。その結果、全受講生が合格したことから、本講義の受講により学生はOTC医薬品の基礎部分は身につけられているものと考えている。</p>
今後の対応	<p>全体的な内容については、今年度と同様で実施していく予定としている。TBLについては学生の反応を見ながら難易度を微調整する予定である。</p> <p>講義内容の変更については、OTC 医薬品の CM を扱うなどを考慮している。最も身近な医薬品である OTC 医薬品に学生が馴染めるよう、さらなる改善を行っていきたい。</p>

科目名	薬物動態学	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	西村信弘	科目担当者	平木洋一、福田光良		
自己点検・評価	<p>薬物動態学は、医薬品や製剤を生体に適用したのち、薬物が生体内に取り込まれ（吸収）、さまざまな臓器に移行し（分布）、そして体内で酵素による化学的变化をうけ（代謝）、やがては体外に除去（排泄）されていくという生体内での薬物の一連の運命を取り扱う講義である。講義内容は、「第1-5回 薬物の吸収」、「第6-7回 薬物の分布」、「第8-10回 薬物の代謝」、「第11-13回 薬物の排泄」とした。第1回</p>				

	<p>～第13回までで薬物の生体内運命の基本事項を学生らに修得させたのち、第14回で生体内運命の過程で起こり得る相互作用について講義した。第15回はこれまでの講義内容から、まとめ、および補足事項を取り扱った。</p> <p>講義に関連した問題は、基礎的な内容から薬剤師国家試験を想定した応用的な内容まで幅広く取り扱った。講義中に取り扱いきれなかった問題は、Google Classroomを利用して学生らに提供した。昨年度の講義では、学生らの断片的な知識の習得に終始している傾向がみられていたため、それぞれの知識を結び付けられるように基礎的な問題から応用的な問題まで幅広く提示するようにした。必要に応じて、次回の講義で解答を提示、ならびに解説を行った。講義資料は、Google Classroom上にアップロードし、学生が受講期間中、常に閲覧できるようにした。学生らが講義時に理解できなかった内容は、講義終了後や放課後を活用して質問に対応した。</p>
今後の対応	<p>薬物動態学は、応用薬学に位置する学問であるため、これまでの基礎薬学の知識を必要とする。例えば、pHの変化によるそれぞれの医薬品の分子形・イオン形の存在割合、それぞれの臓器・器官の上皮細胞の種類、生体内に存在する薬物代謝酵素、ならびに薬物吸収に影響する薬物そのものの物理学的性質等を理解していることが必要となる。本講義では、上記の基礎的な事項もできる限り取り扱うようにし、薬物動態学の理解を深められるように配慮した。しかし、Google Classroom上にアップロードした問題を解答せず、内容の理解に乏しい学生らが見受けられた。学生らが本学問領域を主体的に学べるように、講義用スライドや提示した問題の内容が掲載されている教科書の該当ページを示すなどの改良を加えていきたい。</p>

科目名	臨床薬物動態学	学年	4 学年	期	前期
科目責任者	西村信弘	科目担当者	平木洋一、福田光良		
自己点検・評価	<p>臨床薬物動態学は、薬物の体内動態（吸収、分布、代謝および排泄）を速度論的に扱うことにより、血中濃度の時間推移あるいは薬物動態の各過程を数式モデルにより定量的に解析する学問を取り扱う講義である。薬物速度論は、臨床治療における投与計画を行う重要な理論基盤であると同時に、医薬品開発における候補医薬品の吸収特性や薬物動態予測にも利用される。3学年の講義である『薬物動態学』で学修した薬物の体内動態の理論を基に、速度論的パラメーターを用いて適当な数学モデルを構築することによって、薬物投与後の血中薬物濃</p>				

	<p>度の時間的推移などを定量的に求めることができるよう、講義を展開した。講義内容は、「第1, 2回 モデル解析」、「第3, 4回 薬物動態パラメーター」、「第5回 非モデル解析」、「第6-8回 薬物動態の変動要因」、「第9, 10回 臨床薬物動態各論」、「第11, 12回 血中濃度解析と投与計画」、「第13, 14回 薬物動態学的知識の臨床応用」とした。第1～8回までで各薬物動態パラメーターを導出できるようにし、第9-12回で病態時における各薬物動態パラメーターの変動について取り扱った。第13, 14回で実際に投与設計を行い、第15回でこれまでの講義内容から、まとめ、および補足事項を取り扱った。</p> <p>講義に関連した問題は、基礎的な内容から薬剤師国家試験を想定した応用的な内容まで幅広く取り扱った。講義中に取り扱いきれなかった問題は、Google Classroomを利用して学生らに提供した。必要に応じて、次回の講義で解答を提示、ならびに解説を行った。講義資料は、Google Classroom上にアップロードし、学生が受講期間中、常に閲覧できるようにした。学生らが講義時に理解できなかった内容は、講義終了後や放課後を活用して質問に対応した。</p>
今後の対応	<p>臨床薬物動態学は、薬物動態学で学修したADME（吸収・分布・代謝・排泄）の理論を用いて、各導体パラメーターを導出できるようになることが目的である。そのため、計算などの数学的アプローチを必要とする。学生らには薬物動態パラメーターを算出してもらうために、多くの問題を提示した。提示した問題を通して、多くの学生にとって理解が進んだようであった。しかし、一部の学生は問題を通して現象を捉えるのではなく、計算を解くことに終始しているように見受けられた。今後は関連問題を厳選して重要事項を伝えるようにし、学生が薬物動態学に対して多角的なアプローチを実践できるように講義を展開していきたい。</p>

科目名	臨床薬学 I	学年	3 学年	期	後期
科目責任者	平木洋一	科目担当者	西村 信弘		
自己点検・評価	<p>臨床薬学 I では、医療の担い手として求められる活動を適切な態度で実践するために、薬剤師の活躍する臨床現場に必要な心構えと薬学的管理の基本的な流れを把握することを目的としている。そのため、薬剤師としての臨床での実践的能力を身に付けるために臨床薬学 I の理解は、臨床現場にて薬剤師として適切な服薬管理・指導をする際の基礎となり、本科目は臨床経験が豊富な薬剤師が担当している。講義内容においては、処方箋の法的位置づけと根拠を習得するとともに、</p>				

	<p>法令・規則の理解と遵守を概説できるよう講義を行った。その上で、病院・薬局における薬剤師業務について臨床実習において要求される、①地域における保健、医療、②福祉の連携体制ならびにチーム医療のスタッフと薬剤師の役割の重要性、③生涯教育の必要性、④処方オーダーリングシステムと電子カルテおよび</p> <p>⑤薬物治療に必要な患者基本情報とその情報源の収集のあり方について講義を重ねた。また、薬剤師として最も重要な知識として代表的な医薬品の効能・効果、用法・用量、代表的な医薬品の警告、禁忌、副作用、相互作用と、処方鑑査並びに疑義照会の流れとシミュレートを行い、講義中に演習問題を解説することにより、理解が得られるように努めた。15回の講義の間に小テスト等は行っていないため、教員側が設定した内容に対する学生の理解度がどの程度か試験前に推し量るのが困難であった。しかしながら、本試験では学生は教員の予想を超える点数をとることができており、教員が求めている一定レベル以上の知識獲得はできたと考えている。</p>
今後の対応	<p>本年度の結果に鑑み、大きく方針を変える必要はないと考えており、次年度以降も同様な講義内容を実施していく予定である。また、2025年問題とされている75歳以上高齢者の全人口に占める割合は増加をたどる一方である。2024年度より、当大学では初めての5年生の実務実習が始まり、保険調剤薬局で在宅の実習も取り入れられている。在宅患者への最適かつ効率的で安全・安心な薬物療法を実践していくための問題として、加齢に伴った合併症と、①多剤併用傾向、重複投薬相互作用のリスクの増大、②視覚・嚥下能力等の身体機能の低下に起因する服薬管理や服薬方法の適切な支援、③腎・肝機能の低下や体成分組成の変化に伴う体内薬物動態の変動や個々人の生理機能に応じた処方・調剤・服薬の管理が必要となっており、在宅患者と薬剤師の関与が重要となってきた。従って、臨床薬学Ⅰの講義でも、在宅などの患者さんへ対応できるよう取り組んでいきたいと考えている。社会的背景に理解を示し興味をもって貰えるよう、さらなる学生の理解度アップを念頭に講義に取り組んでいきたい。</p>

科目名	臨床薬学Ⅱ	学年	4 学年	期	前期
科目責任者	平木 洋一	科目担当者	一木 裕子		
自己点検・評価	<p>本教科は、3年時に学んだ臨床薬学Ⅰの継続科目となる。病院実務実習・薬局実務実習に先立って、大学内で調剤及び製剤、服薬指導などの薬剤師職能に必要な基本的知識、技能、態度を学び、主に調剤・製</p>				

	<p>剤を中心とした基礎知識を習得してもらうことを目的とした。また、患者に安全・最適な薬物療法を提供するために、適切に患者情報を収集した上で、状態を正しく評価し、適切な医薬品情報を基に、個々の患者に適した薬物療法を提案・実施・評価できる能力の修得を目指した。医薬品管理については、授業展開が難しい点もあったが、医薬品管理の意義・必要性・流れ・品質・保存について、医薬品の品質に影響を与える因子と保存条件を含みながら授業を実施した。また、無菌操作の原理・ケミカルハザードの回避・注射や点滴の基本的な手技などをはじめ、感染予防・スタンダードプリコーションなどの注意点についても講義を実施した。臨床現場（保険薬局・病院薬局）で、即戦力となれるよう、わかりやすいスライドを作成し、理解し易い授業を展開した。教員側が設定した内容に対する学生の理解度がどの程度か試験前に推し量るのが困難であった。しかしながら、本試験では学生は教員の予想を超える点数をとることができており、教員が求めている一定レベル以上の知識獲得はできたと考えている。</p>
今後の対応	<p>現時点では、試験結果も良好であり、特に講義内容の変更は必要ないと考えている。ただし、医薬品の適正使用、適切な医薬品情報の提供など実践的に発揮できる薬剤師としての技能と知識を習得できるよう実臨床を例とした説明を行い、実務実習で生かせるような知識を習得してもらうことを念頭に授業を実施したい。特に、実臨床での病態（肝・腎障害時など）・生理的特性（妊婦・授乳婦、小児、高齢者など）を考慮した用法用量設定について、考えることが出来る薬剤師を育成するために、より一層充実した講義を行っていきたいと考えている。特に講義では頻繁にスライドを使用するため、学生が理解し易く、解りやすい授業用の資料の作成に努めていきたい。</p>

科目名	臨床薬学Ⅲ	学年	4 学年	期	後期
科目責任者	一木裕子	科目担当者	西村信弘		
自己点検・評価	<p>臨床薬学Ⅲは、臨床薬学Ⅰと臨床薬学Ⅱで学んだ基礎学習に対するまとめや更に学んだ知識を応用できるようになるための講義である。臨床薬学では、患者さんや医療従事者とコミュニケーションをとる方法や医療の倫理など薬を正しく使うために必要な知識を学ぶことが重要である。薬剤師として臨床現場で活躍するために、薬物療法の実践、チーム医療・地域保健医療への参画に必要な基本的事項を習得する。</p>				

	<p>本試験において、学生は教員が求めている一定レベル以上の知識獲得はできたと考えている。また、第 14 回・第 15 回講義は SGD を用いた講義を行った。第 14 回は「がん」について、第 15 回は「脳血管障害」について実践的な問題を用いて行った。一部の学生にとってはディスカッション内容が難しく知識不足であるために消化不良を起こしている可能性も否定できない。しかしながら、大多数の学生は、予習の段階でしっかりと取り組んでおり、SDG では積極的にディスカッションを進めている様子が見られた。</p>
今後の対応	<p>本年度のアンケート結果を鑑み、大きく方針を変える必要はないと考えており、次年度以降も同様な講義内容を実施していく予定である。</p> <p>今後は、必ず予習をして授業に参加するようにアナウンスを行い、授業資料を早めに明示し、学生がしっかり勉強をして授業に参加できるような取り組みを考えていく。</p>

科目名	薬物治療学 I	学年	4 学年	期	後期
科目責任者	永倉透記	科目担当者	緒方勝也、今村友裕、柴田健太郎		
自己点検・評価	<p>解剖生理学、疾患と病態生理学、薬理学等で学修した知識を基盤として、薬物の主作用、副作用、使用にあたっての注意事項、体内動態、剤型などを理解し、有効性・安全性の高い薬物治療の基本を身に付けることを目標とした。アレルギー・免疫疾患（リウマチなど：永倉）、代謝性疾患（糖尿病など：永倉）、感覚器・皮膚疾患（緑内障など：永倉）、精神疾患（統合失調症など：緒方）、神経・筋疾患（認知症など：緒方）、内分泌系疾患（バセドウ病、尿崩症など：今村）領域を学修範囲とし、3人の教員が分担して講義した。</p> <p>教科書として病態機序、症状、治療、薬物治療、症例等の要点が記述されている薬物治療学（改訂 12 版、南山堂）を使用し、学生に講義前に予習するよう伝えた。学生が講義に集中するよう、定期試験は講義において話される内容から出題されることをあらかじめ伝えた。講義スタイルは、パワーポイントスライドを使用する、あるいは教科書の解説を中心とするなど、教員毎に異なった。復習を促すため、確認問題を講義後に出題した。学生の講義への出席率や講義への集中度は良好であった。講義内容に関して質問に来る学生は 3 年次の関連講義（薬理学等）時より増加し、薬物治療系科目の学修への関心の高まりが感じられた。</p>				

今後の対応	扱う疾患種類および各疾患で用いられる薬物は非常に多く、多彩である。他科目も並行して学習する中で、本科目に割り当てることのできる学習時間および記憶容量には限りがあるため、優先順位をつけて、重要項目に焦点を当てて講義する。疾患、薬物、作用機序、副作用、相互作用等を整理して、学生の理解が進むよう工夫する。
-------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

科目名	薬物治療学Ⅱ	学年	4 学年	期	後期
科目責任者	齊藤秀俊	科目担当者	西村信弘、岸拓弥、梶岡俊一、平木洋一、福田光良		
自己点検・評価	<p>今までに学習した疾病と病態生理学、薬理学、薬物動態学を基盤として、循環器系・血液造血器系・代謝疾患系・呼吸器系疾患・泌尿器系疾患・生殖器系疾患・消化器系疾患および悪性腫瘍の薬物治療(治療薬の使い分け、薬物療法時の注意点)について「薬学教育モデル・コアカリキュラム」(平成 25 年度改訂版)の内容に対応した講義を行った。各担当教員の配置は、教員の専門性に即して行い、シラバスに明記した疾患ごとに、病態から治療法・治療薬の選択、薬物有害事象、薬学管理ポイント(動態の特徴、代謝経路、使用上の注意)までの基本的事項についての知識習得を目的としている。</p> <p>授業では、学生の理解促進を促すため、講義のみではなく、確認課題を課して授業を復習する動機を与えるとともに、知識の定着を目指した。講義内では必須習得事項を含むレジュメを配布した上で、視覚的情報をスライドを用いて提供し、疾患概念から個別の専門的知識をつなげる学習を目指した。</p> <p>定期試験では 92 人の受験者中、98%以上の学生が試験を合格したことから、おおむね目標は達成されたと考える。</p>				
今後の対応	<p>次年から実習臨む 4 年生にとって、薬剤師としての実践的知識を学ぶ講義であることから、基礎的知識のみならず新しく更新された知見についても、取りこぼしの無いように常に最新の講義を心掛ける。確認問題等をフィードバックと共に提供することにより、授業への理解が進むような工夫を常に構築していく。また、過去の知識を反芻させるような機会を講義内に含める努力を行い、講義時間内での理解のばらつきを少なくするための工夫を実行していく。</p>				

科目名	製剤設計と DDS	学年	4	期	前期
科目責任者	阿部義人	科目担当者	西村信弘、中矢正、福田光良		

自己点検・評価	<p>本講義では製剤化の意義を教えるため、経口投与製剤、点眼剤、吸入剤、注射剤、貼付剤（1～5回、西村担当）、生薬関連製剤（6回、中矢担当）の種類やその特性を講義した。また、製剤の特性を理解した上での生物学的同等性（7回、中矢担当）、添加剤、製剤の製造工程、製剤の試験法（8～10回、阿部担当）を講義した。さらにドラッグデリバリーシステム（DDS）に関する講義を行なった（11回～15回、福田担当）。パワーポイントを用いて、教科書の内容をなるべくわかりやすく講義した。講義内容に関しては、講義前に Google クラスルームを用いて、PDF ファイルとして事前配布し、予習ができるように配慮した。演習に関しては、講義内容を元に練習問題を作成し、講義終了後に復習として、配布した。定期試験として、本試験、再試験を行った。各試験はマークシートにより、5問の選択肢から選ばせるところ、本試験では一定の不合格者が出たが、再試験ではほとんどの学生が合格した。</p>
今後の対応	<p>製剤設計、DDS は薬剤師として身につけるべき教養であり、しっかりと学習することが必要である。本年度は講義を行った初年度だったので、講義等が熟成されていない部分があり、次年度はこのあたりを考慮しながら、進めていきたいと考えている。</p>

科目名	医薬品安全性学	学年	4 学年	期	後期
科目責任者	山本 緑	科目担当者	石田 卓巳		
自己点検・評価	<p>本講義では、医療や薬学が高度化・複雑化する現状の下、医薬品の適正使用を理解してもらうことを目的とした。到達目標には、「1. 医薬品の毒性を理解し、その対策について説明できる。2. 医薬品のリスクを理解した上で、適切な投与法を設計することができる。3. 薬害の歴史および薬害を回避するための薬剤師の使命を説明できる。4. 医薬品開発における安全性評価について説明できる。5. 安全な薬物治療のために、臨床検査値について説明できる。」を掲げた。</p> <p>講義の進行は、前半部はパワーポイント、後半部は書き込み式の配布資料を用いた。後半部の医薬品の副作用に係る内容は、臨床薬学や臨床検査も含む重要な事項と考えたことから、国試の頻出内容を中心に穴埋め形式の配布資料にまとめて、学生の関心・理解度を高めるよう努めた。学生の自発的学習を促すべく、1. なるべく身近な内容に置き換えた分かりやすい説明を加えること、2. 最新 Topics を国試に関連付けて話すこと、の 2 点を意識した。また、講義中に実施した薬害課題に対しては速やかに、直接フィードバックを返すことを心掛</p>				

	<p>けた。</p> <p>本講義は集中講義の時間割であり、最終講義から一か月後には共用試験を控えていた。そこで、知識の確実な定着のために、これまでの履修科目の復習をメインとした内容を構成した。定期試験の結果は、平均点 76 点であり共用試験を受験する学生は全員合格していた。学生はよく復習に努めたようであり、授業アンケートの結果からも上述した 2 点の意識事項について効果はあったと判断する。しかし、設問の聞き方次第では答えを間違える学生が一定数おり、真の理解には未だ到達できていないようだ。対象を多面的に捉える思考力をどう養成していくかが今後の課題である。共用試験前のメンタル面も考慮に入れつつ、国試突破に続く薬剤師として社会貢献する将来へと、モチベーションを高めることを第一に考えた講義を実践していきたい。</p>
今後の対応	<p>配布資料の内容や講義スタイルについて、学生からは高評価であったため次年度も維持していくとともに、構造式を挿入して欲しいという学生の要望を反映させる。また、今年度の本試験で正答率の低い内容については、重点的に解説を加えることとする。4 年生であれば自身の苦手分野は既に把握しているので、コミュニケーションをしっかりと取りながら、学年全体で理解に不安のある領域の強化に努めたい。</p>

科目名	医療関係法規	学年	4 学年	期	前期
科目責任者	今井竜也	科目担当者	宗像千恵		
自己点検・評価	<p>薬剤師が業務を遂行するにあたって必要な法や制度について、教科書の章立てを基に、薬剤師の負う法的・倫理的責任、薬剤師法、薬機法、麻薬等取締法、あへん法、大麻取締法、毒物及び劇物取扱法、および医療供給や医療保障の関係法など多岐にわたる内容を、自作レジュームなども用いながら授業を行った。関係する法や制度の理念や目的の適確な理解を基礎に、各種試験、および将来携わることになる業務に必要な基礎的知識を身につけさせることを目標とした。</p> <p>本授業は15コマという限られた時間内で、多くのことを理解し、身につけてもらわなければならない。そのため、これまで学生にあまりうるさく言ってこなかった「予習」に、多くの時間を割いてもらうため、反転授業方式を採用し、学生が授業内容について、予め自学自習を済ませていることを前提として、授業ではその内容の確認と、学生の理解が難しかったと思われるところに力点を置いたフォローを行うやり方をした。</p> <p>効率的な予習に資するため、毎回、学生に教科書の該当箇所につい</p>				

	<p>て、どこを理解するべきかについてチェック式のポイントをまとめた「予習チェックシート」を予め配布し、かつ、各トピックの理解度についてどう判断したか、5段階で自己評価するアンケートを授業開始時に毎回実施し、学生の苦手分野の把握に努めた。</p> <p>また、毎回実施する小テスト(選択式)、定期試験(選択、穴埋め、記述問題の複合方式)は、CBTや薬剤師国家試験を意識した仕様とし、それなりに厳しく評価した。</p>
今後の対応	<p>これらの取り組みには、一定の効果はあった。「医療関係法規」は私が担当する他科目(低学年次の共通教育科目)と違い、予習に時間を割く学生の数が圧倒的に多く、約8割の学生が必ず1時間以上の予習をし、3割の学生は、2時間半以上の予習をして授業に臨んでくれた。予めシラバスで反転授業方式をとることを明記し、予習をしてこなければ、授業理解に大いに支障を来すことを厳しく注意喚起しておいたこともあり、私のこれまでの担当講義における懸案事項の1つである「学生が予習及び復習に時間を割かない」という問題を、本科目ではかなり克服できた。</p> <p>ただ同時に、8割以上の学生が授業の難易度について「やや難しい」、「難しい」と回答しており、キャンパス平均と比較して著しく突出してしまった。そして「簡単」、「やや簡単」と回答した学生は1人もいなかった。</p> <p>本試験の不可こそ7名と、想定していたよりは少なかったが、受講者92名中A評価の学生は5名にとどまり、CおよびD評価の学生が過半数、結果、平均点も69点となり、学生には確かに本科目は難しかったようである。</p> <p>授業に臨む意識の改革はある程度達成出来たが、それが授業内容の十分な理解を伴っているものなのか、不安が残る。反転授業の効果については、検証も必要である。</p> <p>学生の理解度チェック評価の結果と、授業内小テスト・定期試験問題の正答率を照らし合わせることで、学生が特に不得手としている分野を特定し、トピックの内容についてブラッシュアップを行う必要がある。</p>

科目名	早期体験実習	学年	1 学年	期	後期
科目責任者	平木 洋一	科目担当者	石田卓巳、西村信弘、一木裕子、多田納豊、塚本宏樹、山本緑、今井竜也、中矢正、朴珍相、		

			宗像千恵、柴田健太郎、福田光良		
自己点検・評価	<p>早期体験実習（アーリーエクスポージャー）は、入学後の早い時期に卒業生の活躍する現場などを体験することにより、医療を担う薬剤師としての心構え、薬学を学ぶ動機付け、および学習意欲の向上を目的に実施している。本年度は、医療施設の見学と薬害に関する講義、そして SGD を組み合わせた実習を計画した。九州山口地区の県薬剤師会にご協力いただき、帰省先からの薬局見学の訪問が実現できた。病院についても、関連施設の病院で見学を予定通りに実施できた。薬剤師が活躍する実際の現場を訪問し、実体験を通じて卒業後の職種と具体的な仕事内容を、少しながら理解することができたと思われる。病院見学でも薬剤師に熱心に質問を投げかける学生の姿が見受けられ、実臨床を見学することの効果を実感した。薬害の講義では、薬害の原因や実態だけでなく薬害と社会との関係について学んでもらう目的で、元薬害肝炎九州原告団代表の方を講師として招き、原告団の立場から講演していただいた。薬局・病院見学前に講義を行い、事前に知識を身につけ学習目標を学生自身が設定し、見学後、薬害と社会との関係や倫理、薬剤師の役割や問題点などについてグループディスカッションで討論した内容を発表し、各自レポートの作成提出を行わせた。これらの一連の実習でコミュニケーション能力とプレゼンテーション能力を身につけるための最初の機会となったと思われる。大学1年生早期の柔軟な五感を通して、様々な現場や講義からの刺激を敏感に感じ取る体験をすることで、あらためて患者中心の医療、くすりを取りまく社会や福祉について見直し、自分たちの将来の進路を考えるよい機会になったと考えられる。</p>				
今後の対応	<p>本年度の結果を鑑み、大きく方針を変える必要はないと考えている。今年度は、準備に時間がかかり余裕を持って準備計画が出来なかったため、見学先の決定まで時間を要した。今後は、準備を早期から始めたいと考えている。早期体験実習そのものに対して、学生の評判も良く今後も継続していきたいと考えている。また、原告団代表の講義は、評判がよかったので、今後も続けていく予定である。</p>				

科目名	医療系薬学実習 I	学年	3 学年	期	前期
科目責任者	西村信弘	科目担当者	平木洋一、一木裕子、宗像千恵、福田光良		
自己点検・評価	<p>医療系薬学実習 I では医薬品情報の活用、および医療スタッフや患者とのコミュニケーションを主として実技実習を行った。具体的な実</p>				

	<p>習内容は、医療用医薬品添付文書と医薬品インタビューフォームの使い分け、目的（効能効果、副作用、相互作用、妊婦への投与など）に合った適切な情報源の選択および必要な情報の検索、収集、医薬品情報の目的に合わせた加工・提供、代表的な医薬品情報収集、患者・来局者情報の収集・服薬指導・疑義照会、セルフメディケーションやOTC薬に関するコミュニケーション、特殊な医薬品の服薬指導や使用方法の説明であった。</p> <p>それぞれの実習内容は、実習室3つを用いて17～19人の小グループに分かれて実施し、一人一人の学生が十分に経験を積めるように配慮した。課題枚に全体での実技披露を行うグループを選出し、学んだ技能の確認を学生全体で行った。最後に、実習試験（筆記）を行い、実習の理解度を確認した。</p>
今後の対応	2024年度は、それぞれの実習担当の指導スキルの向上を図り、並行して実習内容の改善を重ねていく予定である。

科目名	医療系薬学実習Ⅱ	学年	4 学年	期	前期
科目責任者	西村信弘	科目担当者	平木洋一、一木裕子、宗像千恵、福田光良		
自己点検・評価	<p>医療系薬学実習Ⅱでは調剤を始めとする実技を主として実習を行った。具体的な実習内容は計数調剤、計量調剤（散剤、水剤、軟膏）、無菌操作（手指消毒、個人防護具の着脱、注射剤の混合調製）であった。</p> <p>それぞれの実習内容は、実習室5つを用いて10～12人の小グループに分かれて実施し、一人一人の学生が十分に経験を積めるように配慮した。また実習の工夫点として、学生には事前に調剤の計算問題を配布し、実習初日に確認テストを行った。これにより学生が苦手とする調剤の計算能力の定着を図った。</p> <p>今回の実習は本学では初めて実施したものであり、準備は早くからとりかかっていたが、それでも備品や医薬品の調達などに不備があった。教員はその調整に奔走することとなったが、最終的に予定通りの実習をおこなうことが出来た。最後に、実習試験（筆記）を行い、実習で学んだ知識の確認を行った。</p>				
今後の対応	2024年度は、それぞれの実習担当によって医薬品や備品の追加、内容の調整などを行い、実習内容の改善を重ねていく予定である。				

科目名	病院・薬局 事前実習 I	学 年	4 学年	期	後期
科目責任者	武田弘志	科 目 担 当 者	阿部義人、石田卓巳、猪部学、太田昭一郎、 緒方勝也、梶岡俊一、川端猛夫、永倉透記、 西村信弘、平木洋一、村田祐造、一木裕子、 齊藤秀俊、多田納豊、塚本宏樹、成川佑次、 宗像達夫、山本緑、吉武康之、貝塚拓、 中矢正、宗像千恵、磯田紀之、坂井崇亮、 澤井円香、福田光良		
自己点検・評価	<p>本科目は、5年次の病院・薬局実務実習のための事前学習として、学生が4年次までに学習した物理、化学、生物、衛生といった基礎系科目を総復習し、症例や処方箋を基に臨床との繋がりを意識しながら横断的に理解するとともに、薬剤師としての自覚を持ち、ヒトを思い敬う態度や医療の担い手としての生命倫理・医療倫理の倫理観を身に付けることを目的とする科目である。</p> <p>当科目は、5年次の学外実習では、社会人としての行動が求められるため、その重要な態度の一つとして、時間厳守を身につけるために出欠を厳しく管理した。また、医療倫理・生命倫理の倫理観（態度）を修得するために、複数の題材についてSGDによるアクティブラーニングを実施した。また、これまでの基礎科目分野の知識の復習・定着のための演習授業とともに、これらの基礎知識が臨床現場と結びつくことを意識できるための科目横断型の授業を設定した。さらに、このSGDにおいては、自他の考えについて理解を深めることとグループワークの態度を客観的に評価する視点を養成することを目的として学生間のピア評価を実施した。</p> <p>本年度に初めて開講した科目であった。取り組みの内容は、これまでに実績が十分にある大田原キャンパスの同科目の内容を踏襲し、当科目の目的を達成できる内容が実施できたと考える。当科目により、学生は、基礎知識の定着とともに、一部の臨床症例と基礎知識との繋がりを科目横断的に理解するとともに、その様な視点を体得する一助になったと考える。また、グループワークを通して医療人としての倫理観を醸成する機会となり、5年次の病院・薬局実務実習に向けて重要な科目として機能していると考えられる。</p>				
今後の対応	<p>本年度の取り組みの内容は、これまでに実績が十分にある大田原キャンパスの同科目の内容を踏襲し、当科目の到達目的を達成できる内</p>				

	<p>容が実施できたと考えるため、来年度も同様の内容で実施する予定である。授業アンケートの自由記載において授業時間の超過の指摘があったため、全体的に更に内容を改善し続ける意識をもって取り組む。動画の活用や確認問題の実施と解説は、学修に一定の効果があると考えられるため、部分的にでも継続して行う予定である。</p>
--	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

科目名	病院・薬局事前実習Ⅱ	学年	4 学年	期	後期
科目責任者	西村信弘	科目担当者	宗像千恵、福田光良、平木洋一、一木裕子、		
自己点検・評価	<p>病院・薬局事前実習Ⅱでは、臨床薬学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの知識を基に、医療系薬学実習Ⅰ、Ⅱの総復習を行い、薬剤師に必要な技能・態度を学ぶことを目的として、具体的には、処方せんに基づいた調剤業務を安全で適正に遂行するために、基本的調剤業務、患者に安全・最適な薬物療法を提供するために、適切に患者情報を収集した上で、状態を正しく評価し、適切な医薬品情報を基に、個々の患者に適した薬物療法を提案・実施・評価できるコミュニケーション、即ち、患者への情報提供、服薬指導、医師等への情報提供、疑義照会など、実務実習を行い上で身につけておく必要がある技能、知識、態度について、学生個々に実技指導を行った。</p> <p>実習内容は、実習室5つを用いて小グループに分かれて実施し、一人一人の学生が十分に実技実習ができるように配慮した。また、OSCEにて技能の習得が求められる項目を網羅した実習内容とした。</p> <p>さらに、実務実習で学ぶ8疾患について、それぞれの症例を提示し、どのように薬剤師として介入すべきかなど、グループディスカッションを行った。</p> <p>今年度が初めてに実習であったため、スケジューリングや準備などに教員が奔走したものの、最終的に予定通りの実習をおこなうことが出来た。</p>				
今後の対応	<p>2024年度は、それぞれの実習担当によって実習内容のブラッシュアップを行い、改善を重ねていく予定である。</p>				

第四部 福岡薬学部研究活動報告

1. 2023年度の研究活動

氏名（役職）

武田弘志（福岡薬学部長・教授）

研究概要

ストレス性精神疾患の病態解明とその新規予防・治療薬の開発に関する研究

近年は、ストレスレジリエンスを制御する分子メカニズムの考究を行っている。従来の一連の研究から、ストレス抵抗性あるいは適応の形成には、海馬神経細胞の 5-HT1A 受容体が深く関与することを明らかにしてきた。さらに神経化学および分子生物学的検討を重ね、この 5-HT1A 受容体が、海馬ヒストン H3 アセチル化を基盤とした脳機能のエピジェネティクス制御や白血病阻止因子（LIF）による脳神経細胞におけるミエリンの形成と維持などを介して、ストレス抵抗性あるいは適応の形成に寄与していることを明らかにした。現在、これらの研究成果を基盤にしてストレス性精神疾患の予防あるいは治療に関わる新薬の開発に取り組んでいる。

著書

1. 武田弘志, 宮川和也, 辻稔. I 総論 第 2 章 行動の生物学的理解 D. 行動と遺伝（エピジェネティクス）. 行動医学テキスト（第 2 版）, 日本行動医学会 編, (株) 中外医学社, 東京, p30-35 (2023).

原著論文・総説

【原著論文】

1. Takahashi K, Hong L, Kurokawa K, Miyagawa K, Mochida-Saito A, Takeda H, Tsuji M. Brexpiprazole prevents colitis-induced depressive-like behavior through myelination in the prefrontal cortex. *Prog. Neuropsychopharmacol. Biol. Psychiatry*, 121, 110666 (2023).
2. Takahashi K, Tsuji M, Nakagawasai O, Katsuyama S, Hong L, Miyagawa K, Kurokawa K, Mochida-Saito A, Takeda H, Tadano T. Donepezil prevents olfactory dysfunction and α -synuclein aggregation in the olfactory bulb by enhancing autophagy in zinc sulfate-treated mice. *Behav. Brain Res.*, 438, 114175 (2023).
3. Umeda A, Shimada H, Yamane T, Mochizuki T, Inoue Y, Tsushima K, Miyagawa K, Mochida-Saito A, Takeda H, Okada Y, Masaki K, Matsusaka M, Fukunaga K. Real-world effects of once-daily inhaled steroid (fluticasone furoate) combined with long-acting

- beta-2 agonist (Vilanterol) and long-acting muscarinic antagonist (umeclidinium) on lung function tests of asthma patients in Japan. *Front. Physiol.*, 14, 1131949 (2023).
4. Nagakura Y, Tozaki-Saitoh H, Takeda H. Drug discovery and development for fibromyalgia using practical biomarkers throughout the process from relevant animal models to patients. *Expert Opin. Drug Discov.*, 18(5), 539-549 (2023).
 5. Arai I, Tsuji M, Takahashi K, Saito S, Takeda H. Analyzing the antinociceptive effect of interleukin-31 in mice. *Int. J. Mol. Sci.*, 24, 11563 (2023).
 6. Arai I, Tsuji M, Saito S, Takeda H. Analyzing the antinociceptive effect of analgesics using a modified hot-plate test in mice. *Clinical Trials Journal* 100111 (2023).
 7. Nomura A, Kurokawa K, Takahashi K, Miyagawa K, Mochida-Saito A, Takeda H, Tsuji M. Possible involvement of inflammasomes on the post-stroke cognitive impairment in a mouse model of embolic cerebral infarct. *Physiol. Behav.*, 271, 114348 (2023).
 8. Arai I, Tsuji M, Saito S, Takeda H. Experimental Study : Interleukin-31 Augments Morphine-Induced Antinociceptive Activity and Suppress Tolerance Development in Mice. *Int. J. Mol. Sci.*, 24, 16548 (2023).
 9. Miyagishi H, Joyama A, Nango H, Nagayama K, Tsuji M, Takeda H, Kosuge Y. Cytoprotective effects of Hangekobokuto against corticosterone-induced cell death in HT22 cells. *J. Nat. Med.*, 78, 255-265 (2024).
 10. Takahashi K, Kurokawa K, Hong L, Miyagawa K, Mochida-Saito A, HTakeda H, Tsuji M. Hippocampal and gut AMPK activation attenuates enterocolitis-like symptoms and co-occurring depressive-like behavior in ulcerative colitis model mice: Involvement of brain-gut autophagy. *Exp. Neurol.*, 373, 114671 (2024).
 11. Takahashi K, Kurokawa K, Miyagawa K, Mochida-Saito A, Takeda H, Tsuji M. Repeated antibiotic drug treatment negatively affects memory function and glutamatergic nervous system of the hippocampus in mice. *Neurosci. Lett.*, 825, 137711 (2024).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 高橋浩平, 辻稔, 中川西修, 勝山壮, 黒川和宏, 宮川和也, 持田(斎藤)淳美, 武田弘志, 只野武. 嗅覚障害モデル動物で認められるうつ様行動の発現には海馬ミクログリアの活性化が関与する. 日本薬学会第 143 年会 (札幌市) 2023 年 3 月
2. 徐山雅美, 宮岸寛子, 高橋愛, 鶴田こむぎ, 辻稔, 武田弘志. 小菅康弘マウス海馬神経由来 HT22 細胞において半夏厚朴湯はコルチコステロン誘発細胞死を抑制する. 日本薬学会第 143 年会 (札幌市) 2023 年 3 月
3. 安田墨路, 高橋莉子, 小田部咲樹, 黒川和宏, 武田弘志, 辻稔. Cuprizone の短期曝露によるストレス適応能の低下と 5-HT_{1A} 受容体との関連. 第 147 回日本薬理学会関東部会

(東京) 2023 年 3 月

4. 村田千夏, 鎌田祭, 宮川和也, 持田(斎藤) 淳美, 梅田啓, 岡田泰昌, 武田弘志, 辻稔. 睡眠時無呼吸症候群モデルマウスの情動的行動特性と脳機能変化. 第 147 回日本薬理学会関東部会(東京) 2023 年 3 月
5. 宮川和也, 持田(斎藤) 淳美, 黒川和宏, 高橋浩平, 武田弘志, 辻稔. 妊娠期におけるストレス曝露が誘発する仔の情動障害に対する抑肝散母仔同服の効果. 第 39 回日本ストレス学会学術総会(仙台市) 2023 年 7 月
6. 高橋浩平, 黒川和宏, 宮川和也, 持田(斎藤) 淳美, 武田弘志, 辻稔. 潰瘍性大腸炎に併発する不安神経症モデル動物の妥当性に関する検討. 第 39 回日本ストレス学会学術総会(仙台市) 2023 年 7 月
7. 黒川和宏, 高橋浩平, 野村彩衣, 宮川和也, 持田(斎藤) 淳美, 武田弘志, 辻稔. 5-HT_{1A} 受容体の刺激はストレス非適応モデルマウスにおいて GSK3 β を介してオリゴデンドロサイト転写因子を誘導する. 第 39 回日本ストレス学会学術総会(仙台市) 2023 年 7 月
8. 持田(斎藤) 淳美, 宮川和也, 黒川和宏, 高橋浩平, 武田弘志, 辻稔. ATP 感受性カリウムチャンネルの調節が情動およびストレス応答に及ぼす影響. 第 39 回日本ストレス学会学術総会(仙台市) 2023 年 7 月
9. 野村彩衣, 黒川和宏, 高橋浩平, 宮川和也, 持田(斎藤) 淳美, 武田弘志, 辻稔. 塞栓性脳梗塞後に併発するうつ病モデル動物の作成. 第 39 回日本ストレス学会学術総会(仙台市) 2023 年 7 月
10. 高橋浩平, 洪麗花, 黒川和宏, 宮川和也, 持田(斎藤) 淳美, 武田弘志, 辻稔. 潰瘍性大腸炎に併発するうつ症状の病態解明: 前頭前皮質におけるミエリン形成並びにセロトニン神経伝達の関与. 第 25 回活性アミンに関するワークショップ(久留米市) 2023 年 8 月
11. 宮川和也, 持田(斎藤) 淳美, 黒川和宏, 高橋浩平, 武田弘志, 辻稔. 妊娠期におけるストレス曝露が誘発する仔の情動障害に対する抑肝散母仔同服の治療効果. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会(成田市) 2023 年 9 月
12. 黒川和宏, 宮川和也, 持田(斎藤) 淳美, 高橋浩平, 武田弘志, 辻稔. 5-HT_{1A} 受容体刺激がオリゴデンドロサイト発現調節因子に及ぼす影響. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会(成田市) 2023 年 9 月
13. 持田(斎藤) 淳美, 宮川和也, 黒川和宏, 高橋浩平, 武田弘志, 辻稔. ATP 感受性カリウムチャンネルの調節が情動およびストレス応答に及ぼす影響. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会(成田市) 2023 年 9 月
14. 辻稔, 黒川和宏, 高橋浩平, 宮川和也, 持田(斎藤) 淳美, 武田弘志. 新規抗うつ薬の開発に資するミエリン障害モデルマウスを用いたストレス適応機構の解明. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会(成田市) 2023 年 9 月

15. 高橋浩平, 黒川和宏, 宮川和也, 持田(斎藤) 淳美, 武田弘志, 辻稔. 脳内 Sirtuin に焦点を当てた新規抗うつ薬の開発. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会 (成田市) 2023 年 9 月
16. 齋藤秀俊, 武田弘志. 線維筋痛症モデル病態における疼痛・うつ様病態へのミクログリアの関与. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会 (成田市) 2023 年 9 月
17. 宮川和也, 持田(斎藤) 淳美, 黒川和宏, 高橋浩平, 武田弘志, 辻稔. 胎生期ストレス暴露モデルマウスの情動障害に対する抑肝散母仔同服の効果. 第 97 回日本薬理学会年会 (神戸市) 2023 年 12 月

【シンポジウム】

1. 黒川和宏, 高橋浩平, 宮川和也, 持田(斎藤) 淳美, 武田弘志, 辻稔. グリア細胞を標的とした行動薬理学研究. ストレス適応と 5-HT_{1A} 受容体を介した髄鞘形成との関連性. 日本薬理学会主催 次世代薬理学セミナー2023 in 東京 (東京) 2023 年 3 月
2. 高橋浩平, 黒川和宏, 宮川和也, 持田(斎藤) 淳美, 武田弘志, 辻稔. グリア細胞を標的とした行動薬理学研究. ミエリン-オリゴデンドロサイトに着目したうつ病の病態並びに新規治療法に関する検討. 日本薬理学会主催 次世代薬理学セミナー2023 in 東京 (東京) 2023 年 3 月

【合同企画特別講演】

1. 武田弘志 (座長). 大野裕「日常臨床にいかす認知行動療法」第 20 回日本うつ病学会総会/第 39 回日本ストレス学会学術総会 (仙台市) 2023 年 7 月

依頼講演・招待講演 他

【基調講演】

1. 武田弘志. 国際医療福祉大学福岡薬学部で学ぶ薬学教育. 国際医療福祉大学福岡薬学部説明会 (国際医療福祉大学大川キャンパス, 大川市) 2023/8/20

所属学会

1. 日本ストレス学会
2. 日本薬理学会
3. 日本神経精神薬理学会
4. 日本緩和医療薬学会
5. 国際医療福祉大学学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本ストレス学会 理事長（元会長、元理事）
2. 日本薬理学会 名誉会員（元理事、元関東部会長）
3. 日本神経精神薬理学会 名誉会員（元会長、元理事）
4. 日本緩和医療薬学会 名誉会員（元理事長、元会長）
5. 国際医療福祉大学学会 理事（元会長）
6. 科学技術振興機構（JST） 専門委員
7. 日本学術振興会 専門委員

氏名（役職）

阿部義人（教授）

研究概要

タンパク質を「観る」（構造生物学）および「創る」（タンパク質工学）を目的として以下の研究を行っている。主にタンパク質多量体化の調節機構を薬学的観点から調べている。

1. 抗 ATP 受容体 P2X4 抗体他、抗体の物性および利用に関する研究

神経障害性疼痛に関与すると考えられている ATP 受容体 P2X4 に対する抗体を作成し、本抗体の物性およびその利用法の検討を行っている。本抗体により P2X4 をターゲットにした体内動態調査および阻害剤創製を目指している。今年度は、昨年度に続き本抗体の大腸菌発現系の改良を行った。

2. 大腸菌 DNA 複製機構に関する構造生物学研究

大腸菌における複製開始および再開始機構の構造生物学的解析を行い、生命現象を分子およびアミノ酸のレベルで明らかにすることを目指している。今年度は、昨年度に続き複製再開始因子 DnaT の多量体化機構に関して調べた。また、高品質タンパク質結晶生成実験（JAXA との共同研究）により、宇宙空間におけるタンパク質結晶化をおこなった。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Inoue S, Ikeda Y, Fujiyama S, Ueda T, Abe Y. Oligomeric state of the N-terminal domain of DnaT for replication restart in *Escherichia coli*. *Biochim. Biophys. Acta Proteins Proteom.*, 871(5), 140929 (2023).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 阿部義人, 御供田将士, 植田正. 抗 P2X4 抗体 Fab の立体構造を基盤とした大腸菌発現系の改良. 第 23 回日本蛋白質科学年会（名古屋）2023/7/7
2. 阿部義人. 抗体 Fab の立体構造を基盤とした大腸菌発現系の改良. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会（成田、Web 開催）2023/9/3

依頼講演・招待講演 他

1. 阿部義人. 体のしくみ～交感神経と副交感神経について～. 令和5年度 登録販売者生涯学習研修会 2023/4/13

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本生化学会
3. 日本分子生物学会
4. 日本生物物理学会
5. 日本蛋白質科学会
6. 日本神経科学学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本生化学会 九州支部 支部評議員
2. 佐賀薬剤師会 登録販売者研修ワーキンググループ委員

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C, 抗 P2X4 抗体 Fab の構造を基盤とした大腸菌発現の改良および Fab の高機能化, 2021～2023 年度, 研究代表者
2. 国際医療福祉大学学内研究費, 立体構造を基盤とした antiP2X4 抗体 Fab 生産法の改良, 2023 年度, 研究代表者

氏名（役職）

石田卓巳（教授）

研究概要

環境汚染化学物質による生体内メタルホメオスタシスのかく乱に関する研究

ダイオキシン類などの環境汚染化学物質が生体内微量必須元素のホメオスタシスに与える影響を明らかにする。環境汚染化学物質は、現在でも様々な経路を介してヒトに暴露されている。このため、その影響を明らかにすると共に対策を講ずることは、疾病を予防し健康を維持するうえで重要な課題である。本研究の成果は、環境因子を起点とした疾病の発症機序の解明に新たな知見を提示するものである。

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 石田卓巳. トリプトファン代謝物キヌレニンによる AhR シグナルの活性化. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会（成田）2023/9/3
2. 古賀貴之, 廣村信, 平尾雅代, 竹田修三, 石井祐次, 石田卓巳, 藤井由希子, 小武野優子, 戸田晶久, 副田二三夫. 皮膚-肝関連による肝メチオニン代謝酵素 Bhmt 発現抑制への Selenium binding protein 1 (Selenbp1) の寄与の解析. フォーラム 2023 : 衛生薬学・環境トキシコロジー（広島）2023/9/13
3. 古賀貴之, 廣村信, 香川正太, 石井祐次, 平尾雅代, 竹田修三, 石田卓巳, 長島史裕, 小武野優子, 戸田晶久, 副田二三夫. 果糖過剰摂取による脂肪肝形成の性差への Selenium binding protein 1 (Selenbp1) 欠損の影響. 第 40 回日本薬学会九州山口支部大会（福岡）2023/11/18
4. 趙爽利, 中嶋悠子, 宋穎霞, 李任時, 古賀貴之, 石田卓巳, 田中嘉孝, 石井祐次. Selenium-binding protein (SelenBP) 1/2 の脂質代謝における役割 : SelenBP1/2 ダブル欠損マウスを用いた検討. 日本薬学会第 144 年会（横浜）2024/3/28 - 3/31

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本生化学会

研究費獲得状況

1. 国際医療福祉大学学内研究費, キヌレニンによる転写制御シグナルの活性化と細胞機能への影響の解析, 2023 年度, 研究代表者
2. 基盤研究 C, がん細胞に特徴的な亜鉛恒常性の破綻における AhR の役割とその細胞機

能への影響, 2022~2024 年度, 研究代表者

氏名（役職）

石橋正己（教授）

研究概要

生物活性天然物の探索に関する研究（香川大学農学部活性構造化学研究室 原康雅 助教グループとの共同研究）

植物および放線菌等の微生物に含まれる生物活性天然物の探索に関する検討を行っている。ナス科やキク科植物等から TRAIL シグナルおよび BMI1 プロモーター活性化作用に関するスクリーニングを行い、数種の活性成分を見出した。また、病原性放線菌 *Nocardia* 属放線菌について、動物細胞（マウスマクロファージ様細胞 J774.1）との共培養を行い、共培養選択的に産生される天然物として、数種のペプチド型化合物を単離した。さらなるスクリーニングの検討を行い、活性成分の単離と構造決定に取り組んでいる。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Hara Y, Manome T, Suehiro W, Harada S, Yamagishi Y, Takaya A, Ogra Y, Ishibashi M. Isolation of two new trichorzin PA derivatives, trichorzin PA X and XI, from the terrestrial fungus *Trichoderma harzianum* IFM 66736. *Tetrahedron Lett.*, 121, 154488 (2023). DOI:10.1016/j.tetlet.2023.154488
2. Rakhi SA, Hara Y, Islam MS, Manome T, Alam S, Emon NU, Al-Mansur MA, Kuddus MR, Sarkar MR, Ishibashi M, Ahmed F. Isolation of bioactive phytochemicals from *Crinum asiaticum* L. along with their cytotoxic and TRAIL-resistance abrogating prospect assessment. *Heliyon*, 10, e25049 (2024). DOI:10.1016/j.heliyon.2024.e25049

【総説】

1. 石橋正己. 天然物に学ぶ： *Nocardia* 属放線菌成分. *薬学雑誌*, 144, 33-37 (2024). DOI:10.1248/yakushi.23-00161-3

雑誌記事・その他

1. Ishibashi M. Remembering Professor Jun'ichi Kobayashi (September 23, 1949 – October 9, 2023). *J. Antibiot.*, 77, 199–200 (2024). DOI:10.1038/s41429-023-00689-w

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 成島悠貴, 林奈留美, 蒔田吉功, 石橋正己, 荒井緑. 高活性 Notch シグナル阻害剤を目

指した **aciculatin** 誘導体の創製. 日本ケミカルバイオロジー学会第 14 回年会 (大阪) 2023/5/29

2. 氏江優希子, 齋藤駿, 桑原るり, 原康雅, 深谷圭介, 占部大介, 岸本真治, 渡辺賢二, 後藤芳邦, 小川健司, 楠屋陽子, 高橋弘喜, 矢口貴志, 石橋正己, 荒井緑. 休眠遺伝子活性化を目指した病原真菌 **Aspergillus** 属と免疫細胞の共培養. 第 65 回天然有機化合物討論会 (東京) 2023/9/13
3. 古谷峻大, 齋藤駿, 森田望, 石橋正己, 荒井緑. 天然物を基盤とした計算科学的アプローチによる高活性 **Notch** シグナル阻害剤の創製. 第 24 回天然薬物の開発と応用シンポジウム (広島) 2023/10/14
4. 大場暖樹, 川野はるか, 岡野美優, 荒井孝義, 石橋正己, 荒井緑. 神経再生医薬を目指した **Notch** シグナル阻害剤スピロオキシンドールのメカニズム解明研究. 第 49 回反応と合成の進歩シンポジウム (岐阜) 2023/11/7
5. 成島悠貴, 林奈留美, 石橋正己, 荒井緑. 天然物を基盤とした計算科学的アプローチによる高活性 **Notch** シグナル阻害剤の創製. 第 49 回反応と合成の進歩シンポジウム (岐阜) 2023/11/7
6. 氏江優希子, 齋藤駿, 桑原るり, 原康雅, 深谷圭介, 占部大介, 矢口貴志, 石橋正己, 荒井緑. 休眠遺伝子活性化を目指した病原真菌と免疫細胞の共培養. 日本農芸化学会 2024 年度大会 (東京) 2024/3/27
7. 成島悠貴, 林奈留美, 石橋正己, 荒井緑. 天然物を基盤とした計算科学的アプローチによる高活性 **Notch** シグナル阻害剤の創製. 日本薬学会第 144 年会 (横浜) 2024/3/29
8. 原康雅, 藤井一樹, 高屋明子, 石橋正己. 熱帯植物 **Xylia kerrii** からの関節リウマチ滑膜線維芽細胞の細胞死誘導作用を有する新規天然物の探索. 日本薬学会第 144 年会 (横浜) 2024/3/30
9. 瀬戸陽介, 原康雅, 高屋明子, 海老原樹, 荒井緑, 矢口貴志, 石橋正己. 動物細胞存在下 **Nocardia pseudobrasiliensis** IFM 0624^T 等の培養による新規天然物の探索. 日本薬学会第 144 年会 (横浜) 2024/3/30
10. 古谷峻大, 齋藤駿, 森田望, 石橋正己, 荒井緑. がん幹細胞に関わる **BMI1** の天然物由来阻害剤の機構解明. 日本薬学会第 144 年会 (横浜) 2024/3/30

【国際学会】

1. Narushima Y, Hayashi N, Ishibashi M, Arai MA. Design of aciculatin derivatives for highly active Notch inhibitors. 13th International Symposium on Bioorganic Chemistry (Singapore) 2023/12/18
2. Ujie Y, Saito S, Kuwahara R, Hara Y, Fukaya K, Urabe D, Yaguchi T, Ishibashi M, M. Arai MA. Co-culture of pathogenic fungi and immune cells for activating silent genes. 13th International Symposium on Bioorganic Chemistry (Singapore) 2023/12/18

依頼講演・招待講演 他

【招待講演】

1. Ishibashi M. Search for natural products from actinomycetes of the genus *Nocardia*. 7th Tishler-Ōmura Symposium (Tokyo) 2023/11/11
2. 石橋正己. 天然物に学ぶ：生物活性スクリーニング研究. 香川大学応用生命科学研究センター第 15 回公開シンポジウム（香川） 2023/12/8

所属学会

1. 日本薬学会（終身会員）
2. 日本生薬学会
3. 日本化学会（終身会員）

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 千葉大学薬学部非常勤講師

氏名（役職）

猪部学（教授）

研究概要

サイトカインの産生制御機構に関する研究（金沢大学医薬保健研究域・薬学系 松永グループとの共同研究）

ゲノム編集技術を利用して、サイトカイン遺伝子アレルに蛍光タンパク質遺伝子を導入し、サイトカイン産生を簡便に解析できるモデル細胞系の構築を目指している。マクロファージの M1/M2 分極化と転換経路の解析モデルを構築するため、IFN- γ 遺伝子の 3'UTR 領域に、Kaede 蛍光タンパク質遺伝子をノックインするためのターゲティングベクターを作製した。Kaede は近紫外線の照射により変色させることができるため、M1 に分極化して Kaede を産生する細胞を変色させ、その後の IFN- γ 産生の消失により、M1 から M2 への転換経路を解析できると期待している。

T 細胞活性化誘導細胞死(AICD)の誘導機構に関する研究（金沢大学医薬保健研究域・薬学系 松永グループとの共同研究）

T 細胞は活性化して増殖し、その大多数は、エフェクター細胞として効果を発揮した後、活性化誘導細胞死(AICD)により自滅する。T 細胞の活性化に比べ、後期過程である AICD の誘導機構は十分に明らかにされていないとはいえず、また、開発されてきた多数の免疫作用物質が、AICD に及ぼす効果も十分に解析されていない。T 細胞ハイブリドーマに、抗原刺激の代替となる抗 CD3 抗体刺激を加えることで、AICD を誘導することができる。AICD は、T 細胞の活性化を抑制するタクロリムスにより、同様に抑制された。今後、この細胞モデルを用いた AICD 誘導機構の解明や新たな作用物質の探索が期待される。

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 猪部学, 榊菜津子. サイトカインマルチレポーター細胞モデルの構築と外因性影響物質の評価および探索. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会（成田）2023/9/3

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本免疫学会
3. 日本分子生物学会

研究費獲得状況

1. 国際医療福祉大学学内研究費, T細胞 AICD モデルを用いた免疫恒常性に対する免疫作用物質の影響評価, 2023 年度, 研究代表者

氏名（役職）

太田昭一郎（教授）

研究概要

血清ペリオスチン測定による炎症疾患診断キットの開発

細胞外マトリクス分子の一種であるペリオスチンがアレルギー性炎症や間質性肺炎等の線維化疾患の増悪に関わっていることを示し、血清ペリオスチン測定キットを作製して間質性肺炎における保険適用を申請中である。

血清 SCCA2 測定によるアトピー性皮膚炎診断キットの開発

扁平上皮系腫瘍マーカーである SCCA2 がアレルギー性疾患で上昇することを示し、血清 SCCA2 測定キットを作製して小児アトピー性皮膚炎での保険適用を得た。

B 細胞の運動性を制御する分子の研究

B 細胞の接着のトリガーとなる新規分子を同定し、接着機構の一端を解明することによって、免疫応答における B 細胞の動態を詳細に解析するとともに、当該分子を免疫異常病態の制御標的として検査および治療に応用を目指している。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Matsuo R, Imamura T, Takamori A, Kishi T, Minami M, Miyakawa J, Yoshitake N, Hayashi A, Nakayama Y, Egashira N, Teramoto M, Ishinari H, Kajiyama I, Fujisaki S, Kakiyama H, Satou K, Nakafusa R, Tanaka C, Tanaka M, Isomura Y, Izumi K, Ohta S, Souta N, Matsuo N, Yamamoto K, Tsuji S, Umemura T, Takagi K, Fujimoto K. Improvement trend for individual health guidance intervention according to Japan clinical guidelines by public health nurses for type 2 diabetes mellitus who visited for medical checkups regularly: a case-control preliminary report. *J. Clin. Biochem. Nutr.*, 74(2), 141-145 (2024). doi: 10.3164/jcbrn.23-52

特許

1. 太田昭一郎 他. Method for detection of idiopathic interstitial pneumonia. 米国 US8420310.
2. 太田昭一郎 他. Method for detection of idiopathic interstitial pneumonia. ヨーロッパ EP2295599.
3. 太田昭一郎 他. 特発性間質性肺炎の検出方法, 日本国第 5717178 号.

4. 太田昭一郎 他. アトピー性皮膚炎の検出方法および予防・治療剤のスクリーニング方法, 日本国第 5522717 号.
5. 太田昭一郎 他. 非特発性間質性肺炎の治療薬のスクリーニング方法, 日本国第 5632994 号.
6. 太田昭一郎 他. SCCA2 濃度測定によるアレルギー疾患の検査方法, 日本国第 5750646 号.
7. 太田昭一郎 他. 慢性副鼻腔炎の検出方法, 日本国第 5871228 号.
8. 太田昭一郎 他. Antibody capable of binding to specific region of periostin, and method of measuring periostin using the same, 米国 US9347954.
9. 太田昭一郎 他. Antibody capable of binding to specific region of periostin, and method of measuring periostin using the same, ヨーロッパ EP2754672.
10. 太田昭一郎 他. ペリオスチンの特定領域に結合する抗体及びこれを用いたペリオスチンの測定方法, 日本国第 6183809 号.
11. 太田昭一郎 他. Method for screening for a therapeutic agent for idiopathic interstitial pneumonia, 米国 US9482676.
12. 太田昭一郎 他. Method for detecting chronic sinusitis, ヨーロッパ EP2775303.
13. 太田昭一郎 他. Method for detecting chronic sinusitis, 米国 US9625451.
14. 太田昭一郎 他. 慢性副鼻腔炎の検出方法, 日本国第 5871228 号.
15. 太田昭一郎 他. アトピー性角結膜炎の検出方法, 日本国第 6381013 号.
16. 太田昭一郎 他. 試料に含まれるペリオスチンの測定試薬、ペリオスチン測定用前処理剤、ペリオスチン測定方法及びペリオスチン測定の感度の改善方法, 日本国第 7006599 号.

所属学会

1. 日本臨床検査医学会
2. 日本臨床化学会
3. 日本免疫学会
4. 日本アレルギー学会

研究費獲得状況

1. 文部科学省科学研究費（基盤研究 C）, 包括的線維化疾患診断を目指したペリオスチン測定システムの開発, 2020 年～2024 年度, 研究代表者

氏名（役職）

緒方勝也（教授）

研究概要

手内筋群の巧緻運動の神経基盤を神経生理学的に明らかにする研究

ヒトの手指巧緻運動は非常に精密な制御を受けているが、一次運動野から皮質脊髄路を経て手内筋群に至る神経興奮性をどのように協調させているのか解明は不十分である。一次運動野を経頭蓋磁気刺激を用いて手内筋の応答を評価すると各筋で刺激毎の応答が変動するだけでなく、手内筋間の応答も一様ではないことがわかる。これらの手内筋群の興奮性制御の神経基盤を経頭蓋磁気刺激、脊髄興奮性をみる F 波、脳波などを用いて明らかにしていく。

一次運動野に対する経頭蓋磁気刺激と経頭蓋交流電流刺激の同期刺激の研究

一次運動野の経頭蓋磁気刺激と経頭蓋交流電流刺激の相互作用に関する研究を行った。経頭蓋交流電流刺激は 10 Hz, 20 Hz での刺激を行い、交流波形の山あるいは谷といった位相に合わせて経頭蓋磁気刺激を行うと 20 Hz では変化せず、10 Hz で効果が増加することが明らかとなった。これより、皮質機能のより効果的な賦活法の開発を目指す。

バイノーラルビートによる聴覚誘発脳磁界反応の計測（九州大学大学院検査技術学分野 重藤寛史 教授, 九州大学大学院人文科学研究院 山田絵美 助教との共同研究）

健常成人を対象として、聴覚性幻覚の 1 つであるバイノーラルビートに特徴的な脳活動を脳磁図で評価する。脳磁図は高精度な信号源推定が可能であり、バイノーラルビートが生じる際の両側側頭葉を中心とする大脳皮質活動、および両側側頭葉の相互作用を詳細に検討し、その神経基盤を明らかにする。また自律神経変調の可能性が指摘されており、バイノーラルビートによる心拍変動が生じる際に特徴的な脳活動が観察されるか検討する。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Maekawa T, Kuroki T, Tanaka M, Ogata K, Yamasaki T, Matsubara T, Tobimatsu S. Effects of spatially filtered fearful faces and awareness on amygdala activity in adults with autism spectrum disorder: A magnetoencephalography study. *Neurosci. Lett.*, 800, 137135 (2023).
2. Tanaka M, Yamada E, Yamasaki T, Fujita T, Nakaniwa Y, Ogata K, Nakazono H, Maekawa T, Tobimatsu S. Asynchronous neural oscillations associated with subliminal affective face priming in autism spectrum disorder. *Neuroreport*, 34, 150–155 (2023).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. Ogata K. Sensorimotor integration and its modulation by non-invasive neuromodulation.
第 53 回日本臨床神経生理学会学術大会（福岡）2023/12/1
2. 緒方勝也, 松野豊, 平田大勝, 池田拓郎, 後藤純信. 正中神経と尺骨神経同時刺激による手内筋 F 波は TMS で促通する. 第 53 回日本臨床神経生理学会学術大会（福岡）2023/12/1

所属学会

1. 日本臨床神経生理学会
2. 日本神経学会
3. 日本内科学会
4. 日本生体医工学会
5. 日本リハビリテーション医学会
6. 日本てんかん学会
7. 日本作業療法研究学会
8. 認知神経科学会
9. Society for Neuroscience
10. Institute of Complex Medical Engineering

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本臨床神経生理学会代議員、教育委員会委員、認定試験問題作成委員
2. 日本生体医工学会九州支部理事
3. Institute of Complex Medical Engineering 評議員

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C, 脳状態依存刺激を活用した手指分離運動の神経基盤解明とリハビリへの応用, 2021~2024 年度, 研究代表者
2. 基盤研究 B, 運動野に可塑性を誘導する新規非侵襲的脳刺激法の開発: その神経基盤と臨床応用, 2022~2026 年度, 研究分担者
3. 基盤研究 C, てんかん脳における興奮抑制平衡維持メカニズムの解明と個別治療への応用, 2023~2026 年度, 研究分担者

氏名（役職）

梶岡俊一（教授）

研究概要

平滑筋の収縮弛緩に関する研究、幹細胞治療の研究、尿細菌叢の研究

平滑筋の収縮弛緩に関する研究を、基礎から臨床に関連して幅広く検討を行っている。今年度は特に、精囊、尿道の生理学的機能を明らかにした。さらに今年度は、幹細胞治療では、歯肉幹細胞を用いての骨化誘導、3D バイオプリンターへの適応に成功し、論文化した。また、尿細菌叢の研究では、腎癌の腫瘍マーカーとして、尿細菌叢が用いられることの可能性を展開したのに加え、邦人の健常者コントロールとしての尿細菌叢のサンプル採取を増やした。

著書

1. ナースのための薬の基礎知識（分担）
2. ナーシンググラフィカ看護薬理学（分担）

原著論文・総説

【原著論文】

1. Toyoda M, Fukuda T, Fujimoto R, Kawakami K, Hayashi C, Nakao Y, Watanabe Y, Aoki T, Shida M, Sanui T, Taguchi M, Yamamichi K, Okabe A, Okada T, Oka K, Nakayama K, Nishimura F, Kajioka S. Scaffold-free bone-like 3D structure established through osteogenic differentiation from human gingiva-derived stem cells. *Biochem. Biophys. Rep.*, 38, 101656 (2024). doi: 10.1016/j.bbrep.2024.
2. Nagakura Y, Hayashi M, Kajioka S. Analysis of Japanese nationwide health datasets: association between lifestyle habits and prevalence of neuropathic pain and fibromyalgia with reference to dementia-related diseases and Parkinson's disease. *Scand. J. Pain*, 23(4), 662-669 (2023). doi: 10.1515/sjpain-2023-0010.
3. Lee K, Shiota M, Takamatsu D, Ushijima M, Blas L, Okabe A, Kajioka S, Goto S, Kinoshita F, Matsumoto T, Monji K, Kashiwagi E, Inokuchi J, Oda Y, Eto M. Correlation between extended pelvic lymph node dissection and urinary incontinence at early phase after robot-assisted radical prostatectomy. *Int. J. Urol.*, 30(4), 340-346 (2023).
4. Okabe A, Yokomizo A, Takei M, Shiota M, Morooka K, Eto M, Kajioka S. 間質性膀胱炎/膀胱痛症候群の尿流動態検査を用いた解析. *日本排尿機能学会誌*, 第 33 巻第 2 号 (2024).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 梶岡俊一, 岡部彩美, 岡田達憲, 三井烈, 橋谷光. ヒト精囊の生理学的機能の解明. 第 65 回日本平滑筋学会総会 (東京) 2023/8/7
2. Kajioaka S, Okabe A, Okada T, Shiota M, Yokomizo A, Takei M, Eto M. A potential tumor-marker from urinary microbiota-focusing on renal cell carcinoma. 第 82 回日本癌学会学術集会 (横浜) 2023/9/21-9/23
3. 岡田達憲, 岡部彩美, 江藤正俊, 梶岡俊一. ヒト精囊平滑筋の生理学的機能の解明. 第 76 回日本薬理学会西南部会 (那覇) 2023/10/7

【シンポジウム】

1. 岡部彩美, 横溝晃, 武井実根雄, 塩田真己, 諸岡健一, 江藤正俊, 梶岡俊一. AI と医工連携が拓く排尿障害の新たな治療展開」ウロダイナミックスタディの解析を用いた間質性膀胱炎・膀胱痛症候群診断システムの開発. 第 30 回日本排尿機能学会 (千葉) 2023/9/7-9/9

依頼講演・招待講演 他

【招待講演】

1. 梶岡俊一, 「排尿障害治療薬 その 1」 歯科医? 生理学? 薬理学? からみた排尿障害治療薬, 福岡泌尿器科医の集い 2024/3/8

特許

1. トロポニン含有医薬品組成物 — 平滑筋へのトロポニン収縮メカニズム導入による、種々の平滑筋疾患の克服 —
申請者名 : 梶岡俊一
特許申請日 : 平成 21 年 7 月 14 日
特許取得日 : 平成 23 年 2 月 3 日
特許出願番号: 2009-165881

所属学会

1. 日本歯科麻酔学会
2. 日本薬理学会
3. 日本小児集中治療研究会
4. 日本生理学会
5. 日本平滑筋学会

6. 日本泌尿器科学会
7. 日本排尿機能学会
8. 日本癌学会
9. 日本臨床薬理学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本薬理学会代議員
2. 日本生理学会評議員
3. 日本平滑筋学会評議員
4. アレキサンダーフォンボルト奨学金日本支部協会会員
5. オックスフォード大学同窓会日本支部会員

研究費獲得状況

1. 基盤研究 (B) , 乳歯歯髄幹細胞によるヒルシュスプルング病と類縁疾患の病因解明および根治療法の開発, 2023~2025 年度, 研究分担者
2. 基盤研究 (C) , 下部尿路における微小収縮-感覚連関の生理および病態意義, 2023~2025 年度, 研究分担者
3. 挑戦的研究 (萌芽) , 2022~2023 年度, 研究分担者

氏名（役職）

岸拓弥（教授）

研究概要

循環恒常性制御における脳の役割に関する研究

「心不全は脳によるロバスティックな生命維持システムの不全である」という概念創出ならびに「脳を治療標的とする革新的慢性心不全治療開発」に関する検討を行っている。今年度は、引き続き循環動態数理モデルを用いたシミュレーションにより、圧受容器反射による脳の血圧から交感神経への変換アルゴリズム異常に対する介入として、アストロサイトの水チャネル活性化が有効であることを明らかにした。これより、新たな心不全治療標的の探索及び介入手段開発への展開が期待されている。

運動による高血圧改善効果のメカニズム解明とその臨床応用（国立障害者リハビリテーションセンターとの共同研究）

運動の高血圧改善効果を身体への力学的刺激で再現するという独創的な手法により、その背景となる分子メカニズムを明らかにし、臨床応用・展開を試みる。今年度は自然発症高血圧ラットで得られた、運動によるアストロサイトへのメカノストレスによる交感神経抑制作用のデータを元に前臨床試験まで実施し *Nature Biomed Engineer* 誌に掲載された。この成果は、高血圧治療における運動療法の最適化と擬似運動療法開発の科学的基盤の確立に繋がる。

高血圧治療アプリに関する研究（オムロンヘルスケアとの共同研究）

高血圧患者の行動変容を促し降圧効果を発揮できる高血圧アプリの開発を行っており、IUHW オープンイノベーションセンターでのプロジェクトに採択された。今年度は、高邦会高木病院高血圧・心不全センター外来にてパイロット研究を実施し、有効な結果が得られた。その結果は *Hypertension Research* 誌に掲載された。来年度は前向き無作為割付介入研究を実施し、高血圧治療アプリ開発が期待されている。

心不全治療におけるビッグデータ解析

日本・スウェーデン・アメリカ・英国で行われた、心不全薬物治療におけるビッグデータ解析研究（EVOLUTION HF）において、日本の研究責任者を務めた。ガイドラインに準じた治療が十分になされておらず、そのことが心血管イベントの抑制が不十分になっているだけでなく医療経済的にも問題であることを明らかにし、*JACC HF* 誌に掲載された。

医学系学会における SNS 活用の意義

日本循環器学会は日本医学系学会では突出した SNS 活用を行っており、情報広報部会長と

してその責任者をしており、その有効性について研究を行っている。今年度は学術集会における twitter の拡散にインフルエンサーの役割が重要であることや、学会雑誌に掲載される論文を twitter 投稿することによる引用回数の増加について論文を発表した。来年度は引き続き学会の広報活動における twitter の役割について研究を行い、“Tweet the Meeting”を戦略的に行うための方法について他学会をリードする役割を担う。

維持透析患者の予後予測因子探索（高邦会高木病院腎臓内科との共同研究）

高邦会高木病院腎臓内科での維持透析患者における予後予測因子探索を高邦会高木病院腎臓内科の北島医師（大学院生）の学位論文研究として指導し、学位論文として *Internal Medicine* 及び *International Heart Journal* 誌に掲載された。

維持透析患者の心血管イベント発症予測因子探索（高邦会高木病院腎臓内科・整形外科との共同研究）

高邦会高木病院腎臓内科での維持透析患者における心血管イベント発症予測因子探索を高邦会高木病院腎臓内科の北島医師（大学院生）の学位論文研究として指導している。今年度はデータベース作成を行った。来年度は詳細な解析及び論文作成を行う。

維持透析患者の予後における NSAIDs・アスピリン服用と相関（高邦会高木病院腎臓内科・整形外科との共同研究）

高邦会高木病院腎臓内科での維持透析患者の予後における NSAIDs・アスピリン服用との相関関係について、高邦会高木病院整形外科の吉川医師（大学院生）の学位論文研究として指導している。今年度はデータベース作成を行った。来年度は詳細な解析及び論文作成を行う。

健診センター受診者における糖尿病新規発症予測因子の探索（高邦会高木病院予防医学センターとの共同研究）

高邦会高木病院予防医学センター受診者において、糖尿病新規発症予測因子の探索を高邦会高木病院予防医学センターの南医師（大学院生）の学位論文研究として指導している。今年度はデータベース作成を行った。来年度は詳細な解析及び論文作成を行う。

転院患者を対象としたカルバペナム耐性腸内細菌スクリーニングの意義（高邦会高木病院呼吸器内科との共同研究）

高邦会高木病院呼吸器内科において、転院患者を対象としたカルバペナム耐性腸内細菌スクリーニングの意義に関する研究を高邦会高木病院呼吸器内科の川浦医師（大学院生）の学位論文研究として指導し、学位論文として *Archives of Epidemiology & Public Health Research* 誌に刊載された。

著書

1. 岸拓弥. 脳からみる心腎連関機序. 循環器内科, 科学評論社, 東京, 94 巻 2 号, p148-151 (2023). 分担著者
2. 岸拓弥. 心臓の収縮力と拍動. Rp+レシピプラス, 南山堂, 東京, 23 巻 1 号 (2023). 分担著者
3. 岸拓弥. 学会活動における SNS の活用と留意点—日本循環器学会の取り組み—. 日本外科学会雑誌, 日本外科学会, 東京, p17-21 (2023). 分担著者
4. 岸拓弥. 右房圧をガイトン理論で考える. 心エコー, 文光堂, 24 巻 12 号 (2023). 分担著者

原著論文・総説

【原著論文】

1. Kawaura F, Kishi T, Yamamoto T, Nakayama S, Goto T, Tsurusawa R, Katagiri T, Yamanouchi K, Matsuo A, Kobayashi-Watanabe N, Imamura T, Hirooka Y, Takagi K, Umemura T, Fujimoto K, Hayashi S, Takamori A. Age distribution and disease severity of COVID-19 patients continued to change in a time-dependent manner from May 2021 to April 2022 in the regional core hospital in Japan. *Drug. Discov. Ther.*, 17(1), 60-65 (2023).
2. Kitajima A, Kishi T, Yamanouchi K, Hirooka Y, Toda S, Takamori A, Fujimoto K, Kishi C, Tomiyoshi Y. A retrospective analysis of risk factors for mortality during hemodialysis at a general hospital that treats comprehensive diseases. *Intern. Med.*, 62(8), 1117-1121 (2023).
3. Suzuki T, Kishi T, Ishida M, Rewley J, Node K, Mizuno A. The time trend of information seeking behavior about salt reduction using Google Trends: infodemiological study in Japan. *Hypertens. Res.*, 46(8), 1886-91 (2023).
4. Bozkurt B, Savarese G, Eryd SA, Bodegård J, Cleland JGF, Khordoc C, Kishi T, Thuresson M, Vardeny O, Zhang R, Lund LH. Mortality, outcomes, costs, and use of medicines following a first heart failure hospitalization. *JACC Heart Fail.*, 11(19), 1320-32 (2023).
5. Suzuki T, Mizuno A, Kishi T, Rewley J, Matsumoto C, Sahashi Y, Ishida M, Sanada S, Fukuda M, Sugimoto T, Hirano M, Node K. Impact of tweet content on the number of retweets - "tweet the meeting 2022" -. *Circ. Rep.*, 5(7), 306-10 (2023).
6. Kawaura F, Kishi T, Takamori A, Yamanouchi K, Imamura T, Kobayashi-Watanabe N, Matsuo A, Takagi K, Umemura T, Hirooka Y, Hayashi S. Clinical significance of stool screening for carbapenem-resistant enterobacteriaceae in hospitalized aged patients transferred from other hospitals in Japan. *Arch. Epidemiol. Pub. Health Res.*, 2(3), 217-

233 (2023).

7. Murase S, Sakitani N, Maekawa T, Yoshino D, Takano K, Konno A, Hirai H, Saito T, Tanaka S, Shinohara K, Kishi T, Yoshikawa Y, Sakai T, Ayaori M, Inanami H, Tomiyasu K, Takashima A, Ogata T, Tsuchimochi H, Sato S, Saito S, Yoshino K, Matsuura Y, Funamoto K, Ochi H, Shinohara M, Nagao M, Sawada Y. Interstitial-fluid shear stresses induced by vertically oscillating head motion lower blood pressure in hypertensive rats and humans. *Nat. Biomed. Eng.*, 7(11), 1350-1373 (2023).

【総説】

1. Shibata S, Kobayashi K, Tanaka M, Asayama K, Yamamoto E, Nakagami H, Hoshide S, Kishi T, Matsumoto C, Mogi M, Morimoto S, Yamamoto K, Mukoyama M, Kario K, Node K, Rakugi H. COVID-19 pandemic and hypertension: an updated report from the Japanese Society of Hypertension project team on COVID-19. *Hypertens. Res.*, 46(3), 589-600 (2023).
2. Matsumoto C, Shibata S, Kishi T, Morimoto S, Mogi M, Yamamoto K, Kobayashi K, Tanaka M, Asayama K, Yamamoto E, Nakagami H, Hoshide S, Mukoyama M, Kario K, Node K, Rakugi H. Long COVID and hypertension-related disorders: a report from the Japanese Society of Hypertension Project Team on COVID-19. *Hypertens. Res.*, 46(3), 601-619 (2023).
3. Kishi T. Clarification of hypertension mechanisms provided by the research of central circulatory regulation. *Hypertens. Res.*, 46(8), 1908-16 (2023).

【Editorial comment】

1. Kishi T. Importance of plasma aldosterone concentrations as a clinical indicator of nocturnal hypertension in primary aldosteronism. *Hypertens. Res.*, 49(6), 2245-2246 (2023).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 岸拓弥. 高齢者の降圧治療は厳格に (パネルディスカッション). 日本循環器病予防学会総会 (鹿児島) 2023/6/4
2. 岸拓弥. 慢性心不全の GDMT は目標ではなく我々のミッション. 日本心不全学会学術集会ランチョンセミナー (横浜) 2023/10/7
3. 岸拓弥. Society5.0時代の医療を考えたら見えてくる薬理学のシンギュラリティ (大会長講演). Digital Pharmacology Conference (東京) 2023/10/14

【シンポジウム】

1. 岸拓弥. アンチエイジングを軸とするコミュニティヘルスケアで目指す「住むだけで幸せな町」. 日本抗加齢医学会総会（東京）2023/6/11
2. 岸拓弥. 病院や学会広報は誰に何を届けるのか？を考えると見えてくる SNS 活用. 日本医療マネジメント学会総会（東京）2023/6/23
3. 岸拓弥. **Sympathetic nervous system and hypertension**. 日本心血管インターベンション治療学会学術集会（福岡）2023/8/4
4. 岸拓弥. 急性心不全治療はかっこよくなつてできない. 日本心臓病学会学術集会（東京）2023/9/10
5. 岸拓弥. 脳グリンパティックシステム不全による交感神経調節不全が高血圧の原因である. 日本高血圧学会総会（大阪）2023/9/17
6. 岸拓弥. **Generative AI** は高血圧診療を変えるか？ 日本高血圧学会総会（大阪）2023/9/17
7. 岸拓弥. 多臓器連関による循環恒常性維持システムの中心は脳である. 日本心不全学会学術集会（横浜）2023/10/6

依頼講演・招待講演 他

【依頼講演】

1. 岸拓弥. 慢性心不全ステージ分類を人生と EF で考えると見えてくる SGLT2 阻害薬の有用性. **Heart Failure Web Seminar**（久留米）2023/4/11
2. 岸拓弥. 全身疾患として考える腎性貧血. 腎性貧血セミナー（鳥栖）2023/4/17
3. 岸拓弥. 今宵は 2023 年に実践したい高血圧治療を語り合います. 世界高血圧の日セミナー（小郡）2023/5/17
4. 岸拓弥. 慢性心不全ステージ分類を人生と EF で考えると見えてくる SGLT2 阻害薬の有用性. ジャディアンズ勉強会（鹿児島）2023/5/26
5. 岸拓弥. 慢性心不全ステージ分類を人生と EF で考えると見えてくる SGLT2 阻害薬の有用性. ジャディアンズ Web セミナー（岐阜）2023/6/7
6. 岸拓弥. 今宵は 2023 年に実践したい高血圧治療を語り合います. 伊万里地区高血圧セミナー（伊万里）2023/6/8
7. 岸拓弥. 全身疾患として考える腎性貧血. 腎性貧血勉強会（久留米）2023/6/29
8. 岸拓弥. 今宵は 2023 年に実践したい高血圧治療を語り合います（ノバルティス）（久留米）2023/9/29
9. 岸拓弥. HFrEF 治療におけるベリキューボの役割を心不全ステージ分類で考える. ベリイシグアト福岡セミナー（福岡）2023/10/26
10. 岸拓弥. ヒトの心不全と糖尿病の治療を時間軸で考えてみました. ワンヘルス循環器・糖尿病セミナー（福岡）2023/11/1

11. 岸拓弥. 全身疾患として考える腎性貧血. 腎性貧血勉強会（福岡）2023/11/14

所属学会

1. 日本循環器学会
2. 日本内科学会
3. 日本心臓病学会
4. 日本高血圧学会
5. 日本心不全学会
6. 日本循環制御医学会
7. 日本高血圧関連疾患モデル学会
8. 日本心血管内分泌代謝学会
9. 日本抗加齢医学会
10. 日本薬理学会
11. 日本生理学会
12. 日本糖尿病学会
13. 日本内分泌学会
14. 日本緩和医療学会
15. 日本血管不全学会
16. 日本心臓脈管作動物質学会
17. 日本循環器病予防学会
18. 日本腎臓学会
19. 日本性差医学会
20. American Heart Association
21. American Physiological Society
22. European Society of Cardiology
23. International Society of Cardiovascular Pharmacotherapy Japan Section
24. International Society for Heart Research Japan Section

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本循環器学会（Fellow、情報広報部会部会長、総務委員会委員、学術集会運営委員会委員、予防委員会委員、歴史編纂ワーキング長、総務委員会5カ年計画検討部会（予防・国民への啓発サブワーキンググループサブリーダー）、九州支部評議員・監事・あり方委員会委員・予防委員会委員・ダイバーシティ委員会委員
2. 日本心不全学会評議員・広報委員会幹事
3. 日本高血圧学会（評議員、Fellow、Dx推進ワーキング長、Hypertension Research編集委員会、広報情報委員会委員、ダイバーシティ推進委員会委員、学会活性化ワーキン

グ委員

4. 日本血管不全学会理事
5. 日本循環制御医学会理事
6. 日本抗加齢医学会評議員
7. 日本心脈管作動物質学会評議員
8. 日本心血管内分泌代謝学会（幹事・評議員）
9. 日本循環器病予防学会評議員
10. 日本臨床生理学会評議員
11. 日本産科麻酔学会 SNS 活用ワーキングアドバイザー
12. 日本腎臓学会広報委員会アドバイザー
13. American Heart Association, Fellow
14. European Society of Cardiology, Fellow
15. International Society of Cardiovascular Pharmacotherapy Japan Section, Fellow
16. International Society for Heart Research Japan Section, Fellow

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C, 脳グリンパティックシステムに着目する心不全治療開発及び運動療法最適化への基盤研究, 2023～2025 年度, 研究代表者
2. AMED「予防・健康づくりの社会実装ヌムけた研究開発基盤整備事業（ヘルスケア社会実装基盤整備事業）」, デジタル技術を活用した生涯にわたり血圧管理に関する指針の研究開発, 2022～2024 年度, 分担研究者

氏名（役職）

吉良潤一（教授）

研究概要

中枢神経脱髄疾患における新規ノド抗体の探索とノド抗体介在性脱髄機序の解明（福岡中央病院脳神経センター及び九州大学生体防御医学研究所との共同研究）

中枢神経脱髄疾患である多発性硬化症(multiple sclerosis, MS)は、中枢神経を侵す脱髄疾患では最も多く、世界に約 300 万人の患者がいる。国指定難病となっており、根治療法はない。疾患修飾薬により再発は減るものの、慢性進行型には無効である。剖検例の病理学的検索で、ランビエ絞輪部の伸長を示すノドパッチがみられるが、その原因は不明である。視神経脊髄炎(neuromyelitis optica, NMO)では、aquaporin 4 (AQP4)や myelin oligodendrocyte glycoprotein (MOG)に対する自己抗体がみられる例が多いが、seronegative NMOSD も存在し、それらは有効な治療法がない。私たちは、これまでに中枢神経と末梢神経の両者を侵す中枢末梢連合脱髄症(combined central and peripheral demyelination, CCPD)において、ランビエ傍絞輪部に存在する neurofascin (NF) 155 に対する IgG4 クラスの自己抗体が存在すること、抗 NF155 抗体陽性例では CIDP が起こるとともに約 90%で視覚惹誘発電位検査での異常がみられることを報告している。そこで、中枢神経脱髄疾患である MS や seronegative NMO、及び抗 NF155 抗体陰性の CCPD 患者血清を用いて視神経標本の組織免疫染色で新規ノド抗体を見出し、その責任抗原の同定に成功した（米国特許出願準備中）。今後、抗体陽性例を集積し、臨床像の解明を目指すとともに、同抗体をマウスに視神経内注入したり、責任抗原でマウスを免疫したりすることで、病態の再現を行い、病原性を証明する予定である。

末梢神経脱髄疾患における新規ノド抗体の探索とその責任抗原の同定（九州大学神経内科学分野との共同研究）

慢性炎症性脱髄性多発神経炎(chronic inflammatory demyelinating polyneuropathy, CIDP)は、末梢神経を侵す最も代表的な脱髄疾患である。国指定の難病で根治療法はない。私たちは、末梢神経や後根神経節を用いた免疫組織染色により多数の CIDP 患者血清をスクリーニングし、ランビエ傍絞輪部に結合する新規ノド抗体を発見し、その責任抗原が LGI4 であることを報告した（特許出願中）。抗 LGI4 抗体陽性 CIDP 患者の臨床像と腓腹神経生検所見を解明し、抗 LGI4 抗体を用いた受け身移入（患者 IgG のマウス坐骨神経注入）により、ランビエ絞輪の破壊を証明できた（論文投稿中）。現在、抗 LGI4 抗体陽性例の免疫遺伝学的背景を次世代シーケンスで解析している。

進行型多発性硬化症におけるグリオパッチ機序の解明と治療開発（九州大学神経内科学分野及び横浜市立大学神経内科学・脳卒中医学教室との共同研究）

進行型 MS の剖検標本でオリゴデンドログリアの connexin (Cx) 32/47 が脱髄範囲を越えて広汎に脱落していることを報告した。そこでオリゴデンドログリア特異的・時限的に Cx47 を脱落させることができる inducible conditional knockout (icKO) マウスを作成し、MS の動物モデルである実験的自己免疫性脳脊髄炎(experimental autoimmune encephalomyelitis, EAE)を誘導した。すると、急性期および慢性期 EAE が顕著に増悪し、脱髄とグリア炎症が進行性に悪化した。これにより進行型 MS の動物モデルを作成できた。したがって、オリゴデンドログリアの Cx47 はアストログリアの Cx43 と gap junction (GJ)チャネルを形成してエネルギー源の供給やカリウムイオンのバッファリングを通じて脳の恒常性を維持しているばかりでなく、脳内の炎症環境を制御していることを初めて示すことができた。一方、アストログリアの Cx43 は、急性期には広範に脱落するが、慢性期にはアストログリオシスを反映して顕著に発現が亢進する。そこで、大脳皮質アストログリア特異的・時限的に Cx43 を脱落させることができる icKO マウスを作成し、EAE を誘導したところ脱髄炎が著明に軽減した。Cx43 は、酸化ストレス時などに低分子量の truncated translational isoform が産生される。これらはチャネル機能を持たないが、非チャネル機能として RNA や DNA を結合できる。私たちは、グリア細胞間で情報伝達に重要な役割を果たしている Cx43 や Cx47 などのグリア Cx が、MS の動物モデルである EAE を起こしたマウスの末梢血から精製したエクソソームにも発現しており、グリア Cx を発現したエクソソームの量が EAE の重症度によって変動することを発見した。EAE 発症時には末梢血でエクソソーム中の Cx43 低分子量 isoform である GJA1-29k が著増し、Cx43 icKO マウスでは EAE 時にもその増加が消失していた。実際に MS や類縁疾患の視神経脊髄炎(neuromyelitis optica, NMO)の患者においても、末梢血由来エクソソームにおいて急性増悪時には GJA1-29k が有意に増加し GJA1-11k が著減することを発見した(論文作成中)。グリア由来エクソソームは結合したマイクロ RNA (miRNA)などを、血液脳関門を越えて免疫細胞等に伝搬できることから、GJA1-29k 含有グリオゾームは脱髄炎の増幅や広範化に関わっていると考えた。今後、Cx47 icKO マウスや Cx43 icKO マウス、及び脱髄炎患者末梢血由来エクソソーム miR の解析を通じて、炎症性グリアが脱髄炎を増悪させる機序を解明し、グリア Cx を標的とする進行型 MS の全く新しい治療法を開発する。

多系統萎縮症モデルにおけるグリオパチー機序の解明と治療開発(九州大学神経内科学分野との共同研究)

多系統萎縮症(multiple system atrophy, MSA)はオリゴデンドログリアに α -synuclein (α -syn)が蓄積し脱髄と神経脱落を起こす。治療法の全くない国指定難病である。多数の MSA-C(小脳型)の病理検討により初期病巣からオリゴデンドログリア Cx32 がランビエ絞輪で脱落、次いでアストログリア Cx43 が失われ、進行期にはオリゴデンドログリア細胞体の Cx47 が喪失する一方、アストログリア Cx43 が発現亢進し、ヘミチャネル化することを見出した。そこで凝集性の強いヒト変異 α -SynA53T を Tet-off 系で任意の期間オリゴデンドログリア

に発現できるマウス (TetO- α SynA53T Tg/+ マウスと PLP-tTA Tg/+ マウスを交配させた TetO- α SynA53T Tg/+; PLP-tTA Tg/+ マウス) を作成した。本マウスは凝集性の強い A53T 変異 α -syn を Tet-off システムで doxycycline を除くことにより任意の時期に発現させることができる。髄鞘完成期 (8 週齢) から発現させると小脳失調を主徴とし小脳白質・脳幹の脱髄を呈する MSA-C 様病態を示した。このモデルでは病初期からランビエノードでオリゴデンドログリアの Cx32 が脱落し、次いでアストログリアの Cx43 が失われ、進行期にはオリゴデンドログリア細胞体の Cx47 が喪失する一方、アストログリアの Cx43 が再発現した。全脳の RNA のマイクロアレイ解析と脳から単離したミクログリアの single cell RNA sequence により脱髄と軸索脱落に先行して特定のミクログリアクラスターが増加・浸潤していることを見出した。ミクログリアの増殖と維持に不可欠な colony stimulating factor 1 receptor (CSF1R) inhibitor を投与しても、このミクログリアクラスターは残存し、MSA-C 症状がかえって増悪した。今後、synucleinopathy の増悪に寄与しているミクログリアクラスターを標的とした治療開発を行う。また、このモデルでは α -Syn oligomer がオリゴデンドログリアに発現した後に、ニューロンへ transmission することを見出した。中枢神経への移行性の高い Cx43 inhibitor の投与は、MSA-C の臨床・病理所見を有意に軽減した。その際に、 α -Syn oligomer が増加する一方、リン酸化 α -Syn 凝集体が減少することを見出した。したがって、Cx43 inhibitor は α -Syn oligomer による伝搬からリン酸化 α -Syn 凝集体形成に至る過程を阻止することで治療効果を示すと考えた。現在、oligomer による異常 α -Syn のオリゴデンドロサイトからニューロンへの伝搬とリン酸化 α -Syn 凝集体形成プロセスの関連を解析している。

エキソソームが神経変性疾患の病態および疾患進行に与える影響の解明 (福岡中央病院脳神経センター及び九州大学神経内科分野との共同研究)

エキソソームはほとんどの細胞から分泌される直径 30 nm ~ 100 nm 程度の膜小胞である。エキソソームは表面に様々な細胞由来分子を発現するとともに、その中には miRNA も含まれ、遠隔的な細胞間情報伝達に重要な役割を果たしている。また、エキソソームは血液脳関門を容易に通過することから、中枢神経と末梢組織の双方向性の情報伝達にも大きな役割を担うと考えられる。私たちは、アルツハイマー病 (Alzheimer disease, AD) の動物モデルの末梢血から精製したエキソソームには、アミロイドベータ ($A\beta$) やリン酸化タウ (p-tau) が含まれ、野生型と比較してエキソソームに含有されている miRNA に違いがあることを見出した。AD 患者でも同様にエキソソーム miR が健常高齢者とは大きく異なっており、AD 診断の新しいバイオマーカーになることを明らかにした (米国特許出願中)。また、私たちは、上記の MSA-C モデルマウスで脳幹・小脳や脊髄などの脱髄が起こる部位でグリア Cx が広汎に脱落することを見出し、グリア Cx が本症における脱髄の発生に重要な役割をもつことを明らかにしている。しかし、AD や MSA 患者において末梢血でグリア Cx を発現したエキソソームの変化が見られるかは不明である。そこで、AD、MSA 等の難治性

神経変性疾患の患者において、末梢血から回収したエクソソームのフローサイメトリーによる表面発現分子の解析、エクソソームの miRNA 解析、超高感度デジタル ELISA (single molecule array, SIMOA) 法による含有物質 (炎症性サイトカイン・ケモカイン、neurofilament L や glial fibrillary acidic protein、myelin basic protein などの神経組織由来分子) の測定を行う。これらの測定結果と、臨床・検査所見との関連を検討することで、エクソソームの神経変性疾患の病態進行における役割、疾患バイオマーカーとしての意義を明らかにする。

著書

1. 多発性硬化症・視神経脊髄炎スペクトラム障害診療ガイドライン作成委員会 (吉良潤一を含む). 多発性硬化症・視神経脊髄炎スペクトラム障害診療ガイドライン 2023. 医学書院 (2023) 2023/9/1 刊行
2. 吉良潤一. 多発性硬化症・同心円硬化症. 脳神経内科診断ハンドブック. 下畑亨良 (編), 中外医学社 (印刷中)
3. 吉良潤一. 急性散在性脳脊髄炎. 脳神経内科診断ハンドブック. 下畑亨良 (編), 中外医学社 (印刷中)

原著論文・総説

【原著論文】

1. Zhang X, Kira J, Ogata H, Imamura T, Mitsuishi M, Fujii T, Kobayashi M, Kitagawa K, Namihira Y, Ohya Y, Maimaitijiang G, Yamasaki R, Fukata Y, Fukata M, Isobe N, Nakamura Y. Anti-LGI4 antibody is a novel juxtaparanodal autoantibody for chronic inflammatory demyelinating polyneuropathy. *Neurol. Neuroimmunol. Neuroinflamm.*, 10(2), 1-13 (2023). DOI: 10.1212/NXI.000000000200081
2. Nishimura Y, Masaki K, Matsuse D, Yamaguchi H, Tanaka T, Matsuo E, Hayashida S, Watanabe M, Matsushita T, Sadashima S, Sasagasako N, Yamasaki R, Isobe N, Iwaki T, Kira J. Early and extensive alterations of glial connexins, distal oligodendrogliopathy type demyelination, and nodal/paranodal pathology are characteristic of multiple system atrophy. *Brain Pathol.*, 33, e13131 (2023). DOI: 10.1111/bpa.13131
3. Matsumoto S, Nakahara I, Yasuda A, Ishii A, Kubo M, Yamada K, Okawa M, Nishi H, Miura T, Koike D, Okita S, Aoki M, Tanaka K, Suyama Y, Morioka J, Hasebe A, Tanabe J, Suyama K, Watanabe S, Kuwahara K, Ishihara T, Koyama H, Kira J. Reduced Workflow Times for Reperfusion Therapy for Acute Ischemic Stroke Using a Visual Task Management Application. *Stroke Vasc. Interv. Neurol.*, 0, e000551 (2023). DOI: 10.1161/SVIN.122.000551
4. Narita T, Nakane S, Nagaishi A, Minami N, Niino M, Kawaguchi N, Murai H, Kira J, Shimizu J, Iwasa K, Yoshikawa H, Hatanaka Y, Sonoo M, Shimizu Y, Matsuo H.

- Immunotherapy for ocular myasthenia gravis: an observational study in Japan. *Ther. Adv. Neurol. Disord.*, 16, 1-12 (2023). DOI: 10.1177/17562864231163819
5. Mitsui J, Matsukawa T, Uemura Y, Kawahara T, Chikada A, Porto KJL, Naruse H, Tanaka M, Ishiura H, Toda T, Kuzuyama H, Hirano M, Wada I, Ga T, Moritoyo T, Takahashi Y, Mizusawa H, Ishikawa K, Yokota T, Kuwabara S, Sawamoto N, Takahashi R, Abe K, Ishihara T, Onodera O, Matsuse D, Yamasaki R, Kira J, Katsuno M, Hanajima R, Ogata K, Takashima H, Matsushima M, Yabe I, Sasaki H, Tsuji S. High-dose ubiquinol supplementation in multiple-system atrophy : a multicentre, randomised, double-blinded, placebo-controlled phase 2 trial. *eClinicalMedicine*, 101920, 1-13 (2023). <https://doi.org/10.1016/j.eclinm.2023.101920>
 6. Ichimiya Y, Chong PF, Sonoda Y, Tocan V, Watanabe M, Torisu H, Kira R, Takahashi T, Kira J, Isobe N, Sakai Y, Ohga S. Long-lasting pain and somatosensory disturbances in children with myelin oligodendrocyte glycoprotein antibody-associated disease. *Eur. J. Pediatr.*, (2023). <https://doi.org/10.1007/s00431-023-04989-z>
 7. Leppert D, Watanabe M, Schaedelin S, Piehl F, Furlan R, Gastaldi M, Lambert J, Evertsson B, Fink K, Matsushita T, Masaki K, Isobe N, Kira J, Benkert P, Maceski A, Willemse E, Oechtering J, Orleth A, Meier S, Kuhle J. Granulocyte activation markers in cerebrospinal fluid differentiate acute neuromyelitis spectrum disorder from multiple sclerosis. *J. Neurol. Neurosurg. Psychiatry*, 0, 1-12 (2023). doi:10.1136/jnnp-2022-330796
 8. Nagata S, Yamasaki R, Takase EO, Iida K, Watanabe M, Masaki K, Wijering MHC, Yamaguchi H, Kira J, Isobe N. Igaratimod ameliorates the severity of secondary progressive multiple sclerosis in model mice by directly inhibiting IL-6 production and Th17 cell migration via mitigation of glial inflammation. *Biology*, 12, 1217 (2023). <https://doi.org/10.3390/biology12091217>
 9. Irie T, Matsuda T, Hayashi Y, Matsuda-Ito K, Kamiya A, Masuda T, Prinz M, Isobe N, Kira J, Nakashima K. Direct neuronal conversion of microglia/macrophages reinstates neurological function after stroke. *Proc. Natl. Acad. Sci. USA*, 120(42), e2307972120 (2023). <https://doi.org/10.1073/pnas.2307972120>
 10. Ko S, Yamasaki R, Okui T, Shiraishi W, Watanabe M, Hashimoto Y, Kobayakawa Y, Kusunoki S, Kira J, Isobe N. A nationwide survey of facial onset sensory and motor neuronopathy in Japan. *J. Neurol. Sci.*, (in press).

【総説】

1. 吉良潤一. 難病に挑む. *国際医療福祉大学学会誌*, 28(1), 1-8 (2023).

【症例報告】

1. Mizuno Y, Uehara T, Nakamura Y, Okadome T, Mukaino T, Koh K, Takiyama Y, Kanbayashi T, Isobe N, Kira J, Murai H, Shigeto H. A case of monozygotic twins with hereditary spastic paraplegia type 4 and epilepsy, of whom only one developed narcolepsy type 1. *J. Sleep Res.*, (in press).

雑誌記事

1. 吉良潤一. 医療顧問エッセー：人生の放課後：世界初の MSA-C モデルで治療ができた. 全国 SCD・MSA 友の会会報 264 号, pp12-15 (2023/8/1 発行).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. Kira J, Maimaitijiang G, Nakamura Y, Sakoda A, Yamato Y, Yanagihara Y, Iwanaga Y, Yamashita K, Yokote A, Haro K, Tobimatsu S, Zhang X, Imamura T. Serum glial fibrillary acidic protein is useful to predict multiple sclerosis disability progression. 第 64 回日本神経学会学術大会 (千葉) 2023/5/31 - 6/3
2. Imamura T, Kira J, Yukitake M, Mitsuishi M, Maimaitijiang G, Zhang X. Plasma/urine exosomal microRNA-203 is a novel least-invasive biomarker for early Alzheimer's disease. 第 64 回日本神経学会学術大会 (千葉) 2023/5/31 - 6/3
3. Maimaitijiang G, Kira J, Sakoda A, Masaki K, Watanabe M, Nagata S, Ozdemir E, Yamasaki R, Isobe N, Zhang X, Imamura T, Nakamura Y. Exosome GJA1-29k is a blood marker for progressive multiple sclerosis reflecting glial inflammation. 第 64 回日本神経学会学術大会 (千葉) 2023/5/31 - 6/3
4. Zhang X, Kira J, Yokote A, Sakoda A, Mishima T, Tsuboi Y, Sato R, Kanda T, Ogata H, Isobe N, Kobayashi M, Kitagawa K, Namihira Y, Ohya Y, Fukata Y, Fukata M, Imamura T, Maimaitijiang G, Nakamura Y. IgG2 autoantibody relates to IVIg response and onion bulb formation in LGI4+ autoimmune nodopathy. 第 64 回日本神経学会学術大会(千葉) 2023/5/31 - 6/3
5. Harada M, Masaki K, Matsuse D, Yamaguchi H, Nishimura Y, Ozdemir E, Tanaka E, Tanaka T, Yamasaki R, Takeuchi H, Taniwaki T, Isobe N, Kira J. A centrally acting connexin hemichannel blocker attenuates multiple system atrophy-cerebellar type. 第 64 回日本神経学会学術大会 (千葉) 2023/5/31 - 6/3
6. Matsuse D, Yamaguchi H, Nishimura Y, Masaki K, Tanaka T, Saiga T, Harada M, Tanaka K, Yamasaki R, Isobe N, Kira J. Identification of a unique microglia population exacerbating multiple system atrophy. 第 64 回日本神経学会学術大会 (千葉) 2023/5/31 - 6/3

7. Nishimura Y, Masaki K, Matsuse D, Yamaguchi H, Tanaka T, Sadashima S, Sasagasako N, Yamasaki R, Honda H, Isobe N, Iwaki T, Kira J. Marked upregulation of GPR17-positive premyelinating oligodendrocytes in multiple system atrophy. 第 64 回日本神経学会学術大会 (千葉) 2023/5/31 - 6/3
8. Masaki K, Nishimura Y, Matsuse D, Yamaguchi H, Tanaka T, Sadashima S, Sasagasako N, Yamasaki R, Isobe N, Iwaki T, Kira J. Early and extensive alterations of glial connexins in multiple system atrophy. 第 64 回日本神経学会学術大会 (千葉) 2023/5/31 - 6/3
9. Ogata H, Abdelhadi A, Zhang X, Yamasaki R, Kira J, Isobe N. Epitope mapping of anti-neurofascin 155 antibodies in a large cohort of autoimmune neuropathy. 第 64 回日本神経学会学術大会 (千葉) 2023/5/31 - 6/3
10. Nagata S, Yamasaki R, Ozdemir E, Kashu K, Matsuo E, Yamaguchi H, Watanabe M, Masaki K, Kira J, Isobe N. Igaratimod blocks glial IL-6 production and Th17 migration in a progressive multiple sclerosis model. 第 64 回日本神経学会学術大会(千葉)2023/5/31 - 6/3
11. Hayashi S, Yamasaki R, Kobayakawa Y, Kira J, Isobe N. Calretinin activates microglia to produce CC-motif ligand 2 relevant to clinical severity of ALS. 第 64 回日本神経学会学術大会 (千葉) 2023/5/31 - 6/3
12. Ozdemir E, Yamasaki R, Nagata S, Watanabe M, Yamaguchi H, Masaki K, Kira J, Takeuchi H, Isobe N. Blocking of astroglial Cx43 hemichannel successfully ameliorates CNS inflammation in MS model mice. 第 64 回日本神経学会学術大会 (千葉) 2023/5/31 - 6/3
13. 岡美希, 飛松省三, 中村優理, 迫田礼子, 山下謙一郎, 横手顕, 波呂敬子, 岩永育貴, 柳原由記, 吉良潤一. 運動誘発電位の臨床的意義の再検討: 運動ニューロン疾患と多発性硬化症との比較研究. 第 64 回日本神経学会学術大会 (千葉) 2023/5/31 - 6/3
14. 戸田裕之, 斎木豊和, 吉良潤一. フィンゴリモドを服用した MS 患者における JCV に対する免疫応答の検討 (中間解析結果). 第 64 回日本神経学会学術大会 (千葉) 2023/5/31 - 6/3
15. 松本省二, 中原一郎, 安田あゆ子, 沖田慎平, 青木満, 盛岡潤, 長谷部明子, 田邊淳, 陶山謙一郎, 渡邊定克, 石原拓磨, 小山裕司, 吉良潤一. タスク管理アプリケーションでチーム医療を効率化し、より迅速な脳卒中治療を実現する. 第 64 回日本神経学会学術大会 (千葉) 2023/5/31 - 6/3
16. 渡邊充, 松尾江梨子, 福元尚子, 田中栄蔵, 小柳文乃, 眞崎勝久, 松下拓也, 吉良潤一, 磯部紀子. フィンゴリモドおよびフマル酸ジメチル使用多発性硬化症患者の疾患活動性関連細胞分画. 第 64 回日本神経学会学術大会 (千葉) 2023/5/31 - 6/3

17. 波呂敬子, 稲水佐江子, 迫田礼子, 横手顕, 岩永育貴, 柳原由記, 中村優理, 山下謙一郎, 松本順太郎, 飛松省三, 吉良潤一. 頸肋による真の神経原性胸郭出口症候群 (**true neurogenic thoracic outlet syndrome; TNTOS**) の 1 例. 第 240 回日本神経学会九州地方会 (久留米) 2023/6/24
18. 今村友裕, 柳原由記, 山下謙一郎, 張旭, グザリアイママティジャン, 満石三喜男, 吉良潤一. アルツハイマー病における血液バイオマーカーの実用化. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会 (成田) 2023/9/3
19. 原田雅也, 眞崎勝久, 松瀬大, 山口浩雄, 西村由宇慈, 高瀬 オズデミール エズギ, 田中栄蔵, 田中辰典, 山崎亮, 竹内英之, 谷脇考恭, 磯部紀子, 吉良潤一. 中枢神経作用コネキシン阻害薬による多系統萎縮症小脳型モデルマウスの治療. 第 35 回日本神経免疫学会学術集会 (東京) 2023/9/13 - 9/15
20. 迫田礼子, 稲水佐江子, 柳原由記, 横手顕, 岩永育貴, 波呂敬子, 山下謙一郎, 中村優理, 飛松省三, 岩田信恵, 吉良潤一. 造影 MRI で両側性顔面神経病変を認めステロイドパルス療法で回復した両側 **Bell** 麻痺の 1 例. 第 241 回日本神経学会九州地方会 (大分) 2023/9/23
21. 高瀬エズギ, 山崎亮, 永田諭, 渡邊充, 山口浩雄, 眞崎勝久, 吉良潤一, 竹内英之, 磯部紀子. アストログリア **Cx43** を標的とした進行型多発性硬化症に対する新規治療法開発. 第 51 回日本臨床免疫学会総会 (東京) 2023/10/5 - 10/7
22. 磯部紀子, 深澤俊行, 富沢雄二, 大橋高志, 櫻井謙三, 千原典夫, 中村優理, 野原千洋子, 佐藤弥生, 神田三智弘, 吉良潤一, **MSERJ study group**. 日本人多発性硬化症患者における疫学調査～日本人集団解析結果. 第 41 回日本神経治療学会学術集会 (東京) 2023/11/3 - 11/5
23. 山下謙一郎, 柳原由紀, 迫田礼子, 横手顕, 波呂敬子, 岩永育貴, 中村優理, 吉良潤一. アルツハイマー病における大脳皮質萎縮と脳機能的結合変化の関連の検討. 第 42 回日本認知症学会学術集会 (奈良) 2023/11/24 - 11/26
24. 横手顕, 迫田礼子, 柳原由紀, 岩永育貴, 中村優理, 山下謙一郎, 波呂敬子, 吉良潤一. 三叉神経髄外根に限局する再発をきたした抗 **AQP4** 抗体陽性視神経脊髄炎の 1 例. 第 242 回日本神経学会九州地方会 (宮崎) 2023/12/9
25. 吉良潤一, 張旭, 緒方英紀, 田代匠, 山下謙一郎, 芹野南美, 迫田礼子, 稲水佐江子, 岩永育貴, 柳原由記, 横手顕, 波呂敬子, 飛松省三, 磯部紀子, 中村優理, **AMED AN 班**. **NF155** 抗体と **LGI4** 抗体が二重陽性の超高齢発症自己免疫性ノドパチー (**AN**). 第 243 回日本神経学会九州地方会 (福岡) 2024/3/2

【国際学会】

1. Ogata H, Abdelhadi A, Zhang X, Tashiro T, Yamasaki R, Kira J, Isobe N. Epitope mapping of anti-neurofascin 155 antibodies in a large cohort of autoimmune nodopathy. 2023

Peripheral Nerve Society Annual Meeting (Copenhagen, Denmark) 2023/6/17 - 20

2. Takase EO, Yamasaki R, Nagata S, Watanabe M, Masaki K, Yamaguchi H, Kira J, Takeuchi H, Isobe N. Connexin hemichannel blockade ameliorates EAE by suppressing glial inflammation. European Charcot Foundation Annual Meeting 2023 (Baveno, Italy) 2023/11/9 - 11/11
3. Ko S, Yamasaki R, Okui T, Shiraishi W, Watanabe M, Hashimoto Y, Kobayakawa Y, Kusunoki S, Kira J, Isobe N. A nationwide epidemiological survey of Facial Onset Sensory and Motor Neuronopathy (FOSMN) in Japan. The 34th International Symposium on ALS/MND (Basel, Switzerland) 2023/12/6 - 12/8
4. Hayashi S, Yamasaki R, Kobayakawa Y, Kira J, Isobe N. Calretinin activates microglia to produce CC-motif ligand 2 relevant to clinical severity of ALS. The 34th International Symposium on ALS/MND (Basel, Switzerland) 2023/12/6 - 12/8
5. Donofrio P, Stascheit F, Gorson K, Hofman E, Karam C, Kira J, Kostera-Pruszczyk A, Léger JM, Nobile-Orazio E, Attarian S, Markov M, Tse A, Lowe M, Lewis R. Diagnostic Adjudication of Chronic Inflammatory Demyelinating Polyneuropathy in the ADHERE trial: Updates on the first 200 cases. Arbeitstagung NeuroIntensivMedizin (ANIM) 2024 (Kassel, Germany) 2024/2/1 - 2/3
6. Donofrio P, Rath J, Gorson K, Hofman E, Karam C, Kira J, Kostera-Pruszczyk A, Léger JM, Nobile-Orazio E, Attarian S, Markov M, Tse A, Lowe M, Lewis R. Diagnostic Adjudication of Chronic Inflammatory Demyelinating Polyneuropathy in the ADHERE trial: Updates on the first 200 cases. 21st Annual Meeting of the Austrian Society of Neurology (Vienna, Austria) 2024/3/13 - 3/15

【その他】

1. 吉良潤一, 張旭, 満石三喜男, 藤井敬之, グザリアイ・ママティジャン, 今村友裕, 迫田礼子, 柳原由記, 岩永育貴, 山下謙一郎, 横手頭, 波呂敬子, 小早川優子, 磯部紀子, 岡孝和, 桑原聡, 中村優理. 第3回アトピー性脊髄炎全国臨床疫学調査と自己免疫性神経障害性疼痛レジストリ構築. 神経免疫班令和5年度合同班会議(東京) 2024/1/11 - 1/12
2. 吉良潤一, 張旭, 緒方英紀, 満石三喜男, グザリアイ・ママティジャン, 今村友裕, 横手頭, 迫田礼子, 柳原由記, 岩永育貴, 山下謙一郎, 波呂敬子, 三嶋崇靖, 坪井義夫, 佐藤亮太, 神田隆, 小林正樹, 北川一夫, 波平幸裕, 大屋祐輔, 磯部紀子, 海田賢一, 桑原聡, 中村優理. 病態モデルに基づいた抗LG14抗体の作用機序の解明と自己免疫性ノドパチー診断アルゴリズム. 神経免疫班令和5年度合同班会議(東京) 2024/1/11 - 1/12
3. 緒方英紀, 磯部紀子, 張旭, 中村優理, 海田賢一, 桑原聡, 吉良潤一. NF155抗体のエピトープ解析及び自己免疫性ノドパチーレジストリの現状報告. 神経免疫班令和5年度合同班会議(東京) 2024/1/11 - 1/12

依頼講演・招待講演 他

【特別講演】

1. 吉良潤一. **Closing Remarks.** ～福岡中央病院の MS コホート研究からテクフィデラの位置づけを考える～ **International MS Meeting in Kyushu** ～Japanese MS を再考する～. バイオジェン・ジャパン主催講演会（福岡）2023/6/9
2. 吉良潤一. アトピーは慢性疼痛と疲労の新たなプレーヤー. 第 19 回日本疲労学会総会・学術集会特別講演 I（千葉）2023/6/24
3. 吉良潤一. 治せる認知症・これから治せる認知症. 福岡中央病院第 2 回医療連携懇親会（福岡）2023/11/29

受賞

1. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会大会長賞（共同受賞）
今村友裕, 柳原由記, 山下謙一郎, 張旭, グザリアイママティジャン, 満石三喜男, 吉良潤一. アルツハイマー病における血液バイオマーカーの実用化.

特許

1. 慢性炎症性脱髄性多発神経炎の診断方法、キット及びバイオマーカー
発明者 : 吉良潤一, 河村信利, 山崎亮, 松瀬大, 緒方英紀
出願人名 : 国立大学法人九州大学
出願国 : 米国
出願番号 : 15/544756
出願日 : 2016/1/20
登録番号 : US10509033
登録日 : 2019/12/17
2. 神経障害性疼痛マーカー及びその使用
発明者 : 吉良潤一, 藤井敬之, 山崎亮, 飯沼今日子, 土本大介, 中別府雄作
出願人名 : 国立大学法人九州大学
出願国 : 日本
出願番号 : 特願 2019-512547
出願日 : 2018/4/11
3. アルツハイマー病の尿と血清を用いた診断法とバイオマーカー及び測定キット
発明者 : 吉良潤一, 今村友裕
出願人名 : 国際医療福祉大学
出願国 : 米国

仮出願番号: 63/469,446

出願日 : 2023/05/29

4. バイオマーカー、診断用キットおよび診断を補助する方法（急性及び慢性の炎症性脱髄性末梢神経疾患の特異的な診断に使用することのできるバイオマーカー、診断用キットおよびそれらを用いた診断を補助する方法に関するものである）

発明者 : 吉良潤一, 張旭

出願人名 : 国際医療福祉大学

出願国 : 日本

出願番号 : 特願

出願日 : 2023/8/1

所属学会

1. 日本内科学会（功労会員、元理事、元九州支部代表）日本薬学会
2. 日本神経学会（名誉会員、元理事、第 55 回大会長）
3. 日本神経免疫学会（名誉会員、前理事、元理事長、第 17 回大会長）
4. 日本末梢神経学会（名誉会員、前理事、第 23 回大会長）
5. 日本脳卒中学会（名誉会員、元理事）
6. 日本自律神経学会（理事）
7. 日本難病医療ネットワーク学会（名誉会員、前理事長、前理事）
8. 日本神経化学会（功労会員）
9. American Neurological Association (Corresponding Member)

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本神経学会：代議員選挙管理委員会委員長、神経免疫セクションチーフ
2. 日本神経免疫学会：国際対応委員会委員、あり方委員会委員、MS/NMSD 委員会委員
3. Multiple Sclerosis and Related Disorders (Editorial Board Member, Section Editor for Clinical Neurology)
4. Journal of The Neurological Sciences (Editorial Board Member)
5. Multiple Sclerosis Journal (Editorial Board Member)
6. BMC Medicine (Editorial Advisor for Neurology)

研究費獲得状況

1. 基盤研究 B, 新規発見ノド抗体による自己免疫性ノドパチーの中枢及び末梢神経脱髄機序の解明と治療, 2022~2024 年度, 研究代表者
2. 挑戦的研究（萌芽）, 新規同定病原性ミクログリアを標的とした変性と脱髄共通のグリ

ア炎症病態の解明と治療, 2023~2024 年度, 研究代表者

3. 難治性疾患実用化研究事業（日本医療研究開発機構），新規発見ノド抗原に基づいたノド抗体陽性慢性炎症性脱髄性多発神経炎/中枢末梢連合脱髄症の診断基準・診療ガイドライン作成のためのエビデンスの創出とバイオバンク・レジストリ構築, 2021~2023 年度, 研究代表者
4. 難治性疾患実用化研究事業（日本医療研究開発機構），抗 plexin D1 抗体及び新規発見抗 neuropil 抗体陽性アトピー性脊髄炎・自己免疫性神経障害性疼痛の新診療ガイドライン作成のためのエビデンスとレジストリ構築, 2023~2025 年度, 研究代表者
5. 基盤研究 C, 単一細胞 RNA 解析による多系統萎縮症増悪性ミクログリア亜群の同定と同細胞標的療法, 2022~2024 年度, 研究分担者
6. 基盤研究 C, 中枢神経炎症性疾患の治療を遺伝・免疫・血清学的指標を用いて最適化する方法の確立, 2022~2024 年度, 研究分担者
7. 基盤研究 C, ヘミチャネル阻害薬を用いた α シヌクレイン伝播阻止による多系統萎縮症の治療法開発, 2023~2025 年度, 研究分担者
8. 基盤研究 C, 毒性ターゲッ A β 42 含有エキソソームによるアルツハイマー病早期診断と病態伝搬の解明, 2022~2024 年度, 研究分担者
9. 基盤研究 C, グリアコネキシン低分子量イソフォーム発現エキソソームによる脱髄炎の悪化と治療開発, 2021~2023 年度, 研究分担者
10. 住友ファーマ株式会社共同研究, 認知症を対象とした新血液中バイオマーカーの関連分析及び臨床評価に関する研究, 2021~2024 年度, 研究担当者
11. 住友ファーマ株式会社共同研究, シヌクレイオパチーを中心とした神経変性疾患の発症・進展メカニズムの解明と創薬への応用, 2021~2024 年度, 研究担当者

氏名（役職）

永倉透記（教授）

研究概要

線維筋痛症モデル動物を用いた病態機序解明および新規治療法探索

独自に開発したレセルピン誘発線維筋痛症モデルラットは、脳内モノアミンの慢性的低下やサイトカイン上昇等の病態機序解明、および治療法の効果判定に広く用いられている。本年度、線維筋痛症患者および本モデル動物を用いた研究で得られたバイオマーカーに関する知見をまとめ、バイオマーカーを活用した線維筋痛症の可能性をレビューとしてまとめた（原著論文・総説参照）。本モデル動物を用いたバイオマーカー探索および治療薬候補物質の評価を継続する。

医療オープンデータ解析による疾患リスク要因の同定

疾患発症のリスク要因の同定を目的として、国民のほぼ全てのレセプト情報/特定健診等情報を格納する医療データベースである NDB オープンデータ（厚生労働省）の解析を進めている。同データベースを都道府県単位で解析し、慢性疼痛認知症、パーキンソン病の発症における運動習慣、喫煙習慣、飲酒習慣、肝機能指標等の関与を検証する。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Nagakura Y, Hayashi M, Kajioka S. Analysis of Japanese nationwide health datasets: association between lifestyle habits and prevalence of neuropathic pain and fibromyalgia with reference to dementia-related diseases and Parkinson's disease. *Scand. J. Pain*, 23(4), 662-669 (2023).

【総説】

1. Nagakura Y, Tozaki-Saitoh H, Takeda H. Drug discovery and development for fibromyalgia using practical biomarkers throughout the process from relevant animal models to patients. *Expert Opin. Drug Discov.*, 18(5):539-549 (2023).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 永倉透記, 梶岡俊一. オープンデータ解析による前立腺肥大症発症と関連する健康・生活習慣因子の同定. 日本薬学会第 143 年会（札幌）2023/3/28

依頼講演・招待講演 他

1. 永倉透記. 痛覚変調性疼痛を主徴とする線維筋痛症の治療薬研究開発：病態モデル動物の作成と解析. 第 28 回一般社団法人日本口腔顔面痛学会学術大会（福岡）2023/11/18

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本薬理学会（評議員、薬理学エデュケーター）
3. 日本薬学教育学会

氏名（役職）

西村信弘（教授）

研究概要

薬剤耐性菌対策のための抗菌薬適正使用に関する研究（島根大学医学部感染症グループとの共同研究）

耐性グラム陰性桿菌の遺伝子型と抗菌薬使用量の関連性について検討を行っている。耐性グラム陰性桿菌の遺伝子型および POT 型について経年変化を調査し、薬剤耐性率との関連を明らかにした。今後は、抗菌薬耐性対策のための抗菌薬適正使用シナリオの作成と耐性グラム陰性桿菌の伝播・蔓延を封じ込めるための感染制御アルゴリズムの構築を目指している。

薬物の体内動態および相互作用に関する研究

前立腺癌の治療薬について、グループ病院において投与中の患者を対象に、疫学調査を行い、治療効果あるいは副作用発現に関連する影響因子の同定を行っている（IUHW 高邦会グループ倫理審査承認済み）。さらに、患者血液中の抗がん薬濃度および代謝物濃度を測定し、薬物相互作用を起こしうる薬剤の併用が抗がん薬の体内動態や治療効果や副作用等への影響を解析し、抗がん薬治療の患者個別最適化を目指している。

雑誌記事・その他

1. 西村信弘. 第 100 回 福岡県病院薬剤師会筑後支部研修会報告「糖尿病の標準治療と GLP-1 受容体作動薬」. 福岡県病院薬剤師会会誌, 220, 39 (2023).
2. 西村信弘. 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の臨床症状とオミクロンおよびサブバリエーションとの関連性：日本（札幌市）における観察研究. ふくおか県薬会報, 36(4), 713-717 (2023).
3. 西村信弘. 視点 10 年先の薬剤師. ふくおか県薬会報, 37(1), 7 (2024).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 西村信弘, 福田光良, 宗像千恵. 非小細胞肺癌における分子標的治療薬の個別化投与アルゴリズムの構築. 第 13 回国際医療福祉大学学術大会（成田）2023/9/3
2. 永井友規, 宗像千恵, 西村信弘. 口腔周囲のリンパ腫による疼痛コントロールにおいて薬剤師が歯科医をサポートした一例. 第 82 回九州山口薬学大会（長崎）2023/9/24
3. 津上可奈, 一木裕子, 村山裕, 大久保夏希, 平野和裕, 西村信弘. 簡易懸濁法のマニュアル改定に向けて見えてきた課題. 第 82 回九州山口薬学大会（長崎）2023/9/24

4. 一木裕子, 川尻雄大, 峯圭佑, 森皓平, 小林大介, 島添隆雄, 西村信弘. 新型コロナウイルスワクチンと他のワクチンとの副反応の比較:FDA 有害事象報告システム (FAERS) と日本の有害事象報告データベース (JADER) の解析. 日本薬学会第 144 年会 (横浜) 2024/3/30

依頼講演・招待講演 他

【依頼講演】

1. 西村信弘. クリニカルクエスチョンをリサーチクエスチョンに昇華させるために. 令和 5 年度学会発表スキルアップセミナー (福岡) 2023/5/28
2. 西村信弘. 薬剤耐性菌とワンヘルスアプローチ. 八女筑後薬剤師会定期研修会 (八女) 2024/2/14
3. 西村信弘. 入退院支援への関わり. 県内 4 ブロックにおける薬局薬剤師と病院薬剤師の合同ワークショップ-筑後ブロック- (久留米) 2024/3/6

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本医療薬学会
3. 日本薬物動態学会
4. 日本臨床薬理学会
5. 日本緩和医療薬学会
6. 日本 TDM 学会
7. 日本化学療法学会
8. 日本環境感染学会
9. 日本感染症学会
10. 日本老年薬学会
11. 日本医療・病院管理学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 一般社団法人日本病院薬剤師会 代議員
2. 一般社団法人日本病院薬剤師会「感染制御専門薬剤師部門研修委員会」委員長
3. 一般社団法人日本病院薬剤師会「薬剤師のための感染制御マニュアル」編集委員
4. 一般社団法人日本医療薬学会 代議員
5. 一般社団法人日本医療薬学会「医療薬学専門薬剤師研修小委員会」委員
6. 一般社団法人日本医療薬学会「医療薬学」編集委員
7. 一般社団法人日本医療薬学会「Postdoctoral Award 選考小委員会」委員
8. 一般社団法人日本 TDM 学会「TDM 研究」編集委員

9. 公益社団法人日本化学療法学会評議員
10. 一般社団法人日本環境感染学会評議員
11. 九州山口薬学会 理事
12. 一般社団法人福岡県病院薬剤師会 副会長
13. 福岡県病院薬剤師会・筑後支部 会長
14. 公益社団法人福岡県薬剤師会 常務理事
15. 大川三潯薬剤師会 理事
16. 福岡県保健医療介護部薬務課 福岡県薬物乱用防止講習会講師団 講師

研究費獲得状況

1. 基盤研究 B（一般研究），多剤耐性菌の発生・伝播を防止するための感染制御・抗菌薬適正使用アルゴリズムの構築, 2021～2023 年度, 研究代表者
2. 基盤研究 C, 薬剤耐性菌および抗菌薬使用の疫学解析による AMR 対策シミュレーションモデルの構築, 2018～2023 年度, 研究代表者
3. アボットジャパン合同会社 アボット教育助成, プロテアーゼ阻害薬（新型コロナウイルス感染症治療薬）による BNP への影響に関する研究, 2023 年度, 研究代表者

氏名（役職）

長谷川雄（教授）

研究概要

くも膜下出血後再出血の病態解明に関する研究

くも膜下出血後再出血の新規動物モデルを開発、そのモデルを用いて病態解明を検討する。

腎除神経術の多面的脳保護効果検討

脳卒中動物モデルを用いて腎除神経術の予後改善と脳保護効果を検討する。

脳卒中患者の予後に関連する因子の解析

くも膜下出血等脳卒中患者の予後と関連する因子について臨床研究を行う。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Otsu Y, Kajiwara S, Hashimoto A, Sakata K, Negoto T, Hasegawa Y, Nakamura H, Hirohata M, Morioka M. Effect of Microvascular Decompression on Pain Relief and Quality of Life in Late Elderly Patients with Trigeminal Neuralgia. *Neurol. Med. Chir.*, 63, 236-242 (2023).
2. Hayashi K, Sherchan P, Zhang J, Hasegawa Y. Intranasal administration of collagenase develops cerebral microbleeds and vascular dementia in mice: In vivo pilot study. *Brain Hemorrhages*, 4, 183-188 (2023).
3. Uchikawa H, Kamenno K, Kai K, Kajiwara S, Fujimori K, Uekawa K, Fujiwara Y, Mukasa A, Kim-Mitsuyama S, Hasegawa Y. Pretreatment with Clodronate Improved Neurological Function by Preventing Reduction of Posthemorrhagic Cerebral Blood Flow in Experimental Subarachnoid Hemorrhage. *Neurocrit. Care*, 39, 207-217 (2023).
4. Kajiwara S, Hasegawa Y, Fujimori K, Tomiyasu S, Kamenno K, Uchikawa H, Morioka M. Persistent brain exposure to high sodium induces stroke onset by upregulation of cerebral macrobleeds and oxidative stress in hypertensive rats. *Hypertens. Res.*, 47, (2024).
5. Hasegawa Y, Kuratsu J. Goshuyuto reduced the frequency of monthly intake of anti-headache drugs and pain status in patients with medication overuse headache of over 20 years in an outpatients setting. *The Kurume Med. J.*, 68, 153-156 (2023).
6. Kajiwara S, Tanoue S, Hirohata M, Takeuchi Y, Hasegawa Y, Orito K, Abe T, Morioka M. Detection and successful endovascular treatment for a de novo intracranial

pseudoaneurysm in early phase after traumatic brain injury. *Brain Hemorrhages*, 4, 210-214 (2023).

【総説】

1. Uchikawa H, Uekawa K, Hasegawa Y. Perivascular macrophages in cerebrovascular disease. *Exp. Neurol.*, in press.

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 梶原壮翔, 長谷川雄, 森岡基浩 他. 脳内高ナトリウム持続投与は高血圧ラットの脳内微小出血と酸化ストレスを惹起し脳卒中を発症させる. 第 45 回日本高血圧学会総会, (大阪) 2023 年 9 月
2. 長谷川雄, 梶原壮翔, 藤森香奈. 脳動脈瘤再破裂くも膜下出血に対する新規バルビツレート投与法の脳保護効果検討. 第 13 回国際医療福祉大学学会 (大田原) 2023 年 9 月
3. 藤森香奈, 長谷川雄, 森岡基浩 他. もやもや病の **negative remodeling** に対する血行再建術の影響について. 日本脳神経外科第 82 回学術総会 (横浜) 2023 年 10 月
4. 藤森香奈, 長谷川雄, 森岡基浩 他. もやもや病の **negative remodeling** に対する血行再建術の影響について. 第 66 回脳循環代謝学会集会 (福岡) 2023 年 11 月

【国際学会】

1. Uchikawa H, Hasegawa Y. Pretreatment with clodronate improved neurological function involving in inhibition of cerebral blood flow reduction in rat SAH. The 16th International Conference on Subarachnoid Hemorrhage, Durham, North Carolina, USA, June, 2023

所属学会

1. 日本脳神経外科学会
2. 日本脳神経外科コンgres学会
3. 日本頭痛学会
4. 日本脳循環代謝学会
5. SAH/スパズムシンポジウム
6. 日本高血圧学会
7. 日本脳血管・認知症学会
8. 日本脳卒中学会
9. 日本生理学会
10. 日本薬理学会
11. 日本脳神経外科漢方医学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 久留米大学医学部医学科客員教授
2. SAH/スパズムシンポジウム世話人
3. 日本脳循環代謝学会幹事
4. 日本脳血管・認知症学会評議員、あり方委員
5. 日本生理学会評議員
6. 日本薬理学会評議員、薬理学エドゥケーター
7. 日本高血圧学会評議員
8. 日本脳神経外科学会認定専門医、学術評議員
9. 日本脳卒中学会認定脳卒中専門医
10. 日本頭痛学会認定専門医
11. Translational Stroke Research, Editorial Board
12. Brain Hemorrhages, Editorial Board

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C, **Sympathetic overdrive** 仮説に基づく「くも膜下出血後再出血」の病態・脳保護薬の探求, 2023～2025 年度, 研究代表者
2. 基盤研究 C, 脳内出血の転帰改善を目指した選択的・積極的・短時間降圧療法の開発, 2021～2023 年度, 研究分担者
3. 国際医療福祉大学学内研究費, 脳出血後超急性期積極的降圧による持続的出血抑制・周辺脳虚血抑制に関する実験的検討, 2023 年度, 研究代表者

氏名（役職）

平木洋一（教授）

研究概要

神経難病患者に対する抗 MRSA 薬の適正投与を目的とした腎機能評価方法に関する研究

一般的に腎機能の評価に用いられる推算糸球体濾過率 (eGFR) は、筋肉で産生される血清クレアチニン (SCr) 値から計算される。したがって、病的に筋萎縮を示す神経難病の患者では、正確な eGFR を推定することが出来ない。本研究では、神経難病患者の腎機能評価が可能となるマーカーを明らかにし、バンコマイシン (VCM) およびテイコプラニン (TEIC) の適切な投与設計を図ることを目的とする。本研究では、神経難病患者における VCM, TEIC の血中濃度を推定するために必要となる eGFR を、SCr および新しいマーカーであるシスタチン C で算出し、血中濃度を予測する。予測された濃度と実測濃度を比較することで、神経難病患者に適したマーカーを明らかにする。また、本研究の発展として神経難病患者の腎機能評価方法への展開が期待される。

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 山科卓也, 山崎貴史, 青柳千愛, 下村真代, 平木洋一. 神経難病患者におけるシスタチン C に基づくテイコプラニンの血中濃度予測. 第 33 回日本医療薬学会年会 (仙台) 2023/11/3

所属学会

1. 日本化学療法学会
2. 日本医療薬学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本医療薬学会代議員

氏名（役職）

村田祐造（教授）

研究概要

下垂体後葉ホルモンによる血糖低下作用のメカニズムの解明

下垂体後葉ホルモンのオキシトシン及びバソプレシン投与により、糖負荷後の血糖値上昇抑制および尿糖排出を観察してきた。その効果にバソプレシン受容体が関与していることが阻害剤の使用により明らかとなった。そのメカニズムは後葉ホルモンが腎臓をはじめとする多臓器における細胞の直接的あるいは膵島からのインスリンを介した糖輸送体の細胞膜への発現変化に関与していると考えられ、組織学的手法により解明する。これより、オキシトシンによる血糖調節の可能性が期待される。

糖尿病モデルラット唾液腺に関する研究

糖尿病による唾液腺の変化に関する検討を行っている。糖尿病モデルラットの唾液腺における特徴が免疫組織化学を用いた解析により、正常ラットと統計的に有意の差があることが明らかとなった。これより、糖尿病患者における口渇のような症状の原因解明の一助となることが期待される。

Sotos 症候群の学習障害モデルマウスの樹立とその発症機構に関する研究（佐賀大学医学部 東元健准教授との共同研究）

Sotos 症候群の学習障害モデルマウス樹立のためのノックアウトマウスの脳組織解析による検討を行っている。今年度は、大脳組織の特異部位に異常があることが明らかとなった。これより、Sotos 症候群の学習障害の原因解明が期待されている。

原著論文・総説

【国内学会】

1. Maruo K, Nishiyama M, Honda Y, Cao A, Gao W, Shibata K, Murata Y, Kido M. A. Increased GLUT1 expression and localization to Golgi apparatus of acinar cells in the parotid gland of Goto-Kakizaki diabetic rats. Arch. Oral Biol., 146, (2023).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 村田祐造, 柴田健太郎. オキシトシンによる血糖低下作用. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会（成田）2023/9/3

所属学会

1. 日本解剖学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本解剖学会九州支部代議員

氏名（役職）

山口政俊（特任教授）

研究概要

1. セロトニンやカテコールアミン関連物質の高感度・高選択的分析法の開発とその薬理・臨床研究への展開に関する研究に関する検討を行っている。本研究は、神経疾患の科学的診断法の確立や治療薬の基礎的研究・開発に貢献できる。
2. 医薬品の化学的構造をピンポイントに光学（蛍光、化学発光、燐光）発光標識し、対応する光学検出器で定性・定量する超高感度検出法を開発し、さらに高速液体クロマトグラフィーやキャピラリー電気泳動などの分離手法と連結することに基づく高選択的分析法の開発を行っている。本研究は、医薬品の新規開発及びその適正使用に関する研究に役立つ。

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本分析化学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 薬学教育評価機構 総合評価評議員
2. 化学物質評価研究機構 理事
3. 日本分析化学会 九州支部幹事
4. 日本薬学会 九州山口支部幹事

氏名（役職）

一木裕子（准教授）

研究概要

医療用ビッグデータを活用した臨床薬学によるデータサイエンスに関する研究（九州大学大学院薬学研究院臨床育薬学分野との共同研究）

医療用ビッグデータを用いたデータサイエンスの探究に関する検討を行っている。今年度は、新型コロナウイルスワクチンの副作用に関する検討を行った。今後は更に研究を重ね、医薬品との相互作用による副作用について展開する予定である。

糖尿病外来における病院薬剤師による服薬指導の血糖コントロールに対する効果に関する研究

糖尿病外来において医師の診察前に病院薬剤師がチェックシートを用いた服薬指導を行い、病院薬剤師の薬学的管理が糖尿病治療に有効であることが明らかとなった。

精神科病棟長期入院患者に対する薬剤師による処方支援の有用性に関する研究

精神科病棟にて薬剤師による長期入院患者に対する処方支援は有用であり、ベンゾジアゼピン系薬剤等の投与量減少に寄与し、医療費削減効果が得られることが明らかとなった。

著書

1. 21世紀の疾患:神経関連アミロイドーシス. 医学と看護社, (2020), 分担著者

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 津上可奈, 古川佳子, 深町武児, 新谷理菜, 一木裕子, 西村信弘. 簡易懸濁法のマニュアル改定に向けて見えてきた課題. 第 82 回九州山口薬学会（長崎）2023/9/23 - 9/24
2. 一木裕子, 川尻雄大, 峯圭佑, 森皓平, 小林大介, 島添隆雄, 西村信弘. 新型コロナウイルスワクチンと他のワクチンとの副反応の比較：FDA 有害事象報告システム (FAERS) と日本の有害事象報告データベース (JADER) の解析. 日本薬学会第 144 年会（横浜）2024/3/28 - 3/31

依頼講演・招待講演 他

【特別講演】

1. 一木裕子. 佐賀薬剤師会 生涯学習講演会 糖尿病～糖尿病治療薬の適正使用について～. 2023/5/20

2. 一木裕子. 九州大学薬学部キャリア支援講演 薬剤師のキャリアアップを目指して.
2024/1/10

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本医療薬学会
3. 日本生薬学会
4. 日本くすりと糖尿病学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 福岡県糖尿病療養指導士 北九州 CDE の会監事
2. 福岡県薬剤師会学術倫理審査会委員

研究費獲得状況

1. 国際医療福祉大学学内研究費（一般研究 A），有害事象データベースによるコロナとインフルエンザワクチン脳血管イベントの比較調査, 2023 年度, 研究代表者

氏名（役職）

齊藤秀俊（准教授）

研究概要

行動変容を引き起こすグリア機能の解明に関する研究（九州大学薬学部薬理学分野グループとの共同研究）

脊髄後角抑制性介在神経の特定集団（NpyP 陽性・DynP 神経）の感覚伝達における役割の解析を行っている。今年度は、DynP 陽性神経の神経障害性疼痛モデル病態における役割の解析を行った。また、病態時の NpyP 陽性細胞とグリア細胞との相互作用解析を行い、NpyP 陽性細胞への興奮性/抑制性入力の変化について、組織学的なシナプスマーカーの解析を進めている。

グリア細胞活性化メカニズムの解明に関する研究（九州大学薬学部薬理学分野グループとの共同研究）

レセルピン誘発線維筋痛症モデルマウスのグリア細胞の活性化と痛覚への影響について検討を行っている。今年度は、レセルピン誘発線維筋痛症モデルマウスの前頭前皮質ミクログリアを単離し、遺伝子発現変化の解析を行った。ミクログリアの遺伝子発現パターンによる分類により亜集団の組成変化を示す証拠を得た。これより、線維筋痛症モデル病態での脳ミクログリアの新たな役割の解明が期待される。

グリア細胞活性化メカニズムの解明に関する研究（安田女子大学薬学部薬理学分野グループとの共同研究）

インターロイキン 1 β 発現レポーター遺伝子を搭載したミクログリア細胞株を用いた、唾液抗菌ペプチドの抗炎症作用解析。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Inoue E, Minatozaki S, Shimizu S, Miyamoto S, Jo M, Ni J, Tozaki-Saitoh H, Oda K, Nonaka S, Nakanishi H. Human β -Defensin 3 Inhibition of *P. gingivalis* LPS-Induced IL-1 β Production by BV-2 Microglia through Suppression of Cathepsins B and L. *Cells*, 4, 13(3), 283 (2024).

【総説】

1. Nagakura Y, Tozaki-Saitoh H, Takeda H. Drug discovery and development for fibromyalgia using practical biomarkers throughout the process from relevant animal models to patients. *Expert Opin. Drug Discov.*, 18(5), 539-549 (2023).

雑誌記事・その他

1. 薬学プレミアムカレッジの初開催紹介記事. 西日本新聞, 2023/11/18

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. Fujimori K, Tozaki-Saitoh H, Seiriki K, Hashimoto H, Tsuda M. Comprehensive analysis of brain-spinal cord top-down signaling for neuropathic allodynia. 第 97 回日本薬理学会年会 (神戸) 2023/12/14-12/16
2. Saitoh H, Tsuda M. Model of recurrent neuropathic pain by social defeat stress with underlying inflammatory responses. 第 97 回日本薬理学会年会(神戸)2023/12/14-12/16

【その他】

1. Tozaki-Saitoh H, Tsuda M. Model of recurrent neuropathic pain by social defeat stress with underlying inflammatory responses. 27th Glia Decode meeting (札幌) 2023/10/14

所属学会

1. 日本薬理学会
2. 日本神経化学会
3. 日本神経科学会
4. 日本疼痛学会
5. 日本ストレス学会

研究費獲得状況

1. 基盤研究(C), 脊髄ミクログリアと脳神経の相互作用をシナプスレベルで解析する, 2022~2026 年度, 研究代表者
2. 学術変革領域研究(A), グリア多様性を軸にした介入法による感覚など全身機能の変容, 2020~2024 年度, 分担研究者

氏名（役職）

多田納豊（准教授）

研究概要

MAC が産生する D-アミノ酸のマクロファージ細胞に対する作用の検討

本テーマでは、長期的に細胞内感染する抗酸菌について、マクロファージの活性化・分極化の制御における抗酸菌由来 D-アミノ酸の働きについての解明を目指している。

非結核性抗酸菌である *M. intracellulare* による産生が認められた 5 種類の D-アミノ酸について、マクロファージ細胞株（RAW264.7 細胞）に及ぼす影響を RNAseq 解析により検討したところ、IFN や IL-1 などの炎症性サイトカインシグナル関連遺伝子、細胞外マトリックス制御関連遺伝子など、アミノ酸毎に様々な遺伝子の発現変動が認められた。

原著論文・総説

【総説】

1. Tatano Y, Shimizu T, Sano C, Tomioka H. Roles of autophagy in killing of mycobacterial pathogens by host macrophages – effects of some medicinal plants. *Eur. J. Microbiol. Immunol. (Bp)*,14(1), 26-36 (2024).
2. 清水利朗, 佐野千晶, 多田納豊, 佐藤勝昌, 富岡治明. オートファジーとアルドース還元酵素系の抗酸菌 感染宿主の防御免疫機能に及ぼす作用. *結核*, 99(1), 13-18 (2024).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 佐野千晶, 富岡治明, 多田納豊. NTM を中心とした宿主免疫応答についての最近の話題. [シンポジウム 7, non-MAC を含めた NTM 症の新展開]. 第 98 回日本結核・非結核性抗酸菌症学会学術講演会（東京・京王プラザホテル）2023/6/11
2. 多田納豊, 宗像達夫, 澤井円香, 八木秀樹, 佐野千晶, 富岡治明. 抗酸菌由来 D-アミノ酸 によるマクロファージ遺伝子発現の制御についての検討（ポスター）. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会（国際医療福祉大学成田キャンパス+オンライン）2023/9/3
3. 澤井円香, 多田納豊, 宮内優, 石田卓巳, 武知進士. 糖化産物ジヒドロピラジン（DHP）による生体内 TLR4 シグナル抑制機構の解明（ポスター）. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会（国際医療福祉大学成田キャンパス+オンライン）2023/9/3
4. Sawai M, Tatano Y, Zhou JR, Itoh S, Yoshida M, Miyauchi Y, Takechi S. Alleviation effect of Contact Dermatitis by the Glycation Product Dihydropyrazine（ポスター）. 衛生薬学・環境トキシコロジー フォーラム 2023（日韓合同開催）（広島・広島大学霞キャンパス凌雲棟）2023/9/13
5. Sawai M, Tatano Y, Itoh S, Yoshida M, Zhou JR, Miyauchi Y, Takechi S. Anti-inflammatory

effects of the glycation product dihydropyrazine: An in vivo analysis using mice with contact dermatitis. 第 46 回日本分子生物学会年会 (神戸・神戸ポートアイランド) 2023/12/7

6. 多田納豊, 宗像達夫, 澤井円香, 八木秀樹, 佐野千晶, 富岡治明. *Mycobacterium avium* complex 由来 D-アミノ酸によるマクロファージ遺伝子発現の制御についての検討. 日本薬学会第 144 年会 (横浜・パシフィコ横浜) 2024/3/30
7. 澤井円香, 多田納豊, 周建融, 寒水壽朗, 宮内優, 武知進士. 糖化産物ジヒドロピラジンによる炎症抑制効果解析. 日本薬学会第 144 年会 (横浜・パシフィコ横浜) 2024/3/30

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本細菌学会
3. 日本感染症学会
4. 日本化学療法学会
5. 日本結核・非結核性抗酸菌症学会
6. 日本生化学会

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C, 抗酸菌産生 D アミノ酸とマクロファージの感染防御メカニズムとの関連性についての検討, 2021~2023 年度, 研究代表者
2. 基盤研究 B, 多剤耐性菌の発生・伝播を防止するための感染制御・抗菌薬適正使用アルゴリズムの構築, 2021~2023 年度, 研究分担者 (研究代表者: 西村信弘)

氏名（役職）

塚本宏樹（准教授）

研究概要

免疫応答を調節する抗体・化合物の探索・創出による治療・創薬開発の基盤研究

免疫応答に関わる分子の機能を調節する抗体や化合物を作製・探索し、がん、アレルギー、敗血症、自己免疫疾患を始めとした免疫疾患の新規治療・創薬開発の基盤研究を進めている。今年度は、GM-CSF と M-CSF を用いてマウス骨髄由来樹状細胞と骨髄由来マクロファージを作製し、TLR4 刺激抗体による抗原取込の抑制効果を評価した。その結果、TLR4 刺激抗体が、抗原提示細胞における抗原取り込みを抑制し、食物アレルギーの発症、増悪化を抑制、予防することが示唆された。自然免疫を標的とした従来にない新しいアレルギー治療・予防戦略や環境要因とアレルギー増加の因果関係の理解において、研究成果の貢献が期待される。

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 塚本宏樹. 食物アレルギーを抑制する Toll 様受容体 4 刺激抗体の肥満細胞抑制作用. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会（成田、ハイブリッド開催）2023/9/3
2. 熊谷知大, 小田垣水晶, 秋山泰利, 松本洋太郎, 塚本宏樹, 金光祥臣, 富岡佳久. 糖尿病性腎臓病評価法に用いる蛍光標識フェニルサルフェートの合成. 第 62 回日本薬学会東北支部大会（仙台）2023/10/28
3. 塚本宏樹, 小林洋平, 渡邊悠理香, 渡邊康一, 富岡佳久. Toll 様受容体 4 刺激抗体は食物アレルギーを予防、抑制する. 第 96 回日本生化学会大会（福岡）2023/10/31 - 11/2
4. 塚本宏樹, 小林洋平, 渡邊悠理香, 富岡佳久. Toll 様受容体 4 刺激抗体は肥満細胞の炎症反応を抑制する. 第 40 回日本薬学会九州山口支部大会（福岡）2023/11/18 - 11/19

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本生化学会
3. 日本免疫学会

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C（一般）, TLR4 刺激抗体の食物アレルギー抑制機序解明による新規アレルギー予防・治療戦略, 2021～2023 年度, 研究代表者
2. 国際医療福祉大学学内研究費（一般研究 A 一般）, 抗原提示細胞の抑制を介した Toll 様

受容体 4 刺激抗体[®]の食物アレルギー抑制機序解明, 2023 年度, 研究代表者

氏名（役職）

成川佑次（准教授）

研究概要

生薬・漢方薬の科学的解明に関する研究

生薬、漢方薬は、科学的に未解明な部分が多く、特に生薬の多様性に基づく問題が数多く残されている。本研究では漢方処方に配合される類似生薬の使い分けに関する研究を行っている。今回は類似生薬の中でビャクジュツ（白朮）ならびにソウジュツ（蒼朮）に着目し、その使い分けについて脂肪細胞分化に対する影響を指標にして検討を行い、ビャクジュツに脂肪細胞分化を促進する活性が認められ、その作用メカニズムの解明を行った。また、生物活性物質の探索研究の一環として抗トリパノソーマ活性を有する成分について検討を行った。さらに、昨年に引き続き薬用植物園の整備のために日本薬局方収載生薬の基原植物の栽培に関して調査を行った。

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 成川佑次, 石井紗英子, 鶴田侑也, 菊地晴久, 木内文之. 朮類の脂肪細胞分化に対する影響. 第40回日本薬学会九州山口支部大会（福岡）2023/11/18

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本生薬学会

氏名（役職）

宗像達夫（准教授）

研究概要

色素が与えるとオクタノール分配係数変化に関する研究

メチルオレンジとオクタノールの相互作用による分配係数の変化に関する研究を行っている。

今年度に関しては、オクタノール中の添加物に着目して検討を行い、添加物も一定の影響を及ぼしていることが明らかとなった。メチルオレンジとオクタノールの相互作用解明により、構造修飾により DDS への発展が見込める。

機能性天然物に着目したサクラの成分研究

身近に存在するサクラの成分には、抗酸化、ヒアルロニダーゼ活性阻害、チロシナーゼ活性阻害などの生理活性を有する化合物が含まれている。本年度はエラスターゼ阻害活性の高い分画の精製をについて研究を行った。今後、これらの構造決定を行うことで、機能性を有する化粧品への応用などを視野に入れている。

ナトリウムチャンネルと作用薬との相互作用に関する研究（国際医療福祉大学薬学部 角南教授との共同研究）

ナトリウムチャンネルとフレカイニドに代表される抗不整脈薬との相互作用について、構造に着目して解明を行っている。本年度も近年報告されているナトリウムチャンネルの結晶構造を元に、その相互作用解明を試みている。

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本コンピュータ化学会

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C, 抗酸菌産生 D アミノ酸とマクロファージの感染防御メカニズムとの関連性についての検討, 2021~2024 年度, 研究分担者

氏名（役職）

山本緑（准教授）

研究概要

薬物乱用問題に関する調査研究

薬物乱用問題において増加傾向にある薬物は大麻と市販薬であり、どちらも 10 代における乱用が深刻である。また、脳機能を向上させる目的で薬物を治療外に使用する "pharmacological cognitive enhancement (PCE)" も問題視されている。本研究では、大学生の薬物乱用に関する実態を調査し、得られた成果を青少年への啓発・教育活動へ還元する。昨年度に引き続き、本学の福岡薬学部 1 年生を対象にした調査および結果解析を行った。

合理的配慮を念頭にした薬の適正使用に関する取り組み

来年度より、全ての事業者に対して合理的配慮の提供が義務化される社会状況にあって、薬剤師も多様性のある患者に最適の医薬品供給に努める必要がある。本研究では、難聴児を対象に、薬の適正使用のための知識や啓発の普及を目指した介入研究を行う。まずは若者によるオーバードーズで問題となっている風邪薬や鎮痛薬の添付文書を用いて、視覚的な注意喚起の有効性を探るべく、そのデザインを検討した。

骨粗しょう症の一次予防に向けた次世代の踵骨骨梁面積率と生活習慣に関する検討

現在の若者は、20 年前と較べて骨密度低下が示唆されていることに加え、コロナ禍以降の生活環境の変化から、今後の骨の健康状態が大いに懸念される。次世代の骨粗しょう症予防に取り組むべく、昨年度に引き続き本学の福岡薬学部 1 年生を対象に超音波（QUS）法を用いた測定を企画した。

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 山本緑. 福岡県南地域住民の健康づくりを目指す社会薬学的活動. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会（成田）2023/9/3

依頼講演・招待講演 他

【国内学会】

1. 山本緑. 薬物乱用の現状について. 福岡県薬剤師会第 1 回学校・環境衛生研修会 2023/5/13

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本社会薬学会
3. 日本医薬品情報学会
4. 環境アセスメント学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 長崎県環境影響評価審査会委員

氏名（役職）

吉武康之（准教授）

研究概要

スチレン系ポリマーとホウ酸の複合体に関する研究（バイオダイナミクス研究所との共同研究）

グルコサミン共役スチレンマレイン酸共重合体とホウ酸との複合体形成に関する研究を行った。今年度は、スチレン-無水マレイン酸共重合体とホウ酸との複合体と糖類及びアミノ酸との反応シミュレーションを行った。

所属学会

1. 有機合成化学協会
2. アメリカ化学会

研究費獲得状況

1. 基盤研究 B（一般研究），遠隔位不斉誘導に基づくインターロック分子の不斉構築, 2021～2023 年度, 研究分担者

氏名（役職）

今井竜也（講師）

研究概要

1. 人間の行動・思考特性から考える医療をめぐる法・制度・規範の形成

人間の持つ行動や思考の特性には、バイアス、感情、不合理・非科学的な要因という要因が付随している。それらを理解したうえで、医療をめぐる法や制度・規範というものにどのように反映させ、望ましい方向性に人や社会を導けるのかについて、行動経済学におけるナッジ理論、人間の利己的行動・利他的行動という行動科学の観点に着目しながら考察する。

2. 医療技術の社会適用と規範形成をめぐる ELSI

医療技術を確立し、社会に普及させていく過程で、どのような倫理的・法的・社会的問題 (Ethical, Legal and Social Issues : ELSI) が起こり、それら問題への対処を踏まえ、我々の社会はどのような価値観を受容・許容し、医療技術利用のためのルール作りをしていけばよいのかについて、特に人の生と死に関わる医療を対象として考察している。

3. 医療技術の利用をめぐるリスクコミュニケーション／リスクマネジメントに関する研究

医療技術の利用には、必ず一定のリスクが付随する。そのリスクを利用者にどこまで／どのように伝え、利用の可否を判断する要素として適切に活用しうるだろうか。その医療の持つ社会的意味や性質なども考慮しながら、望ましいリスクコミュニケーション／リスクマネジメントのあり方を考察している。

所属学会

1. 日本法哲学会
2. 日本医事法学会
3. 日本生命倫理学会
4. 日本医学哲学・倫理学会
5. 日本保健医療社会学会
6. 科学技術社会論学会
7. 日本国際保健医療学会
8. 日本医療福祉政策学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 一般社団法人薬学教育協議会 ヒューマニティ関連教科担当教員会議 委員
2. 一般社団法人日本私立薬科大学協会 薬剤師国家試験問題検討委員会 法規・制度・倫理部会 委員

氏名（役職）

今村友裕（講師）

研究概要

アルツハイマー病における新規バイオマーカーに関する研究

激増するアルツハイマー病(AD)において早期診断のための血液マーカー未確立されていない。私たちは、AD マウス末梢血エキソソームで候補となるマイクロ RNA を同定した。これらのマイクロ RNA を利用して、早期診断のバイオマーカーの実用化に向けて研究を行っている。さらに侵襲性のない尿を用いたバイオマーカーについても研究を進めている。

人間ドック経年受診患者における保健指導の介入効果および 2 型糖尿病患者発症の危険因子およびに関する研究

高木病院予防医学センターの健診受診者のデータを用いて、経年的なデータを解析した。保健指導の介入効果を検証して人間ドック学会で発表を行い、論文として発表した。さらに 2 型糖尿病を発症する群と発症しない群の健診データを解析を行っており、そのリスク因子の解明を進めている。

ジャパン・マンモグラフィー・サンデー (J.M.S) による乳がん検査の効果についての検証

高木病院予防医学センターにおける J.M.S の受診者のデータを用いて、一般の健診と比較することで、その効果を明らかにした。検証結果は、人間ドック学会にて発表を行った。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Matsuo R, Imamura T, Takamori A, Kishi T, Minami M, Miyakawa J, Yoshitake N, Hayashi A, Nakayama Y, Egashira N, Teramoto M, Ishinari H, Kajiyama I, Fujisaki S, Kakiyama H, Satou K, Nakafusa R, Tanaka C, Tanaka M, Isomura Y, Izumi K, Ohta S, Souta N, Matsuo N, Yamamoto K, Tsuji S, Umemura T, Takagi K, Fujimoto K. Improvement trend for individual health guidance intervention according to Japan clinical guidelines by public health nurses for type 2 diabetes mellitus who visited for medical checkups regularly: a case-control preliminary report. *J. Clin. Biochem. Nutr.*, 74(2), 141-145 (2024).
2. Nakayama S, Yamanouchi K, Takamori A, Goto T, Shimada F, Imamura T, Hirooka Y, Kitajima A, Onozawa K, Kakiuchi T, Takagi K, Kishi T, Fujimoto K, Sakamoto Y. Gastrointestinal bleeding among 151 patients undergoing maintenance hemodialysis for end-stage renal failure: A 5-year follow-up study. *Medicine (Baltimore)*, 103(7), e37274 (2024).

雑誌記事・他

1. 今村友裕. 人生 100 年時年時代の漢方薬～超高齢化社会を漢方薬と共に生きる～. 筑後八女医師会報 No. 416 (2023 年 4 月号) .

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. Imamura T, Kira J, Yukitake M, Mitsuishi M, Maimaitijiang G, Zhang X. 2Serum/urine exosomal microRNA-203 is a novel least-invasive biomarker for early Alzheimer's disease. 第 64 回日本神経学会学術大会 (千葉) 2023/5/31-6/3 (優秀演題候補に選出)
2. Kira J, Maimaitijiang G, Nakamura Y, Sakoda A, Yamato Y, Yanagihara Y, Iwanaga Y, Yamashita K, Yokote A, Haro K, Tobimatsu S, Zhang X, Imamura T. Serum glial fibrillary acidic protein is useful to predict multiple sclerosis disability progression. 第 64 回日本神経学会学術大会 (千葉) 2023/5/31-6/3
3. Maimaitijiang G, Kira J, Sakoda A, Masaki K, Watanabe M, Nagata S, Ozdemir E, Yamasaki R, Isobe N, Zhang X, Imamura T, Nakamura Y. Exosome GJA1-29k is a blood marker for progressive multiple sclerosis reflecting glial inflammation. 第 64 回日本神経学会学術大会. (千葉) 2023/5/31-6/3
4. Zhang X, Kira J, Yokote A, Sakoda A, Mishima T, Tsuboi Y, Sato R, Kanda T, Ogata H, Isobe N, Kobayashi M, Kitagawa K, Namihira Y, Ohya Y, Fukata Y, Fukata M, Imamura T, Maimaitijiang G, Nakamura Y. IgG2 autoantibody relates to IVIg response and onion bulb formation in LGI4+ autoimmune nodopathy. 第 64 回日本神経学会学術大会(千葉) 2023/5/31-6/3
5. 藤崎さとみ, 松尾憲人, 今村友裕, 藤本一眞, 加藤麻衣子, 石橋郁佳, 平田彩, 宮川純子, 宮内和, 平野善考. 当院におけるジャパンマンモグラフィの成果. 第 64 回日本人間ドック学会学術大会 (G メッセ群馬、高崎芸術劇場) . 2023/9/1-9/2
6. 今村友裕, 柳原由記, 山下謙一郎, 張旭, グザリアイママティジャン, 満石三喜男, 吉良潤一. アルツハイマー病における血液バイオマーカーの実用化. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会 (国際医療福祉大学成田キャンパス) 2023/9/3
7. 今村友裕, 吉良潤一, グザリアイママティジャン, 満石三喜男, 張旭. 血清/尿中エクソソームグザリアイママティジャン AD 診断のための新規バイオマーカー. 第 42 回日本認知症学会学術集会 (奈良県コンベンションセンター、JW マリオット・ホテル奈良) 2023/11/24

依頼講演・招待講演 他

1. 今村友裕. 人生 100 年時代の漢方薬～超高齢社会を漢方薬と共に生きる～. 大川三瀧

医師会学術講演会（福岡県大川市）2023/6/14

2. 今村友裕. 古くて新しい漢方薬、人參養榮湯について. 第5回日本在宅医療連合学会大会ランチョンセミナー（新潟県新潟市）2023/6/24
3. 今村友裕. 人生 100 年時代の漢方薬～超高齢化社会を漢方薬と共に生きる～. 宝塚市医師会定例学術講演会（兵庫県宝塚市, 福岡市より WEB 配信）2023/7/22
4. 今村友裕. 『人生 100 年時代の漢方薬』～超高齢社会を漢方薬と共に生きる～. 鳥栖三養基医師会クリニカルセミナー（佐賀県鳥栖市）2023/8/8
5. 今村友裕. 『人生 100 年時代の漢方薬』～超高齢社会を漢方薬と共に生きる～. 東入間医師会学術講演会（埼玉県ふじみ野市, 福岡市より WEB 配信）2023/9/8
6. 今村友裕. 『人生 100 年時代の漢方薬の役割』～認知症疾患を中心に～. 宮古医師会学術講演会（岩手県宮古市, 福岡市より WEB 配信）2023/9/19
7. 今村友裕. 『人生 100 年時代の漢方薬』～超高齢社会を漢方薬と共に生きる～. 千葉市立海浜病院 KAMPO セミナー地域連携講演会（千葉県千葉市）2023/10/27
8. 今村友裕. 『人生 100 年時代の漢方薬』～超高齢社会を漢方薬と共に生きる～. 第 719 回大垣内科会（岐阜県大垣市, 福岡市より WEB 配信）
9. 今村友裕. 高齢者医療における漢方の活用～漢方薬のトリセツ～. 八女市 多職種が連携しておこなう服薬管理研究会（福岡県八女市）2023/11/16
10. 今村友裕. 『人生 100 年時代の漢方薬の役割』～認知症疾患を中心に～. 広島市中区医師会第 18 回認知症研修会（広島県広島市, 福岡市より WEB 配信）2023/11/28
11. 今村友裕. 認知症治療における漢方薬の新たな可能性. 第 28 回日本神経精神医学会学術集会漢方教育セミナー（茨城県つくば市）2023/12/9
12. 今村友裕. 「人生 100 年時代の漢方薬」～超高齢社会を漢方と共に生きる～. 認知症ケアにおける漢方多職種セミナー（新潟県新潟市, 福岡市より WEB 配信）2024/1/13
13. 今村友裕. 人生 100 年時代の漢方薬～超高齢化社会を漢方薬と共に生きる～. 県央地区認知症×KAMPO セミナー（長崎県大村市）2024/2/22
14. 今村友裕. 人生 100 年時代の漢方薬～超高齢社会を漢方薬と共に生きる～. 愛媛東洋医学カンファレンス 2023 年度 KAMPO 特別講演会（愛媛県東温市）2024/3/14

受賞

1. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会大会長賞
今村友裕, 柳原由記, 山下謙一郎, 張旭, グザリアイママティジャン, 満石三喜男, 吉良潤一. アルツハイマー病における血液バイオマーカーの実用化. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会（国際医療福祉大学成田キャンパス）2023/9/3

特許

1. アルツハイマー病の尿と血清を用いた診断法とバイオマーカー及び測定キット

発明者 : 吉良潤一, 今村友裕
出願人名 : 国際医療福祉大学
出願国 : 米国
仮出願番号: 63/469,446
出願日 : 2023/05/29

所属学会

1. 日本内科学会 (専門医)
2. 日本神経学会 (専門医)
3. 日本認知症学会 (専門医、指導医)
4. 日本糖尿病学会
5. 日本内分泌学会
6. 日本甲状腺学会

研究費獲得状況

1. 文部科学省挑戦的研究 (萌芽), 新規同定病原性ミクログリアを標的とした変性脱髄共通のグリア炎症病態の解明と治療, 2023~2024 年度, 研究分担者
2. 国立研究開発法人日本医療研究開発機構, 難治性疾患等実用化研究事業, 患等実用化研究事業, 難治性疾患実用化研究事業, 抗 plexin D1 抗体及び新規発見抗 neuropil 抗体陽性アトピー性脊髄炎・自己免疫性神経障害性疼痛の新診療ガイドライン作成のためのエビデンスとレジストリ構築, 2023~2025 年度, 研究分担者
3. 文部科学省基盤研究 (C), 毒性ターゲッ A β 42 含有エキソソームによるアルツハイマー病早期診断と病態伝搬の解明, 2022~2024 年度, 研究代表者
4. 文部科学省基盤研究 (B), 新規発見ノド抗体による自己免疫性ノドパチーの中枢及び末梢神経脱髄機序の解明と治療, 2022~2024 年度, 研究分担者
5. 学内研究費・プロジェクト研究, 耐糖能異常を有する受診者に対する保健指導の効果, 2023 年度, 研究代表者
6. 住友ファーマ株式会社共同研究, 認知症を対象とした新血液中バイオマーカーの関連分析及び臨床評価に関する研究, 2021~2024 年度, 国際医療福祉大学研究担当者
7. 住友ファーマ株式会社共同研究, シヌクレイオパチーを中心とした神経変性疾患の発症・進展メカニズムの解明と創薬への応用, 2021~2024 年度, 国際医療福祉大学研究担当者

氏名（役職）

貝塚拓（講師）

研究概要

翻訳因子 **EEF1D** の変異に起因する神経発達障害の分子病態解明と治療法の開発（琉球大学医学研究科分子・細胞生理学講座との共同研究）

本研究では **EEF1D** の遺伝子産物である **eEF1BδL** の細胞内機能と神経疾患との関連について解析を行っている。本来 **EEF1D** は翻訳因子を産生するが、そのバリエーションである **eEF1BδL** は遺伝子転写を刺激するユニークなタンパク質である。近年、その遺伝子の変異と神経発達障害との関連性が報告されている。今年度は既知の **EEF1D** 遺伝子の変異が **eEF1BδL** タンパク質発現に及ぼす影響を明らかにした。今後はヒト細胞において欠損株を作製し、神経発達障害の分子病態解明と治療薬のスクリーニングなどの研究展開が期待される。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Kaneko H, Kaitsuka T, Tomizawa K. Artificial induction of circadian rhythm by combining exogenous BMAL1 expression and polycomb repressive complex 2 inhibition in human induced pluripotent stem cells. *Cell Mol. Life Sci.*, 80, 200 (2023).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 貝塚拓, 高松岳也, 松下正之. 知的障害関連遺伝子 **EEF1D** がコードする **eEF1BδL** の相互作用タンパク質解析. 第 46 回日本神経科学大会（宮城）2023/8/2
2. 貝塚拓. **EEF1D** 遺伝子のスプライシング調節機構の解明. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会（千葉）2023/9/3
3. 金子瞳, 貝塚拓, 富澤一仁. 時計遺伝子の過剰発現がヒト **iPS** 細胞の幹細胞性に与える影響. 第 30 回時間生物学会（神奈川）2023/9/15

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本時間生物学会
3. 日本生理学会
4. 日本神経科学学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本時間生物学会評議員

研究費獲得状況

1. 国際医療福祉大学学内研究費, がん細胞における概日リズム誘導法の開発, 2023 年度, 研究代表者

氏名（役職）

中矢 正（講師）

研究概要

FUS による筋萎縮性側索硬化症（ALS）発症分子機構解明に関する研究

RNA 結合タンパク質 FUS は ALS の原因因子であり、様々な変異が家族性 ALS を引き起こすことが知られている。また、孤発性 ALS 患者においてもその凝集体が変性神経細胞内に観察されることから、その機能異常が疾患発症に深く関わることを考えられている。しかしながらその分子機構は明らかではない。本研究では、FUS の機能とその破綻による疾患発症分子機構を明らかにすることを目的として、FUS 野生型及び変異型を発現させた神経細胞を用いた解析を行っている。

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 中矢正. 筋萎縮症側索硬化症原因因子 FUS の細胞外分泌に関わる責任領域の同定. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会（成田・Zoom）2023/9/3

所属学会

1. 日本 RNA 学会
2. 日本神経化学会

研究費獲得状況

1. 基盤研究 C, ALS 原因因子 FUS の細胞外分泌分子機構の解明, 2022～2026 年度, 研究代表者

氏名（役職）

朴珍相（講師）

研究概要

医療情報のデータベース等を用いた医薬品の安全性評価（国際共同研究）

国内外の実臨床データを用いて、医薬品の適正使用の実態を観察疫学的に可視化し、医療政策・経済学的効果を定量的に評価する分析手法の検討および、医薬品の安全性評価における臨床疫学・薬剤疫学的の国際比較研究を行っている。現在、疾患レジストリ等の **Real World Data** を医薬品の有効性評価にどのように活用していくか、根拠資料として使用することを見据えた国内外で臨床疫学・薬剤疫学に応用可能なデータベースの **Validation study** を推進している。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Park J. Quantitative Evaluation of Standardizations of Clinical Laboratory Examination Codes Based on Real-World Data from the Japanese Sentinel Project. *Ann. Lab. Med.*, 43(1), 134 (2023).

学会発表・シンポジウム

【国際学会】

1. Park J. Quantitative Evaluation of Standardizations of Clinical Laboratory Examination Codes Based on Real-World Data from the Japanese Sentinel Project. LMCE 2023 (Laboratory Medicine Congress & Exhibition) & KSLM 64th Annual Meeting (Suwon, Korea) 2023/10/18-10/20

所属学会

1. 日本医療情報学会
2. The Royal Society of Medicine, United Kingdom

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 医療材料マネジメント研究会 幹事
2. Editorial Board Member for Scientific Reports
3. Editorial Board Member for European Child & Adolescent Psychiatry
4. Editorial Board Member for European Journal for Biomedical Informatics

研究費獲得状況

1. 文部科学省科研費（若手研究），実臨床データを用いたポリファーマシー実態に関する国内外の比較研究, 2021～2024 年度, 研究代表者

氏名（役職）

宗像千恵（講師）

研究概要

バンコマイシン注の配合変化に関する研究（長崎大学医薬品情報学分野・東和薬品との共同研究）

バンコマイシン注と多剤との組み合わせでの配合変化の要因検索・先発品と後発品の比較に関する検討を行っている。今年度は、バンコマイシン注とヘパリン注の配合変化について、検討した。この2剤における白濁はイオン結合によるものであり、どのような濃度でも配合は不可との結論を得た。これを論文化する予定である。

緩和ケア領域での配合変化に関する研究（日本緩和医療薬学会研究推進委員会との共同研究）

学会員共同で緩和ケア領域での配合変化に関する検討を行っている。アンケート結果より臨床現場で検証が求められている薬剤が判明し、これを論文化した。現在はその中でも添加物の亜硫酸塩に着目し、亜硫酸塩を含む注射剤がオピオイド注射液との配合変化に及ぼす影響についてデータ収集している。

原著論文・総説

【原著論文】

1. 近藤匡慶, 宗像千恵, 龍恵美, 吉田真人, 高瀬久光, 国分秀也. 緩和医療における点滴ルートマネジメント確立に向けた医療用麻薬注射薬の配合変化試験組合せ要望に関する全国調査. 日本緩和医療薬学雑誌, 16(2), 23-30 (2023).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 永井友規, 宗像千恵, 西村信弘. 歯科口腔外科入院中の悪性リンパ腫患者における疼痛コントロールに緩和ケアチーム薬剤師が介入した一例. 第82回九州山口薬学大会（長崎）2023/9/24

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本医療薬学会
3. 日本緩和医療学会
4. 日本緩和医療薬学会

5. 日本医薬品安全性学会

学会・学外審議会委員会への貢献

1. 日本緩和医療薬学会 社員
2. 日本医薬品安全性学会 副作用情報部会 部員

研究費獲得状況

1. 基盤研究 B, 多剤耐性菌の発生・伝播を防止するための感染制御・抗菌薬適正使用アルゴリズムの構築, 2021～2023 年度, 研究分担者
2. 国際医療福祉大学学内研究費, MRSA 治療薬の適正使用に向けた薬学的検討, 2023 年度, 研究責任者

氏名（役職）

磯田紀之（助教）

研究概要

医薬品候補化合物に対する新規フッ素官能基導入法に関する研究

医薬品候補化合物に対する新規フッ素官能基導入法に関する検討を行っている。今年度は、モノフルオロアルケン骨格の収束的合成を可能とする、新規ジフルオロアルケンビルディングブロックの開発と利用法に関する研究を論文にまとめた。これより、アミド結合等価体であるモノフルオロアルケンの効率的な合成が可能となると期待できる。

ルイス酸が関与する鈴木・宮浦クロスカップリング反応に関する研究

鈴木・宮浦クロスカップリング反応は、信頼性の高い炭素-炭素結合形成手法であるが、鍵となる金属交換の進行に塩基の添加が必要であり、副反応として脱ホウ素プロトン化が課題であった。これに対し、ルイス酸としての性質を持つ垂鉛錯体の添加により、塩基なしでもクロスカップリング反応が高効率に進行することを発見した。現在、本手法をクロスカップリング反応に不向きなフッ素化アルキル基の導入に展開し検討を行なっている。

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本化学会
3. 日本フッ素化学会

研究費獲得状況

1. 基盤研究 B（一般研究）, 21H02604-3, 2021～2023 年度, 研究分担者

氏名（役職）

坂井崇亮（助教）

研究概要

不斉直接的ビニロガス共役付加・アルドール反応を利用した γ -ラクトン誘導体合成に関する研究

有機分子触媒を用いた不斉直接的ビニロガス共役付加反応およびビニロガスアルドール反応による γ -ラクトン・ γ -ラクタム誘導体の不斉合成に関する研究を行っている。二官能性有機分子触媒を用いた γ -ブチロラクトン・ラクタム誘導体合成の基質を探索中である。また、触媒ライブラリーの充実化を行っている。

所属学会

1. 日本薬学会
2. 有機合成化学協会

研究費獲得状況

1. 基盤研究 B, 遠隔位不斉誘導に基づくインターロック分子の不斉構築, 2021~2023 年度, 研究分担者
2. 国際医療福祉大学学内研究費（一般研究）, 有機触媒を用いたブチロラクトン誘導体の不斉合成, 2023 年度, 研究代表者

氏名（役職）

澤井円香（助教）

研究概要

糖化産物による生体影響に関する研究

現在、糖化産物ジヒドロピラジン（DHP）による生体影響に関する検討を行っている。今年度は、DHP が炎症状態の腎臓細胞に対し、抗炎症効果を発揮する可能性が明らかとなった。これより、DHP の生体影響の解明のみならず、根本的な治療薬がない炎症性疾患の予防や治療効果改善に役立つ萌芽的知見となることが期待されている。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Miyauchi Y, Koba H, Sawai M, Kansui H, Takechi S. Oxidative stress and cellular toxicity induced by dihydropyrazine: a comparative study with other Maillard reaction products. J. Toxicol. Sci., 48,263-272 (2023).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. Miyauchi Y, Sawai M, Kansui H, Takechi S. A comparative study of dihydropyrazine with other Maillard reaction products focusing on their abilities to induce oxidative stress. 第 50 回日本毒性学会学術年会（横浜）2023/6/19
2. 澤井円香, 多田納豊, 石田卓巳, 武知進士. 糖化産物ジヒドロピラジン（DHP）による生体内 TLR4 シグナル抑制機構の解明. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会（成田）2023/9/3
3. 多田納豊, 宗像達夫, 澤井円香, 八木秀樹, 佐野千晶, 富岡治明. 抗酸菌由来 D アミノ酸によるマクロファージ遺伝子発現の制御についての検討. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会（成田）2023/9/3
4. Sawai M, Tatano Y, Zhou JR, Itoh S, Yoshida M, Miyauchi Y, Takechi S. Alleviation effect of Contact Dermatitis by the Glycation Product Dihydropyrazine. フォーラム 2023 衛生薬学・環境トキシコロジー（広島）2023/9/13
5. Takechi S, Sawai M, Miyauchi Y. Dihydropyrazines induce endoplasmic reticulum stress and inhibit autophagy. フォーラム 2023 衛生薬学・環境トキシコロジー（広島）2023/9/13
6. 磯田昌秀, 宮内優, 澤井円香, 寒水壽朗, 武知進士. 糖化産物ジヒドロピラジンと他のメイラード反応産物の細胞毒性の比較. 第 40 回日本薬学会九州山口支部大会（福岡）2023/11/13

7. Sawai M, Tatano Y, Itoh S, Yoshida M, Zhou JR, Miyauchi Y, Takechi S. Anti-inflammatory effects of the glycation product dihydropyrazine: An in vivo analysis using mice with contact dermatitis. 第 46 回日本分子生物学会年会 (神戸) 2023/12/7
8. Takechi S, Miyauchi Y, Sawai M. 糖化産物ジヒドロピラジンによる小胞体ストレス誘導およびオートファジー阻害. 第 46 回日本分子生物学会年会 (神戸) 2023/12/8
9. 武知進士, 岡部真由, 澤井円香, 宮内優. 糖化産物ジヒドロピラジンは小胞体ストレスを誘導しオートファジーを阻害する. 日本薬学会第 144 回年会 (横浜) 2024/3/29
10. 澤井円香, 多田納豊, 周建融, 寒水壽朗, 宮内優, 武知進士. 糖化産物ジヒドロピラジンによる炎症抑制効果解析. 日本薬学会第 144 回年会 (横浜) 2024/3/30
11. 多田納豊, 宗像達夫, 澤井円香, 八木秀樹, 佐野千晶, 富岡治明. Mycobacterium avium complex 由来 D-アミノ酸によるマクロファージ遺伝子発現の制御についての検討. 日本薬学会第 144 回年会 (横浜) 2024/3/30

所属学会

1. 日本薬学会
2. 分子生物学会

研究費獲得状況

1. 若手研究, 糖化産物 DHP による TLR4 シグナル抑制機構の解明: 敗血症治療への新規アプローチ, 2023~2024 年度, 研究代表者
2. 国際医療福祉大学学内研究費, 糖化産物ジヒドロピラジン (DHP) による生体への有害性の調査, 2023 年度, 研究代表者

氏名（役職）

柴田健太郎（助教）

研究概要

冠状動脈開口部領域の形態学的研究（佐賀大学医学部解剖学教室 倉岡晃夫教授の指導、監督）

解剖実習体より摘出した大動脈標本を対象として、日本人における冠状動脈開口部領域の形態学的特徴につき検討中である。本研究成果は、同部位の詳細な解剖学的理解を通して、冠状動脈へのカテーテル挿入手技や経カテーテル大動脈弁植え込み術（TAVI）等の合併症防止に貢献することが期待される。

Rat 胚を用いた心臓発生に関する研究（本学福岡薬学部 村田祐造教授との共同研究）

免疫組織化学染色を用いて rat 胚の心臓発生領域を同定し、主に心膜腔形成に関連する領域の観察を続けている。本観察結果は、胸郭正中癒合不全のメカニズムを考察する上で重要になる可能性がある。

原著論文・総説

【原著論文】

1. Maruo K, Nishiyama M, Honda Y, Cao AL, Gao WQ, Shibata K, Murata Y, Kido MA. Increased GLUT1 expression and localization to Golgi apparatus of acinar cells in the parotid gland of Goto-Kakizaki diabetic rats. Arch. Oral Biol., 146, 105601 (2023).

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 齊藤秀俊, 武田弘志, 柴田健太郎. 線維筋痛症モデル病態における疼痛・うつ様病態へのミクログリアの関与. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会（千葉）2023/9/3
2. 村田祐造, 柴田健太郎. オキシトシンによる血糖低下作用. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会（千葉）2023/9/3

受賞

1. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会学術大会 優秀演題賞（共同受賞）

所属学会

1. 日本解剖学会
2. 国際医療福祉大学学会

研究費獲得状況

1. 国際医療福祉大学学内研究費（一般研究 A），心膜横洞発生の新仮説を検証し、**Cantrell** 症候群の発症機序を考察する, 2023 年度, 研究代表者

氏名（役職）

福田光良（助教）

研究概要

鼻から脳への薬物送達に関する研究（日本大学薬学部薬剤学研究室 鈴木豊史教授との共同研究）

鼻から脳への薬物送達に関して、薬物動態学的側面から検討を進めている。今年度は、脳虚血モデルマウスに低分子医薬品であるナロキソンを経鼻投与したところ、未治療群に比べて梗塞巣体積の増大を有意に抑制することを明らかにした。また、ナロキシソンの経鼻投与における脳内への分布量は静脈内投与に匹敵した。これより、ナロキシソンの経鼻投与は、急性脳梗塞治療において有用であることが期待される。

学会発表・シンポジウム

【国内学会】

1. 西村信弘, 福田光良, 宗像千恵. 非小細胞肺癌における分子標的治療薬の個別化投与アルゴリズムの構築. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会（千葉）2024/9/3
2. 福田光良, 鈴木直人, 鈴木豊史. BBB 透過性低分子を用いた脳内送達および脳神経保護効果に及ぼす投与経路の影響. 第 13 回国際医療福祉大学学会学術大会（千葉）2024/9/3
3. 柳原圭佑, 福田光良, 長友太希, 鈴木直人, 鈴木豊史. 脳梗塞急性期に対するコハク酸エチルメチルヒドロキシピリジンの非侵襲的な経鼻的治療アプローチ. 第 67 回日本薬学会関東支部大会（東京）2024/9/16
4. 塚田海, 柳原圭佑, 福田光良, 長友太希, 鈴木直人, 鈴木豊史. コハク酸エチルメチルヒドロキシピリジンの経鼻投与による脳内神経保護効果. 日本薬学会第 144 年会（横浜）2024/3/28-3/31

所属学会

1. 日本薬学会
2. 日本薬剤学会
3. 日本 DDS 学会
4. 日本病院薬剤師会

研究費獲得状況

1. 若手研究, 鼻から脳への低・中分子分布評価と脳内活性化ミクログリア炎症機構の解明, 2023~2025 年度, 研究代表者
2. 国際医療福祉大学学内研究費（一般研究 B 奨励）, 脂溶性低分子における鼻から脳への

分布動態機構の解明, 2023 年度, 研究代表者